

ゼロのモンスターメーカー

ローレンシウ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ふとしたきっかけからカードの世界へ吸い込まれ、“カード使い”として闇の力の脅威からその世界と、そして地球とを救った一人の少女がいた。

彼女は同じ地球から来た仲間たちや、ディアース、ルフィア、タムローンなどその世界の仲間たちと共に力を合わせて戦い抜き、そして元の世界へ帰っていった。

その少女が、再び異世界から召喚の呼びかけを受ける。

けれど、今回彼女を呼んだのは世界を救うことを望むカードの精霊ではなく、ただパートナーとなる相手を求める一人の少女だった……。

目次

第1章

第一話	新たな冒険へ	1
第二話	使い魔生活の始まり	14
第三話	朝の出会い	22
第四話	それぞれの朝食と思惑	31
第五話	異世界の初授業	41
第六話	爆発と掃除と友達と	50
第七話	カード使いⅡ決闘者？	63
第八話	初めてのお出かけ	78
第九話	掘り出し物	89
第十話	続・掘り出し物	99
第十一話	伝説を作るもの、伝説を夢見るもの	109
第十二話	桃りんごと夜更かし	120
第十三話	続・桃りんごと夜更かし	132
第十四話	朝の女子会	144
第十五話	放課後の課外授業	153
第十六話	手探り	163
第十七話	はじめまして、また会ったね	179
第十八話	異文化講義	189
第十九話	歌の王子さま	199
第二十話	破壊のカード	211
第二十一話	事の始まり	223
第二十二話	夢のようなひと時	237

第2章

第二十三話	新たなるクエスト	251
第二十四話	カジノでの学びと出会い	259

第1章

第一話 新たな冒険へ

夕暮れの近づく、とある街角。

わいわいと賑やかに談笑しながら、少年少女たちの一団が歩いていた。

持っている荷物からすれば、学校帰りなのだろう。

「じゃ、また明日ね」

「こないだの話の続き、書いてくれないよー！」

「そうそう、ずっと気になってるのよ。ルフィーアは、ちゃんとヴィシユナスさんを助けられたの？」

「うん。必ず書くよ。……明日見せられるかは、わからないけど」

友人たちと別れの挨拶をかわして、一人が集団から離れていく。

それは、栗色の髪を頭の両側でお団子にまとめた、まだ稚い外見の少女だった。

髪と似た色合いのくりくりとした目には、大きめのめがねをかけている。

全体的には物静かで大人しげな雰囲気だったが、その瑞々しく輝く瞳からは子供らしい活発さや芯の強さも感じられた。

「そうね。勉強もあるけど、卒業までには書き終えなきゃ……」

少女はそう呟くと、岐路の途中でふと足を止めて、公園に寄り道をした。

昼間には小さな子供たちで賑わっていたであろうが、今は人影がなくがらんとしている。

砂場の傍にあるベンチを見つめて、少女は微かな笑みを浮かべた。顔を伏せて、しばしの間、物思いに耽る。

(懐かしいな。あの日、あのベンチの上にカードを見つけて)

——そこから、すべてが始まったのだ。

不思議なカードの世界の、アイングングと呼ばれる国に、突然召喚

されて。

この世界を救って欲しいと王様から頼まれて、同じように地球から召喚された仲間たちとそれぞれにクエストをこなして。

ルフィーア、ヴィシユナス、デイアーネ、タムローン……、冒険の中で、異世界のいろいろな人たちに出会って。

最初のうちは、驚きや不安もあったし、勇者なんてうつつとおしいとも思った。

でも、まるでゲームの世界のようでワクワクしたのも確かだった。それに、大人でさえすごいと言って認めてくれたのが嬉しかったし、自分のことを信じられるような気がしたのだ。

そのうち、楽しいだけではない様々なことにも出会って、多くの経験をして……。

それを通して、自分は仲間たちと一緒に大きく成長できたと思う。今は元通りの生活を送りながら、その世界で経験したことを書き記して本にまとめている。

元の世界に還ったときに仲間のみんなとは離れ離れになってしまったけれど、いつか必ず探し出して再会するつもりだ。

もつとも、向こうの世界、ウルフレンドの仲間たちとは、もう会えることはないのだろうか……。

そんな風にしみじみと感傷に浸っていた少女は、ふと、奇妙な輝きに気が付いて顔を上げた。

「えっ？」
いつの間にか、ベンチの後ろに奇妙な、光る鏡のようなものが浮かんでいた。

「……なに、これ……？」

警戒しながらもゆつくりと近づいて、それを調べてみる。

近づいたとたんにかが起るかもしれないと考えて警戒していたが、特に反応はなかった。

鏡面は高さ二メートル、幅一メートルほどの楕円形をしていて、厚みはほとんどない。

光を反射しているわけではなく、それ自体がきらきらとほのかな光を放っているが、特に熱くはないようだ。

あの時と同じ公園で、同じように、不思議な出来事。

少女は、息が止まるような驚きを感じた。

と同時に、興奮と期待の気持ちだが、急激に胸の内膨らんでいく。

(結論を急いじゃダメ、落ち着いて調べてみなきゃ)

少女は、胸をぐつと押さえてひとつ深呼吸をすると、努めて自分に
そう言い聞かせた。

もしかしたら、なにか珍しい自然現象でしかないのかもしれない。

まだ、学校で習っていないだけかも。

そこで、試しに石ころを拾って、鏡にそつと投げてみた。

驚いたことに、それは鏡面に弾かれるのでも、鏡面を割るのでもなく、吸い込まれるように消えてしまった。

後ろのほうを念入りに調べてみたが、確かに投げたはずの石ころは影も形もない。

(自然現象じゃないわ、石が消えるなんてありえないもの)

今度は枯れ木の枝を拾って手に持ち、恐る恐る、鏡面へ差し込んでみた。

入れた瞬間に何か感電などのショックがあるかもしれないと覚悟していたが、やはり何も起こらなかった。

確かに差し込んでいるはずの枝の先端は、鏡の後ろには出てこない。

けれど、引き戻してみると枝は何の抵抗もなく鏡面から出てきて、特に変わった様子もない。

(くぐった瞬間に死んじゃうような、危険なことはなさそうだけど……)

最後に、周りに人影のないことを確認してから、鏡の向こうに向かって呼びかけてみた。

「……そこに、誰かいるの？ 答えられるのなら、答えて！」

なるべく周りに声が漏れないよう、鏡の方に向かって響くように口の横に手を当てて、できるだけ大きな声でそう言ってから、じつと耳

を澄ます……。

すると、ほんの微かにだったのが、確かに何かの音が聞こえた。

『——私は、心より求め、訴える——導きに、応えよ——』

その声は耳にはではなく、心の中に直接聞こえてきたような感じだった。

(誰かが、私を呼んでる？ あのと時のように、助けを求めているの？)

少女は以前にも、そんな感覚を覚えたことがあった。

あのカードの精霊に、異世界に呼ばれたときだ。

もつとも、そのときはこんな途切れ途切れの声ではなく、カードの精霊自身が姿を現してもつとはつきりした言葉をかけてきたのだが。

どうか私たちの世界を救ってほしいと頼まれて、それに同意して……、気が付いたら異世界に立っていた。

(似ているような、ちがうような……)

その後も二、三度声をかけたり、問いかけを試みたりしたが、もう返事は聞こえてこなかった。

しかし、鏡は依然として消える様子はない。

(……どうしよう?)

今度はあのと時のようなカードセットではなく、光る鏡だ。

となると、カードの世界ではないのだろうか。

必ずしもそうとは限らないだろうし、ウルフレンドの他に異世界が存在するのかもしれないけれど、あったとしても不思議はない。

では、それを踏まえた上で、自分はどうするべきなのだろうか。

別に、助けを求められてもそれに応える義務はない。

確かに、助けを求められて知らん顔をするというのはいい気分ではないけれど。

ウルフレンドの友人たちならともかく、相手が見知らぬ異世界の住人であれば、別に行く義理もないのだ。

しかし、本当は悩むまでもなく、自分の中で既にその答えは出ていたのである。

もしかしたら、もう二度と会えないと思っていた異世界の友人たち

に、再会できるかもしれない。

そうでなくても、またあのような冒険ができるのなら、たとえ辛いこともあるとしても、しばらくは元の世界に戻れないとしても、自分
は行きたい。

その機会を逃したら、きつと、ずっと後悔するだろう。

明日また会う約束をした友人たちの顔を思い浮かべて、心の中で少し詫びながら、少女はゆつくりと鏡に向かって進んでいった。

「……前と同じで、戻ってきたときに時間が経っていないければいいんだけど」

そう呟きながら鏡に足を踏み入れた次の瞬間、少女の視界は暗転し、しばらくの間意識が飛んだ――。

――意識が戻ったときには、仰向けに寝転んでいた。

先程までとは、空気の味がまるで変わっている。

時間も少し違うようで、夕暮れが近づいていたはずなのに、目の前には抜けるような青空が広がっていた。

少し頭を巡らしてみると、ここはどうやら、どこかの草原らしい。

遠くの方には、アイングング城とは少し感じが違うけれど、石造りのお城のような建物が見える。

そして、誰か見知らぬ女の人が、まじまじと自分の顔を覗き込んでいた。

大人という年ではなさそうだけれど、自分よりは間違いなく年上だ。

高校生くらい、だろうか。

桃色がかつたブロンドの髪に透き通るような白い肌で、ツリ目で鳶色の瞳をしている。

日本人でないのは間違いないが、桃色の髪なんて地球では見たこともないから、外人だとも思えない。

(そういうえば、ヴィシユナスの髪も桃色だった)
してみると、やっぱりここはファンタジーの世界に間違いないだろう。

でも、ルフイーアやヴィシユナスとはなんとなく顔の造作などが違うような感じがするから、ウルフレンドではないのかもしれない。

それが少し残念で、少女はわずかに肩を落とした。

目の前の女性は黒いマントをつけて、その下に白いブラウスを着て、グレーのプリーツスカートをはいている。

なんだか、どこかの学校の制服っぽいな、と思った。

周囲を見渡してみると、案の定、周りにも同じような格好をした人がたくさんいる。

(魔法使い?)

ウルフレンドで見た魔法使いのルフイーアやシエフィールドなどには、あまり似ていないが……。

地球のファンタジー小説に出てくる魔法学校などを思い出して、なんとなくそう感じた。

実際に見る機会はなかったが、ウルフレンドにもちゃんと魔法使いの学校はあるようなことを言っていたし。

「あなた、誰？」

そんな風に考え事をしていると、目の前の女性が何やら困惑したような顔をして、そう話しかけてきた。

日本語を話しているが、別に驚きはしなかった。

どんな仕組みかは知らないけれど、ウルフレンドでもみんなそうだったから。

「私は……ユマ」

「そう、ユマって名前なの？ それで、どこから……」

そこで、脇の方から別の誰かが声を上げた。

「ルイズ！ どうするつもりなのよ、『サモン・サーヴァント』でどこかの貴族の子を呼び出すなんて！」

「……ちよ、ちよつと間違っただけよー！」

ルイズと呼ばれた少女はそう反論しながらも、顔をしかめていた。

この世界の貴族は基本的に魔法使いであり、地位の証であるマントを着用して杖を携帯しているのが普通だ。

その点、目の前の女の子はマントを身に着けていないし、杖も持っていないように見える。

しかし、だからといって、ただの平民だとは思えなかった。

着ている服は胸元に大きな紫のリボンが飾られた緑色のワンピースで、ドレスのような袖が付いている。

靴は、何やら柔らかそうな素材でできた、白い編み上げのブーツだ。

いずれも見慣れない変わったものではあるが、かなり上等な代物であることが察せられた。

しかも、眼鏡をかけている。

弱視を矯正するための眼鏡は精度の高いレンズを必要とする高級品で、並みの平民にはまず手が出ない品だ。

見たところ幼い少女のようだから、まだ魔法を習い始めたばかりでマントを与えられておらず、杖も携帯していないのかもしれない。

あるいは、自室で寛いでいる最中にでも召喚されたのか。

いずれにせよ、これは大変なことになった。

春の使い魔召喚の儀式のルールはあらゆるルールに優先する、とされる。

一度呼び出した使い魔は変更はできないのだ。

しかし、古今東西、人を使い魔にした例など聞いたことがないし、ましてやまだ小さな女の子、それも貴族、となると……。

「ミス・ヴァリエール、私が代わろう」

わいわいと野次を飛ばす生徒らをたしなめながら、この儀式を取り仕切るミスタ・コルベールが進み出た。

頭髪の少し寂しい、中年の男性教師である。

ウルフレンドで仲間にしたダルーアンとちよつと似てる、というのがユマの感想だった。

まあ、魔法使いでハゲ頭なところだけだが。

それよりも、さつきこの人たちは使い魔がどうかとか言っていないかったか。

自分のように小さな女の子に大人がするものとしてはいささか滑稽なくらい丁重に頭を下げるコルベールをじつと見つめながら、ユマはそのことを尋ねてみた。

「使い魔って、私のこと？」

「そうです、ミス・ユマ。いささか申し訳ないことになりましたが、あなたは、春の使い魔召喚の儀で、こちらのミス・ヴァリエールに召喚されたのです」

コルベールは恐縮したように、一層深く頭を下げた。

「それで……、ミス・ユマは、貴族かとお見受けしますが。お住いの国の名前や、家名をお聞きしても？」

ユマはそれを聞いて、首を傾げた。

(貴族？ 住んでいる……国？)

この人たちは、私を地球から呼んだことを知らないのだろうか。

召喚した本人だという、あのルイズというお姉さんも？

疑問は尽きなかったが、とりあえず、質問に答える。

「貴族って、王様とか、それにお仕えする騎士とかのこと、だよな？」

知り合いはいるけど、私はそういうのじゃないわ。住んでいるのは

……、地球の、日本という国よ」

その返事を聞いて、コルベールはやや意外に思いながらも、同時にほつと胸を撫でおろしていた。

チキユウという地名やニホンという国名には、聞き覚えはない。

おそらく魔法についてあまりよく知らずに好奇心から召喚に応じたのであろうこの少女には、申し訳ないことになったかもしれない。

だが、ひとまず大きな問題が持ち上がることだけは避けられそうだった。

一方ルイズの方は、安堵もしたが、落胆もしていた。

興味本位で召喚のゲートをくぐった貴族の娘を誘拐したわけではなかったのは、まあよかった。

しかしながら、聞いたこともない田舎からやって来た幼い平民の娘など、使い魔としては何の役にも立たないではないか。

そして、それ以外の生徒らにとっては、まるで他人事だった。

「なんだ平民かよ、脅かしやがって」

「当たり前だよ、あいつに貴族なんて呼べるわけがないさ」

「さすがはゼロのルイズだ！」

てんでに囃し立てる生徒らと、悔しげに彼らを睨みつけるルイズを見比べて、ユマは眉をひそめた。

事情はよく知らないが、彼女は魔法が下手なのか、馬鹿にされているらしい。

嫌な雰囲気で、なんだか気に入らなかった。

そういえば、あのルフイーアも昔は魔法がうまく使えず、よく出来のいい姉と比べられてはみんなに馬鹿にされていた、と言っていた。

普段は優しいが内に激情を秘めたルフイーアと、負けず嫌いそうな目の前の少女とは、どこか似たところがあるのかもしれない。

そこでユマは、くいくいとルイズの袖を引っ張って、彼女の注意を引いた。

「なによ」

「ルイズ。……で、いいのよね？」

「……あなたはまだ子供だし、田舎から来た平民だから知らないのかもしれないけど、貴族にそんな口をきくものじゃないわよ？」

ルイズは顔をしかめてそう言うと、ユマのほうに向きなおって薄い胸を張った。

「トリステイン魔法学院二年生の、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。ヴァリエール家の三女よ」

「長い名前なのね。私も名前のユマだけでいいから、あなたのこともルイズって呼ぶね」

「だから……」

ルイズは顔をしかめたが、思い直した様子でまあいいわ、と溜息を

ついた。

同年代の平民なら許さず咎めるところだが、こんな若い女の子に強くあたるものでもあるまい。

「ところで、ちよつと聞きたいの。トリステインというのは、この国の名前？」

「そうよ。トリステインを知らないなんて、相当な田舎者ね」

「トリステインは、ウルフレンドの国じゃないんでしょう？」

「ウルフレンド？ ……聞いたことないわね。まさか、東方のどこかの地方だとか？」

ユマは、ああ、やっぱりか、と胸の中で呟いた。

ここはウルフレンドとはまた違う異世界らしい。

念のため、アインガング、レオスリック、メルキア、ダンシネインなどの向こうで覚えた国名や地名をいくつかあげてみたが、ルイズはひとつも知らなかった。

「……わかった。それで、あなたには、私が必要なの？ 使い魔として……」

この世界の使い魔というのがどんなものかは知らないが、たぶん、魔法使いの使役する召し使いみたいなものなのだろう。

前の時は勇者扱いで、今度は使い魔。

ずいぶんな違いのようだが、別にそれをもって嫌だと言うつもりはなかった。

何があるのかは知らなかったとはいえ、ここへ来ることを決めたのは自分なのだ。

それに、前の世界では、カード使いとしてたくさんのもンスターたちを使役して戦ってもらっていたのである。

決して望まぬ戦いを強いたり虐待したりしたつもりはないけれど、それでも今度は自分が使役される側になったとして、文句を言えるような立場にはない。

「そうよ。使い魔を召喚して自分の属性を決めないと、二年の専門課程へは進めないんだもの」

ユマは顔を上げて、ルイズの顔を真っ直ぐに見つめる。

「そう。あなたの役に立つのなら、それなら、私はあなたの使い魔になるわ」

「当たり前よ、なってもらわないと困るの」

ルイズは、当然のようにそう返事をした。

平民が貴族に仕えるのは当然のこと、相応の待遇を与える限り何ら問題はないはずだ。

身なりなどからすれば割と裕福な平民だったのだろうが、ヴァリエール家はトリステイン随一の大貴族で、決して不足のない暮らしを与えてやれるだろう。

こちらに悪気はなかったとはいえ、親元から引き離してしまったであろうことには多少後ろめたい気持ちはあったが、それはいずれ場所を調べて里帰りさせてやればよい。

残念ながら特に役に立つとも思えないし、学生の間だけ使い魔であってくれさえすれば、その後は親元に戻ってもらっても別に構わない、とも考えていた。

「それじゃ、『契約』をするから、こつちに来て……」

ルイズはそう言いながら、今更のように困った顔で、ユマを見つめた。

(この子と……、使い魔の、契約。って……)

相手は人間で、同性で、しかも幼い女の子。

私、初めてなのに。

「どうしたの？」

不思議そうにきよとんと首を傾げるユマに肩を竦めると、諦めたように目を瞑って、手にした小さな杖を彼女の前で振った。

それから、朗々と、呪文の言葉を紡ぎ始める。

『我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン、この者に祝福を与え、我の使い魔となせ』

詠唱を終えると、杖をユマの額に置き、体をかがめた。

「……何をするの？」

「いいから、その……目を閉じて、じっとしてて」

微かに赤い顔をしたルイズが、大人しく目を閉じたユマの顔にそつと自分の顔を寄せ……。

そして、唇を重ねた。

周りで見守る生徒たちから、おおー、きゃー、と、歓声上がる。

「……!? な、何をするの!」

ユマは何が起こったか理解すると、たちまちリングゴのように真っ赤になってずぎぎつ、と後ずさり、ルイズに抗議した。

「し、仕方ないでしょ! これが使い魔の契約なんだから!」

ルイズはきまり悪そうに身じろぎして、ぷいっと横を向いた。

彼女のほうも、かなり顔が赤くなっている。

「……ううー……」

それならそうと教えておいてほしいわ、とユマは不平がましく思った。

だって、ファーストキスだったのである。

そりゃあ、仲間のディアアーネもロイヤルキツスとかいう技でキスしてきたことはあつたけど、あれは額とか頬つぺたとかだったし。

そういえば、同じ王族なのになんでお兄さんのヘリオスはキスしてくれないのか、なんて不満に思ったりしたこともあった。

なにせヘリオスは女の人みたいにきれいで、思わずときめいてしまうような素敵王子様なのである。

お兄様にぞっこんなディアアーネの前でそんなことを言ったら睨み殺されかねないから、口には出さなかったが。

そんなことを考えていると、急に体が熱くなり、左手の甲に痛みが走った。

「痛っ……っ?」

それは、戦いで受ける傷の痛みに比べれば何でもなかったが、怪我をしたのとはまた違う妙な感覚だった。

そちらの方に目をやると、いつの間にか手の甲に見慣れない文字が浮かび上がっている。

「これは……」

「おお、『サモン・サーヴァント』は何回も失敗したが、『コントラクト・

『サーヴァント』は一回で成功したね」

コルベールは嬉しそうにそう言うと、ユマの手の甲を調べて、その文字を書きとった。

「ふむ、珍しいルーンだね……」

どうやら、この文字は使い魔の徴みたいなものらしい。

そういうのも先に教えておいてほしいのだけど、とユマは思った。別に嫌だとは言わないが、断りもなくいきなり体に入れ墨みたいなものを入れないでほしい。

地球に帰ったら、ちゃんと消えるのだろうか。

いや、そもそも、今回は何をしたら地球に帰れるのだろうか。

使い魔の仕事が終わったらだろうか。

でも、それはどのくらい続くものなんだろうか。

ユマは学校帰りで持ったままだった荷物を拾ってまとめ直すと、先に空を飛んで帰っていく魔法使いらしき人々の姿をぼんやりと見つめた。

もしかすると今回は、思ったよりも長い旅になるかもしれない……。

第二話 使い魔生活の始まり

「それって、本当？」

ユマの話を聞いたルイズは、疑わしそうな顔をしてそう言った。二人は今、ルイズの自室で向かい合ってテーブルにつき、夜食のパンを食べながら話をしている。

部屋にはアンティークのような家具が置かれ、学生の私室とは思えない広さと豪華さだった。

「嘘をついても仕方ないわ。証拠は、ちゃんと見せたでしょ？」

「それはまあ、そうだけど……」

ルイズは顔をしかめて、テーブルの上に広げられたユマの私物を見つめた。

主に彼女が所持していた鞆とその中身、つまりは学校の授業で使っている教科書とか筆記用具とかである。

本は光沢のある不思議な紙でできていて、きれいな活字で見たことのない文字が並んでいる。

そして実物と見まがうような美しい挿絵が、あちこちを飾っている。

それらの挿絵に描かれている様々な場所や建物、人物には、ルイズが見慣れたものはひとつもない。

筆記用具にしてもまるで馴染みのない奇妙なものが多く、その中にはガラスのように透き通った未知の軽い材質でできた定規なども含まれていた。

工業の発展した新興国家のゲルマニアや、ガリアの大都市にも、おそらくこんなものはないだろう。

しかもユマの言葉を信じるなら、それらの本や道具はいずれも魔法を一切使わずに、平民でも扱えるような技術だけで作ったのだという。

そもそも、彼女の故郷にはメイジがない、もしいるとしてもほんの少いで、一般には知られていないのだとか。

「……………」

にわかには信じがたい話だった。

確かに彼女の所持品からみて、ユマがハルケギニアとはかけ離れた、しかし辺境の田舎などではないどこか高い技術を持つ場所からやってきたことは間違いない。

しかし、それがごことは違う異世界だなどという話は、突飛すぎて容易に受け入れられるようなものではなかった。

落ち着きのある子に見えるが、子供ゆえに突然の環境の変化に内心では動転していて、大袈裟な思い込みをしているだけなのではないか……。

いろいろと考えた結果、ルイズはユマの故郷がハルケギニアではないと遠くの国、もしかすると東方のロバ・アル・カリイエのどこかの国なのではないか、と推測した。

ハルケギニアとはほとんど交流はないものの、東方には最強の亜人と悪名高いエルフたちに対抗する高い技術を持つ人間の国家があると言われている。

そのことを伝えてみたが、彼女は首を横に振った。

「どんなに遠くに離れても、月が二つになったりはしないわ」

「? 何言ってるのよ、月が重なるスヴェルの夜以外は、月は二つに決まってるでしょ」

「私たちの住んでいたところでは、そうじゃないの」

ユマはそう言って、窓の外に目をやった。

そこには、地球のそれよりもずっと大きい、しかも赤と青の二色の月が輝いている。

「……信じられないわ」

「そうだと思う。でも、本当だもの。だから、異世界に間違いないの」

ユマはそう言いながら、理科の教科書をぱらぱらとめくって月の写真を探し、ルイズに見せた。

「これが、地球の月。白っぽくて、小さく見えるの」

「絵なんか、好きなように書けるわ」

「絵じゃないの、写真よ。……そうね、鏡に映った景色を、そのまま紙に移したようなもの」

「……………」

ルイズは、魔法もないのにそんなことができるという話を、ますます疑わしそうに聞いていた。

とはいえ、確かにここにある本には、あまりにリアルすぎる挿絵が多い。

その『シャシン』というものだと思えば、筋は通っている。

しばらく考え込んだものの、ルイズは結局、溜息を吐いて頷いた。

「そうね、まだ疑わしいとは思うけど。異世界でないにしても、あなたが私たちのぜんぜん知らない場所から来たことは確かみたい」

それから、きまり悪そうに身じろぎした。

「……………」その、近いうちにあなたの家に連絡を、と思つてたんだけど。使
い魔の契約自体は一生だけど、あなたにも自分の故郷があるわけだし、別にずつというなんて言う気はないのよ。でも、そうになると、ええと……………」

ユマはルイズが言い淀んでいることから、自分を帰れるかどうかもわからない遠くに呼び出してしまったことを気にしているのだと察して、少し嬉しくなった。

おそらく、帰す方法を彼女は知らない、ということか。

どこから来るのかも知らずに呼び出しておいて、ずいぶん無責任な話だと思わなくもない。

だが、そんな風に申し訳なく思つてくれるのは、彼女が根はいい人だからだろう。

それに、前の時も世界を救うまで戦えば帰れるとは言われたものの、それがいつになるのかはわかっていなかったのだから、大して違いはないかもしれない。

だから、安心させるようにクスッと笑つて、首を横に振ってみせた。

「大丈夫。私も、友だちに黙ってきたことは、悪いと思つてるけど。しばらく戻れないとは、最初から思つてたもの」

「……………」

「そう。前にも、同じようなことがあつたの。その時もいつ戻れるかわからなかったから、平気よ」

本当に平気そうなユマの様子を見て、ルイズはいくらか安心したものの、あまり年齢不相応な落ち着き方や、前にも同じようなことがあったという話には困惑した。

悪い子ではなさそうだし、見た目の割にやけに大人びていて、頭もよさそうだけれど……、なんだかよくわからないことを言う、不思議な少女だ。

そんなルイズの感想などつゆ知らず、ユマは話を続けた。

「それで。帰る方法が見つかるまでは、ルイズの使い魔をするつもりだけど。何をすれば、いいの？」

「あ……、そ、そうね。メイジがいないのなら、知らないわよね……」ルイズはコホンと咳払いをすると、説明を始める。

「使い魔の役割は、大まかに言って三つ。……まず、第一に、使い魔は主人の目となり、耳となる能力を与えられるわ」

「……どういうこと？」

「つまり、使い魔が見たものは、主人も見ることができるようよ」

「私が見ているものが、ルイズにも見えるの？」

そう聞かれて、ルイズは顔をしかめた。

「そのはずなんだけど、何も見えないわね……」

「そう、よかった」

「……何よ、よかったって」

「だって、覗き見なんてされたくないもの。何か見たいものがあつたら、頼んでももらえれば調べてくるわ」

それを聞いて、まあそれもそうね、とルイズも納得した。

平民とはいえ、年頃の女の子なのだ。

無暗になんでも覗き見するのは、あまり行儀のいい振る舞いとはいえない。

それにどうせ、小さな女の子に出来る偵察なんてたかが知れている。

「それから、使い魔は主人の望むものを見つけてくるのよ。例えば、硫黄とかコケとか、特定の魔法を使う時に必要な触媒なんかをね」

「ふうん……。何が欲しいか教えてくれたら、場所を調べて探してく

るわ」

「その意気込みは、褒めてあげるけど。お使いくらいならともかく、あなたみたいな小さな子を、一人で火山や森に行かせるわけにはいかないでしょ！」

「……そうね。森や山なら、行ったことはあるけど。一人じゃなかったし、どのくらい危ないのかもよく知らないから」

この世界の山や森にどんなモンスターが出るのかは知らないし、今は頼もしい仲間たちのカードも持っていない。

よっぽどでなければ大丈夫、とは思っただけ……。

「最後に、使い魔はなによりもまず、主人を守る存在であるのよ。その能力で主人を敵から守るのが、一番の役目ね」

ユマは、こくりと頷いた。

「わかった。何かあったら、頑張つてルイズを守るわ」

「いえ、あくまでも一般論よ。あなたみたいな小さい子を戦わせるわけじゃないじゃない」

「大丈夫よ。私、そんなに弱くないわ。少しは戦えると思う」

ここが魔法の世界であるためなのか、ウルフレンドにいた頃と同じような力が自分の中に戻っていることに、ユマは気が付いていた。

ウルフレンドに召喚されたとき、最初のうちは本当に弱くて、カードから呼び出した仲間たちに守ってもらったことしかできなかった。

しかし、クエストを重ねていくうちに力をつけて、ある程度経った頃には自分でもかなり戦えるようになっていたのだ。

この世界にどんな脅威があるのかはわからないが、まったく役に立たないということはないだろう。

以前にずっと仲間たちから守ってもらっていたお返しに今度は自分がルイズを守るのだと思えば、決して嫌な役目ではない。

「……そう。本当に、熱心な使い魔で嬉しいけど……」

そう言われても、同じ年頃の女の子たちの中では強いとか、運動が得意だとか、せいぜいその程度だろう。

亜人や幻獣はおろか、そこらの平民の男やカラスにだって勝てるとは思えない。

こんな小さな子に、わざわざ面と向かって口に出してそう伝えるよ
うなことはしないが。

「私は学生だもの、そんな危険はそうそうないわ。普段は、あなたに
できる仕事をしていてくれればいいのよ」

「私に、できる仕事?」

「そう。掃除とか洗濯とか、ちよつとした雑用くらいなら、やり方を覚
えればできるでしょ?」

「うん、掃除は得意よ。ゆかみがきとか」

ルイズはその返事を聞いて、よろしい、と頷いた。

これで、させられる仕事の目途は立った。

最初は平民の女の子なんて思ったが、まあ少し変わっているけれ
ど従順でやる気もあるようだし、かわいい子だし、はずれの使い魔を
引いたとは思うまい。

雑用など使用人で十分といえはそうなのだが、トカゲやネズミより
は役に立つかもしれない。

「じゃあ、いい加減に眠くなってきたし、そろそろ寝ましょう。あー
……」

ルイズはきよろきよると部屋を見回して、少し困ったように考え込
んだ。

そういえば、ユマのためによさそうな寝場所がない。

もう少し大人で男なら床で寝ろというところだが、小さな女の子に
そんな扱いをするのはちよつと気が引ける。

身なりや教養の度合いなどからしても、平民とはいえこれまで割と
いい暮らしをしてきた子のようにだし、召喚した手前あまり劣悪な環境
で暮らさせるわけにはいくまい。

「……まあいいわ。あなたの寝床は明日にでも用意させるから、今夜
は同じベッドでいい?」

「うん」

素直に頷いたユマを見て安心すると、ルイズは服を脱いでネグリ
ジエに着替え始める。

ユマはパジャマを持っていなかったが、とりあえず上着を脱いで寝

ることにした。

「あ、じゃあさっそくだけど。これ、そこに置いて、明日になったら洗濯して」

ルイズは寢床に入る前に、脱ぎ捨てたキャミソールやパンティをユマに渡す。

「わかった」

「洗い場は、窓の外のあのへんよ。場所とかやり方とか、わからないことがあったら、そこら辺のメイドに聞きなさい」

そう言つて、ユマが自分の隣にもぐりこんだのを確認すると、ルイズはぱちんと指を鳴らして部屋の明かりを消した。

この部屋の照明は、どうやら魔法がかかったランプだったらしい。

「ん……」

ユマは空の二つの月を見上げて、心地よさそうに目を細めた。

あたたかくてふかふかしたベッド。

傍には、人のぬくもり。

いつもの寢床より、ずっと心地が良かった。

(思っていたのとは、だいぶ違ったけど)

ウルフレンドでも、寝る時はいつも与えられた宿の部屋で一人だったから、待遇はこちらの方がいいかもしれない。

まだ小さな女の子にとっては勇者の称号なんかよりも、人のぬくもりが近くにあるあたたかい寢床の方が、どれほど嬉しいか。

それでも、地球に帰る方法は探さなくてはならない。

学校の友人たちにもまた会いたいし、ウルフレンドで一緒だった仲間たちも探したいから。

でも、その前にこの世界での生活をしばらく楽しんで、また新しい仲間や友達を探してみるのも、悪くはない。

今度は世界を救うのだといった、切羽詰まった危険な仕事はないのだから。

ウルフレンドの話をこちらでも本にまとめて残すというのも、いいかもしれない。

そのためには、文字の勉強もしなくては。

前の世界では召喚されたら文字も普通に読めるようになっていたのだけれど、どうもこちらの文字は読めるようになっていないらしい。

さつき教科書を見せたら、ルイズは字がわからないようだったし……。

(……ふああ……)

今日はいろいろあったし、まだ小さな女の子なのだから、そりゃあ眠くもなる。

ユマは、続きを考えるのは明日にすることにした。

(おやすみなさい、ルイズ。みんな)

傍らの少女と遠い世界の友人たちに挨拶をすると、ユマは目を閉じて、しばし夢の世界で戯れ始める。

新たな異世界における彼女の使い魔としての生活は、こうしてスタートを切った。

第三話 朝の出会い

翌朝、窓から差し込む朝日で、ユマは目を覚ました。

隣ではルイズがあどけない顔でまだすやすやと寝息を立てているので、起こさないようにそっとベッドを脱け出す。

こちらの世界の時刻はよくわからないが、学生なら大体決まった時間に目は覚ますだろうし、たぶんまだ寝ていても問題ないのだろう。

「んー……」

腕を上げてぐーっと伸びをすると、まずは上着を着て、身だしなみを整える。

昨夜の言いつけをちゃんと覚えていたユマは、それからきよろきよろと部屋を見回して、下着を洗うのに必要な道具を探した。

ファンタジーの世界は二回目ということもあって、電気も水道も引かれていない世界での洗濯には何が必要かというくらいのはわかってはいる。

ウルフレンドでは、店主にいろいろ世話を焼いてもらったとはいえ、下宿で一応は一人暮らしをしていたのだ。

しかし、貴族の部屋だからなのか、洗濯板や洗い桶なんてものは置かれていないようであった。

(洗い場にあるのかな?)

ちよつと首を傾げると、ひとまず見つけた洗顔用らしいたらいに下着を入れて部屋を出て、ルイズが教えてくれたあたりに向かって歩き始める。

トリステイン魔法学院の内部は、不慣れな子供では一人で歩くのに心細さを感じそうなほど広かった。

が、もちろんクエストで城や遺跡や地下迷宮を長々と歩くのに慣れているユマにとっては、今さらどうってこともない。

外に出たあたりで、同じように洗濯物らしき荷物を抱えて歩いている人を見つけた。

エプロンドレスとホワイトブリムを着た若い女性で、黒い髪をやや長めのボブカットにしている。

年齢は、ルイズと同じか少し上くらいだろうか。

ユマは、アインガング城でも似たような格好の使用人を何度も見かけたことがあった。

おそらく彼女は、ルイズが言っていた学院のメイドだろう。

そう思ったので、小走りに近寄って声をかける。

「あの、すみません」

「はい？」

声をかけられた使用人は、足を止めてくるりと振り返った。

その瞳も、髪と同じように黒い。

彼女はやや驚いたようにユマの姿を見つめたが、すぐに姿勢を正して、恭しく頭を下げた。

「失礼しました。何かご用でしょうか、お嬢さま」

ユマはきよとんととして目をしばたかせたが、じきに思い至った。

昨晚のコルベールという先生と同じで、どうやら彼女も、自分のことを貴族だと勘違いしているらしい。

自分が、そんなに立派な格好をしているとは思えないのだが……。

「私はお嬢さまじゃないの、ユマ。昨日から、ルイズの使い魔をしているのよ」

「えっ、使い魔？」

メイドは顔を上げて不思議そうに呟いたが、何かを思い出したように、ああ、と声を上げた。

「もしかして、ミス・ヴァリエールに呼び出されたという……」

「そう、それ」

ユマはこくりと頷くと、手に持ったたらいを見せながら話を続けた。

「ルイズから、洗うように頼まれたの。洗い場と、洗濯の道具があるところを教えてください」

「まあ！ それは大変でしょう、ミス・ユマ。私はこの学院の使用人ですから、こちらのほうで一緒に洗ってお届けしますわ」

その女性はあたたかい微笑みを浮かべると、ユマと視線を合わせるように少し屈みながらそう言った。

それから、自分の名前はシエスタといいます、と付け加える。
シエスタの声や視線からは、相手に対する同情と思いやりの気持ちが感じられた。

おそらく、まだ小さいのに突然遠くへ呼び出されて、慣れない仕事をさせられて、さぞ大変で心細いのではないかと案じてくれているのだろう。

その気遣いが嬉しくて、ユマはにっこりと微笑みを返した。

だが、たらいを差し出そうとはせず、首を横に振る。

「ありがとうございます、シエスタさん。でも、ルイズから頼まれたのは私だから、やり方だけ教えてください」

しばらくの後、二人は洗い場で、すっかり打ち解けた様子で一緒に洗濯をしていた。

「ユマちゃん、上手ね。洗い方が丁寧だし、初めてなのにすごくきれいに洗ってるわ」

「そう？　ありがとうございます、きっと先生の教え方がいいからね」

最初のうちは、シエスタはユマが貴族でないにしても裕福な家のお嬢様かなにかだろうと思ったのか、接し方がまだ少し恭しくて堅苦しかった。

しかし、洗濯の仕方を教えているうちにどうやらそんなお高くとまったところのない普通の女の子だとわかって、態度を改めた。

彼女は故郷では幼い兄弟たちの世話を見ていたので、久し振りに小さな子と関わることができるのは楽しかった。

すっかり洗い終わると、ユマが桶から洗濯物を順番に取り出して手渡し、それをシエスタがてきぱきと干していく。

「ありがとうございます、ユマちゃんがお手伝いをしてくれたおかげで、いつもより早く終わったわ」

「こちらこそ。それじゃ、私はルイズの所に戻るから。またね、シエスタ」

シエスタが堅苦しい呼び方を止めてくれたので、ユマのほうも彼女にさん付けをするのは止めることにした。

「うん。よかったら、お昼の食事の時に厨房に来て。何か美味しいものを用意するよ」

そんな風に和やかな挨拶を交わして、二人は別れた。

それから、ユマは階段をとことこのぼってルイズの部屋に帰っている。

戻ってみると、ルイズはようやく目が覚めたようで、ベッドの上を体を起こしてぼーっとしていた。

まだよく頭が回っていないさそうなその様子からすると、彼女は朝が弱いらしい。

「おはよう、ルイズ」

「んー……う？」

ルイズはぼんやりとユマの顔を見つめて、目をしばたたかせる。

ややあってから、ようやく返事が返ってきた。

「……ああ、うん。そうね、あなたがいたんだっけ。おはよう」

「洗濯物は、干してきたから」

ルイズは小さく頷くと、ベッドから立ち上がってふあああ、と大きなあくびをした。

それから、だるそうにネグリジエを脱ぎながら、ユマに言いつける。

「制服、持ってきて」

「はい」

「あとー、下着も。クローゼットの、下の引き出しから」

「わかった」

ユマは文句も言わずにとととと動き回って、頼まれた服を持っていく。

しかし、さらに服を着せてくれとまでいわれると、首を傾げた。

「着られないの？」

「服くらい着れるに決まってるでしょ。貴族はね、使用人がいるときは自分で服なんか着ないものなの」

「でも、だらしのない気がするわ。それに、自分で着たほうが早いと思

う」

ウルフレンドでも、ディアーネやヘリオスは王族だからといって仲間に服を着せてもらったりなんかしていなかったはずだ。

まあ、お城住まいのユリーシカ姫やポーシヤ姫はどうだったのか知らないが。

それを聞いたルイズは、不機嫌そうな顔になった。

普通の使用人が相手なら、そのようなわきまのない言動に対しては、罰として朝食抜きくらいは言い渡すところだ。

しかし、ユマが何分まだまだ小さい子であることと、メイジのいないところから来たと言っていたことを考慮して、叱りつけるのは思い留まった。

代わりにコホンと咳払いをすると、ぴつと指を立ててみせる。

「いい、ユマ。メイジというのは魔法が使えるから、いろいろなことができるのよ」

「そうね」

この世界のメイジのことはよく知らないが、ウルフレンドの魔法使いは確かにそうだった。

クエストの最中は戦いの役に立つ何種類かの魔法しか使わないが、たまに街中でゆっくりしているときにお話でもしようと呼び出すと、他にもいろいろな魔法を見せてくれたものだ。

明かりをともし魔法とか、水をお酒にする魔法とか、そこにあるはずのものをないように見せかける魔法とか。

「そのメイジが何でも自分でやり始めたら、特別な技術を持ってない普通の平民は仕事がなくなるわ。メイジが身の回りの雑用を平民に任せるから、使用人も働いて食べていけるのよ」

「ふうん？ ……そうかも」

「そうよ。貴族には貴族の、平民には平民の仕事があるの。別に、だらしなから自分で服を着ないわけじゃないのよ。わかった？」

「うん、わかった」

必ずしもルイズの話に賛成なわけではないが、彼女にも自分の意見があるのだということは納得した。

ユマとしては、子供らしい倫理観からなまくらのお手伝いをするのはよくないと思っただけで、そうでないなら服を着せること自体は別に嫌ではない。

そんなわけで、慣れない作業でちよつともたついたが、自分よりも背の高いルイズにがんばってなんとか服を着せていった。

「明日からは、洗顔用の水も汲んでおいて。……よし、それじゃ、食事に行くわよ」

ルイズがそう言ってユマを促しながら部屋を出たのとほぼ同時に、近くの別の部屋のドアが開いた。

そこから一人の女性が姿を現して、彼女に挨拶をする。

「おはよう、ルイズ」

それは燃えるような赤い髪と健康的そうな褐色の肌をもつ、彫りが深い顔立ちの美しい女性だった。

ルイズよりも背が高く、体つきも豊満で、ユマから見ると大人のお姉さんという感じである。

学院の制服を着ているが、学生らしからぬことにブラウスのボタンを二番目まで外し、大きなバストの胸元を覗かせて色気を振りまいていた。

様々な点で、ルイズとは対照的な印象を受ける女性だ。

一見して、ディオシエリルにちよつと似ているかも、とユマは思った。

髪の色や、色気のある女性の魔法使いだという点では。

もつとも、ディオシエリルの肌は透き通るように白いし、雰囲気も大分違っているようだが。

一方ルイズは、彼女の姿を見るやあからさまに顔をしかめて、嫌そうに挨拶を返した。

「……おはよう、キュルケ」

「あなたの使い魔って、その子？」

キュルケは、ルイズのすぐ後ろに立って自分のほうをじっと見ているユマの姿をみとめると、面白いものを見つけたというように目を輝かせた。

「そうよ、悪い？」

ルイズはじろつとキュルケを睨んで、少し刺々しい調子でそう答える。

「あら、別にそんなことは言っていないわ。かわいい子じゃないの」

「はじめまして。私はユマ、ルイズの使い魔をしています」

ユマは、ちよつと進み出てぺこりとお辞儀をした。

「はじめまして、ユマちゃん。私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー、二つ名は『微熱』よ。キュルケでいいわ」

「ありがとう。よろしく、キュルケ」

どうやらキュルケは、ルイズほど貴族と平民の身分にこだわりはないらしいわ。

ユマとしてはわりと好印象で親しみが持てそうな人だと思ったのだが、ルイズは彼女が嫌いなようで、気に入らなさそうな顔をしている。

「それじゃあ、お返しに私の使い魔も紹介するわね。フレイムー！」

キュルケが名前を呼ぶと、彼女の部屋から大きさがトラほどもある真つ赤なトカゲが、のそのそと姿を現した。

その尻尾は燃え盛る炎で出来ていて、口からもチロチロと炎が迸っている。

フレイムという名前らしいその使い魔が近くに寄ってくると、むつとした熱気が感じられた。

「わあ……」

ユマは、目を少し大きく開いて感嘆の声を上げる。

驚きというよりはむしろ、久し振りに間近でこういったモンスターを目にした懐かしさからだった。

「ふふ。もしかしたら、ユマちゃんは幻獣を見るのは初めてかしら？」

サラマンダーよ」

「サラマンダー……？」

ウルフレンドで見た同じ名前のモンスターとは、だいぶ姿が違っているようだった。

あちらの世界のサラマンダーは、トカゲに似ていて体が燃えているのはこちらと同じだが、下半身がヘビみたいになっていて腕には槍を持っていたはずだ。

カードの説明には、たしか火の精霊だと書いてあった気がする。

記憶をたどって考え込むユマをよそに、ルイズはその立派な使い魔を見つめながら苦々しい声を出した。

「火トカゲね……。あんたは『火』属性だもんね」

「ええ、そうよ。まさに属性ぴったりね。それも、私にふさわしいブランドものよ?」

キュルケは使い魔の背中をすりすりとは撫でながら、得意げに話を続ける。

「見てよ、ここまで鮮やかで大きい炎の尻尾は、間違いなく火竜山脈のサラマンダーだわ。好事家に見せたら、きつと値段なんかつかないわよー」

「そりゃ、よかったわね」

ルイズはそっけなくそう言いながらも、内心では悔しさ半分で、これだからツエルプストーは品がないわ、使い魔をお金に換算して考えるなんてなどとケチをつけていた。

そんな二人にはお構いなしに、ユマはフレイムとも話を始める。

「よろしく、フレイム」

ユマがそう挨拶をして頭を撫でると、フレイムは心地よさそうにきゆるきゆると鳴いた。

「どうやら人間の言葉は喋れないらしいが、こちらの言っていることはわかってくれていそうな雰囲気だった。

その様子に気が付いたキュルケが、やや意外そうに小さく首を傾げる。

「……あら? ユマちゃん、フレイムが怖くないの?」

「ええ。だって、襲ってこないのはわかってるもの。かわいいと思うわ」

「へえー……」

キュルケは、感心したような声を漏らした。

「見かけによらず頼もしい子ね。使い魔同士、仲良くなってくれと嬉しいわね？」

そう話を振られると、ルイズは黙ったまま不機嫌そうに顔をしかめてキュルケを睨んだ。

キュルケはちよつと肩を竦めると、余裕たつぷりに微笑み返してみせる。

「あら、使い魔の行いに対してあんまり狭量だと、メイジとしての器が疑われるんじゃないかしら？」

「……別に。使い魔同士が仲良くするのを、止める気はないわよ」

「そう？ よかったわ。それじゃあとりあえず、使い魔たちも仲良くしてることだし。私たちも一緒に、朝食に行きましょ？」

ルイズは不本意そうにしながらも、結局は渋々とそれに応じた。

そうして三人と一匹とは、連れ立って食堂へ向かっていったのである。

第四話 それぞれの朝食と思惑

トリスティン魔法学院の食堂は、学園の敷地内でも一番背が高い中央の本塔の中にあつた。

いたるところにきらびやかな飾り付けが施されており、壁際には夜中になると意志を持って動きまわるといふ精巧な小人の彫像がずらりと並べてある。

まるで晩餐会の会場のような絢爛豪華さで、ユマはアインガング城で王様と会食をしたときのことを思い出した。

この食堂は壁に並ぶその魔法の彫像の名にちなんで『アルヴィーズの食堂』と呼ばれているのだと、キュルケが教えてくれた。

「貴族にふさわしい教育を施すには、食卓もそれに見合ったものでなくてはならないのよ」

「ふうん……、そういうもの?」

何かとキュルケに対抗意識を燃やしているらしいルイズも口を挟んで得意げに説明してくれたが、ユマとしては親しい人たちと小さなテーブルを囲む方が落ち着くと思った。

並んでいる食事はどれもおいしそうだがポリウムもすぐくて、どろがんばつても朝からこんな食べられそうにない。

どの席の前にも、何種類ものやわらかそうなパンや果物のかご、大きな鳥の焼いたのやおいしそうなおパイ、香り高い紅茶の入ったポットなどがずらずらと並んでいる。

こういうお姫さまのような生活にも憧れはあるが、いつもかもこんな感じだとなると、きつとうつとおしいことだろう。

レオスリックの姫君であるディアーネも、王女として豪華な席に着くのは大体が堅苦しい義務からで、そんなにいいものではないと言っていた。

冒険中に宿や酒場で好きなものを注文して、仲間たちと気楽に食べる時の方がずっと楽しいと。

それはさておき、食堂の中には軽く百人くらいは座れそうな長いテーブルが三列並んでいて、どうやら学年別に座るらしい。

一階の上にあるロフトの中階には、教師たちの姿も見える。

ルイズとキュルケは二年生であるらしく、中央のテーブルに向かった。

(あれ、二人は同じ学年?)

食堂に集まっている学生たちを見る限りではどうやら学年ごとにマントの色が違うようで、確かに二人は同じ黒色のマントを羽織っている。

ユマはキュルケの方がルイズよりもお姉さんだろうと思っていたので、ちよつと意外そうに首を傾げた。

そのことをルイズに尋ねてみると、この学院は入学時の年齢がきちり揃えられているわけではなく、必ずしも同学年が同じ年とは限らないのだと教えてくれた。

「私は十六歳よ。キュルケは確か、十八歳だったわね」

「そうよ。あなたが年齢以上にお子様に見えるから、きつとユマちゃんも不思議に思ったのよね?」

からかうような調子でそう言いながら、キュルケはボリュームたっぷりの胸を張ってみせた。

「うっさいわね。私はあんたみたいに、いちいち色気を振りまくほど暇じゃないだけよ」

口ではそう言いながらも、負けずぎらいのルイズは自分もぐつと胸を張ってみせる。

残念なことに、まるで勝負になっていなかったが。

ユマはぼんやりと、自分は将来どのくらい大きくなるのかな、と考えた。

「はいはい。……あ、タバサ、おはよう」

余裕たっぷりに笑ったキュルケは、そこで別の友人の姿を見つけて声を掛ける。

「おはよう」

声をかけられたその少女は、足を止めて顔をそちらに向け、淡々と感情のこもっていないように思える声で短く挨拶を返した。

彼女も二年生のマントをつけていたが、同じ学年の生徒の中でもひ

ときわ見た目が幼かった。

身長は年齢のわりに小柄なルイズよりもさらに五センチは低く、体も細くて起伏がほとんどない。

この学院内でも他には見かけない珍しい青色の髪と瞳を持ち、顔立ちは幼さこそ残っているが非常に端整だ。

容姿だけを見れば、ユマよりもほんの少し年上か、下手をすれば同年代かとも思えた。

ただ、そのような年齢の少女らしいあどけなさや活発さは感じられない。

無口で無表情で、ぼんやりと眠そうにしているようにも思える。

「こちらはユマちゃん、ルイズの使い魔よ」

キュルケはそう紹介してから、こうして並べて見るとなんだかあなただの妹みたいね、と喋って楽しげに笑った。

確かに、見た目は姉妹といっても通りそうな感じだ。

髪や目の色こそ違うが、どちらも地味な印象ながらも整った面立ちで、小柄でめがねをかけているところはよく似ていた。

顔つきはあどけないのに落ち着きのある雰囲気を漂わせていて、不思議とどこか大人びて感じられるところも。

もつとも、ユマのほうが彼女よりはだいぶ活発な印象を与えるが、それは年齢相応の稚さがあると考えればむしろ自然なことだろう。

そんなキュルケの感想などどこ吹く風で、二人は淡々と自己紹介を交わした。

「はじめまして、ユマです」

「タバサ」

軽く頷くような会釈をしてそれだけ言うと、タバサはさっさと歩き出してテーブルに着いてしまったので、それ以上の会話は発生しなかった。

「ごめんなさいね、ユマちゃん。タバサはいつもあんな感じなのよ。ほんとはいい子なんだけどね」

キュルケが苦笑してそう言うと、ユマはこくりと頷いた。

「そうだと思う。今度、時間のあるときにお話するわ」

確かに無愛想だが、別に敵意などは感じなかった。

キユルケの言うように、いつもあんな感じのお姉さんのだろう。自分もお世辞にも愛想のいいほうではないだろうし、特に気にしてはいない。

これでもウルフレンドでの冒険以降、だいぶ人と進んで話すようになったくらいなのだ。

ユマはそれから、ちよつと首を傾げた。

「私は、どこかで食べられるの？」

ルイズらの部屋がある火の塔からこの中央塔へくる途中に、フレイルとは外で別れた。

彼に限らず使い魔、特に体の大きいものは、大抵は外で厨房のあまりものなどをもらつて食事にするのださうだ。

そのときに自分も使い魔だから外で食べればいいのかと尋ねてみたが、人間だから食事は屋内でと言われて、ここまでついてきたのである。

クエストの最中に森だの山だの砂漠だの、屋外で食べるには慣れていたので、外でも別に構わなかったのだが。

しかし、見たところこの食堂には、自分が座つてよさそうな席はない。

子供のユマにとっては、立つて食べるにせよ床に座つて食べるにせよ、なんだか行儀の悪い感じがしてあまり気が進まなかった。

みんな席についている中で自分だけそうしているのは、なおさら居心地が悪さうだ。

「うーん、そうね……」

ルイズは、さてどうしようかと考えた。

ユマのような小さな子に床で食べるとか、立つて食べるとかいうのは、さすがにないだろう。

使い魔とはいえ人間だから、野外で食べさせるといふわけにもいくまい。

彼女の椅子を用意させて、自分の横に座らせるという手もある。

しかし、子供とはいえこれから傍仕えをさせる以上は、立場の違い

はわきまえさせるようにせねばなるまい。

いつまでも大目に見続けていては、主人としての面目が立たないだろう。

「ここは貴族用の食堂だから、あなたはよそで食べるのよ。私が食事をする時の給仕役は、仕方ないから免除しておいてあげるわ」

そう言う手近のメイドを呼んで、私の使い魔のために厨房の隅かどこかに毎日の食事をとる席を用意しなさいと言いつけた。

それから、昼食からは別に用意してもらうが、今は自分の席から適当に大皿一つ分ほどの料理を取り分けてもつていつてやるようにと付け加える。

「食べ終わったら、食堂の前で待つてなさい」

「わかった」

ユマはそう言うのと、そのメイドに案内されて食堂から出て行った。料理を取り分けたお皿は、メイドが運ぼうとするのを努めて断つて、自分で運んだ。

「何もよそへ行かせなくても。せつかくの人間の使い魔なんだから、あなたの横で食べさせてあげればよかったでしょうに」

「ここは貴族用の席よ。ユマは平民なんだから、今のうちにわきまえが必要だわ」

「あら、平民である前に使い魔でしょ。あなたのパートナーよ。召喚したばかりなのに、親睦を深めたいとは思わないのかしら？」

「……………」

キュルケにたしなめるような調子でそう言われて、負けず嫌いなルイズは口に出して認めることこそしなかったものの、内心少し後悔していた。

(……確かに、今日くらいはユマもいさせてもよかったかも……)

あーんさせて食べさせてあげたり、口のまわりを拭いてあげたり、よしよしと頭を撫でたりしながら食事したら、きつと楽しかっただろう。

いくら小さくてかわいい子と言っても、下位の相手としてしか付き合えない使用人に対しては、普通はそんなことは思わない。

だがユマは、まあまだこちらの制度に疎いからなのだろうが、無条件に服従するでもなく、かといって無暗に齒向かうでもなく、ごく自然体な感じで自分と付き合ってくれる。

疑問に思ったことがあれば臆することなく質問をして、貴族だからというのではなく、こちらの言い分をちゃんと聞いて認めた上で素直に答えを返してくれるのだ。

級友からいつも笑われていて友だちらしい友だちもいないルイズには、自分でもまだはつきりと意識してはいないが、それがなんだかんだで嬉しかった。

とはいえ、ルイズのプライドは高い。

貴族としてそんな、給仕の真似事のようなはしたないことはできないし、それを人に見られるのも恥ずかしいのだった。

まあ、もし実際にそんなことをしようとしたら、ユマはいくらなんでもそんなに子供じゃないわと言って反発していただろうが……。

・
・
・

一方、ユマの方はといえば。

本来なら昼にお邪魔する予定だった厨房に案内されて、シエスタと早々に再会していた。

彼女がこの子は私の知り合いだからと他の使用人たちに事情を説明して、ユマのために一人用の机や小さめの椅子を運んでくる。

厨房の隅のほうにその机を置いて、その上にルイズがくれた皿と一緒に、まかないのスープや紅茶も並べてくれた。

「今はあんまりないけど、お昼にはたくさん用意するからね」

「ありがとう、シエスタ。だいじょうぶ、これでも多すぎるくらいよ」
シエスタにお礼を言い、席についていただきますと手を合わせる
と、彼女から不思議そうな顔をされた。

「ユマちゃん、変わった食事の挨拶をするのね」

「そう？ 私の国の挨拶なの。こっちの挨拶は、どんな風にするの？」
「ええと、貴族の人たちは始祖にお祈りするけど、私たち平民は特に決

まりはないわ。……そういえば、東の国からきた私のひいおじいちゃんも、そんな挨拶をしてたって」

それからシエスタに、ユマちゃんも東の国の生まれなのか、と聞かれた。

「そう、日本。東の方の国」

「ふうん、ニホンって言うのね？　ロバ・アル・カリイエにある国かしら……」

ユマは首を横に振った。

「たぶん、違うわ。空に月が一つしかないもの」
「え？」

特に隠し事をする気もないユマは正直に話したが、シエスタはきよとんとした顔になった。

昨夜のルイズの反応からして別に信じてもらえるとも思っていないので、ユマも特に気にはしない。

「……月が、一つ……？　スヴェルの夜みたいなのに、いつもずっと月が重なって見える地方とかがあるのかしら」

「違うと思う。けど、私にもよくわからないから」

考え込むシエスタに対して、ユマはややそっけない調子でそう答えると、食事にとりかかった。

彼女は年齢からすれば博識な方だったし賢くもあるのだが、まだ義務教育課程も修了していないのだから、その知識にはどうしても限りがある。

月の見え方や何かについて、彼女が科学的に詳しい話などを知らないというのは本当のことだ。

とはいえ、現在の地球の地図には未知の地域が入る余地などないこと、ましてや魔法とファンタジーの国などありえないことは知っていた。

だから、ハルケギニアが異世界であることは疑ってはいない。

だが、ルイズでさえいまだに半信半疑な様子なのに、シエスタにそのことをわかってもらえるとは思えない。

それに仮にわかってもらえたとしても、おそらくは混乱させたり心

配させたりするだけで、たぶんあんまり意味がない。

なので、嘘をつく気などはないが、今のところは無理をして詳しく説明しようとも思わない。

それについては全然気にしていないような顔をしていた方が、彼女に無駄に心配などをさせなくて済むことだろう、と考えていた。

「そうなの……。よくわからないくらい遠くに連れてこられて、大変でしょう?」

「ううん。友だちに挨拶もしないで出てきたのは、悪かったと思う。でも、ここではみんな親切だから、今のところは別に大変なことはいわ」

ユマは、そう言ってふるふると首を振った。

そう言ってみても、シエスタがきつと気を遣ってくれるだろうことはわかっていた。

アインガングでも、そういう大人が何人もいたから。

まだ小さな子供だから家が恋しいだろう、両親が恋しいだろう、心配かけまいと強がっていても本当は心細いはずだ……。と、しきりに心配して世話を焼いてくれるのだ。

そういった気遣いが、最初のうちはうっとおしいと思っていた。

今ではそんなことはないし、嬉しくないわけではないけれど、なんだか後ろめたいような、申し訳ないような、居心地の悪い感じはする。強がりではなく本当に平気なのだということが、なるべく早く伝わればいいのだが……。

「ごちそうさま。おいしかったです」

食事を終わると、ユマは自分で食器を洗い場に返した。

例によってシエスタに自分が運ぶといわれたが、そのくらいは自分でしないとよくないから、と言って断った。

少なくとも、学校ではそのように習っている。

それから使った机と椅子も、邪魔にならないよう忘れずに厨房の隅っこに寄せた。

「ありがとう。今度時間があるときには、掃除のお手伝いとか、します。今は、ルイズから呼ばれているから」

ユマはそう言うと、使用人たちにペこりと頭を下げた。

「ええ、その時はお願いね。……はい、これ。好きなときに食べて」
帰り際にシエスタとは別の、もう少し年配のメイドが、そう言って戸棚からお菓子の入った小さな包みを出してくれた。

「おう、そいつは貴族用の茶菓子だからうまいぜ。お嬢ちゃん、いつでもまた来なよ、歓迎するからな！」

マルトーという名の太った中年の料理長が、快活に笑って手を振った。

謙虚な姿勢が好印象だったのか、あるいは単にいたいけな子でかわいと思われたのか。

シエスタ以外の使用人にも、ユマはかなり気に入られたようだった。

「ん……」

帰る途中にもらった包みの中身を確認すると、バターサンドのようなお菓子がいくつか入っていた。

しつとりしたビスケットの間に、クリームとなにかベリー系の乾果（ユマは知らなかったが、クックベリー）が挟んであるようだ。

「わあ、おいしそう」

ユマは顔をほころばせて、あとでルイズと一緒に食べようかな、と思った。

そうして包みを閉じたあたりで、ふと思いつく。

（……これ、カードにできないかな？）

ウルフレンドにいた間、普通の食べ物をカードにするのを試してみたことはない。

カード使いの力にも限界があり、クエストに持ち込めるグッズの枚数には限りがあるので、戦いに関係ないものまでカードに入れて持つていくような余裕はなかったのだ。

だから、クエスト中に食べるための食料などは普通に携帯していた。

でも今は、そのグッズを持っていない。

地球に戻ったときにもウルフレンドで入手したカードは手元に残ったのだが、そこからモンスターなどを呼び出す力はなくなっていた。

学校に持ち込むのは校則違反ということもあるし、何よりも紛失などは絶対にしたくないので、普段は大切にしまっておいて、たまに取り出して眺めたり話しかけたりしている。

だから、ルイズからの召喚を受けた学校帰りの時には、それらのカードは手元にはなかったのである。

もしもあれば、またデИАーネやルフィアといったあの世界の仲間たちを呼び出して再会できたかもしれないだけに、残念でならない。

しかし、前向きに考えるなら、だからこそ今はただの食べ物でもカードにして持つておくような余裕があるはずだ。

以前ウルフレンドにいた時に使っていたカードの中には、マジックベリーというMPを回復する不思議な木の実のカードがあった。

ラブラブチョコという、天にも昇るような心地になる甘い甘い魔法のチョコレートのカードもあった。

したがって、食べられるものをカード化することはできるはずなのだ。

あの世界では、クエストの最中に見つけたアイテムはカードとして持ち帰っていた。

この世界では以前と同じような力を自分の中に感じるし、もしかしたら自分の所有物をカード化することができるかもしれない。

もしできれば、その能力はルイズのためにも役立てられるだろう。

「……………」

ユマはすうっと深呼吸をすると、手の中の包みに意識を集中した……………。

第五話 異世界の初授業

しばらくの後、ユマは普段より機嫌よさそうに小声で歌など口ずさみながら、食堂の前でルイズが出てくるのを待っていた。

その手には、先程食堂でもらったお菓子の包みはない。

ほどなくしてルイズが出てきたが、なぜか彼女の方は、若干機嫌が悪いようだった。

「これから授業にいくわ。今日は先生方への使い魔のお披露目もあるから、ついて来なさい」

ルイズがそう言って歩き出したので、ユマもとことそその後についていく。

これから授業なのでは、細かい説明などをしている時間はないだろう。

そういうわけで、カードにして懐に入れたお菓子について説明するのは、また後にすることにした。

魔法学院の教室は石造りで、教壇が一番下の方にあり、そこから席が上に向かって階段状に重なっていた。

地球で言えば、まあ大学の講義室のようにつくりだと言えるだろうか。

もちろんユマは大学のことなど知らないが。

先に教室に来ていた生徒たちの多くは、二人が入ってくるとそちらを振り向き、くすくすと忍び笑いを漏らしたり、ひそひそ話を始めたりする。

ルイズはそれを気にした風もなく、他の生徒たちからやや離れた席に一人で座った。

ユマはルイズの席の傍らに立ったまま、物珍しそうにきよろきよろと教室の様子を眺めてみた。

キュルケは先に食事を終えて教室に入っていたようで、まるで女王のように周囲を男子生徒たちに取り巻かれていた。

タバサも彼女の近くの席に座っていたが、快活な友人とは正反対で

まるで注目されておらず、黙々と本を読んでいるようだ。

しかし、なんと言っても目を引くのは、生徒らが連れている多種多様な使い魔だった。

主人の肩に乗ったフクロウ、腕にはりついているトカゲ、机の上に大人しく座っている猫に、窓から顔を覗かせている大蛇。

他にも、地球には存在しないであろうさまざまなモンスター、この世界では幻獣と呼ばれている生物たちがいる。

いずれもウルフレンドのモンスターとは姿が違うようで、ユマにも名前の推測がつく生物もいたが、見慣れないものも多い。

ユマはそれらについて、ルイズにいろいろと尋ねてみた。

「あれはバグベアー。向こうのはバジリスクよ」

「ふうん……」

バグベアーといったら、ウルフレンドではゴブリンやオークと同じような人型の種族だった。

バジリスクも、ぜんぜん姿が違っている。

(やっぱリッコは、同じファンタジーの世界でもあつちとは違うんだわ)

見れば、フレイムもいつの間にかキュルケと合流していたようで、彼女の椅子の下でまどろんでいた。

タバサは使い魔を連れていないようだったが、ルイズに聞くと彼女が召喚したのはまだ子供だが風竜という種類のドラゴンで、この部屋に入らないからだろうということだった。

そうこうしているうちに、先生らしい人が教室に入ってくる。

それは優しい雰囲気と漂わせたふくよかな中年の女性で、紫色のローブに身を包み、とんがり帽子をかぶっていた。

容姿などはともかく、格好はいかにも魔女という感じでルフィアにも似ている。

彼女は教壇にのぼると、満足そうに微笑んだ。

「皆さん、使い魔召喚の儀は大成功だったようですね。このシユヴルーズ、毎年春の新学期にこうしてさまざまな使い魔たちを見るのが、とても楽しみなのですよ」

そうしてゆつくりと教室中を見渡し、生徒と使い魔の姿を確認していく。

やがて、その視線がルイズとユマのほうを向いた。

一瞬きよとんとしたような顔をしたが、すぐに何かを思い出したように、ゆつくりと頷く。

「ああ、そうそう。ミス・ヴァリエールは変わった使い魔を召喚したものです。ミスタ・コルベールから聞いていなければ、授業の見学にきたのかと思うところでした」

シユヴルーズがそう言うと、クラスのあちこちからくすくすと笑い声が聞こえてきた。

ルイズは不機嫌そうに眉根を寄せたが、ユマは構わずに一步前に出て、先生に向かってお辞儀をする。

「はじめまして、ユマです。先生、よろしく申し上げます」

「まあ、かわいらしいこと」

シユヴルーズが、につこりと顔をほころばせた。

彼女はあまり身分の差などにはこだわらない、温厚な人柄なのである。

しかし、そこへ横合いから野次が飛んだ。

「どうせ召喚できないもんだから、見た目のいい使用人を適当に雇って連れてきたんだろ！」

教室中が、どつと笑いに包まれる。

ルイズが憤然と立ち上がって、その生徒に向かって怒鳴った。

「違うわ！ この子はちゃんと私が召喚した使い魔よ、みんな見てたじゃないの！」

「何度も失敗した後には、だろ？ おおかたみんながうんざりしてよそ見してる間に、どっかから連れ込んだのさ。ゼロのルイズに、『サムン・サーヴァント』ができるもんか！」

明らかにひどい言いがかりだったが、多くの生徒がその意見に賛同しているのか、品のない笑いが止む気配はない。

ルイズは悔しさに肩を震わせて、さらに何か言い返そうとする。

ユマは、嫌な口喧嘩が始まる前に、なにかしたほうがいいだろうか

と悩んだ。

が、そこで。

「いえ。私はさつき、食堂までミス・ヴァリエールとユマちゃんにご一緒しましたわ。そのときに、彼女の左手に使い魔のルーンがあるのをちゃんと見ましたけど?」

キュルケが颯爽と立ち上がって、口を挟んだのである。

彼女からの目配せを受けて、ユマはこくりと頷き、皆によく見えるように左手を開いてぐつと上に伸ばす。

そこには間違いなく、昨日刻まれた使い魔のルーンがあった。

思いもかけないところからの口出しに、それまで笑っていた教室の皆が一斉に静まる。

ルイズは資格が高く筆記の成績も優秀なもの、何よりも重視される魔法の腕前が壊滅的な上に、負けん気ばかりが強くて性格的にもかわいげがない。

教室内でのヒエラルキーは、底辺の部類である。

対してキュルケは、社交的で男子生徒たちから人気があり、魔法の腕前も学年トップクラスである。

ヒエラルキーは、最上位のレベルだ。

その彼女が認めているのであれば、誰もそれ以上笑うわけにはいかなかった。

それでも、最初に声を上げてルイズを馬鹿にした男子生徒は引つ込みがつかないのか、もごもごと口ごもりながら反論を呟いた。

「そ、そんなのは、偽装とか……」

「あら。それではミスタ・グランドプレは、わたくしの目がルーンの真贋の区別もつかない節穴だとおっしゃいますの?」

キュルケはそう言うてにっこりと微笑むと、その生徒……マリコルヌ・ド・グランドプレのほうを見つめた。

下手に怒鳴られたり睨まれたりするより怖かったようで、マリコルヌは慌てて首を横に振ると、机に目を落とす。

どうにか騒動が収まったのを見て、シユヴルーズがこほんと咳払いをした。

「ええ、ミスタ・コルベールも確認されたのですから、間違いはないでしょう。お友達にいわれのない中傷をしてはいけませんよ。……では、授業を始めますので、席について」

キュルケはそれを受けて軽く会釈をすると、席に座りなおした。ユマは座つていいものかとちよつと悩んだが、自分だけ立っているのも落ち着かないのでルイズの横に腰掛ける。

もしかしたらルイズから注意されるかとも思っていたが、彼女はやや困惑したような顔でキュルケの方を気にしているようで、何も言つてこなかった。

きつと二人は仲が悪そうに見えていい友達なんだなと思つて、ユマはちよつと嬉しそうに頬を緩めた。

「めずらしい」

席に着いたキュルケに、タバサが短く声をかけた。

普段はルイズが笑いものになつていても、別にこんなことはしないはずだ。

そもそも、キュルケの家とルイズの家は昔から不仲らしく、少なくともルイズのほうでは彼女を嫌っている。

「あら、ルイズがゼロなのは事実だけど、不正は濡れ衣ですよ。だいたい、あんな小さな子にまで面白半分で不正の片棒を担いだ疑いをかけるだなんて、気に入らないじゃないの」

キュルケは当たり前でしょ、というような顔でそう言った。

彼女としては、今朝顔を合わせて個人的に気に入ったユマを弁護したつもりであつて、ルイズのことはそのついでだ。

少なくとも、誰か人に聞かれればそう答えるだろう。

「そう」

タバサはそれで納得したのか、軽く頷いて親友から目を外し、読んでいる本に視線を戻した。

学期始めの基礎授業など、筆記でも実技でもトップクラスのこの少女にとつてはまずノートをとるまでもない。

本の続きを読みながら耳で話だけ聞いておけばそれで十分、と考え

ているのだろう。

キユルケにとつてもそれは大体同じことで、そうでなくても彼女はあまり興味のない授業などを真面目に聞く性質ではない。

そんなわけで、彼女はペンをくるくると手の中で弄びながらぼんやりと教師の方を眺めつつ、先程マリコルヌに同調して笑っていた男子生徒の顔を思い出していた。

その中には、今夜部屋へ招く約束をしていた男も含まれている。些細なことで実につまらない存在であることを明らかにしてしまふ男は多いものだ、キユルケは小さく鼻を鳴らした。

あの男とは確か十日あまりの付き合いだったが、恋の微熱が冷めてしまった以上はこれまでだ。

彼女は恋多き女性、というよりは男に取り巻かれて、彼らを意のままに飼い慣らすのが好きなのだった。

したがって特定の男への未練は薄く、彼らの誰かが彼女の機嫌を損ねるようなことをしたら、普通はその男との関係は終わりになった。(……ま、いちいち声を掛けるのも面倒くさいわね)

彼女は基本的に自己中心で、興味の失せた相手に対してはいたって冷淡だ。

今夜部屋に来たら、そのときに断って追い払えばそれでいいだろう。

どうでもいい男が未練たらしく抗議したりごねたりするのをなだめるなんて、うんざりするような仕事なのだから。

いよいよ、授業が始まった。

シユヴルーズが軽く杖を振ると、教卓の上に石ころがいくつか現れる。

「あらためまして、私の名はシユヴルーズ、二つ名は『赤土』です。『土』系統の魔法を、これから一年、皆さんに講義します」

彼女はそう言って会釈すると、最初に魔法の四大系統は何かと、先程のマリコルヌを指名して質問した。

「は、はい、ミセス・シユヴルーズ。『火』『水』『土』『風』の四つです」

「よろしい。それに失われた『虚無』を含めて、私たちの系統魔法が合わせて五つの系統から成っていることは、みなさんもご存知ですね？」

生徒たちが頷く。

誰も書き取りなどをしないことからすると、今の話は非常に基礎的な内容なのだろう。

しかし、ユマにとってはもちろん初めて聞く話である。

自分だって学生だからということも別にしても、この世界については知らないことだらけなので、何でも学んでおかなければならない。

(ノートと筆箱をもってくればよかったわ)

鞆ごとルイズの部屋に置きっぱなしにしておいたことが悔やまれた。

次からは持つてくるようにしようと決めて、とりあえず懐からいつも持ち歩いているメモ帳を取り出すと、挟んである三色ボールペンでさらさらと先程の先生の話を書き取る。

隣に座ったルイズは、横目で不思議そうにその見慣れない筆記用具と、知らない文字とを眺めていた。

そうしている間にも、シュヴルーズの話は続く。

「私は五つの系統の中でも、『土』こそがもつとも重要なポジションを占めていると考えています。なにも、私が土系統だから身びいきをしているというわけではありませんよ」

彼女によれば、土系統の魔法は万物の組成を司るもので、この魔法がなければ重要な金属を作ったり加工したりすることは難しいとのことだった。

それに、大きな石を切り出して建物を建てるのにも、農作物を収穫するのに、重要な役割を果たしているのだという。

「……このように、土系統の魔法はみなさんの生活に重要な貢献をしており、なくてはならないものです。ゆえに、最重要だと考えるのです」

ユマは、うんうんと頷きながらペンを走らせた。

この世界ではどうやら魔法使いの数がかなり多くて、社会の中で果

たしている役割もウルフレンドよりもずっと大きいみたいだった。

ウルフレンドではそもそも魔法使いは珍しい存在だったから、魔法に頼った社会なんてものを作るのは難しいだろう。

もしいけば頼りにされるが、いないからといって世の中が回らなくなるなんてことはまずないのだ。

「さて、『土』系統の魔法の基本はなんですか？ ミス・ツエルプストー」

「ん？ ああ……、『錬金』ですわね」

「そうです。一年の時にできるようになった人も多いでしょうが、基本は大切です。第一回の授業は、そのおさらいから入ります」

シュヴルーズがそう言つて杖を振り、ルーンを呟くと、教卓上の石ころのひとつが光り出す。

ややあつて光が収まると、石はぴかぴかと輝く金属に変わつていった。

「……！ゴ、ゴールドですか!？」

にわかに興味を惹かれたらしいキュルケが、目を見開いて身を乗り出した。

「いえ、これは真鍮です。ゴールドはスクウエア・クラスのメイジでなければ錬金できません。私は……、ただの、トライアングルですから」

ユマは、スクウエアとかトライアングルというのは、魔法使いの格付けのことだろうかと思つた。

隣のルイズに小声で尋ねてみると、その通りだと教えてくれた。

この世界の魔法は同じ系統をさらに加えるか別の系統を足すかすることですさらに強力になり、ランクはいくつの系統を足せるかを表すのだと。

「ドットが一つで、ラインが二つ。トライアングルは三つで、スクウエアが四つよ」

「ふうん……」

あの先生は自分のランクを言う前に、もったいぶって咳払いをしていた。

謙遜していたが、トライアングルというのはかなり高いレベルで、

それに自信をもっているのだろう。

「じゃあ、真鍮ってというのは、なに？」

「金属の名前よ。黄銅ともいって、たしか錬金以外で作るには、亜鉛と銅を混ぜて……」

ルイズは本来、静かに授業を受ける真面目な生徒なのだが。

友だちがおらず普段はあまりおしゃべりをしないのもあって、いろいろ尋ねてくるユマに自分の知識を披露するのが楽しく、つい夢中になった。

それを、シユヴルーズに見咎められた。

「ミス・ヴァリエール。召喚したばかりの使い魔がかわいいのはわかりますが、授業中によそを向いて私語をしないけませんよ」

「あ……、す、すみません」

しよぼんとするルイズの横で、ユマが立ち上がったぺこりと頭を下げた。

「私がルイズに聞いたんです。先生、ごめんなさい」

「あら……、まあ。いえ、あなたやあなたの主人を叱ろうなんてつもりはないのですよ。ちよつと注意しただけですから」

シユヴルーズは、少し目を丸くした後、微笑ましげに頷いた。

生徒たちの反応は、さまざまだった。

シユヴルーズと同じような反応をする生徒もいれば、相変わらず忍び笑いをしている生徒も、平民がでしゃばるなどでも言いたげな嫌な目で睨む生徒もいた。

キュルケは微笑ましげに頬を緩めながら、横目で男子生徒らの反応を見て、次はあの子に粉をかけてみようか、あいつに声をかけるのは中止だ、などとチェックしていた。

タバサは、気にせず本を眺めている。

しかし、次のシユヴルーズの発言で、全員が一様に凍り付いた。

「では、名誉挽回の機会を。ミス・ヴァリエール、ここへきて、石ころを好きな金属に錬金してごらんなさい」

第六話 爆発と掃除と友達と

先生から実技の指名を受けてももじもじするばかりでなかなか立たないルイズを見て、ユマは不思議そうに首を傾げた。

他の生徒たちも様子がおかしく、みんな何かを怖がっているように見える。

先程ルイズを弁護した、キュルケでさえも。

「ミス・ヴァリエール、どうしたのですか？ さあ」

シュヴルーズが再度そう言つて促すと、キュルケが困つたような声で口を挟んだ。

「あの、先生。私がやりますわ」

「立候補するのはよいことですが、ミス・ヴァリエールが終わつてからです」

「いえ、その。彼女はやめておいた方が……」

なぜかと問われると、キュルケは危険だからだと答えた。

教室の他の生徒たちも、ほとんどの者がそれに同意して頷いている。

「何を言うのです？ 『鍊金』には危険などありません」

「先生は、ルイズを教えるのは初めてだから、知らないと思いますけど……」

「ええ。ですが、彼女は努力家だと聞いています。失敗を恐れていては、成長はありませんよ？」

「……はい。やります」

シュヴルーズに再三促されて、ルイズはついに意を決したように立ち上がった。

キュルケは青い顔をしてルイズにやめるようにと頼んだが、彼女は聞く耳を持たない。

彼女がつかつかと教壇のほうへ向かって歩いていく間に、教室の前方に座っている生徒たちは、慌てて椅子の下に隠れ始めた。

(どうしたんだろう)

ユマは、困惑して首を傾げた。

生徒たちの慌てぶりはどう見ても本物で、ルイズへの嫌がらせなどではないようだが……。

だとすると、一体何を恐れているのだろうか。

あのルフィーアは、普段は優しい性格なのにネズミを見ると、どこぞの猫型ロボットよろしくあたり構わず魔法を撃ちまくるらしい。

人間サイズの巨大ネズミを見たときなど、我を忘れて森ごとすべて焼き払おうとしたらしく、そのために森に棲むエルフやコボルドが逃げ惑っていたくらいだ。

ルイズもそんな感じで、ちよつとしたきつかけですぐに魔法を暴走させるとか、何かそういったことだろうか。

「ミス・ヴァリエール。錬金したい金属を、強く心に思い浮かべるのです。魔法にはまずイメージと、そして成功を疑わない自信が大切です。詠唱は、覚えていますか？」

「はい。大丈夫です」

シユヴルーズがにっこりと微笑んでルイズの隣に立ち、丁寧に指導する。

ルイズはこくりと頷いて、真剣な面持ちで杖を掲げた。

それをじつと見つめていたユマの体が、突然ふわっと空中に浮かんで、後ろに引っ張られる。

「……？」

一体何が起こったのかと思っていると、短い杖を手に持ったキュルケの横に着地した。

どうやら彼女が何か念力のような魔法を使って、自分の体を近くに引き寄せたらしい。

「ユマちゃんも隠れてた方がいいわ」

そう言うと、キュルケはユマの体を抱えるようにして、机の下に引っ張り込んだ。

何がなんだかわからないが、彼女が親切でやってくれたのは確かそうなので、ユマも大人しく従う。

机の影からちよこんと顔だけを出して、何が起こるのかと見守った。

「……イル・アース・デル！」

ルイズは静かに深呼吸をした後に、短くルーンを唱えて杖を振り下ろす。

次の瞬間、石ころは教卓もろとも爆発した。

煙と煤が噴き上がり、間近のルイズとシュヴルーズは爆風をもろに食らって黒板に叩きつけられた。

爆発の影響を直接受けたのは教室の前の方だけだったが、悪いことに今日は、お披露目のために教室中にたくさんの使い魔が入っている。

爆音に驚いた彼らはあちこちで暴れだし、たちまち教室中が阿鼻叫喚の大騒ぎになった。

「フレイム、ここで火を噴いちゃダメよ！」

「きゃあ、マンティコアが窓から外に！　だ、大丈夫、キャシー？　ガラスは刺さってない？」

「うわわ、割れた窓からヘビが入ってきた！　……お、おい。俺のラツキーを呑み込むな、こいつツ！」

「畜生、もうヴァリエールは退学にしてくれよ！」

ブーイングの上がる中で、ルイズがむくりと起き上がる。

煤で真っ黒に汚れ、服のあちこちが裂けて肌や下着が露出して、見るも無残な格好だった。

シュヴルーズのほうは予想外の衝撃で完全に意識を失ってしまったらしく、倒れたまま痙攣して起きて上がる気配がない。

「ちよつと、失敗したみたいね」

ルイズがハンカチで顔を拭いながらそう言うと、一層ブーイングが激しくなった。

「何がちよつとだ、ふざけるなよ！」

「あんたはいつだつてこうじゃないの、ゼロのルイズ！」

ユマはなぜみんなが怖がっていたか、どうしてルイズがゼロと呼ばれているのかを理解した。

だが、今はそれどころではない。

椅子の陰から飛び出すと、教壇の方に向かって急いで駆けだした。

ルイズは自分の使い魔がこっちへ駆け寄ってくるのを見て、軽く首を振ると問題ないと声をかけようとした。

が、ユマは彼女をスルーして、倒れているシュヴルーズの傍に屈み込む。

「先生。……大丈夫？ シュヴルーズ先生！」

ユマは耳元で彼女の名を呼びながら、軽く体を揺すって反応を確かめた。

すぐに立ち上がったルイズが無事なのは見ればわかるが、先生は倒れたままなのだから危険な状態かもしれない。

この状況では、当然そっちの手当てが最優先である。

それを見て、はっと我に返った『水』系統のメイジたちが何人か、教壇に駆け寄った。

水系統のメイジは、『治療』の呪文を得意としているのだ。

ユマは先生に体力を回復させるヴィタルの魔法を唱えようかとしていたが、治療を専門にしているらしい魔法使いたちが来てくれたので、彼女らに任せることにして場所を譲った。

「大丈夫、気絶しているだけね。私たちが介抱するわ。誰か医務室に連絡して、念のため先生に秘薬をもって来てもらって！」

見事な金の巻き髪をもつ少女が、倒れているシュヴルーズを軽く診察すると、そう指示を出した。

それを受けて、彼女のボーイフレンドらしい薔薇をシャツのポケットに挿した金髪の少年が、部屋を飛び出していく。

「……………」

その間、ルイズは脇のほうに退いて、きまり悪そうにもじもじしていた。

魔法を使えない彼女では治療に加わることはできないし、助けを呼びに行くにしても、空を飛べる他のメイジより明らかに遅いのだ。

この事態を引き起こした元凶でありながら何もすることがないというのだから、それは居心地も悪いだらう。

ユマは、今度はそんなルイズの傍に近づいた。

「ルイズは、怪我はないの？」

「……ええ。大丈夫よ」

それでも、ユマはルイズが強がりと言っているのではないかと、彼女の手を取ったり全身をきよろきよろ眺めたりして、自分の目で調べてみた。

本当に怪我はしていないと納得すると、よかったといって頷いて、それから小声で耳打ちするように付け加える。

「みんなに謝ってから、部屋に戻って着替えてきた方がいいわ。その後で、この教室の掃除をしましょう」

私も手伝うから、とユマに言われて、ルイズは顔をしかめる。

「な、何で、私が謝るのよ。それに、片付けだなんて。そんな、使用人みたいな……」

「だって、ルイズがやったんだもの。悪気はなかったにしても謝るのは当然だし、片付けも自分ですべきだわ」

ユマは、そんなことは当たり前だろうというように、淡々と答えた。少なくとも、自分が地球で通っている学校ではそう習っている。

「それに、言われる前に自分からやった方が、先生からの印象もよくなると思うの」

「……うー……」

だって、先生にやれと言われたからやっただけなのに。

別に、やりたくてやったわけじゃないわ。

何で、貴族の私が……。

そんな文句の言葉が、次々と頭に浮かんでくる。

しかし、ユマの言うことは正論であった。

自分がいくらがんばったにしても、他人に迷惑をかけたことには違いない。

明らかに自分が悪いときに謝らないのは、貴族として本当に誇りのある態度とは言えないのではないか……。

「……わかったわよ」

ルイズはしぶしぶながら、使い魔の提案に従うことにした。

「……その。みんな、ごめんなさい……」

「授業の邪魔をしてすみません。教室は、私たちで片付けます。先生

の手当てを、どうかお願いします」

主従は入り口のところで頭を下げてそう謝罪すると、教室の外へ出て行った。

ユマはそれから、道具は私が持つてくるからその間に着替えておいてと行ってルイズと別れ、小走りに駆け出していく。

後に残った生徒たちは、あのゼロのルイズが小声でとはいえ頭を下げて謝るなんてと、ざわざわと話し合っていた。

彼女のその振る舞いを平民のようだと言って笑う者もいたが、どちらかといえいい印象を受けた生徒の方が多かったようだ。

「へえ……っ？」

「……めずらしい」

キュルケは思わずそう声を漏らし、タバサも本からわずかに顔を上げて、ぽつりと呟いた。

ルイズの評判が悪いのは、もちろん何よりもまず、この世界で重視される魔法の腕前が壊滅的だからである。

杖よりもマントよりも、何よりもまず魔法の力こそがメイジであることの証であり、平民の上に立って彼らを導く貴族としての立場と誇りを支えるものなのだ。

しかし、実際のところはその性格による部分もかなり大きいだろうなど、二人は常々思っていた。

キュルケは、本来ならルイズには、魔法ができないにしても擁護してくれる者や言い寄る男はそれなりにはいたことだろうと思っている。

当然自分ほどではないという自信はあるものの、それにしてもルイズは明らかに美人の部類だし、家柄もよく、勉強に取り組む態度も真面目なのだから。

それがなぜ総スカンをくらって皆から孤立しているかといえば、そりゃあ迷惑をかけているのに無駄に高い気位のせいで反省する態度を示せないせいに決まっている。

能力的にはまるでダメでも、愛されるような性格でみんなから人気のある人というのは割とよくいるものだし、その逆もまた然りだ。

タバサには、この学院の誰にも話したことはないが、ルイズと同じように魔法をろくに使えない身内が二人ほどいた。

ゆえあつて愛情などまったくなくない、むしろ仇敵とみなしている連中なのだが、ルイズの姿を見ているとその境遇にいくらか同情を覚えなくもない。

お世辞にも愛されるような性格ではない歪んだ者たちだが、それは生まれつきばかりではないのだろう。

彼女と同じく、魔法が使えず人から認められないせいでそうなったという面も、おそらくいくらかはあるのだろうから。

ルイズは誇り高く努力家であるからきつと大丈夫だろうが、誤って彼らのように道を踏み外したりはしないしてほしいものだと思う。

とはいえ、キュルケもタバサも、ルイズにその旨を指摘したり忠告したりしてやったことはなかった。

二人ともそこまでお節介焼きな性格ではないし、本人の自己責任だ。

第一、もし仮に言ってみたところで、あのルイズが仇敵ツエルプストー家の娘である自分の忠告を聞き入れるわけがないと、キュルケは確信している。

タバサは、元より必要がない限り人と関わろうとしない生徒で、キュルケという親友こそいるものの、周囲から孤立しているという点ではルイズと同じようなものだった。

しかし、魔法が使えるようにはならないまでも使い魔の召喚をきつかけにルイズにいい影響が表れてきているのだとすれば、それは結構なことだとは二人とも思っている。

「どう、タバサ？ ユマちゃんが戻ってきたら、私たちも片づけに協力してあげるっていうのは？」

「……手伝いを禁止されなければ、付き合ってもいい」

タバサは、本来なら授業が中止になったのだから図書館へ行くか部屋に戻るかして本を読もうと思っていた。

だが、キュルケが手伝うというのなら、親友と一緒にヴァリエールの主従に付き合うというのもやぶさかではない……。

結局ルイズは今回の騒ぎの罰として、滅茶苦茶になった教室の後片付けをさせられることになった。

騒ぎを聞きつけてやってきた別の教師が、まだ気絶していたシュヴルーズに代わって生徒らに授業の中止を伝えるとともに、そうするようルイズに言い渡したのだ。

しかし、迅速な手当ての甲斐もあって小一時間ほどで目を覚ましたシュヴルーズは、彼女のことを弁護してくれた。

生徒たちが反対しているのを黙殺して、錬金を行うよう指示したのは自分のほうだから、と言って。

彼女は精神的にかなりのショックを受けたようだが、ルイズに吹き飛ばされたことについて特に彼女を責めたりはしなかったのである。

そのことと、指示を受ける前に自分から進んで片付けに取り組もうとしていたことが、いい方向にはたらいたようだ。

「机のほうは私がやっとくわ。あなたは、窓ガラスをはめておいて」「かしこまりました、ミス・ツエルプストー」

自主的に協力を申し出たキュルケがシエスタにそう指示を与えながら、『念力』で壊れた机を運び出し、新しい机を並べていく。

ルイズは最初、当然のように申し出を拒絶しようとしたのだが、キュルケはお構いなしだった。

あなたの不始末のせいで重労働をさせられるユマちゃんがかわいそうだからやってるんじゃないの、と言われれば、ルイズも黙るしかなかった。

シエスタは指示された通り新しい窓ガラスを運び込んで、ときばきと取り付けていった。

ルイズの態度から反省はしていると判断した教師が手伝いを出すように使用人たちに伝え、掃除用具を借りに来たのがユマだったこともあって、彼女が抜擢されたのである。

ユマはいえ、シエスタから借りたモップを使って、教室中を勢

いよく駆け回ってゆかみがきをしていた。

小さな子供とは思えないほどてきぱきと、まるで魔法のようにあたりをピカピカにしていく様子には、シエスタも目を丸くする。

見た目の割にずいぶんと力があるようで、椅子をいくつも重ねて一人で持ち上げては、平気な顔で運んだりもしていた。

「すつごい頑張り屋さんねえ」

キュルケはユマの働きぶりを眺めながら、感心したようにそう呟いた。

「ユマちゃんみたいに、フレイムにも働いてもらえたらよかつたんだけど……」

自分の使い魔であるフレイムにも窓ガラスなり机なり、なにか荷物運びくらはさせられるかもと思ったのだが、先程教室で暴走して火を噴いたことを考えると少し不安があった。

そういうわけで、今回は手伝いに駆り出すのはやめにしておいたのだ。

幼生とは言えドラゴンであるタバサの使い魔こそ荷物などを運ぶのに向いていそうなものだったが、彼女によれば今はよそへ出かけていて学院内にいないらしい。

キュルケは知らないことだったが、実は彼女はハルケギニアでは既に絶滅したとされている、高い知能をもつ風韻竜なのである。

それを見抜いたタバサが、人間に化けて街へ本を買いに行くようにと、今朝のうちに言いつけていたのだ。

「いい使い魔を呼んだじゃないの、ルイズ」

自分の作業を一通り終えたキュルケにそう言われて、ルイズは不審そうに顔をしかめた。

「……なによ。皮肉？」

火竜山脈のサラマンダーなどという当たりを引き当てた者が、しかもツエルプストー家のキュルケが、平民をいい使い魔だなどと。

「あら、心外ね。私は、素直に褒めたつもりだけど……」

ユマちゃんに不満でもあるの、と聞かれて、ルイズはむすつとした顔になる。

「別に、ないわよ。でも、平民じゃないの」

キュルケは肩を竦めた。

「平民だから、何よ？ いい子じゃないの、働き者だし、あなたのことを思いやってくれてるみたいだし。こうして役にも立つてくれてるじゃないの」

「……そりゃ、そうだけど……」

まがりなりにも使い魔の召喚は上手くいったのだから、これでも自分も魔法が使えるようになったのかもしれない。

そう、少なからぬ期待を抱いていたのに、この体たらくである。やっぱり平民ではダメなのか、所詮は失敗だったのかと、思わざるを得なかった。

もちろん、それは自分の勝手に、本当に不満があるのはユマにではなく自分に対してなのだ、そうわかってはいるのだが。

それでもついつい、彼女を責めなくなる。

どうしてドラゴンやサラマンダーや、せめてフクロウやカラスではなかったのか。

主人の失敗をフォローしてくれる使い魔よりも、主人を成功に導いてくれる使い魔が欲しかった……。

「ドラゴンでも、人間よりいいとは限らない」「え？」

いつの間にか近くに来ていたタバサが、ぼつりとそう言った。

半ば独り言のようなものとはいえ、彼女が自分から人に話しかけるのは珍しい。

少なくともルイズは、彼女に話しかけられるのは初めての経験で、どう対応していいものか戸惑った。

「あら、タバサ。……どうしたの、機嫌悪そうじゃない？」

ルイズには無表情としか見えなかったが、キュルケには彼女の微妙な表情や雰囲気の変化がわかるのだ。

彼女の機嫌が悪いのは、お使いが終わったか確かめようと感覚共有を試してみたところ、自分の使い魔が渡した金を使い込んで買い食いをしていることが判明したからである。

先程の発言は、そのために出てきたものだ。

実際、あの子にも少しはルイズの使い魔を見習ってほしいと思っていた。

「なんでもない」

タバサはそう言っつてぷいと踵を返すと、また黙々と清掃の続きを始めた。

彼女は、いつも持ち歩いている自分の身長よりも長い杖を掲げるようにして振り、天井に刺さったガラスの破片や付着した煤の除去作業に従事している。

ガラスの破片は『錬金』で天井に同化させ、煤は水魔法や風魔法を使って洗い流したり吹き払ったりしているようだ。

さまざまな系統の魔法を細かく器用に扱っていることから、彼女の技量の高さがうかがえた。

「あ、ええと……。その、ありがとう?」

ルイズはなんだかよくわからなかったが、タバサなりに励まそうとしてくれたものと受け取って、とりあえずお礼を言った。

それから、確かにいつまでくさついても仕方ないわと気を取り直して、改めて目の前の掃除に取り掛かる。

普段ならこんな作業はしぶしぶやるのだろうが、使い魔や使用人はもとより、仇敵のキュルケやろくに話したこともないタバサにまで手助けをしてもらっているのだ。

自分だけ怠けているというわけにもいくまい。

そんなわけで、ルイズはそれからしばらくの間、彼女なりに一生懸命、慣れない机拭きやほうき掛け、ごみ拾いなどの清掃作業に取り組んだ……。

ルイズのがんばりと皆の手助けのお陰もあって、教室の片づけは比較的早く終わった。

作業が終わると、タバサはシエスタが持ってきたたらいに空気中の

水蒸気を集めて、きれいな水を用意する。

「これで、手と顔を洗うといい」

素手で掃除をしていたルイズやユマは、礼を言っておりがたくお言葉に甘えた。

シエスタは使用人の分をわきまえて最初は手を出したりしなかったが、タバサからあなたもと勧められたので、お辞儀をして自分も手を洗わせてもらう。

「一働きしたらお腹がすいたわねえ。昼食はまだかしら？」

キュルケが、ぐつと伸びをしながらそう言った。

「はい。お食事まではまだ時間があると思いますが、お茶と何か食べるものをご用意いたしますわ」

シエスタがそう言って出ていこうとするのを、ユマが引き留める。

「待って。さっきもらったお菓子があるわ、みんなで食べましょう」

「え、あのお菓子？　でも、ここにはないでしょう。ミス・ヴァリエールのお部屋まで、取りに行くの？」

「お菓子？　……何よそれ、聞いてないけど」

シエスタとルイズがそう言って首を傾げる中、ユマは懐から一枚のカードを取り出して見せた。

その場にいる全員の注目が、それに集まる。

「……何よ、これ？」

ルイズが怪訝そうにそう尋ねた。

それは美しい金の縁取りを施した光沢のある茶色のカードで、枠の中にはおいしそうなお菓子の入った小袋が写実的に描かれている。

裏面には説明文のようなものが書かれていて、なぜかハルケギニアの文字を読めないユマにも、地球の文字を読めないルイズらにも、同じように判読することができた。

『クックベリーバターサンド：アイテム（サポート）

しつとりと焼き上げた生地にはバタークリームと干したクックベリーを挟んだお菓子。甘くておいしい。一袋で五個入り』

「ね、ちょうど五個入ってるわ。ひとつずつ分けましょう?」

嬉しそうにそう言うユマに対して、皆が困惑して顔を見合わせる。

「……ユマちゃん、どこでこんな札を? まるで本物みたいだけど、あなたが書いたの?」

「分けましようつたって。絵にかいたお菓子じゃ、食べられないわよ!」

キュルケとルイズにそう言われて、ユマは少し悪戯っぽく、めがねの奥の瞳を輝かせた。

「大丈夫。見てて——」

ユマはカードを指で挟んで少し掲げると、目を閉じて精神を集中した。

すると、カードはにわかには輝きながらユマの手を離れて浮き上がり、ゆっくり一、二度回転しながら、次第に透明になって消えていった。

そしていつの間にか、絵に描かれていたのとそっくり同じお菓子の包みが、ユマの手に握られていたのである……。

第七話 カード使いⅡ決闘者？

みんなの前でカード使いの力を初披露してみせたユマは、当然のようにルイズらからの質問攻めにあつた。

「ち、ちよっと、ユマ！ あなた今、そのお菓子をどこから出したのよ？」

「さっきの、カードの中から」

「ま、魔法……!? やっぱりユマちゃんは……いえ、ミス・ユマは、メイジだったの……ですか？」

「違う、カード使い。……でも、魔法の仲間なのかも。あんまりよくはわからないの。とにかく、魔法使いじゃないわ。呼び方を変えるのも、やめて」

「魔法って！ メイジじゃないなら、なんであなたが……」

「前にも別の世界に召喚されたことがあつたって、話したでしょ？ そのときに、使えるようになったの」

ユマとしては特に友だちに対して隠す気もなかったので、淡々と答えていく。

矢継ぎ早に質問を投げかけるルイズやシエスタに対して、キュルケやタバサはなんとか既存の知識で説明をつけようとして頭をひねっていた。

「先住魔法、……じゃ、ないわよね。エルフや吸血鬼がカードを使うなんて、聞いてないし」

「先住魔法？ 知らないわ」

「えーと、精霊の力を借りる魔法らしいわ」

「そう。カードの中には、精霊の力を借りるのもあつたわ。カードの精霊もいるし。でも、全部じゃないと思うけど」

まるつきり聞いたこともないような話に、キュルケはどうやらお手上げだと早々に諦めて、肩を竦める。

タバサの方は、ユマの顔をじつと見つめたまま、その豊かな知識を総動員して考え続けていた。

カードの精霊などというものは初耳だが、精霊はさまざまなものに宿るらしい。

湖や、山や、沼や、洞窟や……、時には古い建物のような人工物にだって、精霊は宿るといふ。

古いカードになら精霊が宿っているということも、もしかしたらあるのかもしれない。

しかし、ユマの話からすれば、あのカードは別に古いものではなくさつき作ったものらしい。

また、別に精霊の力を借りるとは限らなくて。

シエスタにもらったばかりのお菓子をカードにした、だとか……。

「……………」

タバサはそこまで考えて、自分の知識の範囲内では到底説明はつけられないと認めざるを得なくなり、ほんの少し顔をしかめた。

ユマは嘘をつくような子には見えないが、それでも本当のことなのか疑わしく思えた。

タバサには、多くの本を読んできた自分は世の中の大抵のことは多かれ少なかれ知っているはずだ、という自負があったから。

「……手品とか、マジックアイテムを使ったのとは、違う?」

手先の早業の類でカードをどこかに隠して、代わりに菓子の包みを取り出した。

もしくは、あのカードが何か特殊な魔法の品である。

自分でもちよつと無理矢理な判断だとは思いますが、それで一応は説明がつかないこともない……だろう。

「手品じゃないわ。マジックアイテムというのかはわからないけど。さつきも言ったとおり、シエスタからもらったお菓子をカードにしたの」

「今ここでできるのなら、やって見せてほしい」

他の面々も、それに同意する。

「そうね。ユマちゃんを疑うわけじゃないけど、聞いたこともないから。見られるものなら、見せてもらえないかしら?」

「自分の使い魔が何をできるかくらい、知っておきたいわ。なによ、早

く教えなさいよ！」

「ごめんなさい。こつちの世界でもできるか、自信がなかったから」
ユマはそう言ってルイズに軽く頭を下げると、さてどうしようかと、小さく首を傾げた。

一旦カードにしてそこから取り出した品物は、カード使いの力を注ぐのを止めると消滅し、しばらく休養をとって力を回復するとまたカードになってデッキに戻る。

つまり、消費しよう壊れようと、カードから呼び出すたびに何度でも使えるというわけだ。

その代わり、いちいち力を使ってカードから取り出す必要が生じ、一度カード化したものは二度とカードでない普通の品物には戻せない。

少なくとも、ユマは戻し方を知らなかった。

要するに、既にカード化済みの目の前のお菓子は、食べてしばらくすれば元のカードに戻りはするが、改めてカード化してみせるということはできないのだ。

そうなると、他の何かをカードにするしかあるまい。

見せるだけならさつき拾い集めたその辺のごみとかでもいいのだろうが、せつかくカードにするからには何か役立つものであってほしい。

二度と呼び出すことがないようなものをカードに閉じ込めてしまふというのは、なんだかせつかく与えられた力を遊び半分に使うように気が進まない。

そんな力の使い方をするのは、カードの精霊や、あの『カードの王さま』に対しても申し訳ない気がする。

「……これ。カードにするのに、もらってもいい？」

結局、ユマは少し悩んだ後に、先程使ったモップを手にとってシエスタにそう尋ねた。

自分はゆかみがきが得意だし、こういうった柄の長い棒のようなものを武器として使ったこともある。

これなら、何かの折にまた取り出して使うこともあるだろう。

「え？ あ……、うん。そのくらいなら、たぶんいいと思うわ」

シエスタがそう言うのを聞いて、キュルケとルイズも口を挟む。

「ああ、それなら見学科代わりに私が買い取ってあげるわ。大して高いものでもないでしょうし」

「ちよつと、お金を出すのは主人の私に決まってるでしょう！」

「二人とも、ありがとう……」

ユマはちよつと微笑んでお礼を言うと、モップを手にとって精神を集中した。

全員の注目が集まる中で、モップはほのかな輝きに包まれて姿を消す。

そして、空中に突然浮かび上がるように、くるくると回転しながら一枚のカードが姿を現して、ユマの手に収まった。

ユマはそれにちらりと目を通すと、先程のお菓子のカードと同じように、みんなにも見せた。

『モップ：装備品（サポート）』

清掃用具。トリステイン魔法学院の備品である。固定化の魔法が施されているので丈夫で痛みにくく、汚れや臭いも染み付きにくい。

本来の用途のほか、いざというときには代用武器にもなる。

メイジたちは掃除もチャンバラごっこもめつたにしないので、普段はもっぱら使用人の手に握られている』

「この『固定化』っていうのは、なに？」

食い入るようにカードを見つめるルイズに対して、ユマがそう質問した。

「土系統の魔法よ。かけると、自然に錆びたり腐ったりして痛むことを防げるの。自分よりも実力の低いメイジによるものなら、『錬金』なんかの呪文も防げるわ」

「ふうん……、便利なのね」

感心したようにそういうユマに対して、キュルケが不思議そうに首

を傾げた。

「あら？ 作ったユマちゃんが知らないことが、どうしてこのカードに書いてあるの？」

「だって、なんて書くか決めたのは私じゃないもの。何かをカードにすると、最初から説明が書いてあるの。どうしてかは知らないけど」
向こうの世界で手に入れたカードも、みんなそうだった。

子供のユマがそれまでまったく聞いたこともなかったような情報が、たくさん書かれていたのである。

それらの情報の中には向こうの世界のものもあったが、地球からのものもあった。

たとえば、ホリーシールドという装備品のカードには、これはその昔勇者が神より授かったという魔法の盾だと書かれていた。

それはおそらく、ウルフレンド世界における情報であろう。

一方でハーピーというモンスターのカードには、ハーピーはギリシアの風の精霊で死者の魂の運び手だと書かれていた。

地名から考えて、そちらは地球での情報であろう。

子供とはいえ、ユマもそのあたりのことを少なからず不思議には思っていた。

とはいえ、そんなことをいつまで考えていても始まらないので、向こうではそういうものだど割り切って受け入れていたのである。

「……………」

そんなユマの顔を、タバサはじっと見つめていた。

どう見ても、この少女は嘘をついてはいない。

そして明らかに手品ではないし、既知のいかなるマジックアイテムでも説明がつきそうにない。

ややあって、短く端的に尋ねる。

「あなたは、何者？」

ユマから返ってきた返答も、同じように短かった。

「ユマ。カード使い」

「だから、そのカード使いつていうのは一体何なのよ!？」

ルイズの問いかけに対しては、首を横に振る。

「私にも、よくわからないの。ただ、カードを使う力があって、あつちではみんなにそう呼ばれていたっていうだけ」

ユマはそれから、お菓子をみんなに勧めながら、自分がカード使いになった経緯について簡単に話していった。

ある日、公園で不思議なカードのセットを見つけたこと。

そのときにカードの精霊の声が聞こえてきて、手助けをして欲しいと頼まれたこと。

それを受け入れて、気がつくとも別の世界に召喚されていて、同じように召喚されたほかのカード使いたちと一緒にクエストをこなしていったこと。

最後にウルフレンドを危機に陥れていた元凶を倒して、ついに元の世界に戻ることが出来たこと……。

本当にぎっとした流れを話ただけで、詳しいことは何も話さなかった。

向こうの世界で勇者か英雄扱いをされていたことや、しかしカード使いを厭う人も多かったこと、異世界からきたということなどで恐れや疑いの目で見られたことも多かったこと。

それに個々のクエストの内容や、冒険の中で起こった出会い、別れ……。

そういったことには、一切触れていない。

別に隠しているわけではなく、とても今この場で全部を話していられるような時間はないし、説明に必要ないから、というだけのことだ。

話を聞き終えた面々は、困惑したように顔を見合わせる。

「……その。今の話は、本当なの？」

ルイズが、遠慮がちにそう尋ねた。

普通ならとても信じられるような話ではなく、夢見がちな子供の空想かと微笑ましく思うだけのところだろう。

先程目の前で実際に見たカードの力は確かにそう簡単には片付けることのできないものだったし、自分の使い魔の言うことを疑うというものはばかられる。

だが、そうであつてもなお、ユマのような子供がそんな冒険をして

きたなどという話はそうそう信じられるようなものではなかった。

ユマのほうでもそのことは理解しているようで、気にした様子もなくこくりと頷く。

「疑うのは当然だと思う。でも、嘘は言っていないわ」

それから、手に入れたばかりのモップのカードを懐にしまつて、さくさくとお菓子を食べ始めた。

「別に、信じなくてもいいの。ただ、カードを使えるのがルイズの役に立つかもと思っただけ」

「信じる」

自分もお菓子を口に運びながら、いち早くそう声を上げたのはタバサだった。

まだ小さな子供であっても苛酷な環境の下では優れた狩人にもなれるのだということを、彼女は身をもって知っている。

ただの騙りには真似のできない、どこか自分に似たそんな気配を、ユマから感じ取ったのかもしれない。

「わ、私だって信じるわよ、当たり前じゃないの！　ちよつと確認しただけなんだから！」

負けず嫌いなルイズも、少しあわてたような、むつとしたような調子でそう言った。

シエスタやキュルケも、それに同調する。

「私も、もちろん信じるわ。ちよつと驚いたけど、ユマちゃんがすごい人なのは最初からわかっていたから」

「そうねえ、まだ狐につままれたような気分だけど。よく考えてみれば、ルイズに召喚されたのなら納得かしら」

「……それ、どういう意味よ」

ルイズが敏感に反応して、ぴくりと眉を動かした。

「どういうものにも、そのままの意味じゃないの。あなたは規格外なメイジだから、規格外な使い魔が来ても不思議はないってことよ」

「私も、そう思う」

横合いから、タバサが口を挟んだ。

「呪文が成功しないにしても、ただの『錬金』でこれだけの魔力が出て

いるのだから、あなたには尋常でない魔力があるはず」

「そうそう、そういうことよ。メイジの実力をはかるには使い魔を見ろって言うじゃない。才能はあるってことが証明されたんでしょ、よかったじゃないの」

予想外の言葉に、賞賛されるのに不慣れなルイズは戸惑った。

「そ、そう……う？　ありがと……」

結局、反応に困ってもじもじと視線を泳がせた後、小声でぽつりとそう礼を言った。

それから、照れ隠しにバターサンドを口に運ぶと、大好物のクックベリーの味が口の中に広がる。

それは乾果だったが、今日は心なしか普段よりもおいしいと思っ
た。

その後、シエスタと別れて、ユマはルイズらとともに授業を受けに向かった。

何人か手伝ってくれたこともあって片付けは比較的早く終わったが、それでも中止になった一時間めの授業の残り時間だけでは済まな
かったようだ。

午前中の最後から二つ目の授業の、その途中から参加することにな
った。

つまり、キュルケやタバサは授業をひとつたつ休んでまで、ルイズの手伝いをしてくれたということだ。

そのことを考えて、ユマは胸が温まるような思いがした。

おせっかいかもしれないけれど、後からなにかお礼をするように、ルイズに勧めてみようか。

この世界の貴族同士の付き合い方も、ルイズくらい歳の女の子同士の付き合い方も、どういものかは知らないのです、もしかしたら
的外れかもしれないけれど。

今度の休日……この世界にも、たぶん日曜日にあたる日くらいはある
だろう……にでも、どこかへ一緒に食事を食べに行くとか、どうだ
ろう。

できたら、シエスタも誘って。

そうすればきつと、みんなもつと仲良くなれるだろうし……。

そんな風にうきうきとこれからの日々を思いを馳せながら、ユマは見るもの聞くもの初めてで新鮮な授業を、心から楽しみながら聴講していた……。

・
・
・
午前中の授業はそれ以上何事もなく終わり、昼休みの時間になった。

ルイズらは朝と同じように食堂へ向かい、ユマは厨房の片隅でシエスタが用意してくれた食事をとる。

基本的には使用人が食べるのと同じまかないの食事だということだが、特別にデザートのカッキーや果物までついている豪華なものだった。

ボリウムもあつて、今日はたまたま午前中に掃除をしていたからぜんぶ入ったが、普段はちよつと多すぎるかもしれない。

残すのはもつたないし、次からは量を抑え目にしてほしいとお願いして、ユマは食器を片付けた。

それから、約束どおりお手伝いをする和使用人たちに申し出る。年配のメイドが、にっこりと笑って頷いた。

「ありがとう、そうね。それじゃあ、シエスタの手伝いをして、デザートを配ってきてちょうだい」

「はい、わかりました」

ユマはこくりと頷くと、デザートのカッキーが並んだ銀のトレイをもって、シエスタと一緒にとことこと食堂へ向かった……。

食堂では、大方の貴族たちが既に食事をとるのを止めて、デザートが来るのを待ちながら雑談をしていた。

と、いつても、食卓に料理はまだまだたくさん残っている。

ユマはおいしそうなのにもつたないなと思ったが、シエスタによ

ると、この世界の貴族の食事というのはそういうものらしい。

満腹してなおあまりあるだけの食べ物や食卓に並べるのが裕福な貴族の作法で、あまったものは使用人や領地内の貧民などに下げ渡すのが通例なのだとか。

それに使い魔の食事にもなるそうだから、たぶんそう無駄になつていゝるといふこともないのだろう。

(あまつてゐるなら、一人分くらいもらつてカードにしておいたら、いぎといふときに役に立つかも)

まあ、非常事態なんてここではそうそう起こりそうもないし、使うかもわからないカードをそう無闇に増やさなくてもいいのだろうが……。

ユマはそんなことをぼんやりと考えながら、デザートを運んでいった。

彼女の持ったトレイからシエスタがはさみでケーキをつまみあげ、ひとつずつ生徒たちの皿にのせていく。

ルイズと同じ二年生のテーブルには、ちよつと目立つ男子生徒がいた。

金色の巻き髪をした割とハンサムな少年で、見た感じでは年はルイズよりも少し上くらいだろうか。

ただ、フリルのついたシャツを着ていたり、そのシャツのポケットに薔薇を挿していたりと、なんだかキザな感じがする。

もしかするとこの世界ではおしゃれなかもしれないが、少なくともちよつと見た感じでは、他に彼みたいな格好をしている生徒はいない。

とりあえずユマは、貴族らしい美しさや格好良さというなら、ヘリオス王子の方がはるかに上だと思つた。

とはいえ、さつき教室でシヴルーズ先生が倒れたときに、医務室へ助けを呼びに行つてくれたのが彼だったこともちやんと覚えていた。

見た目はなんだか悪趣味な感じだけど、大勢の友だちに取り巻かれていゝるし、きつと気のいい人ではあるのだろう。

「おいギーシュ、お前、今は誰とつきあっているんだよ?」

「誰が恋人なんだ? 教えろって!」

周りの友人たちが、ギーシュという名前らしいその少年を口々に冷やかしている。

ギーシュはもったいぶった調子で、唇の前にすつと指を立てた。

「つきあう? 僕には、そのような特定の女性はいないのだよ。薔薇は、多くの人を楽しませるために咲くのだからね!」

それを見たユマの感想は、子供らしい率直なものだった。

(バカみたい)

どうやら、見た目どおりの気取り屋らしい。

本当にもっていているというよりは、そのナルシストな態度が周囲に面白がられているのかもしれない。

彼を取り巻く友人たちの態度も、どちらかといえばからかっているような感じで、羨んでいるというふうではなかった。

同じ軟派な男にしても、タムローンとは雲泥の差だと思った。

子供の自分が言うのもなんだが、本当に不敵な無頼漢という感じのする彼と比べたら、ギーシュは格好つけているだけのお子様に見えない。

まあ、タムローンはタムローンで、上着くらい着たらどうなのか、とは思いが……。

そんなことを考えながら彼のことを見ていたら、上着のポケットからなにかが落ちたのに気付いた。

ガラスでできた小瓶で、中に何か紫色をした液体が入っている。

香水か、あるいは魔法の飲み薬とかだろうか?

とりあえずユマは、トレイをシエスタに渡してその小瓶を拾い上げると、ギーシュに話しかけた。

「ごめんなさい。これ、落とし物よ」

ギーシュはしかし、差し出された小瓶を困ったように見つめると、わざとらしくこほんと咳払いをした。

「レディ、それは僕のじゃないよ。きつと勘違いだろう」

「……? でも、あなたのポケットから落ちたわ」

小首を傾げてそう言ったユマに、ギーシュはさらに何か反論しようとした。

が、それよりも先に。

その小瓶の出所に気付いた彼の友人たちが、わいわいと騒ぎ始めた。

「おっ？ それはもしま、モンモランシーの香水じゃないか？」

「そうだ、その鮮やかな紫色は市販品じゃない！ モンモランシーが、自分用に調合してるやつだ！」

「つてことは、お前がいま付き合ってる相手はモンモランシーなんだな!？」

ギーシュはそれに対して、少し焦った様子で弁解しようとする。

「ち、違う！ いいかい、彼女の名誉のために言っておくが……」

ユマはその様子を見て、ああ、なるほど、と納得した。

つまり、そのモンモランシーという女の子と付き合っているのを知られるのが恥ずかしいから、隠そうとしたわけか。

(悪いことしたかな)

そう思ったのも、つかの間のこと。

この騒ぎに聞き耳を立てていたのか、後ろのテーブルに座っていた一年生らしい茶色のマントの少女が立ち上がり、ギーシュの席に向かって歩いてきた。

それは栗色の髪をしたかわいい感じの少女だったが、なぜか、今にも泣きそうな顔をしている。

「ギーシュさま……。やつぱり、ミス・モンモランシーと……」

「い、いや、誤解だケティ。いいかい、僕の心に住んでいるのは、君だけ……」

そんな弁解には耳を貸さず、ケティと呼ばれた少女はほろほろと涙をこぼしながら、ギーシュの頬を思い切り引つ叩いた。

「いいえ、その香水があなたのポケットから出てきたのが何よりの証拠ですわ！ さようなら！」

そう言い捨てると、ケティは食堂から飛び出していく。

ギーシュが叩かれた頬をさすっていると、今度は二年生のテーブル

から見事な巻き髪の少女が立ち上がった、かつかつと足音高くこちらへやってきた。

ユマはそれが、シユヴルーズ先生の手当てをするとき先頭に立つて場を仕切ってくれた人だと気が付いた。

しかし、今はあの時の献身的な様子とはうって変わって、ひどくいかめしい顔つきをしている。

その姿を目にすると、ギーシュはまだ何も言われないうちから慌てて弁解を始めた。

「モ、モンモランシー、誤解だ！ 彼女とはただいっしょに、ラ・ロシエールの森へ遠乗りをしただけで……」

冷静な態度を装おうとはしていたが、冷や汗が一滴、額を伝っている。

ギーシュがタムローンだとすれば、こちらの少女はラクーナだろうか。

いずれにせよ、あまり似ていないが。

「やっぱり、あの一年生に手を出していたのね？」

「お願いだよ、『香水』のモンモランシー。そんな怒りで咲き誇る薔薇のような君の顔を歪ませないでくれよ、僕まで悲しくなるじゃないか！」

そのうろたえぶりを見て、やっぱりタムローンとはぜんぜん違うなあ、と、ユマは思った。

モンモランシーはそんなギーシュに言葉で応えようとはせず、代わりに無言でテーブルの上のワインの瓶をひつつかむと、中身をどぼどぼと彼の頭に注いだ。

そして最後に、嘘つきと一言罵って、ケティと同じように去っていった。

「……ふう、やれやれ。あのレディたちは、薔薇の存在の意味というもの、まだよく理解してくれていないようだ」

沈黙が流れる中、ギーシュは首を振りながら芝居がかった態度でそう言うと、取り出したハンカチで顔を拭いた。

それから、なにやら厳しげな顔を作って偉そうに脚を組むと、まだ

ちよつとぼかんとしたような顔で事の成り行きを眺めていたユマのほうに向き直る。

「レディ。君が軽率に香水の瓶などを拾い上げたおかげで、二人の貴重な女性の名誉が傷ついてしまったじゃないか。どうしてくれるんだね？」

ユマは、きよとんとして首を傾げる。

意味がよくわからなかった。

「……そうなの？」

ギーシユは、やれやれというように首を振る。

「君はまだ若いから、無理もないかもしれないが。いいかねレディ、僕は君が香水の瓶をテーブルに置いたとき、二人のたを思つて知らないふりをしただろう？ あのとときに話を合わせるぐらいの機転が、君にあればよかつたんだ」

ユマは、ちよつと顔をしかめた。

はつきりとはわからないが、さつきのを見た感じだと、この人が二股をかけていたのがそもそもの原因なのではないか？

とはいえ、自分はまだ子供だから、男女の仲とかについてはよくわからないこともあるだろうし。

もしかしたらいろいろと自分の知らない事情があつたのかもしれないし、あるいはこの世界ではそういうものなのかもしれない。

なんにせよ、目の前のギーシユというお兄さんが全面的に悪いと決めつけるのもよくないだろう。

「……そう。よくわからないけど、私のせいでケティさんとモンモランシーさんの名誉が傷ついたのね？」

「そうとも！ そのことについて、君がどうしてくれるつもりなのか……」

ギーシユが何やら高説を垂れようとしているが、ユマはそれに付き合う気はなかった。

「わかつた。じゃあ、すぐに謝ってくるわ」

頷いてそう言うと、きびすを返して駆け出し、先程食堂を飛び出していた少女たちを追いかける。

「…………え？」

あとには、きよとんとしたギーシユが取り残された。

彼の言葉を信じるなら、傷ついたのはケティとモンモランシーの名誉だということだから、当然謝るべき相手はその二人だ。

ユマは、子供らしい素直さでそう理解したのである。

その、数分後。

「ギーシユさま！　言うに事欠いて、あなたじゃなくあの子が私たちの名誉を傷つけた、ですって!？」

「何の関係もない小さな子供なんかには責任転嫁してんじゃないわよ！

この嘘つき、ろくでなしッ!!」

ギーシユは烈火のごとく怒って引き返してきた二人の少女によって、先程のシユヴルーズよりもっとひどい重傷を負わされ、めでたくこの物語からリタイヤしたのだった……。

第八話 初めてののお出かけ

ハルケギニアでは一週間が八日で、そのうち一日が『虚無の曜日』と呼ばれ、地球でいう日曜日に相当するらしい。

その休日が訪れたのは、ユマが召喚されてから四日めのことだった。

「んー……」

ユマは目を覚ますと、いつもどおり洗濯をてきぱきと済ませてから、ルイズを起こしにかかった。

休日ではあるが、今日はキュルケらと一緒に街へ出かけて食事を奢るといふ約束をしているので、のんびり寝ていてもらっては困るのだ。

そのことをユマから提案されたとき、ルイズは当然ながら、「なんで私がツエルプストーと」と言って突っぱねようとした。

しかし、教室の片づけを手伝ってもらったお礼もあるでしょうといわれると、渋々ながらも同意したのである。

単に気まぐれで手伝ってくれただけかもしれないが、そうであつてもあの宿敵ツエルプストー家の娘に借りを作つたままにいるというのは、確かにあまり好ましいことではない。

どの道、着の身着のまま召喚されたユマに必要なものを買い揃えるために休日は街へ行くつもりでいたから、そのついでだと思ふことにした。

キュルケは、ユマから誘われると二つ返事で応じてくれた。

実は付き合っている男の一人と先約が入っていたのだが、そんなことはきれいさっぱり忘れてしまっている。

まあ、仮に覚えていたとしても、あつさりキャンセルしたことは間違いないだろう。

彼女にとつては女友達の方がボーイフレンドよりも希少で、女同士で楽しく遊ぶ予定が入ったとなれば、些細な微熱なんかはたちまち吹っ飛んでしまうのだった。

タバサは、そのキュルケから誘われて同行を承諾した。

彼女にとって休日は、他人に邪魔されずに自分の世界に好きだけ浸っていられる貴重な時間であり、普通は一日中部屋で本を読んでいる。

ゆえに、友人であるキュルケの誘いでも、大抵は断る。

しかし、「ユマちゃんを何時間も馬で走らせるのは気の毒だから」「ルイズがこないだのお礼に昼食を奢るそうだから」と言われて、申し出に応じる気になった。

ルイズの不思議な使い魔には少なからず興味があつたし、ただで外食ができるというのも魅力的だったからだ。

ユマとしては、できればシエスタとも一緒に行きたいと思つていた。

なんといつても、彼女もキュルケやタバサと同じように手伝つてくれたのであるし、自分もいろいろとお世話になつているから。

しかし、それにはルイズらが賛成しなかつた。

まずルイズは、些細なことで特定の使用人だけをひいきにしたり、過剰に甘やかしたりするのはよくない、と主張した。

キュルケやタバサは自主的に手伝つてくれたわけだが、シエスタの場合は学院の使用人としての仕事の一環である。

使用人としての仕事をするのは当然のこと、たまたま自分の手伝いにあつたからといって、それで彼女だけを特別扱いする正当な理由がない。

キュルケのほうは、休日今まで使用人を自分たちに付き合わせない方がいい、という意見だつた。

もちろん休日とはいえ使用人は交代で学院内の雑務にあたつていくはずだが、それでも生徒や教師の多くが外出して留守な分、平日よりははずいぶんと楽だろう。

それを連れだしたりすれば、こちらとしては食事を奢るだけのつもりでも、シエスタは立場上いろいろと身の回りの世話をしたり荷物をもったりしなければと思うはずだ。

それでは、外出時の世話係として連れ出して休日にまで一日中仕事をさせるようなもので、かえつて迷惑である。

「まあ、ユマちゃんがああのメイドに、なにか個人的にお礼をしたいんだっいたら……。そうねえ、街でお土産でも買って行ってあげたらいいんじゃないかしら？」

「そうね、私のために余計に仕事をしてくれたのは事実なわけだし。使い魔とも仲良くしてもらってるんだから、そのくらいは出すわよ」「そう？　……そうかも。ありがとう、じゃあ、そうするわ」

ユマは納得して、二人にペこりと頭を下げた。

ルイズにお金を使わせるのは申し訳ないが、自分は持っていないのだから仕方がない。

その分は、頑張って仕事をすることで埋め合わせしようと決めた。

そんなわけで、四人は朝食を済ませた後、タバサの使い魔である風竜のシルフィードに乗って、王都トリスタニアまで出かけることになった。

シルフィードは彼女らが乗ったのを確認して翼を広げるや、上昇気流を器用に捕らえて、たちまち二百マイルも上空まで駆けのぼる。

「わお！　……あなたのシルフィードは素敵ね、惚れ惚れするわ！」

キュルケが風竜の上で背びれに掴まり、感嘆と称賛の声を上げた。

まだ召喚されてから四日目ということもあって、親友の使い魔に長時間まともに乗せてもらうのはこれが初めてなのだった。

タバサはそれに返事をするでもなく、背びれにもたれて黙々と本のページをめくっていたが、彼女はいつもこんな感じなのでキュルケは気を悪くしたりはしない。

ルイズも少しばかり機嫌よさそうにしながら、眼下の景色を眺めている。

こんなふうドラゴンの背中に直接跨るのは、小さなときに乗せてもらって以来のことだった。

しかも、魔法が使えない彼女は他のメイジと違って頻繁に空を飛んだりしないので、なおさら新鮮な感じがした。

ユマも、風を受けて心地よさそうに目を細める。

(こうしてまた、ドラゴンに乗れるなんて)

ウルフレンドの仲間たちの中には、アイラやライア、ハーゲンと
いったドラゴンライダーがいたし、いくつかの種類のドラゴンのカー
ドも持っていた。

なので、さほど長時間ではないが、ドラゴンに乗せてもらった経験
自体はある。

地球に帰ってからはもう二度と乗れないと思っていただけに、感激
もひとしおだった。

そういえば、タバサはあの世界のドラゴンライダーとは違うのだろ
うかと、ユマはふと考えた。

アイラによれば、ドラゴンライダーというのは寝ても覚めてもドラ
ゴンのことばかり考えているような子になるものだということだっ
た。

自分の手で卵から孵ったドラゴンを世話し、心を通わせ合って、初
めてなれるものだ。

魔術師や魔物使い、あるいは自分のようなカード使いも、ドラゴン
などのモンスターやある種の動植物と意志を疎通できたりするが、ド
ラゴンライダーはそれとはまた違うらしい。

男性のドラゴンライダーは一般的には竜騎士と呼ばれているらし
いが、ドラゴンライダーであることに違いはない。

タバサはルイズが自分を召喚したようにシルフィードを召喚した
ということだから、それ以前からこのドラゴンと付き合っていたわけ
ではないのだろう。

ということは、やはり別物だということだろうか。

(今度、聞いてみようかな)

タバサは無口だから、教えてくれるかはわからないけれど。

そんなことを考えていたら、キュルケの嬉しそうな声が聞こえてき
た。

「もう城下町が見えて来たわ。早いわね！」

どうやら、もう王都とやらに着いたらしい。

馬では二、三時間はかかる距離だそうだが、さすがはドラゴンであ
る。

「ありがとう、シルフィード」

ユマは着陸したシルフィードの背から降りると、お礼を言つてそつと首のあたりを撫でた。

シルフィードは目を細めて、きゅいきゅいと嬉しそうな鳴き声を上げる。

『どういたしまして、お安い御用なのね』

なんとなく、そんなふう言っているような気がした。

(今度は、馬に乗って来てみたいな)

ユマは、ふとそう思った。

別に、ドラゴンの乗り心地に不満があるとかではない。

ウルフレンドでは馬にも乗ったことはあるのだが、遠乗りはまだしたことがなかったからだ。

アインガングの厩舎に飼われている馬に乗せてもらったのだが、あの街は外の世界と隔絶していたから、街の中をゆっくりと歩いて回るだけだったのである。

ろくに使われることがない馬たちは暇と体力をもてあましていたようで、短時間の散歩でもいきいきして見えたものだ。

馬を思いつきり走らせられたら、疲れるだろうけど、きつと楽しいに違いない。

「それじゃ、買い物に行くわよ」

ルイズがそう宣言したので、一行はシルフィードと別れて、トリスティンの城下町に向かった。

「わあ、にぎやかだね」

ユマはそう感嘆したような声を漏らして、楽しげにあたりを見回しながら、ルイズの後に続いて歩いていった。

あたりにはさまざまな露店が立ち並び、パンや果物などの食料品から水桶などの日用品、きれいなアクセサリーに、奇妙な魔法の道具みいたいなものまで売られている。

貴族の学び舎である魔法学院に比べると、質素な身形をした人が多い。

トリスタニアの白い石造りの街並みは、同じファンタジーの世界でもアインガングとはまた雰囲気違った。

まだ朝早いこともあってかそこまで混み合っていないものの、それでも何よりも違って感じられるのは、その活気だった。

同じ街の中につと閉じ込められて、少なからず退屈と憂鬱に取り付かれたような人が多かったアインガングと違って、ここの人々はみんないきいきとしているのだ。

人口そのものも、アインガングよりもずっと多いだろう。

「ここはブルドンネ街、トリステインで一番大きな通りよ。この先には宮殿があるの」

ルイズがそう、得意げに説明してくれた。

一番の大通りという割には狭いが、やかましく走り回る自動車もない世界ならそんなものなのかもしれない。

そういえばアインガングにも、あまり大きな通りはなかった気がする。

「じゃあ、その宮殿に行くの?」

「何言ってるのよ、説明しただけに決まってるでしょ。女王陛下に拝謁するような用事はないわ」

「そう? ……そうね」

呆れた様子のルイズに対して、ユマは曖昧に頷いた。

アインガングでは割と気軽に、頻繁に王さまに会っていたが、確かにそれが普通なのだろう。

第一こちらの世界では、自分は世界の命運がかかった勇者でもなんでもないのだから、王さまのような偉い人がわざわざ面会してくれるような理由はあるまい。

まあ、あの気のいいアインガング王なら、別に誰であっても尋ねていけば、忙しくない限りは会ってくれそうな気もするが……。

「まずは、ユマちゃんの服を買いましょうよ」

そんなキュルケの提案で、露店めぐりは後回しにして、まずは彼女らの行きつけの服飾店へ向かうことになった。

ルイズもキュルケも、少女だけあって服を見繕うとなると気分が華

やぐのか、楽しみにしている。

タバサだけは興味が無いのか、本を読みながらみんなの後を黙々と歩いていた。

それからしばらくの間、何軒もの店をはしごして回って、ユマは着せ替え人形扱いになった。

まだ色気よりは、かわいらしさをアピールした服がいいわよね。なら、あれはどうかしら。あら、こっちも似合うわ。

下着やアクセサリーもいるでしょう。コートも。化粧品も一揃い……。

「……………」

ユマも少女だけあっておしゃれに興味がないわけではなかったが、二人が競うようにしてあまり山ほど買い込もうとするので、ちよつとうんざりした。

大体、自分には支払い能力がないのだから、そんなにお金を出してもらうのは申し訳ない。

そんなわけで、見苦しくない最低限の着替えがあればいいと申し出てはみたものの、キュルケもルイズもどこ吹く風であった。

「あら、このくらいはなんでもないわ。ユマちゃんは気にしなくていいから」

「私は貴族なのよ。身の回りにおく者には、それなりの格好をさせないともないじゃないの」

普段はぎやあぎやあとキュルケに突っかかるルイズも、こうして一緒に出掛けると、なんだかんだでわりと仲良さそうにしている。

たぶん、あまり友人と出掛けたりした経験がないから、なおさら楽しく感じられるのかもしれない。

「……………」でも、そんなにたくさん、持って帰れないもの」
ユマはちよつと顔をしかめて、そう抗議した。

彼女は既に買い込んだ荷物を両手で抱えていて、かさが限界に近かった。

これ以上買ったなら、ルイズらにも荷物持ちを手伝ってもらわなければならなくなってしまうだろう。

「なら、あのカードに入ればいいじゃない」

「カードの力を使うと疲れるし、一度カードにしたら普通の品物には戻せないわ」

普段着る服までいちいちカードから出すのは、いい考えだとは思えない。

いざというときのために一着くらいはそうやって持っておいたら、非常時の着替えとかで役に立つかもしれないが。

「ふうん、そんな決まりがあるのね……」

キュルケが首を傾げてそう言った。

実は荷物持ちとしてあてにしていたので、ちよつと残念に思ったのである。

「……そういえば、お菓子はカードにすれば何度でも出すたびに食べられるんだったわね。じゃあ、金貨をカードにしたら、取り出すたびに何回でも使えたりするのかしら？」

ふと思いついてそう尋ねてみると、ルイズが目を吊り上げた。

「何言ってるのよ、そんなのインチキじゃない！」

「あら、単純に気になっただけよ。本当にやってもらおうなんて思っ
てないわ」

タバサも興味があるのか、本から顔を上げてこちらを見ている。

ユマは少し考えてから、首を横に振った。

「わからない、やったことないから。……でも、たぶん無理だと思うわ」

「ふうん。どうして？」

「だって、お菓子みたいなものをあげるのは、自分の持ち物を人に使わせることだけど。お金を払うのは、払ったお金を相手に渡すこと
でしょう？」

所有権そのものを相手に譲ってしまうと、カードは自分の手元からなくなつて、渡した相手のところに行くのである。

そのことは、カード使いの仲間同士の間で交換をしたときに確かめ
てある。

また、何かをカードにした後に誰か他の人に譲ってもそれはカード

のままだが、現時点で自分の所有物でないものを勝手にカード化することはできない。

ただし、迷宮で拾ったアイテムなど、所有者不明の品物はカードにできるらしい。

「……どういう原理？」

タバサのそんな質問に、ユマはまた首を横に振った。

「ごめんなさい、私にもわからないの」

もしかしたら、あのカードの王さまか、カードの精霊の意志が、他人のものを不当にとったりしてはいけないという決まりを定めているのかもしれない。

もちろんそれは何の根拠もない推測であって、正確なところはわからないのだが、なんだかそんな気がする。

だから、カードの決まりごとに抜け道を探して悪用しようなどという気にはなれなかった。

たとえば、金貨の詰まった袋をカードにしてその中の一部だけを使うとかすれば、もしかしたらカード本体を手元に残せるのかもしれない。

だがたえそうであっても、そんなことをしたらカードに見限られてしまうのではないか、という気がした。

お菓子を時々カードから出してみんなに喜んでもらうのはよくても、あとで消えてしまうとわかっていいる金貨を渡して他人から不正に品物をだまし取るのは駄目だ。

「わかった」

タバサは頷くと、また本に目を落とした。

「まあいいわ。とにかく、もう少し買おうわよ。持ちきれなくなったら、学院まで届けてくれるようにお店に頼めばいいんだから！」

「……余計なお金がかかる」

ルイズの宣言に対して、タバサがゆっくりと本のページをめくりながら、そう反対した。

もつとも、彼女は別に、ルイズの懐具合を心配したわけではない。相変わらずの無表情だったが、内心ではいい加減に興味が無い買い

物につき合わされるのが嫌になってきているのだ。

持ってきた本はそろそろ読み終わってしまうし、早めに用を済ませて本屋にも立ち寄りたかった。

「店が混み合う前に食事に行ったほうがいい。服は、必要になったらまた買い足せる」

ここまで連れてきてくれて、そしてまた帰りにも送ってくれることになっているシルフィードの主人がそう言うのでは、無下にするわけにもいかない。

キュルケとルイズは、やや残念そうにしながらもその提案を受け入れた。

「そうねえ。ま、シルフィードのところへ荷物を置きに戻るのも面倒くさいし、そういえば少しお腹も空いたわ。今日はここまでにしませうか?」

「仕方ないわね。まあ、これだけ買えば、当分は大丈夫だし……」

ルイズは最後に家具店にも少し立ち寄って、ユマのために寝台や毛布なども買い込み、学院へ届けてくれるように手配した。

今は使用人が使っている学院の備品を借りているのだが、もう少し貴族の部屋にふさわしいものを用意したかったのだ。

ユマ自身からしてみれば現状で十分なのだが、ルイズがそうしたいというのなら強いて拒む理由もないため、礼を言ってお受け入れた。

それでひとまず予定していた買い物は終わったので、ルイズは約束どおり、キュルケとタバサに食事を奢ることにした。

「この先に、おいしいパイを焼く店があるのよ」

そう言って、一行を品のいい貴族向けの軽食店へ案内する。

おいしそうな香りの漂う店内へ入って大きなテーブルにつくと、さつそくメニューを開いて、注文するものを決めにかかった。

「全員でクックベリーパイをワンホールと、紅茶のポットね。取り皿とカップを人数分。それと、私はサンドイッチを」

「私は蒸し鶏とスープをお願いするわ。それにビスケットを一皿と、シャンパンも一本つけてね」

「子牛頬肉の赤ワイン煮込み。白パン一かごにバターと蜂蜜。炙り鳥と春野菜のクリームシチュー。フルーツセット。あと、はしばみ草のサラダ」

「あなたはあいかわらず、細いのによく食べるわねえ。……で、ユマちゃんは？」

キュルケに話を振られたユマは、メニューにちらつと目を通して、少し困ったように首を傾けた。

「ごめんなさい、読めないからよくわからないの。お酒は飲めないから、それ以外でなにか、てきとうに……」

この世界では未成年でも酒を飲んでいるようだが、ユマはごく真面目な子である。

別の世界だろうが何だろうが、二十歳になる前に飲む気はなかった。

「え？ あなた、字が読めないの？」

「私の住んでいたところと、字が違うみたいなの。先生が黒板に書く字も、読めなかったから」

ユマはそう言っただけで自分の持ち歩いてるメモ帳を開き、中に書き込んだ文字をみんなに見せてやった。

「確かに、見たことのない文字ね」

「……カードは？」

タバサがじつとメモ帳を見つめながら、疑問を口にする。

彼女の作ったカードの文字は自分たちにも読めたし、ユマ自身にも読めていたはずだ。

「わからないけど、誰でも読めるみたい。翻訳の魔法とかがあるのかも」

「そう」

タバサはそれ以上問い詰めようとはせず、本に目を落とした。

それから、独り言のように呟く。

「……あとで本屋によって、読み書きの本を買うといい」

第九話 掘り出し物

食事を終えた一行は、帰る前にタバサの提案で書店に寄ることになった。

ユマはまだハルケギニアの文字を読み書きできないので、勉強するための本を何か買っていこうというのである。

「学院の図書館には本がいっぱいあるけど……。確かに、一から字の読み書きを勉強するのに向いたものはないかもしれないわね」

識字率の低い平民ならばともかく、学院に来る貴族の子弟の中には、入学の時点でもまだ字の読み書きもできないなどという者はさすがにいない。

そんな状態では、まだ時期尚早ということで入学の許可が下りないだろう。

字の読み書きくらいはユマにも教えてやりたいし、幸いお金もまだ十分に残っているので、ルイズも本を買うことに同意した。

「ありがとう、たくさん買ってくれて」

ユマはそう言って、ルイズにペこりと頭を下げた。

両手にはたくさんさんの衣類と、先程の飲食店で包んでもらったシエスタへのお土産が入った袋を抱えている。

「メイジが使い魔に必要なものをきちんと用意するのは当たり前よ、気にすることはないわ。私は別に吝嗇家じゃないのよ」

ルイズがさも当然のように、しかし少し得意げな調子の滲んだ声でそう答える。

「私も見ていく」

タバサもそう言って本屋へ同行することにした。

というか、彼女にとってはそちらの方がメインの目的である。

「私は本なんか見ても退屈だから。そこら辺のお店を回って、しばらくしたら戻ってくるわ」

キュルケだけはそう言って、本屋の前でみんなと別れた。

ルイズが選んだ書店の中に入ると、インクのおいに、ほこりっぱ

いにおい、それに羊皮紙のすえたようなにおいが混じり合って鼻をついた。

店内には本棚がずらりと並んでいてせまっ苦しく、あちこちに古びた本がうずたかく積まれている。

地球でいえば、年季の入った小さな古書店のような雰囲気のお店だった。

流行りものの小説本などをメインに置いている、もっと小ぎれいな大衆向けの書店もあるのだが、本屋はこういう店の方がルイズの好みに合うのである。

彼女は店選びでも、貴族らしい格式にこだわるのだ。

店の奥に腰掛けた気難しげな初老の店主は、客が入ってくると顔を上げてじろつとそちらのほうを見た。

が、どうやら相手が貴族だとわかると、小さく会釈をする。

「いらっしやい。どうぞ、ご自由に。それとも、何かお探しのものがありますかな」

ルイズは傍らのユマを示して、店主に説明する。

「この子に字の読み書きを教えたいの。教本と、絵本か何か読みやすい本を何冊か見繕ってちょうだい」

タバサはそちらの買い物物はルイズらに任せることにしたようで、さっさと本棚を回って自分が面白そうだと思う本を探し始めた。

「はあ。字の教本と、絵本……ですか」

そんな本はあまり置いていないので、店主は少し困ったように顔をしかめる。

ここは、主として貴重な古書や何かを取り扱う店なのだ。

そういったものであれば、ここよりも大衆向けの書店へでも行った方が見つかりやすいだろうに。

とはいえ、貴族に頼まれたからには、何かしら提示はせねばなるまい。

少し考えた後、店主は店の奥の方に積まれた本の山を指し示した。

「あちらの本は、先だって断絶したフォングレイル家が所蔵していたものです。未整理の山の中には子供向けの絵本や学習書の類もあつ

たかと思いますが、調べてみましょうか？」

「そう？ ……いいわ、それなら私が自分で調べてみるから」

まったく興味のない品ならともかく、本はルイズも好きだし、見ればどんなものかくらいは大体わかる。

まだ未整理ということは店主も詳しくは知らないのだろうし、それなら使い魔に買ってやるものは自分で調べて決めようと思ったのだ。

ルイズは本の山に歩み寄ると、かがみ込んで本のタイトルを調べ始めた。

「……あ、あったわ。『イーヴアルデイの勇者』に、『ビタミンナ王国物語』、『明日への翼』……。確かに絵本ね」

軽くほこりをはらうと、ルイズはそれらの絵本を開いて、ぺらぺらとめくってみた。

ユマも、後ろのほうから覗き込んでみる。

さすがに貴族用の高級な本だけあって、色鮮やかな美しい挿絵がページを彩っているようだ。

「これなら、読みやすくていいか、も……」

その時、あるものが目に留まって、ルイズのページをめくる手がぴたりと止まった。

「……！」

ユマの目もまた、それに釘付けになる。

二人が目を奪われたものとは、絵本に挟まれた一枚の札だった。

それは明らかに、ユマが作ったものと同じ、カード使いの用いるカードだったのである。

(な、なんでこれが、こんなところにあるのよ?)

ルイズが振り向いて、押し殺した声でユマに問いかけた。

(……わからない。けど、もしかしたら、他の本にもあるかも)

二人はそこで、片っ端から本を開いて、同じようにカードが挟まっていないかを確認し始める。

途中からタバサも事態に気付いたようで、協力しに来てくれた。

そうしてしばらく探した結果、他の絵本や学習書の中からも、次々とカードが見つかった。

どうやら、それらの本を読んでいた子供がしおり代わりに使っていたらしい。

店主にも聞いてみたが、彼は本にカードが挟んであること自体知らなかったようで、おそらくそれは本を所蔵していた貴族が子供に与えたおもちゃか何かだろうということだった。

「きれいな札ですな。しかし、当店はあくまで書店ですので。本をお買い上げいただけるなら、一緒にお持ちになられても結構です。そのあたりの本なら、そうですね……」

貴族向けの品とはいえろくに買い手のつかない子供向けの古本であり、在庫がまとめて処分できるならこちらもありがたいからと、店主はずいぶん安くしてくれた。

自分の商品はあくまで本であってたまたま混ざっていたカードではないという矜持があるのか、吹っかける気はないらしい。

ルイズは礼を言うと、それらのカードが挟まっていた本をすべて購入することにした。

「ふうん……。不思議なこともあるものねえ」

合流して事の次第を聞いたキュルケは、首を傾げた。

「もしかしたらその子供が、ユマちゃんと同じカード使いつてやつだったのかしら？」

「……わからない」

どうやって自分の力に気付いたのかは謎だが、その子供はこの世界で生まれたカード使いの才能をもつ人物だったのかもしれない。

でなければ、自分と同じように地球かウルフレンドから何かの理由で召喚されてきたのかも。

それとももしかしたら、何かの原因で地球かウルフレンドからカードだけが召喚されてきて、子供はたまたまそれを手に入れたに過ぎないのか……。

ユマは自信なさそうに、思いつくままにいろいろな仮説を並べてみた。

「そうねえ。フォングレイル家といえば、この間破産したゲルマニア

の貴族家よ。好事家で、珍しいものとみれば見境なく集めていたそうだから、最後のが正解かもね」

カードだけが召喚されたのか、カード使いと一緒に召喚されたのかは不明だが、ともかく何かの原因で召喚されたカードが、見た目が美しく珍しいということでも市場に出た。

それをフォングレイル家の貴族が購入し、特に使い道もないのでしばらく眺めて楽しんだ後に子供に与え、その子供が本のしおりとして使った……。

真偽のほどはわからないが、それで一応筋は通る。

そのカードをユマがたまたま発見したというのはなんともすごい偶然だが、あるいは彼女がカード使いであるがゆえに、自然と引かれ合ったのかもしれない。

ユマは、事実を確認するためにもぜひ直接会って話を聞いてみたいと思った。

だがキュルケは、それは無理だと言って首を横に振る。

「当主も家族も、みんな死んでしまったらしいわ。残っていた家財は、負債の支払いのために権利者が押収して市場に出したんでしょうね」
キュルケの母国であるゲルマニアは競争の盛んな国で、下級貴族でも平民でも才気と運と行動力があれば富や権力をつかみ取れる一方で、没落していく者もまた多いのだ。

聞いた話では、フォングレイル家はかつてはかなり裕福で歴史のある貴族家だったが、当代の主が趣味と遊蕩に金を注ぎ込んだために、次第に財政状態が悪化していったらしい。

その上に不運も重なり、とうとう貯蓄が底を突いて、残る財産を換金して負債の支払いに充てた上で今後はつましい暮らしを送るようにと宣告された。

当主はひどくうろたえて、友人たちから金を借りるといふ絶望的な試みのために奔走したが、長年の乱行のために既に友人も親類縁者もみな彼を見捨ててしまっていた。

ついにどうにもならないと悟ったとき、現実を直視したくなかった彼は家族に毒を飲ませた後、杖を握って自分自身の命にも始末をつけ

たのである。

「そうなの……」

ユマはそれを聞いて、痛ましげに顔をしかめる。

同じカード使いだったかもしれない子供が死んでしまったことはもちろん悲しいが、それ以上に、子供が大人の事情や身勝手な感情の犠牲になったということが悲しかった。

「それで、店の中ではざっとしか見なかったけど。どんなカードがあるのよ？」

「……ん。見てみる」

ユマは気持ちを切り替えると、タバサが『念力』を使って運んでくれていた本を一旦下ろしてもらい、挟まれていたカードをひとつひとつ取り出してチェックし始めた。

ルイズも、そしてキュルケやタバサも、興味津々な様子で後ろから覗き込む。

『ショートソード：装備品（サポート）』

刃渡り4、50センチの短めの剣。狭い場所でも振り回せるため、冒険者なら一本は持っている』

『ストロングボウ：装備品（サポート）』

プロの狩人が使う攻撃力の高い弓。引くのにかなりの力がある』

『バックラー：装備品（サポート）』

小型の丸い盾。攻撃を受け流すのに向いている』

『マジックベリー：アイテム（サポート）』

MPを回復させる、不思議な木の実』

今のところは、ウルフレンドでユマも手に入れたことのある、比較的ありふれたカードばかりだ。

武器などの装備品のカードが多いようだが、それ以外のカードも含まれている。

ユマはそこでふと思いついて、マジックベリーのカードをルイズらに差し出して質問した。

「これ、見たことある?」

ハルケギニアの少女たちは代わる代わるそのカードを手にとって、イラストや説明文にしっかりと目を通した。

「……いえ、見たことのない木の実ね。クックベリーと同じ、ベリーの果実みたいだけど」

「ええ。それよりも、このMPっていうのは何かしら?」

「聞いたことない」

それは、概ねユマの想像したとおりの反応だった。

これはウルフレンドでは比較的ありふれたアイテムで、ユマが召喚されたときに手にしていた初期デツキにも入っていた。

それをルイズら全員が知らないということは、おそらくこの世界にはないということだろう。

もちろん、地球にはあるはずもない。

ということは、これらのカードはやはり、ウルフレンドで作られてから召喚されてきたものに違いない。

「MPは、魔法とかを使う力のことよ。なくなると、魔法が使えなくなるの」

それを聞いて、少女らは顔を見合わせた。

「……それって。つまり、精神力のこと……よね?」

「それが本当なら、すごい価値があるじゃないの!」

「貴重」

ハルケギニアでは、魔法を使う力の源になる精神力は、普通は眠って回復を待つしかない。

食べることで精神力を補給できるとしたら、それは非常に貴重な魔法薬だ。

「そうなの?」

ユマはちよつと首を傾げたが、あまり興味なさそうにカードを調べのに戻った。

この世界では貴重だろうと、別に売るわけではないのだから。

そうして調べていくうちに、モンスターカードも見つかった。

『巨大ネズミ：モンスター（ビースト） HP 5 / MP 0 Lv 12
物理防御7 魔法防御1

異常成長した巨大なネズミ。

他の星から来た宇宙人という説もあるが、真偽は定かではない』

（あ、ルフィーアが嫌いなやつだ）

このモンスターは、ユマもウルフレンドで入手したことがある。

ルフィーアはネズミが大嫌いで、あるクエストではこの巨大ネズミを見たせいでパニックに陥り、森の奥で暴走して暴れまくっていた。

なので、彼女の前ではこの手のモンスターを呼び出さないように気を付けていたものである。

動物好きな彼女が、なぜネズミだけは最大の苦手なのかはよくわからない。

この巨大ネズミにしても、異様に大きいことを別にすれば、見た目はむしろかわいいくらいだと思うのだが……。

「……何これ、ネズミ?」

「こんな生き物もカードになるのね。どうやるの?」

ルイズとキュルケが、不思議そうにそう質問してきた。

「倒したら、カードになることがあるの」

「へえ……。じゃあ、このネズミもカードから呼び出せるのね。ユマちゃんの言うことをなんでも聞くの?」

「ええ。なんでも、かはしらないけど。一緒に戦ってくれるくらいには」

ウルフレンドのクエストで遭遇したモンスターは、倒すと死体になるのではなく、跡形もなく消えてなくなる。

そうしたモンスターを倒すと、たまにカードがその場に残ることがあるのだ。

こちらに敵対して襲いかかってきたモンスターも、そうやって手に入れたカードから召喚すると、仲間として働いてくれるようになる。

ただ、なぜそうなるのかといわれると、ユマにもよくわからない。カードにならなかったモンスターは死んでしまうのか、そもそも

カードになったらそれは死んでいないとっていいのか、それすらもよくわかっていない。

敵対していた闇の陣営にもカードを使う者たちがいたから、少なくとも一部の敵は、元々カードだったのだろうが……。

だから、ユマはクエストでは襲ってきたモンスターは倒すが、カードを手に入れるためだけに自分から攻撃したことはなかった。

カードから召喚したモンスターだけに戦わせたりしたこともない、いつも一緒に戦った。

カードの力は、きつと自分だけの力ではなく、借りている力でもあらずだ。

強くなるためにむやみやたらにカードを掻き集めて回ろうとしたり、その力を悪事にでもなんでも好き勝手に使ったりするのは、思いついた無責任な行動だと思う。

自分でよくないと思う使い方をすればカードに見限られてしまうのではないか、と感じているのもそのためだ。

「やってみせて」

タバサがそう要求したので、ユマはこくりと頷くと、まずは周囲に人目がないことを確認した。

それから、巨大ネズミのカードを指で挟んで掲げ持ち、意識を集中する。

カードは輝きながらユマの手を離れて浮き上がり、ゆっくり回転しながら透明になって消えていった。

次の瞬間、ユマの目の前、少し離れたあたりにほのかな光の球体が出現して膨らみ、その中からモンスターが姿を現す。

それは、身の丈2メートル以上はあるかという、まるで熊のような大きさの直立した巨大なネズミだった。

ビーバーよりもなお長い前歯と大きな爪をもち、体色は真っ白で、目は赤い。

しかし、なんだかぼけーとした顔立ちで突っ立っているので大きさの割に迫力はなく、どちらかと言えば愛嬌のある感じだった。

「お、思ったより大きいのね。てつきり、ネコかイヌくらいかと……」

「そうね。まるでジャイアントモールみたいな大きさだわ」

「……見たことない」

巨大ネズミはそんな少女たちの評価を知ってか知らずか、きよろきよろとあたりを見回した。

それから召喚者であるユマの方を向いて、前足を軽く振りながら何やら話しかけるようにチユー、チユーと鳴く。

「……この子、ユマちゃんに何か言ってるの?」

「うん。『見たところ敵もないし危険地帯でもないようだが、今日は何の用で呼んだのか』って」

「見た目の割に、なんだか賢そうな話し方をするのね」

「幻獣の一種?」

ユマは、さあ、と言って首を傾げた。

カードの説明によると、動物ではなく宇宙人かもしれないらしいが……。

真偽のほどはわからないようだし、こちらの言葉で幻獣というのが宇宙人を含むのかどうかもしらないので、なんとも答えようがない。

それはさておき、巨大ネズミがこちらをじつと見つめたまま待っているようなので、ユマは何か返事をしなければと思った。

と言っても、カードからモンスターを召喚するところをルイズらにみせるために呼び出しただけなのだが。

しかし、呼びつけておいて別に何も用はないというのも、また失礼な話かもしれない。

少し考えて、ユマは自分が持っている荷物を差し出した。

「ごめんなさい、これを。私たちが乗ってきたドラゴンのシルフィードのところまで、運ぶのを手伝ってくれる?」

第十話 続・掘り出し物

巨大ネズミが、ユマから受け取った荷物を両手に持って、のそのそと街中を歩いてゆく。

当然道行く人々からの注目を集めたが、ルイズら貴族が同行しているので珍しい使い魔の類だと思われたのであろう、特に騒ぎにもならなかった。

そのまま街の外に出て、少し離れたあたりでタバサがピーツと口笛を吹くと、じきにシルフィードが降りてきた。

シルフィードはつぶらな瞳で、不思議そうにまじまじと巨大ネズミを見つめた。

巨大ネズミも、ぼーっとした顔でシルフィードを見つめ返す。

ユマはその間に巨大ネズミから荷物を受け取ると、お礼を言った。

「ありがとう、ここまででいいわ」

「チュ。チュチュー、チュチュ、チュー」

巨大ネズミは頷くと、心なしか嬉しそうに何度か鳴く。

それを聞いて、ユマも少し微笑んで頷き合った。

「そうね、私もそう思うわ」

それから、巨大ネズミは出てきたときと同じように、光の中に姿を消した。

「今、あいつと何を話してたのよ？」

「アポデムスはね、『現地住民の間を歩いても騒がれなかったのは初めてだ。このあたりの人々は文化水準が高い』って、褒めてたの」

「……ぶ、ぶんかすいじゅん？ ……そ、そう」

ルイズは、ネズミとは思えないようなその話の内容を聞くと、妙な顔をして頷いた。

それにアポデムスって、ペットや使い魔でもないだろうに、ネズミに名前なんかあるのだろうか。

「へえ、頭いいのねえ。やっぱり、幻獣か亜人の一種なのかしらね」

「宇宙人かもしれないと書いてあった。それは、何？」

「他の星から、来た人のこと」

「他の、星……？」

何それ、という感じで首をひねっているハルケギニアの少女らをよそに、ユマはまた本を広げてカードを確認し始める。

さつきは巨大ネズミを召喚したために、確認が中途半端になっていたのだ。

『ジャベリン：装備品（サポート）

小型の槍』

『バイパー：モンスター（ビースト） HP3／MP0 Lv2 物理
防御3 魔法防御2

森に棲む大きな蛇。怒りっぽく、すぐに噛み付く』

『ファイアスピット：モンスター（スピリット） HP3／MP4 L
v5 物理防御3 魔法防御2

小さな炎の精霊でサラマンダーの仲間だが、弱くてまだ形がない』

『サンダーワーム：魔法（魔法攻撃）

いかづちの精サンダーワームを呼び出して敵を攻撃する魔法のカード』

（魔法カードもあるのね）

こういった魔法のカードは、専門家でない自分が使うよりも、腕のいい魔術師などに使ってもらおうほうがより高い効果が出る。

まあ、戦いがなければ使わないのだし、今はあまり気にすることもないだろうが。

『エリアルの実：アイテム（サポート）

マンバの森に実る果実。

水中で周囲に酸素の膜を作り出し、呼吸できるようにすると共に、深海の圧力からも持ち主の身を守ってくれる』

『でくのぼう：モンスター（ゴーレム） HP4／MP0 Lv7 物

理防御4 魔法防御3

図体は大きいが軽い材料で作られているので、打撃力も強度も低めなこけおどしのゴーレム。

腕のいい魔術師が、自分の住む塔などを守らせるためにたくさん作ることがある』

このあたりは見たことのないカードだったが、まあ、特に不思議とは思わない。

自分が滞在した間に遭遇したものだけが、ウルフレンドのすべてというわけではないだろうから。

これまでに見つかったモンスターは、どれも比較的レベルの低いものばかりだった。

アイテムも、強力そうなものはほとんどない。

最初は弱いモンスターでも使い続ければレベルが上がって強くなっていくものだから、元々の持ち主自身がまだ経験の浅いカード使いだっただのかもしれない。

でなければ、使えないと判断されてデッキから抜かれたつきりになっっていた在庫品のカードだったのだろうか。

さっきの『でくのぼう』なんて、三枚もダブっていたし。

ユマは、デИАーネやルファイアのようなキャラクターのカードがあつたらうれしいな、と内心で期待しながら調べていた。

キャラクターカードは、モンスターカードと違って倒して手に入れるものではない。

クエストの最中に出会ったキャラクターからの信頼を得たときに、本人から手渡してもらえるものなのである。

本人たちから聞いた話によれば、カードから呼び出されるのは本体ではなくその分身のようなもので、分身と本体とは休んでいる間に夢を見るような形で経験を共有するらしい。

ゆえに分身が死んでも本体に害はなく、カードの力が戻れば何度でも再召喚することができる。

カードとして既に手元に持っているはずのキャラクターとクエスト

トで遭遇したこともあるので、それは本当のことだろう。

ユマも、望んで力を貸してくれる彼らのことは比較的気兼ねなく呼び出すことが出来たし、クエストのないときでもよく話し相手などになってもらっていたものだ。

しかし、そう都合よくはいかないようで、キャラクターのカードはこれまでにまだ一枚も見つかっていない。

ユマは、今回見つけたカードの最後の一枚を手を取った。

『魔剣^①デルフリンガー！キャラクター（スピリット）／装備品（サポート） Lv1

現在は意思をもつ魔剣となっているが、本体は刀身に憑依した靈魂。

魔力を吸収して、所有者の身を守る力がある。

エルフによって作られた存在であり、^②“虚無”の使い魔^③“ガンダールヴ”の片腕となる運命を負っている』

イラストには、刀身が錆び付いた片刃の長剣らしきものが描かれている。

「……………」

ユマは、そのカードを見つめながら、ちよつと不思議そうに首を傾げた。

説明に『キャラクター／装備品』なんて書かれているカードは、これまで見たことがない。

キャラクターで、かつ装備品だということなのだろうか…………。

（意思を持つ、魔剣…………、魔法の、剣？）

自分の意思で動き回る剣ということなら、リビングソードというカードはもっていた。

最初からデッキに入っていた中では特に頼もしい味方の一人で、駆け出しのころはずいぶんとお世話になったものだった。

でも、あれはモンスターカードで、確かデーモン的一种だったはずだ。

モンスターではなくキャラクターだということは、もっと珍しい、唯一無二の存在ということなのかもしれない。

だとすると、あの『魔剣ニビル』みたいなものだろうか。

ニビルはウルフレンドでは悪名高い呪いの剣で、それを持った者を見境なく人を襲う血に飢えた殺戮者になってしまうのだ。

ユマはあるクエストでその剣に魅入られた偉大な騎士ロツドウエルを救ってほしいと彼女の部下に頼まれて、ニビルと対決したことがあった。

しかし、カードの文面を見る限りでは、この剣はそんなに悪意のある存在には思えないし……。

「さっきから、何を一生懸命見てるのよ？」

「あのネズミちゃんよりも面白いカードがあつたのかしら？」

横から声をかけられたので、ユマは彼女らにもそのカードを見せた。

「意思をもつ魔剣？ インテリジエンスソード？ね」

「私はそれよりも、エルフが作ったっていうのが気になるわね。それに、ガンダールヴって、確か……」

「始祖の使い魔」

ルイズらはそれから、ハルケギニアのことにまだ無知なユマにいろいろと説明をしてくれた。

インテリジエンスソードとは自分の意思をもつ魔法の武器で、ハルケギニアではたまに見かけられること。

ハルケギニアの人間は高度な先住魔法を使いこなすエルフを最強の亜人として恐れており、大昔から敵対関係にあること。

始祖ブリミルとはハルケギニアのメイジたちの祖にあたる六千年前の人物で、土水風火の四系統に失われた虚無の系統を加えた五大の系統魔法を作り出したとされていること。

ガンダールヴはその始祖ブリミルの四人の使い魔の一人で、あらゆる武器を使いこなし、数千の軍勢とも戦えた勇猛果敢な『神の盾』だったと伝えられていること……。

「じゃあ、この剣はその『ガンダールヴ』の使っていた武器？」

「説明によると、そうみたいね。でも、なんで始祖の使い魔の武器がカードになってるのかしら」

「まさか、始祖の使い魔もカード使いだったとか？」

「……使い魔でないにしても、カード使いの仲間がいたのかもしれない」

自分たちの祖であるブリミルゆかりの品かもしれないというので、無理もないことだが、ルイズらはかなり熱中して議論している。

しかし、ユマとしては今はじめて聞いた話なのでさほど感慨もない。

彼女らからやや距離を置いて、一人で静かにこのカードの由来について考えていた。

このデルフリンガーという剣が本当にその始祖ブリミルという人の使い魔のものだとしたら、これらのカードが作られたのは六千年も前ということなのだろうか？

いや、そうとは限らないだろう。

ブリミルやガンダールヴの死後に、無関係な誰かがカードにしたのかもしれない。

だとしても、少なくともこのカードが作られたのはウルフレンドではなく、このハルケギニアだということになる。

剣が何かの理由でウルフレンドへ行き、そこでカードになってまたこちらに戻ってきた、と考えることもできなくはないだろうが。

いずれにしても、二つの世界の間にはつながりがあるということに……。

(……うーん)

気になることは多いが、今ここで考えていても答えはでそうにない。

ただ、やはり自分がここに呼ばれたことには何か理由があつて、こちらでもウルフレンドの時と同じようにやらなくてはならないことがあるのではないか、とは思った。

偶然にしては、あまりにもできすぎているから。

だからといって今すぐに自分から何かをしようというわけではな

いが、いずれ何かが起こるのかもしれない。

そのことは、頭の片隅には置いておくことにしよう。

そんなふうを考えていたら、ああだこうだと話し合っていたルイズたちから声をかけられた。

「とにかく！ 気になるから、その剣を呼び出してみてちょうだい！」

「そうね、本人に聞くのが一番早いわ」

「興味ある」

ユマもそれには賛成だったので、さっそくデルFRINGERを召喚してみることにした。

魔剣デルFRINGERのカードを指で挟んで掲げ持ち、精神を集中する。

カードはくるくると回って宙に消えていき、代わりに一本の剣が、ユマの手の中に姿を現した。

それはイラストに描かれていた通りの、錆びた片刃剣だった。

絵では長さまではよくわからなかったが、百五十センチかそこらはあるだろうか、ユマの身長よりもまだ大きい。

刃は薄手だが、かなりの大剣である。

(……………)

ユマはその剣を握った途端、体に妙な違和感を感じた。

カード使いは、もとよりカードから呼び出したものなら、武器でも防具でも、そのほかのアイテムや魔法でも、何でも扱うことが出来るものだ。

しかし、それにしてもいつも以上に手に馴染むような感じがするし、体が少し軽くなったような気もする。

カードの説明には書いてなかったが、もしかしてこの魔法の剣には、持ち主の動きを素早くするとかの力もあるのだろうか。

一瞬そう考えたが、ふと見ると、ルイズと契約したときに左手に刻まれたルーンがほのかに光っているのに気がついた。

そうすると、これは使い魔に与えられる特殊能力なのだろうか？

「……………うん？ なんだここは。店の中じゃねえな……………」

そんなことをいろいろと考えていると、ユマの手に握られた剣から

低い男の声が聞こえてきた。

刃の根元にある金具が、その剣がしゃべるのに合わせてカチカチと動いている。

「おいおい、おめえは誰だ、娘っ子。何でおめえみてーなのが俺を持つてんだ？　俺はおままごとの道具じゃねえんだぞ、下に置きな」

「はじめまして、デルフリンガーさん。私はユマ、カード使いよ」

ユマは自己紹介をしてから、素直に剣を地面に置いた。

その途端に、ルーンの輝きが消える。

キラクターカードということは、このデルフリンガーという剣……に宿る靈魂は、元々の持ち主を信頼して自分のカードを託すことに同意したのであろう。

自分はその人とは違うのだから、見ず知らずの相手に勝手に呼び出されたことに文句を言うのは当然だ。

「カード使い？　……んん、どっかで聞いたな……」

「……忘れたの？」

ユマが首を傾げると、デルフリンガーは考え込んでいるような声で返事をした。

「あー、まあこちとら、何千年も生きてるもんでよ。なんかこう、頭の隅に引っかかるような言葉なんだが……」

「じゃあ、始祖のことは？　あなたは、あのガンダールヴの使つてた武器なんでしょ？」

「まさか、それも忘れたって言うんじゃないでしょうねー！」

横合いから、キュルケらも口を挟んだ。

「ガンダールヴ？　それも、なんか聞き覚えがあるな……」

「始祖ブリミルの使い魔」

タバサがそう補足すると、デルフリンガーはおお、と声を上げる。

「おお、思い出したぜ！　そうか、『使い手』だ！　俺は確かに、六千年ばかり前にあいつに握られてた！」

「じゃあ、カード使いのことは？」

ユマがそう尋ねなおすと、デルフリンガーはまた考え込んだ。

「……うーむ。そいつは、まだ思い出せねえな。こう、喉のへんまでは

出かかっているような感じなんだがよ」

「あんたは剣じゃないの。どこに喉があるのよ？」

「ものの例えだよ。……あー、まあたぶん、気分的には鏢のあたり？」
ルイズとデルフリンガーのそんなやり取りをよそに、タバサはじつと考え込んだ。

ややあつて、また別の質問を口にする。

「……カード使いと始祖には、何か関係がある？」

「あー、あつたような、そうでもなかったような……。すまん、忘れた」
「なによ、あれもこれも忘れたつて！ 役立たずね！」

「しようがねえだろ、なにせ大昔のことなんだからよ」

デルフリンガーは、そう言つてルイズの文句をそっけなく流した。

「それよりよ、カード使いとやらの娘っ子。もう一回俺を持つてみてくれ」

「あら。さつきは置けつて言ったのに、どういふことかしら？」

キュルケにそう聞かれると、デルフリンガーは決まり悪そうに言い訳をした。

「あー、いや。確かにそう言ったけどよ……。なんか、今思うと、持たれた時に妙な感じが……」

「わかつた」

ユマは嫌な顔をするでもなく、もう一度デルフリンガーを両手で持ち上げてみた。

ルーンがまた、ほのかに輝き始める。

デルフリンガーは、ユマを品定めでもしているかのように、しばらく黙っていた。

ややあつて、小さな声で呟く。

「……おでれーた。おめえ、カード使いなだけじゃなくて、使い手でもあんのか」

「使い手？ ……私が？」

ユマは首を傾げただけだったが、ハルケギニアの少女らの方はそうはいかない。

「え。それつて、ユマちゃんがガンダールヴつてこと？」

「まさか!」

「……」

驚いてまたざわざわと騒ぎ始めるルイズらをよそに、ユマは内心で溜息を吐いていた。

(そう、伝説の使い魔……ね……)

この世界では、勇者だのなんだのとうつとおしいことはないのかと思っていたのに、やっぱりそうはいかなさそうな気配がしてきている。

いずれ、何かが起こるのだろうか。

そのときには、せめてルイズやシエスタらに迷惑や危険が降りかからなければいいのだが……。

そんなユマの思いなどつゆ知らず、ルイズらはデルフリンガーをしきりに問い質している。

「とにかく、いきなり伝説なんて言われても信じられないわ。何か証拠はないの?」

「証拠つたつてなあ。……まあ、ガンダールヴは武器の扱いが得意だぜ。小さな娘つ子とは思えねえほどすばしっこく動けて、巧みに武器を操れるはずさ」

「……だそうだけど、ユマちゃん。そんな感じはあるの?」

キュルケから話を振られたので、ユマは小さく頷いた。

「そうね。いつもよりも体が軽くて、剣が手に馴染む感じがするわ」

「……そう言われても……」

それを聞いても、ルイズはまだ疑り深そうに考え込んでいる。

そんな伝説の使い魔などを、自分のような落ちこぼれのメイジが呼び出せたというのは、にわかには信じがたい。

確かにユマは、不思議な力をもっているし、大した子ではあるけれど……。

「……なら、試してみればいい」

それまで押し黙っていたタバサが顔を上げて、横からそう口を挟んだ。

第十一話 伝説を作るもの、伝説を夢見るもの

ユマたちがトリスタニアの郊外で、デルフリンガーを囲んで『ガンダールヴ』について話し合っていたちようどそのころ。

トリステイン魔法学院の学院長室でも、同じ話題について話し合っている二人がいた。

「つまり、ミス・ヴァリエールの使い魔に、あの『ガンダールヴ』のルーンが現れたというのかね？」

「そうです。文献によれば、あの少女の左手に刻まれたルーンは、かの伝説の使い魔のものとまったく同一でした」

学院長の机の上には、『始祖ブリミルの使い魔たち』という題の古めかしい本と、ユマの左手のルーンをスケッチした紙が置かれていた。

本の中に書かれた始祖ブリミルの使い魔『ガンダールヴ』のルーンと、そのスケッチとは、確かに同じ形をしている。

それを示しながら、召喚の儀に立ち会っていた教員のコルベールが、学院長オールド・オスマンに説明をしていた。

春の使い魔召喚の折に、ミス・ヴァリエールがユマという奇妙な平民の少女を呼び出したこと。

契約の証として少女の左手に現れたルーン文字が、変わった形をしていたこと。

とはいえ相手は小さな少女であり、ミス・ヴァリエールに対してもごく従順で、特に危険も問題もなさそうに見えた。

仕事も忙しかったのでしばらくはそのまま放っておいたが、どうにも何かが頭に引っ掛かったままだった。

変わったルーンだったが、いつかどこかで見たものであるような気がしたのだ。

そこで、休日を利用して調べてみようかと、今朝から図書館で文献調査をしていたところ……。

「これを発見した、というわけじゃな？」

「そうです」

コルベールはルーンが伝説の使い魔のものであることに気が付き、報

告のために慌てて学院長室へ向かったのだ。

休日であったが、幸い学院長は外出はしていなかった。

秘書のミス・ロングビルは不在だったが、内密な話なのでかえって都合がいい。

「…………ふむむ…………」

オスマンは静かに目を閉じて、始祖の使い魔にまつわる伝承を思い返した。

言い伝えによれば、始祖ブリミルの用いた『虚無』の呪文は強力であったが、それだけに詠唱に要する時間も長かったという。

そのため、彼が呪文を唱える間、その身を守っていたのが『ガンダールヴ』であるらしい。

始祖が失われた『虚無』の呪文を要したほどの相手には、現代のメイジでは容易に打倒し得ないエルフやドラゴンなどの強大な亜人や幻獣の類も含まれていただろう。

つまり、少なくともそれらの相手がある程度の時間食い止めておけるくらいには、『ガンダールヴ』は強かったということだ。

事実、その力は千人もの軍隊を一人で壊滅させるほどであり、並のメイジではまったく歯が立たなかったという言い伝えも残っている…………。

「どうしましょう、オールド・オスマン」

「落ち着きなさい。ルーンが同じだというだけで、間違いなくそうだと決めつけるのも早計かもしれん」

「まあ…………、それもそうですな」

オスマンは、こつこつと指で机を叩き、思案げに長いひげを撫でた。「それに、仮にそうであったとしても、あまり公にするのは考えものじゃ。王宮のボンクラどもがそんな者がおると知れば、試しに戦で使ってみたなどと考えかねんからな」

「…………確かに」

「ひとまず、ミス・ヴァリエールとその使い魔には、さりげなく目を配っておきなさい。もちろん、他言は無用じゃ」

「は、かしこまりました」

コルベールはオスマンに一礼すると、部屋から退出していった。オスマンはそれを見送ってから、窓に向かい、遠い歴史の彼方に思いを馳せた。

「伝説の使い魔、か……」

一体、どんな姿をしていたのだろうか。

あらゆる武器を使いこなしたというからには、動物や幻獣ではなく、やはり人間か、さもなければ亜人の類だったのか……。

「……試してみる？」

ユマは、不思議そうに首をかしげた。

『『ガンダールヴ』は、並のメイジでは相手にならないほど強かったといわれている』

そう説明しながら、タバサはルーンを一言唱えて、杖を軽く振る。すると、空気中の水蒸気が集まって、空中に拳ほどの大きさの水の塊が出現した。

「避けてみて」

実際に伝説に語られているような力があることを示せば、それが何よりの証拠になるはずだ。

タバサの言葉を聞いて、ルイズらが慌ててユマから離れる。

ユマはじつとその水の塊を見つめていたが、やがて小さく頷いた。それを受けてタバサがもう一度杖を動かすと、水の塊が杖の動きに応じてぐんと上昇した後、ユマをめがけて真っ直ぐに急降下した。

スピードはかなり早いですが、もちろん水の玉だから、当たってもせいぜいしりもちをつくくらいで怪我はしないだろう。

これが実戦なら、タバサは鋭い氷の矢を使う。

しかし、大きさやスピード、飛ぶ軌跡が同じなら、回避する難しさは変わらないのだ。

ユマはデルフリンガーを自分の体に引き寄せるようにして両手で持ったまま、とんと大きく横に飛んで、余裕をもってその水の塊をかわした。

「……へえ、すごいじゃない。さすがは『ガンダールヴ』ね」

それを見ただけで、キュルケは感心したように声を漏らした。

自分の体よりも大きな剣を持ち上げているとは到底思えないような、軽快な身のこなし。

ユマのような体格の少女なら、普通は剣を持ち上げているのがやつとで、あのように大きく素早く飛び跳ねることなどまずできない。

その一事だけでも、『ガンダールヴ』のルーンがただのお飾りではなく、おそらくは本物だろうと信じるに十分だった。

タバサも同意するように頷いたが、内心ではそれとは別のことも考えていた。

(ルーンの力は本物。……でも、それだけじゃない)

回避した後のユマには、いわゆる「残心」があった。

余裕で避けられたからといって気を抜かず、水塊が急に方向転換して襲い掛かってはこないか、タバサが二の矢を飛ばしてはこないかと、油断なく目を配って身構えているのだ。

多くの実戦経験を積んでいるタバサには、その所作を見ただけでユマが単にルーンによって身体能力が上がったというだけの素人ではないことは確信できた。

おそらくは、カード使いとして異世界で積んだという戦闘経験の賜物だろう。

「もう一度」

タバサは、もう少し続行することにした。

あのインテリジェンスソードのもつ能力とやらをまだ見ていないことだし、ユマの腕前ももつと確かめてみたかったから。

短くルーンを唱えてもう一度杖を掲げると、今度は二つの水塊が出現した。

小さく円を描くように杖を動かすと、それらの水塊は大きくぐんと旋回し、それぞれ別の方向から急カーブしてユマに襲い掛かっ

く。

ユマは、ぴよんぴよんとバネ仕掛けの人形のように立て続けに飛び跳ねて、それも簡単に回避した。

「次」

タバサはさらに『エア・ハンマー』の呪文を唱えて、今度は目に見えない風の塊を錠状にして撃ち込んでみる。

しかし、その手の不可視の攻撃呪文を撃たれた経験もあるのか、ユマはそれも術者の動きと風の流れから軌道を読んで、危なげなく避けてみせた。

「おお、やるな相棒！ 最初はこんな娘っ子が使い手で大丈夫かと思っただが、おめえ、素人じゃねえな？」

「戦った経験なら、少しはあるけど」

デルフリンガーの感心したような声に、ユマは簡単に返事をした。「今度は、あなたの力も見せてくれる？」

そうお願いしながら、デルフリンガーを大きく振りかぶるように構え直す。

体に対して長すぎるので、いきさかアンバランスな格好だったが。

「あん？ 俺の力？」

「そう。あなたは魔力を吸収して身を守ってくれるって、カードに書いてあった」

「……おお！ そういえば俺、そんな力があつたような……」

なんだか頼りのないことを言うので、ユマはちよつと困つたような顔になった。

いずれにせよ、ユマが剣を構えたのを見たタバサは、次の呪文を唱え始める。

今度は、広範囲に強力な風圧を叩きつける呪文だ。

呪文そのものには殺傷力はないが、デルフリンガーに魔力を吸収する力があるというのが本当でなければ、ユマは数メートルは吹き飛ばされて地面に転がるだろう。

打ち所が悪ければ、大きな怪我をするかもしれない。

しかし、気心の知れた親友のキュルケが、何も言わずとも万が一失敗した場合に備えてユマを受け止めるべく『念力』の準備をしている。

それを確認してから、タバサは呪文を解き放った。

今度はユマは避けようとはせずに、デルフリンガーを盾にしながら、腰を落として吹き飛ばされないようにぐつと踏ん張った。

ユマに襲い掛かる暴風が、刀身に吸収されていく。

しかし、錆びた刀身は呪文の力のすべてを吸収は出来なかったようだ。

正面から吹き付けてくる強い風に髪がなびき、ユマは目を細める。

それでも、呪文の威力はかなり削がれたようで、転倒することは免れた。

「相棒、大丈夫だったか？」

「うん。ありがとう、デルフリンガーさん」

ウルフレンドでも、突風でこちらを転倒させてくる巨大なドラゴンや、ジンニ、シャイターンなどの相手には苦労させられたものだ。

完全ではないにせよそういった攻撃を転ぶことなく凌げるのだとすれば、それだけでも大したものである。

「デルフでいいぜ。いや、すまねえ。このくらいの呪文は何でもねえはずなんだが……、久し振りだからか、なんか昔の調子が出ねえみてえだよ」

「……そうなの？」

そういえば、デルフリンガーのカードには、レベルは1だと書かれていた。

以前にも『ガンダールヴ』に使われていたというわりには、レベルが低過ぎて不自然だと思ったのだが……。

あまりにも使われないまま長い時間が経ちすぎたために、いろいろなことを忘れてしまい、力も次第に衰えていったということだろうか。

しばらく使っていれば、そのうちにまたレベルが上がって、以前の力を取り戻すのかもしれない。

あるいは、鏑を削って落とすとかすればいいだろうか。

カードから出てきた剣の鏑を落としたとして、どこかにいるデルFRINGERの本体にも影響があるのかどうかはわからないけれど。

そんな二人のやり取りをよそに、タバサはもう一度杖を構え直した。

「……続ける」

今度は、少し長めに呪文を詠唱する。

すると、タバサの系統である『風』と二番目に得意な『水』、二つの系統が絡み合い、何十もの小さな水の塊が空中に出現してユマを取り囲んだ。

彼女が最も得意とする攻撃呪文、『ウインディ・アイシクル』の氷柱の矢を水塊に置き換えたバージョンである。

当たってもダメージにはならないが、周囲全方向からの複数同時攻撃を回避し切ることは至難の技……魔法で身を守れない平民の剣士には、まず不可能といってよいであろう。

「へえ、あの娘っ子もかなりの使い手だな。トライアングル・クラスか、しかも矢弾の数が並じゃねえ。若いのにてーしたもんだぜ」

「そうなの？ やっぱり、タバサはすごいよね」

経験の長いデルFRINGERがいうなら、きつとそうなのだろう。

ユマにはこの世界のメイジの腕前はまだよくわからなかったが、確かにすごそうだとは思った。

離れて様子を見ていたルイズも、いつも目立たない級友の思った以上の腕前に驚いた。

キュルケもまた、少し意外そうな顔をしている。

(なんかこの子、いつもよりやる気があるわね……?)

既にデルFRINGERの能力は見たし、『ガンダールヴ』のルーンが本物だろうということもわかった。

だから、本来ならもう切り上げてしまってもいいはずだ。

なのに、いつも必要最低限のことしかしようとしなくてこの親友にしては、思いのほか熱心ではないか。

実際、タバサはかなり張り切っていた。

常に無関心そうなぼんやりとした表情をしてはいても、彼女は知識欲の強い少女なのである。

口には出さねど、自分の實力にも内心で強い自信をもっている。異世界から来たという不思議なカードの使い手の腕前はどれほどのものか、伝説の使い魔の強さはどれほどのものか。

そして、これまで戦い抜いてきた自分の力は、それに通用するのかどうか……。

それらのことに何の興味もないなどとは、到底言えない。

(あの子はこれを、すべてかわせるのだろうか)

期待と不安に、微かに胸がざわめく。

ユマが周囲に素早く目を走らせて身構えたのを確認すると、タバサは水塊を四方八方から彼女に殺到させた。

「えーいっ！」

それに対して、ユマは水塊が動き出したのとはほぼ同時に自分から水塊のひとつに突っ込むように跳躍し、その塊を剣で斬り払うことで囲みを突破しようとした。

ウルフレンドで似たような攻撃をされたときのことを思い出して、そう動いたのだ。

いくらなんでも、これほどの数の弾をすべて別々に、精密にコントロールできるわけではないだろう。

たぶん、四方八方から同時に、同じ場所に向けて真っ直ぐ突っ込ませるだけのはずだ。

ならば攻撃が来るより早く狙われた場所から離れて、一か所を突破して囲みから抜ければおそらく被害は最小限に抑えられるだろう、という判断である。

ユマが水の塊を斬り裂いて囲みから転がり出るとほぼ同時に、一瞬前まで彼女が立っていたあたりに水塊がいくつも炸裂した。

そのまま地面を転がるようにして移動し、背後の方から向かってくる水塊を避ける。

ひとつだけコースが悪くて避け切れないのがあったが、それもデルフリンガーを盾のように使って防ぎ、どうにか被弾を免れた。

とはいえ『ガンダールヴ』のルーンの効力がなければ、完全にはかわし切れなかっただろう。

少なくとも、最後にデルフで防いだ一発はくらっていたはずだ。

ユマはそう考えながら地面から立ち上がって、体についた土を軽く払った。

「……」

その様子を見たタバサがぐっと杖を握り直して、さらに追撃をかけようとしたあたりで、キュルケがぱんぱんと手を叩いた。

「はいはい、そこまでよ。これ以上やったら、ユマちゃんの服が土だらけになっちゃうわ」

タバサの動きが、ぴたつと止まる。

ちよつと悔しげに眉をひそめたが、軽く頷いて、そのまま杖を下ろした。

確かに、これ以上やっていたら、ユマは地面を転がり回って土まみれになってしまいそうだな。

別に決闘をやっているわけではないのだから、そこまでする必要はないだろう。

ユマに本気であてようと思ったら、怪我をしかねないような攻撃も使わなくてはならないだろうし、あまり熱くならないうちに切り上げておいた方がいい。

「間違いなく本物だった。あなたの使い魔も、その剣も」

ユマに軽く頭を下げ、ルイズに向かってそう言うと、さっさとシルフィードの上に跨って本を開いた。

キュルケも、そんな親友の後に続く。

「そ、そうね。……」

ルイズはそう言うと、ユマの方を見た。

何か言うべきかと思っているのだが、何と言っているかわからず、困ったような顔をしている。

ユマはちよつと首を傾げてから、デルフリンガーをカードの中に還して、じつとルイズの顔を見つめ返した。

「別に、何も変わらないわ」

「え？」

「私がルイズの使い魔であることは変わらないもの。いざという時にはルイズを守るわ。『ガンダールヴ』でも、そうでなくても。当然でしょう？」

そう言つてルイズの手をそつと握つてから、ユマもてつと駆け出して荷物を集めて抱え直すと、シルフィードの上に移動した。

「あ……、その。そうね……、ありがとう……」

ルイズは微かに頬を染めてはに cand するような笑みを浮かべると、彼女の後に続いた。

シルフィードはそんな少女たちを背に乗せて、日の傾き出した空に大きく翼を広げ、魔法学院へ向かつて飛び立っていった……。

王都トリスタニアのある裏路地にある一軒の武器屋の中で、五十がらみのいかつい店主が暇そうにパイプをふかしていた。

今日についてない日で、ろくに客も来なかった。

もう日が暮れるし、そろそろ店じまいの時間だ。

そんな風に考えていると、乱雑に積まれた武器の山の中から、低い男の声があった。

「……よう、親父」

店主はパイプを口から離すと、不審そうに眉をひそめる。

「なんでえ、デル公。客もいねえのにおめえが話したあ、珍しいじゃねえか？」

「いやな、ちよいと夢をみたもんでよ」

「……はあ？ 剣のおめえが、夢なんぞ見るのか？」

胡散臭げな顔をした店主に、デルフリンガーが鼻を鳴らす。

「うるせえ、こちとら六千年も生きてんだ。俺だって退屈で、いつもかも起きてられやしねえよ」

「そうかい、六千年なんてのはおめえがボケてんじやねえかとは思
うがね。それで、どんな夢を見たってんだ？」

そう聞く店主に、デルフリンガーは珍しく、楽しげな声で話し始め
た。

「ああ、それが、なんだか懐かしい夢でよお。『使い手』と一緒に、も
う一度戦った夢さ。いやあ、その使い手も、戦った相手も、ほんの小
さな娘っ子なんだがね……」

第十二話 桃りんごと夜更かし

それからしばらくは、何事もない穏やかな日々が続いた。

毎日ルイズの身の回りの雑用をこなしたり、学院の使用人たちを手伝ったり、キュルケやタバサと親しくしたり……。

それでもユマは、きつとそのうちにこの世界でも何かが起こるのだ、と思っていた。

自分がルイズに召喚されたこと、『ガンダールヴ』とかいう伝説の使い魔だということ、その手に握られる定めにあるというデルフリンガーと出会ったこと。

そのすべてが偶然だとは、とても考えられなかったから。

(いざという時になってから慌てないように、訓練や勉強も普段からちゃんとしておかないと)

そうでなくても、ルイズも毎日一生懸命に魔法の勉強や練習をしている。

なのに、使い魔の自分がだらけているわけにはいかないだろう。

まず、毎日朝の洗濯が終わるとあまり人目のないうちに少し運動をしたり、カードから出したモップや武器を使って素振りなどをやってみたりした。

ウルフレンドではカードの仲間たちに守られて積極的に前線には出なかつたし、小柄な体格が接近戦に向いていないのもあって、どちらかといえば魔法の訓練を中心にしていた。

しかし、『ガンダールヴ』の能力を活かすなら、武器を使った近接戦の訓練も必要だと思ったのだ。

そうしていろいろとやってみた結果、デルフリンガー以外の武器でもルーンの効果は発動するが、本来武器ではないモップでは発動しない、ということもわかった。

ただ、ルーンの力を使っていると余計に疲れるようなので、常に発動している方がいいとばかりはいえないようだ。

一応、日用品としても使えるちよつとしたナイフくらいはいつも懐

に入れて持ち歩くようにしているので、いざというときはそれを握ればいいだろう。

まあ、懐からナイフを抜く余裕があるならカードを使うほうがいいだろうが、持っておいても損はないはずである。

経験上、さまざまな用途に使えるナイフは、ウルフレンドのような世界では一本くらい持ち歩いていればなにかと便利なものだったから。

日本では刃物を携帯していると犯罪になるらしいので、その習慣を続けるわけにもいかなかったけれど。

それに、デルフと何度か話してみた結果、彼の本体は意外と近く……トリスタリアのある武器屋にいるらしいということもわかった。

残念ながら彼を買い取れるようなお金は今の自分にはないが、折を見て直接会いに行ってみようと心に決めた。

魔法の授業にはちゃんと出席してノートをとり、夜には買ってもらった本を使って、ルイズから読み書きを習った。

タバサも、たまに図書館などで出会ったときには、質問をすると短くわかりやすく教えてくれた。

二人ともユマの読み書きの習得がとても早いことに驚いており、当のユマ自身も不思議だったが、おそらくそれもルーンの効力のひとつなのだろうということで見解が一致した。

他にも、この世界のさまざまな事柄について、機会があるたびに居合わせたいろいろな人から教わった。

特に、召喚のときに立ち会ってくれていたコルベールという名の先生はやけによく居合せてくれたので、たびたび質問をした。

少し不思議だったが、遠くから来た変わった使い魔だから気にかけてくれているのだろうかと思って、特にそれについて詮索はしなかった。

そんな、ある夜のこと。

ユマはルイズから買ってもらったベッドの中で、なかなか寝付けずにいた。

特にこれといった理由もないのだが、あるいは夕食の時に使用人たちが試しにどうかと勧めてくれた、濃いブラックコーヒーのせいだったかもしれない。

すごく苦かったけれど、残すのももったいないからと思って、ミルクを足してもらって飲み切ってしまったのだ。

何度も寝返りを打ちながら、どうにか寝ようと努力してみたが、目が冴えてどうにもならない。

「……………」

とうとう諦めて、ベッドからもぞもぞと這い出した。

いつそ自分に眠りの魔法をかけてしまおうかとも思ったが、逆に熟睡しすぎて翌朝寝坊をしてしまわないか心配だった。

自分はウルフレンドで戦いながら学んで即席で身につけた、型どおり、呪文書どおりの魔法を唱えられるだけで、腕のいい魔術師のように細かい制御などはできないのだ。

戦いで役に立ちそうな呪文をいくつか、常に全開の威力で放つ方法を手取り早く身につけただけで、とても魔術師などと名乗れるようなものではない。

そんな魔法で眠ったら、叩き起こされない限り何時間寝続けることになるのかわからない。

こうなったら、自然に眠くなるまで読書でもしていようか。

でも、近くでルイズが寝ているから、明かりをつけるわけにもいかない。

月明りだけを頼りに、暗い中で本を読んだりしていたら、ますます目が悪くなりそうだし……。

(そうだ、瞑想をすればいいわ)

それは魔法の訓練の一環として、ウルフレンドでやり方を学んだ修行法のひとつであった。

さきほどちらつと魔法のことを考えたので、思い出したのだ。

気持ちを静めてじっとしていれば、体も心も休まって、睡眠の代わりにもなるだろう。

あの世界で仲間になってくれた老魔術師のザルサイの話によれば、

瞑想は魔法学校で見習い生が合格しなければならぬ基礎学科のひとつであるらしい。

召喚されるまではただの子供だったユマにとっては、実戦経験を積む以外でもできる限り戦う力を得ていくことが大切だったので、訓練には真面目に取り組んだ。

魔法の奥義が記されているという『知恵の石版』を一生懸命読んだり、仲間の魔術師たちに教わったりしてがんばったものだ。

もつとも、瞑想自体は短期間で戦う力を身につけるには向かない修行だったので、ほどほどで切り上げて呪文の勉強に移ってしまったのだが。

そういえば、最近は瞑想に限らず魔法関係の訓練はほとんどしていなかった。

いざというときのために戦う力を身につけることも大切だろうが、いつもがんばっているルイズと一緒に魔法の訓練をしてみるというのもいいかもしれない。

ウルフレンドでした瞑想の修行は、まずじつと床に座って、すべての雑念を払えるようになることから始まった。

雑念があったりうつらうつらしたりすると、監督を努める先輩の魔術学生に肩や背中を棒で叩かれるのだ。

どうして監督役の魔術学生はこちらの頭の中を見抜けるのかと不思議だったが、きつと瞑想の訓練を積むうちに人の考えも覗けるようになるのだろう、と思った。

座ってじつとしていたことはわけなくできるようになったが、何も考えないというのが難しかった。

何もせずに待つ時間は長くて苦痛だったし、何も考えてはいけなさと念じること自体が、ものを考えているということになってしまいうからだ。

試行錯誤の末に、ユマは精神をただ一点に集中し、床の上のある場所だけを、あるいは壁面のある地点だけを、ただひたすらにじつと見つめ続けるようにした。

そうすると、自分が次第に石ころのようになっていくのが感じら

れ、時間の感覚もなくなって、待つことが苦ではなくなった。

やがて、ユマは容易に瞑想の状態に入つて、それを維持できるようになった。

呪文の唱え方はまだ学んでいなかったが、雑念を払う技術は魔法以外の面でも役に立つことがすぐにわかった。

それ以前には、武器の構え方はとか、足の踏み出しはとか、矢の角度はとか、攻撃が外れたらどうしようとか、戦いのときに雑念が入り過ぎていたのだ。

一生懸命考えていないと不安でしようがなかったのだが、それがかえって集中を削ぎ、体のきれを鈍くしていたのに気が付いた。

それを振り払って、ただ無心に集中できるようになると、目に見えて技術が上達するようになった。

その次の段階では、目の前に石だとかパンだとか羊皮紙だとかいった物を置かれて、それについてひたすら考え続けるように、といわれた。

そういつたありふれた物について考え続けることは難しく、すぐに考えることが尽きて集中が途切れがちになり、そうすると監督にまた容赦なく肩や背中を棒で叩かれた。

当時のユマはその過程を途中で切り上げて、呪文の勉強に移った。

ひとまず瞑想の第一段階をクリアして高い集中力を維持できるようになっていれば、深い理解や細かい制御はともかく、本に書かれたとおりに魔法を唱えることは可能だからだ。

それでとりあえず、戦う力を手っ取り早く得ることはできる。

そうになると、いつ非常事態が起こるかもわからない状況では、瞑想にそれ以上の時間を割いてはいられたのである。

でも、今は時間にも余裕がある。

今回はその段階から、もう一度じっくりと挑戦し直してみるのがいだらう。

(そうすると、今日は何について考えてみようか)

監督がいらないのだから、そこから自分で決めなくてはならない。

今の時点で習得できている呪文や技から考えるに、自分はたぶん、

風や植物、生命、心などに関係した魔法が得意なのだろうと思う。

最初はまず、それらにある程度関係したものについて考えることから始めるのがやりやすいのではないだろうか。

(ええと……)

ユマはきよろきよると部屋を見回して、何かよさそうなものはないかと探した。

そうするうちに、昼間使用人たちから分けてもらった「桃りんご」という果物の乗った皿が目にとまった。

なんでも学院長の秘書を務めるロングビルという女性から、厨房の皆さんにと贈られたもので、彼女の故郷の方からもらった食べ物のおすそわけらしい。

さつきルイズと一緒にひとつ切って食べてみたのが、まだもうひとつ残っていた。

魔法をかけて日持ちがするようにしてあり、冷蔵庫などに入れておかななくても大丈夫なのだそうだ。

これなら、植物や命に関係したものだし、さつき食べたばかりで味もわかっているから、いろいろと考えやすいかもしれない。

ユマは少し考えて、今日はこれを使ってみようかと決心した。

戸棚の中から取り出してそっと運んで床に置き、その前に座ると、すうつと深呼吸をした。

それから、皿の上の桃りんごをじっと見つめて、それについての思案を巡らせ始める。

ユマはまず、先程食べたときのことを思い出してみた。

やわらかく瑞々しいのに歯ごたえもよい不思議な触感で、噛むとねっとりした果肉が歯にまとわりつきながらも、かすかにしやしきしきと快い音がした。

まだ旬ではないということだったが、それでも十分に美味しかった。

上品な甘さが口に広がり、鼻にいい香りが広がった。

それに果物ナイフを使って自分が剥いたとき、切り分けたときの感触に、色、手触り。

一緒に食べていたルイズの顔のほころびや、彼女がもらした感想……。
けれど、すぐに思い浮かぶのはそのくらいで、考えられることはじきに尽きてしまいそうだった。

(まだ、何かあるはず)

ユマは今度は、桃りんごの中はどんなふうになっているのだろうか、と考え始めた。

皮の下……先程剥いたときの姿を思い浮かべる。

それから、断面……切ったときの姿が、頭に浮かんできた。

しかし、経験で知っているのはそこまでだ。

(それ以上のことはわからないものだろうか)

そこで、もう一度深呼吸をして瞑想の状態に入り、意識を目の前の果実の中に集中させていった。

なんとなく、そうすればもっと詳しくわかるような気がしたのだ。

ユマは、植物を操って敵を攻撃させる魔法を使うときのことを考えていた。

ただ決まった呪文の文句を唱えさえすればそれでいい、というわけではない。

感覚を広げて周囲にある植物をとらえ、そこに意識を集中させて、その植物と“つながって”から呪文を唱えなければ、効果は現れない。

瞑想の修行が中途半端なユマはごく大雑把にしかできず、細かな威力の制御などは利かないが、基本的なことではできる。

それと同じように、意識を目の前の桃りんごに集中させるのだ。

自分の感覚と桃りんごのそれとをつなげて、普段呪文を唱えるときよりももっと長く、深く探ってみれば……。

そこまで考えたところで、ふと疑問が頭に浮かんだ。

(でも、この桃りんごは生きているのだろうか?)

生き物となら感覚の枝をつなげられるが、生きていないものの場合はどうだろう。

枝からもぎ取られた木の実は、果たして生きているといえるのか。

(学校では、習ったっけ?)

教わったような、教わっていないような……。

いや、正しいかどうかもわからない曖昧な知識なんて、あてにするのはやめよう。

ユマは瞑想して意識を集中させ、桃りんごの中に自分の感覚の枝を
入り込ませていった。

この中に生命があるのかどうか、自分自身の感覚でとらえてみるの
だ……。

・
・
・

(——ん……)

瞑想して集中を深めていくと、次第に桃りんごが立体になり、ユマ
の意識の中で大きく大きくふくらんできた。

自分の体よりも大きくなったその果物の中に、入り込んでいく。

すると、先程桃りんごを食べたときに感じた果肉の感覚が、歯と同
じように果肉へ食い込んでいく全身を包み込んだ。

ねつとりとまとわりつくような、それでいてしやしきしやしきとした触
感……。

(……は、あ——)

上品な甘さと香りが体中に広がっていく快さに、ユマは思わず小さ
く息をもらした。

集中を途切れさせないように気をつけながら、果肉をかきわけて、
さらに奥へと意識を進めていく。

もつと奥の方から、生命の脈動を感じたのだ。

ついに果肉の中心にたどり着くと、そこには種があった。

(この種は生きているわ。この中に、いのちがあるのね)
けれど、種にたどり着いただけでは、まだすべてわかってはいない
と感じた。

この奥に、きっと生命の本質がある。

それにこの手で触れてみたい、自分の感覚をつなげてみたい。

不思議な高揚感を覚えて、ユマはもどかしげに、もつと奥へと意識を進めていった。

種の中は、周囲の果肉よりもかたくなっていた。

そのかたい構造の中心に、感覚の世界の中でほのかに輝いているように感じられる生命の精髓が守られている。

ユマは、それに手を伸ばした。

感覚の手に触れたそれは小さく弱々しかったが、確かに生きて脈打っている。

それを感じたとき、自然に強い歓びが胸の中に湧き上がってきた。
(やつと、会えた)

それは、瞑想で新しい段階に進めたことに対する達成感といったようなものではなく、何か、もつと根源的なもの……。

生まれたばかりの幼い生き物に触れたときのような幸福感だった。

ユマは愛おしさのあまり、そのいのちを自分の感覚の腕でぐつと抱きしめる。

(もつと、あなたのことを教えて)

そう望むと、何かかすかなささやきが、腕のなかの生命から聞こえてきた。

『……………て』

(なに？　なんと言っているの？)

『……………しを……………て』

(あなたは、わたしになにを伝えたいの？)

ユマはそれを聞き取ろうと、一生懸命に感覚の耳を研ぎ澄ませる。

ややあつて、ようやく聞き取ることができた。

『わたしをたべて』

(……………えっ?)

『わたしは、たべられるためにあるの』

(……………まさか、そんなはずは……………)

ユマには、聞こえてきたその言葉が信じられなかった。

そうして戸惑っていたために集中が切れて、感覚の世界から引き離されてしまった。

「……………」
気がつくとき、ユマは元の通り、ルイズの部屋の床に行儀よく座っていた。

あたりはまだ暗く、目の前では、手の平からちよつとはみ出るくらいの大きさの桃りんごが変わりのない様子で皿に乗っている。

ユマは困ったように眉をひそめてそれを見つめながら、一体どこで間違えたのだろうかと考え込んだ。

自分を食べて欲しいなんて、言うはずがない。

シマウマだって、食べられたくないからこそ、追いかけるライオンから必死で逃げようとするのではないか。

相手が食べられることを嫌がっていないだなんていうのは、食べる側に都合のいい勝手な解釈に決まっている、とユマは思った。

(きつと、途中から自分の気持ちが混ざってしまったんだわ)

桃りんごのおいしさを体中で感じ取ったものだから、食べたいという自分自身の心の声が聞こえてきて、それを植物の声だと思い違いましたのだから。

注意を与えてくれる監督がないものだから、知らない間に雑念が混ざってしまったのだ。

この腕の中に、あんなに素敵ないのちを抱いていたときに、そんないじきたない気持ちかわいてくるなんて……………!

もう二度とそんなみつともない失敗はすまいと自分に言い聞かせて、深呼吸をして座りなおすと、ユマはもう一度目の前の桃りんごに意識を集中させた……………。

先程と同じように、ユマの意識で桃りんごの存在が大きくふくらんでいった。

果肉の中に分け入っていくときに、また心地のいい触感と甘い味、香りが全身を包み込もうとする。

ユマは今度は、あえてその感覚を遮断しようと努めてみた。

（私が知りたいのはあなたの味じゃない、もっと深いところにある、あなたのいのち）

しかし、それでは桃りんごの中に感覚を入らせることができなかった。

しばらくがんばってみたが、自然に伝わってくる感覚をわざと遮断したままの状態では、一步も果実の中に踏み入っていくことができない。

（つまり、このやり方は間違っているの？）

なるほど、触感も、味も、香りも、結局は桃りんごの存在の一部なのだ。

それを受け入れることを拒絶しながら感覚をつなげようだなんて、できるはずがないということか。

（……わかった。あなたから伝わってくるものは、なんでも受け入れるわ）

ユマは感覚を開いて、先程と同じように伝わってくる快い刺激を全身で受け取った。

すると、あっさりと桃りんごの奥に進むことができるようになった。

（でも、今度は自分の食欲なんかに流されないようにしなければ）

ユマははやる気持ちを抑えて自分にそう言い聞かせながら、先へ進んだ。

かたい種の中に入り込み、再びかすかに脈打ついのちの前に立つて、それをしっかりと抱きしめる。

（今度こそ、ちゃんと学んでみせるわ）

だからもう一度、私にあなたのことを教えて。

そう自分の願いを伝えると、またかすかな声が聞こえてきた。

ユマは、今度は聞き間違えるまいと、自分の気持ちを努めて静めて、その声だけに集中する。

しかし、結果はさつきと同じだった。

『わたしをたべて。わたしは、たべられるためにあるの』

(……………)

自分は、十分に気をつけたはずだ。

では、この声は自分の願望から出たものではなく、本当に桃りんごの声なのだろうか。

(……………どうして?)

なぜ、あなたは食べられたいというの?

そう尋ねても、腕の中の桃りんごは同じ望みを繰り返すだけだった。

人間の考え出したそんな問いかけなど、まだ根付いてもいない若い植物には理解できないのかもしれない。

あるいは、答えることに意味を見出せないのかも。

(……………わかった、答えてとはいわない)

自分で、答えを見つける。

あなたのことを、きつと理解してみせる。

ユマはそう心に決めると、腕の中で弱々しく脈打ついのちを感じながら、一生懸命に考え始めた。

第十三話 続・桃りんごと夜更かし

(どうして、この桃りんごは自分を食べてほしいなどというのだろうか?)

ユマはそのわけを、自分のもっている限りの知識を動員して一心に考えてみた。

何かを望むのには、必ず理由があるはずだ。

たとえば、新作のゲームを買ってほしいがる子供は、自分の知識や経験からそれがきつと面白いと思っっているから手に入れたがるのだ。

でも、生まれたばかりの赤ちゃんには、まだそういった判断を下すための知識や経験がない。

まだ芽を出して周りの世界を見てもいない種が、なぜ食べられたいというのだろうか。

(とにかく、知識や経験からそう判断したのでないのは確かだ)

ならば、それは生まれつきもっている桃りんごの性質なのだろうか。

たとえば、まだ何も教わっていない赤ちゃんでも、お腹がすいたら泣いてミルクを求め、疲れたら自然に眠る、というような……。

(うーん……)

もつと知識がある大人だったら、もしかしたらそんなことは知っついて当然なのかもしれない。

けれど、残念ながら自分はまだ子供で、もっている知識は少ない。

地球の図書館かインターネットでも使えたらと思っただが、あいにくとここではそんなものは利用できない。

まだそんなに複雑な言葉まで読めるかは自信がないが、夜が明けてから学院の図書館へ行つて、植物に関する本を調べたら何かわかるだろうか。

あるいは、ルイズや、物知りなタバサに尋ねたら？

(いいえ、それはだめ)

いや、聞いたり調べたりすること自体はいいだろう。

でもそれは、自分で理解するためにできる努力をすべてしてから

だ。

瞑想や魔法は、あくまでも自らの感覚によるものである。

知識はそれをより研ぎ澄ます役には立つかもしれないが、知識が感覚そのものなわけではない。

人から教わった知識をただ鵜呑みにしただけでは、自分の中で本当に感じ取った、理解したとは決して言えないだろう。

知識が魔法そのものなら、ルイズだってとつとつに呪文を唱えられるようになっていくはずなのだ。

毎日、あんなに一生懸命に勉強しているのだから。

ハルケギニアのメイジは、得意な系統の呪文を唱えると体の中に何が生まれだして、それが体内を循環するような感じがするのだという。

ルイズは、自分はそんな感覚をまだ一度も感じたことがない、呪文を唱えても詠唱は正確なはずなのになんだかぎこちないのが自分でもわかる、とこぼしたことがあった。

つまり、知識はあつてもまだ感覚として魔法をつかめていないということなのだろう。

自分も大して違わない、とユマは思う。

呪文はいくつか唱えられるが、決してルフィーアやヴィシユナスのようではないのだ。

ルフィーアは得意な火の魔法を何十回でも疲れることなく唱えていたが、自分はほんの数回も呪文を唱えたら息切れしてしまう。

ただ表面的な技術を生半可に学んで、呪文をいくつかかじっただけで、本物の魔術師とは比較にならない。

今日はせっかく、これまでになく深くまで感覚の枝を伸ばすことができたのだから、ここであきらめたくない。

今の自分に探れることはもう他にないだろうかと、ユマはもう一度よく考えてみた。

(生まれたときから食べられたがる理由は、もしかしたら、生まれる前を調べたらわかるかもしれない)

考えた末に、ユマはそう思いついた。

そんなことが、自分に本当にできるのかどうかはわからなかった。でも、今回ほど深い段階まで瞑想できたのもこれが初めてのことであったのだから、今度もうまくやれるかもしれない。

(このさい、何でも試してみよう)

ユマはそう決心すると、意識を一生懸命に集中して、感覚の世界で桃りんごの成長を逆にたどろうと試みた。

最初は、どのようにしたらいいのか、何を思い浮かべてみたらいいのか、皆目わからなかった。

そもそも、自分が桃りんごについて知っていることと叫びたら、目の前にあるようなものがれた後の果実を見たことがあるだけなのだ。

どんな樹の枝に実るのかも、どういった場所に生えるのかも何も知らないのだから、成長の過程がうまくイメージできない。

しばらく悩んだが、ふと、季節を逆にたどるように思い浮かべてみたらどうだろうと思いついた。

季節の変化なら、思い描くことができる。

桃りんごを取り巻く周囲の景色を過去に戻したら、その中にある桃りんごのイメージもそれに合わせて変化するのではないだろうか。

そこでまずは、桃りんごの周りに、現在の暖かい春の情景を思い描いた。

頭の中でそれを逆回しに、雪の降る寒い冬の終わりごろまで巻き戻すイメージをしてみる。

すると、その変化に合わせて桃りんご自身の姿も変わっていった。

実が小さくなり、色が青くなる。

それはやがて実ではなくなり、花に変わった。

その花が、何かの枝に咲いていることに、ユマは気がついた。

(あなたは、この枝に実っていたのね)

ユマはそこで、感覚の目を少し枝から遠ざけて、周囲の景色を見てもみようとした。

視点が後ろに下がっていくにつれて、見えるのが一本の枝だけではなくなり、木の全体像がつかめるようになった。

もつと下がると、その木はたくさんの木の中のひとつであり、周り

は緑豊かな森林なのがわかった。

(この森は、どこにあるのだろうか?)

魔法学院の近くにあるような森とは、なんとなく雰囲気違って
いる。

すると、トリステインとは別の国なのだろうか。

(もつと上の方から見てみよう)

感覚の目に地面は関係ないのだから、ユマは視点をぐんぐん上昇さ
せてみた。

最初は視界に一面の森しか写らなかったが、やがて森が途切れ、そ
の向こうの大地が見えはじめる。

やがて、その大地もまた唐突に途切れた。

その向こうは、雲の海だった。

森や、山や、湖や、街や、お城が乗った大きな大地が、空のただな
かに浮かんでいる……。

(……!)

もちろん強い驚きを感じたが、感覚の世界に深く入り込んでいたか
らなのか、先程のように集中が途切れて元の世界へ放り出されること
はなかった。

ユマは少し考えて、ハルケギニアにはそんな国があると以前に聞いて
いたのを思い出した。

(これが、アルビオン……)

ウルフレンドにも、魔法的な動力源によって空に浮かぶ浮遊城とい
うものが存在していると聞いたが、実際に見たことはない。

その美しくも非現実的な光景を、ユマは食い入るように見つめた。
(あなたの、それにロングビルさんの故郷は、この空の上の国だったの
ね)

けれど、その美しい光景をいつまで見ている、自分の求めている
答えがわかるわけではない。

ユマはもう一度桃りんごのところへ意識を戻すと、もつと昔を見よ
うとした。

季節を冬から秋に、秋から夏に、そして昨年の春に。

その繰り返し返しを、何度も何度も通り過ぎた。

花はつぼみとなり、つぼみは枝の中に戻り、その先は元となった木そのものの成長をたどり始めた。

木が徐々に若く、小さくなっていく。

ついには新芽となり、種となり、果実の中に……。

(……あつ……)

ユマはそこで、ある出来事に注意を惹かれた。

種が果肉から出て地面に根を張る、その過程の途中で、果実は獣に食べられていたのだ。

その果実は元々、そこからかなり離れたところにある木に実っていた。

ある日、大きな獣がするすると親木に登り、その甘い果実をもいで齧った。

種は果肉と共に獣の体内に入ったが、かたい殻によって消化から守られて、その中にある生命の精髓は無事だった。

獣はやがて別の場所に移動してその種を排出し、種は根付いて、そこで新たな芽を吹いたのだ。

その過程には、自力で移動できない植物が、新しい場所で新たな生命を育めることに対する欲びがあった。

それを感じ取って、ユマはようやく得心がいった。

(あなたは、このために食べられたかったのね)

桃りんごは、なにも種の中の生命の本質を食べられたかったのではない。

どうやら自分は、生命の本質を見つけた欲びのあまり、それだけが植物の本体だという錯覚に陥って、視野が狭くなってしまっていたようだ。

果肉もまた桃りんごの一部であって、食べられたかったのはその部分だったのだ。

それは食べられるために、動物に食べさせることで中の種を植えてもらうために、育てられたものだった。

どんな生き物であれ食べられたいなんていうはずがない、相手が食

べられたがっているんだなんて食べる側の勝手な解釈だと、先程はそう思ったけれど……。

それもまた、動物が自分の立場から見た勝手な解釈だったのだろう。

(もつと、学んでみたい)

ユマはその気持ちに従って、生命のつながりをさらに過去へとたどっていった。

いくつもの季節が目まぐるしく通り過ぎ、何本もの木が種に戻っては、親木の中へと還っていった。

さすがに周囲で起きている出来事までは把握できないが、道を外れずにつながりを確かにたどり続けられているという自信があった。

このままたどり続けければ、桃りんごの「いのち」が最初はどこからやってきたのか、わかるかもしれない。

そう思ったとき、突然、それまでたどっていた道が二つに枝分かれしたのに気が付いた。

(……?)

これでは、どちらをたどって行けばいいのかわからない。

ユマは困惑して足を止めると、そこで何が起こったのか、少し木から離れて感覚の目で探ってみた。

(……森が、なくなってる)

間違えずに道をたどることにばかり集中していて気が付かなかったが、いつの間にか、周囲にあった森が消えていた。

木々はまばらで、人が住んでいるらしい小さな小屋が近くにいくつか見えている。

森ができる前まで戻ったのか、それともこの木が違う場所に生えていて、どこかの時点で子孫にあたる種が森に運ばれたのだろうか。

(でも、どうして、過去へ戻る道が二つに分かれたのだろうか?)

その答えは、小屋のひとつから出てきた農夫がもたらしてくれた。

その農夫は、近くにある別の桃りんごの木から枝を切って、台木の上に接ぎ木したのだ。

(別々の木の体を、つなぎ合わせたの?)

そういつた植物の育て方について詳しく知らなかったユマは、不思議な思いがした。

その農夫がした作業を感覚の目でしっかりと観察すると、今度は接ぎ木を終えた植物の生命のほうに意識を戻し、そのつながりを探ってみた。

桃りんごの枝と、台となった木とは、最初は別々の存在だった。しかし、二つの生命は徐々に混ざり合い、ついには一つになって、その境界がわからなくなった。

その過程をつぶさに感じ取って、ユマは強い感動を覚えていた。先程自分が感じた枝分かれした道は、桃りんごの枝と台木のものであったのだ。

ドラゴンライダーは愛するドラゴンと心がひとつになるといいうが、植物は生命そのものが本当にひとつに融け合うのだ。

そして自分も、今、感覚だけとはいえ植物とつながって、その喜びを共有しているのだ。

(すごい……)

ユマは今、深い瞑想を通じて魂が肉体から脱け出して宙をさまようという、文字通りのエクスタシーの境地にいた。

夢中になって、もつともつと過去へ、もつともつと深くへと、生命のつながりをたどっていく。

枝分かれした道のうち、桃りんごの枝からつながる道のほうを追っていくと、過去にはさらにいくつもの生命との結びつきや枝分かれがあつたことが感じ取れた。

接ぎ木、挿し木、他の木からやってきた花粉との受粉……。

しかし、いくつの枝分かれや合体があろうとも、「いのち」は太古の昔からずっとつながっていた。

過去へ戻れば戻るほど、さすがに感覚のとらえる光景もおぼろげになつていったが、ユマはただ一心に道をたどり続けた。

そしてついに、白くぼんやりとかすむ光景の中で、ユマは「桃りんご」という名の生命の起源となつた出来事をみつけた。

大昔にメイジらしき人物が、二種類の異なる植物、地球の桃やりん

ごとに似た品種の果物を組み合わせ、新たな植物の品種を生み出す研究をしていたのである。

それより以前になると、たどっている道はもはや「桃りんご」という名の生きものの道ではなくなっていた。

そして、その先を追うことは、今の自分にはできそうもないことのように思われた。

あまりに細く消えかかっている道筋をこれ以上たどろうとしたら、そのうちに道を見失って、目印のない感覚の世界の中で迷子になってしまうそうだ。

それに、光景が白くぼんやりとかすみ始めたのは、もしかしたら昔に戻りすぎたというだけではなく、夜が明け始めて周りが少しずつ明るくなってきたせいでもあるかもしれない。

ユマは以前にも、時間を忘れて瞑想していて似たような経験をしたことがあった。

瞑想に深く没頭していると時間の経過はよくわからなくなるのだが、精神と肉体とのつながりがなくなったわけではないから、周囲の環境の変化から影響を受けるのだ。

ルイズが起きてくる前には瞑想を切り上げて、朝の雑用もこなしておかなくてはならない。

(残念だけど、今回はこれで終わりにしよう)

名残惜しい思いをしながらも、これまでにとどってきた道に戻ろうと振り返る。

そのとき、ユマは感覚の目がとらえた光景に息をのんだ。

(あ……)

自分がたどってきた一本の道に、枝分かれしたいくつもの道、そこからさらに枝分かれした道がつながり、まるで大樹の枝のように広がっている。

生命はどこまでもつながり、広がって、広がって……、世界をも、宇宙をも覆い尽くさんばかりに、大きい。

感覚の腕の中に抱いた桃りんごの精髓を通して、自分もこの生命の連鎖の中に組み込まれ、いのちの大樹に抱かれているのがわかった。

気付くと気付かぬとにかかわらず、遙かな昔から、“いのち”はつながっている……。

それは、もちろん本で読んだり先生に教わったりして知識としては知っていたことだが、今、本当に理解できたように思えた。

（私が瞑想をやめても、このつながりが切れるわけではないのだ。だからきつと、いつでもまたここに戻ってこられる）

そう思うと、名残惜しいという気持ちも薄れ、代わりに穏やかな満足感が心を満たした。

ユマは慌てずにゆっくりと、しかし立ち止まることもなく、感覚の道をたどって元来た場所へと引き返し始めた。

来るときは半ば忘我の境地であったが、今は落ち着いたためか、あるいは瞑想の理解がより深まったためなのか、戻る途中には前よりもよく周囲の様子が見えた。

桃りんごの木が何本も成長し、また新たな種を蒔いては、少しずつ広い範囲へと殖えていく。

その過程で、受粉を助けてくれる虫や、果実を食べる獣、接ぎ木を行った農夫やそれに使われた台木など、他のさまざまな生命もかわっていた。

生命のつながりはどんどん広がっていき、自分は無数にあるその中のひとつの道をたどっているに過ぎなかった。

道を歩んでいくにつれて、以前に枝分かれした遠くの道は、だんだんとぼやけて見えなくなっていく。

しかし、自分がいかにちっぽけな存在だと感じて、それで委縮することはなかったし、不安でもなかった。

たとえ見えなくとも、世界中に大勢の仲間たちがいることを既に知っていたからだ。

やがて、たどってきた道も終わり近くになると、最初の方で見たアルビオンの緑豊かな森の光景が戻ってきた。

緑の髪をもつ大人びた雰囲気的女性と、金髪のエルフラしき少女とが、親しげに笑い合いながらこちらに歩いてくる姿が見える。

少女の方が木に実っている桃りんごの実をいくつかもいでかごに

入れ、緑の髪的女性に差し出す。

女性はそれらの果実をもってアルビオンを離れ、地上に降りてトリステインへ行き……、その中のひとつが、厨房の使用人からユマに手渡された。

ユマの意識は、最後にその手渡された桃りんごの実とともに、元のルイズの部屋へ戻ってきた。

「——ん……」

体に意識を戻したユマは二、三度まばたきをすると、まずは周囲の様子を確かめてみた。

思った通り、窓の外はもう明るくなり始めている。

結局一睡もせず、夜が明けたことになるが、疲れてはいなかった。

感覚の世界で力強い生命の流れに触れたためか、むしろ心身に活力がみなぎっているように感じる。

ユマはベッドでまだ寝ているルイズの姿を見てしばし考え込んでいたが、やがて小さく首を振った。

それから、立ち上がってぐーつと伸びをすると、桃りんごの皿を机の上に戻し服を着替えて、洗濯物を集め始める。

(ちよつと早いけど、洗濯に行こう)

「ただいま……」

洗濯を終えて戻ってきたユマは、まだルイズが寝ているのを確認すると、小声で挨拶をしてそつと扉を閉めた。

朝食まではまだ間があるので、ベッドに入って少し休憩しようかとも思ったが、自然と机の上の桃りんごに目がいった。

桃りんごの様子は、瞑想を始める前と変わりが無い。

けれど、瞑想を始めてすぐの時には弱々しく震えているように思えたその生命が、今は溢れんばかりの活力に満ちて堂々としているように感じられた。

「……」

ユマは黙って椅子に腰かけると、目の前の桃りんごに意識を集中して、もう一度その声を聞いてみようとした。

今度は瞑想を深めて果実の中へ入っていくまでもなく、意識を桃りんごに集中させるとすぐに、さつきよりももつとはつきりした声が聞こえてきた。

おそらくは技術的な習熟と、理解の深まりのためなのだろう。

『わたしをたべて。わたしは、たべられるためにあるの』

『やつと、そのうえからおりてきたの。ほんとうのじめんにねづいて、わたしはここでそだつのよ』

(ええ、食べるわ)

意識でそう返事をする、ユマは桃りんごを手に取り、ナイフで皮を剥いた。

上品な甘い香りが、ふわっと広がる。

(あなたの種は、あとで近くの森に蒔いてあげる。そのあとは、あなたががんばって命をつないでいくのよ)

そう呼びかけつつ、果実を切り分けていく。

ユマはそうしながら、この後のことをゆっくりと考えてみた。

もちろんルイズをはじめとする友人たちにも、自分が先程感じたこの感動を伝えたかった。

実際、瞑想を終えてすぐの時点では、ルイズを叩き起こして今すぐ話そうかと真剣に考えたほど、内心強く興奮していたのである。

けれど、洗濯をしているうちに落ち着いて、ここは慎重にやった方がいいかもしれないと思い直したのだ。

このメイジたちはどうもウルフレンドの魔術師のような瞑想などはしていないようだし、ちゃんと理解してもらえらるには限らない、と気が付いたのである。

あまり興奮して勢い込んでまくしたてたりしたら、妙な妄想にとりつかれたと思われるしまうのではないか。

少なくとも、地球で似たようなことをしたら、まず間違いないと思うだろう。

(それに、私の感じたことがみんな正しいとは限らないもの)

もちろん、先程自分が大きな感動と共に感じたこと、理解したことを根本的に疑っているというわけではない。

ただ、概ねは正しいにしても、細部では誤りもあるかもしれない、と考えていた。

最初に桃りんごの言葉を疑った時にもその可能性を考えたように、自分自身の願望や想像が事実と混ざってしまったっていいないとも限らないのだ。

監督をしてくれる先輩の魔術学生はここにはいないのだから、自分の正しさを妄信してはいけない。

(とりあえず、ルイズには話して……。それから、ロングビルさんにも確認してみよう)

さっきの瞑想で最後に見えた緑の髪の女性は、ミス・ロングビルに間違いないだろう。

あの時見た光景が正しかったのかどうか、本当に桃りんごが自分の見たアルビオンの森で取れたのかどうかなどは、彼女に確認してみればわかるはずだ。

証拠としてそれを確かめられれば、ルイズらにも自分が妄想で話しているのではないとわかってもらえるだろうし。

頭の中でそんな段取りを立てながら桃りんごを切り分け終わったユマは、さっそくルイズを起こしにかかった。

「……………んう……………、なによ、もう朝？」

ベッドの上で上体を起こして、ふあああ、とあくびをするルイズに、ユマはよい香りのする桃りんごがのった皿を差し出した。

「おはよう、ルイズ。桃りんごを切ったから、ご飯の前にこれを食べましょう？」

第十四話 朝の女子会

ユマは起きて着替えを済ませたルイズらと一緒に桃りんごを食べながら、先程の自分が経験したことをひとつひとつ話していった。せつかくだからキュルケとタバサにも思っ、ルイズが着替えている間に彼女らも呼んできている。

眠れなくて、以前にやっていた瞑想の修行を試してみたこと。

感覚の世界に入り込んでいって、桃りんごの成長を逆にたどり、ついにどこからやってきたのか突き止められたこと……。

あまり興奮しすぎないように気を付けながら、その経験から自分が強い感動を覚えたことも伝えた。

「ええと、この桃りんごがどこから来たかを瞑想で見つけたって、……ええと……？」

「ふうん……、ユマちゃんが瞑想、ねえ」
「……」

ルイズらはそれらの話を聞いてはくれたものの、やや困惑したような顔で首を傾げている。

それは嘘をついているのではないかと疑っているというわけではなく、今ひとつ理解できない、実感がわかない、といった感じだった。

もつともタバサだけは、話を聞いた後も無表情で黙っていたので、どう思っているのか今ひとつ推し量れなかったが。

(やっぱり、こっちのメイジは瞑想はしないのね)

ユマのその理解は、概ね正しい。

ハルケギニアのメイジも、もちろん呪文を詠唱するときには集中力は必要になる。

だから、雑念を払って詠唱に集中できるようにするための訓練は多かれ少なかれ大抵のメイジが積んでおり、その一環として瞑想を行うメイジもいるにはいる。

しかしウルフレンドの魔術師とは違って、それを通して入神状態になったり、感覚の枝で周囲の世界をとらえたりといったような深い段階までは、まず滅多にやらないのである。

そうする代わりに、彼らはみな自分用の杖をもっている。

それは持ち主のメイジ自身が何日間もかけて契約をかわした、自分だけのためのものである。

自分の手足も同然のその杖が、彼らが呪文を詠唱する際に周囲の世界にはたらきかける感覚の杖を伸ばす手助けをしてくれるのだ。

物心つく頃になると、メイジの子はさまざまな杖を握らされ、その中から自分が呪文をうまく唱えられる杖を探し出して契約して、以降はずっとそれを使い続ける。

ずっと杖を握ったまま、祈りの言葉と共に呪文を唱え続けるというのが、杖と契約する方法である。

つまりは自分と相性のいい、すなわち感覚をつなげやすい杖を選び出し、その杖だけに絞って集中的に訓練することで、強くひとつに結ばれようとするのだ。

そうするうちに、その杖は自分の身体の一部のごとく感じられるようになり、そうなって初めて呪文が成功するようになる。

そのお陰で、ハルケギニアのメイジは詠唱の文句を覚えて集中力がある程度磨くだけで、比較的容易に呪文を行使することが可能になるのだった。

より扱いやすい杖に後年になって乗り換える者、破損して新たに別の杖と契約し直す者などもたまにいるが、基本的には最初に選んだ杖は生涯の伴侶となる。

その代わり、彼らは自分専用のその杖がないと、呪文を一切唱えられなくなってしまうわけだが。

また、生まれつきの素養がない平民ではそもそも杖と契約することができないので、ハルケギニア式のやり方ではどんなにがんばっても魔法を使えるようにはならない。

ウルフレンドの魔術師にとっても、感覚をつなげやすい使い慣れた杖や水晶玉などの魔法具は、あれば呪文を唱える際のよい助けになってくれる。

しかし、彼らは瞑想などの修行を通して、道具の助けなしでも周囲の世界に感覚の杖をつなげてはたらきかけられるようになっていく。

から、必須というわけではない。

ただしそうできるようになるまでには、素質にもよるがかなり長期間の訓練が必要になる。

十分な素質のない者は何年もつまづいたあげく、ついには指導者から「お前はもう魔術師になるのは諦めた方がよい」と宣告されてしまうこともあるらしい。

それに、ウルフレンドの魔術師が呪文を満足に使いこなせるようになるには、「スペルネーム」という新しい本当の名前を定めておかななくてはならないという制約もある。

魔術師といえども訓練を積む前はただの人間であり、生まれつき魔法の素養があるわけではないのだ。

それが周囲の世界を強大な呪文の対象にできるようにするためには、その代償として、自分も呪文の対象となるリスクを負わなくてはならない。

そのために、スペルネームという自身の「真の名」を知り、それを誰かに教えるのである。

自分のスペルネームで呼ばれてしまうと、魔術師はその名前を呼んだ者の命令になんでも従わなくてはならなくなる。

だから誰にも知られないようにしておきたいのだが、困ったことに自分の他に誰かその名前を知っている者がいなければ、スペルネームを定めたとはみなされないのだ。

名前とは、誰かに知られて初めて意味を持つものだから。

一方で、ハルケギニアのメイジには生まれつき血統による魔法の素養が備わっている。

また、杖がないと呪文を唱えられないという制約が、スペルネームを定めねばならないという制約の代わりになってくれている。

それゆえに、彼らにはスペルネームのような危険なものを知り、それを誰かに教える必要はなかった。

ユマは、少なくとも今のところはまだ、そういった相違点のすべてを把握しているわけではない。

とはいえ、こちらのメイジと向こうの魔術師とでは、いろいろとや

り方が違っているらしいことくらいは認識している。

なので、あるいは自分の体験をすぐには理解してもらえないかもしれないとも想定していたのだが、どうやらその考えは正しかったようだ。

「そう、瞑想。変かしら？」

「いや、変ってことはないけど……」

ルイズは困ったように言葉を濁した。

「別に変じゃないけど、意外だと思ったのよ。ユマちゃんが瞑想をやるだなんて、初めて聞いたから」

かわいいのに渋い趣味じゃない、といって微笑むキュルケに対して、ユマは首を横に振った。

「趣味ではないの。訓練よ」

「訓練？ ……ええと、カード使いの訓練かしら？」

「いいえ、魔法を使えるようになるための訓練。ウルフレンドで教わったの」

そう言うと、ルイズがぴたつと動きを止めて、まじまじとユマの顔を見つめた。

キュルケとタバサも、興味を惹かれた様子だ。

「……魔法って。だって、あなたはメイジじゃなくてカード使いだって、前に……」

「ええ。でも、呪文は使えたら戦いの時に便利だから、がんばって覚えただの。ほんの少しだけけど」

「魔法が使えるなら、メイジじゃないの！」

「たぶん、こっちとは決め方が違うんだと思うわ。ウルフレンドでは、呪文がひとつでも使えたら、それで魔術師だって名乗れるわけじゃなかったから」

たとえば、エルフのナーダやサーラなども呪文をある程度知っていて戦いで使っていたが、彼女らは魔術師ではなかった。

もつとも、では最低限どんなことができたら魔術師なのか、そもそも厳密な決まりなどがあるのかといったようなことは、ユマも実はよく知らないのだが……。

まあ、両手で数えられる程度の呪文しか使えず、出力の調整などもろくにできず、一日に数回も唱えたらもう息切れしてしまう自分が魔術師とは認められないのは確かだろう。

一般的に魔法学校では、修行過程を終えたと指導者に認められた上でスペルネームを定めた時に、初めて一人前の魔術師だと認められるらしい。

そうなるまでに、普通は数年から十数年の修行を要するのだそう
だ。

(そういえば、自分はその世界にどのくらいの間、留まっていたら
う)

ユマはふと、そんなことを考えた。

地球に戻ったら、出掛けたときそのまま時間は過ぎていなかったし、
体も特に成長したようには見えなかったけれど。

あまりちゃんと数えていなかったが、何か月か、もしかしたら一年
かそれ以上だろうか。

してみると、自分も実戦を交えながらそれだけの期間勉強や修行を
して、先程ようやく深い段階の瞑想を成功させることができたとい
うわけだ。

さておき、ルイズは何やら疑わしげな、あるいは不服そうな目で、ユ
マを見つめていた。

「……何で、いままで隠してたのよ」

主人の私が、いまだに魔法を使えないっていうのに。

あんたはカード使いだとかで、わけのわからないすごい力をもつて
て。

その上伝説の使い魔で。

おまけに、魔法まで使えるだなんて……。

そう考えると、ひどく不公平だ、腹立たしい、という思いがわきあ
がってくる。

それで、ちよつと声の調子もとげとげしくなっていた。

「ううん、別に隠していたわけじゃないの。ただ、私は魔術師じゃない
し。ほんの少しだけしか使えないから、あんまり役に立たないと思う

し。それで、話す機会がなくて……」

「自分の判断で決めないで。主人として、使い魔のことをちゃんと把握しておかなきゃいけないでしょ。もっと早く言いなさいよ！」

「……ごめんなさい」

ユマが素直に叱責を聞き入れてしょぼんと肩を落としたのを見ているうちに、膨れ上がりつつあったルイズの苛立ちが収まり、罪悪感がそれにとって代わった。

元より妬み半分に噛み付いただけであって、いささかみつともない態度だったと気が付いたのである。

「……う。あ、いえ、わかればいいのよ！」

きまりが悪いのを誤魔化すように、視線を泳がせながらコホンと咳払いをする。

「そうそう、あんな不思議な力を持つてるんだもの。魔法を使えるくらい何の不思議もないし、別にわざわざ言うほどのことでもないわ。ルイズはどうせ嫉妬してるだけなんだから」

「うぐ」

そんな二人のやり取りをよそに、タバサは小さく首をかしげた。

「……なら、試しに何かやってみせてほしい」

そう頼まれると、ユマは困ったように首を傾げた。

「わかったわ。でも、私は戦いの役に立つ呪文をいくつか覚えただけで、部屋の中でちよつとやってみせられるようなものはほとんど知らないの」

「別に、そんな大袈裟なものじゃなくていい」

「そうね。コモン・マジックだっていいわ。『念力』とか、『ライト』とか」

「物を動かしたり、明かりをつけたりする魔法のこと？　ごめんなさい、使えないわ」

「え？」

ユマはそれから、ルイズらと情報交換がてら、ウルフレンドの魔法がこちらの世界の魔法とだいぶ違うらしいことをかいつまんで説明していった。

こちらでは基本とみなされている魔法は、向こうの世界では必ずしもそうではないらしい。

たとえば、この世界ではほとんどすべてのメイジが空を飛べるようだが、ウルフレンドでは呪文で自由自在に飛び回る魔術師というものをユマは見た覚えがなかった。

そういった呪文自体はあるらしいのだが、魔術師なら誰もが使えるというようなものでも、頻繁に使われるようなものでもないのだ。

その代わりに向こうの呪文は杖がなくても使えるという話になったとき、ルイズが眉をひそめた。

「杖がなくても使えるって、先住魔法……とは、違うみたいね。でも、人に見られたらそう思われる可能性はあるかも……」

ルイズは、この世界では杖がなくても使える精霊の力を借りる魔法を先住魔法といい、その使い手は主に亜人の類で、人から恐れられているのだと説明した。

「エルフの血が混じってるんじゃないかなんて疑われたら、大変よ。連中は始祖の時代からの大敵で、その血を引いてるだけでも異端審問にかけて殺されかねないんだから」

「そうなの？」

「ええ。そうね、カードの力もだけど、よく知らない人の前ではあんまり見せないようにした方がいいかもしれないわ」

ユマも、ここ数日の勉強でこちらの世界ではエルフと人間とが敵対しているらしいことくらいは既に学んで知っていた。

とはいえ、元々この世界の住人でないユマには、それがどの程度のものなのかという実感はない。

場合によっては人間に友好的なエルフもいて、そういう相手と個人的に親しくすることくらいは問題ないのだろう、というくらいに考えていたのである。

「わかった。教えてくれてありがとう、ルイズ、キュルケ」

そうになると、さつきミス・ロングビルがエルフの女性と仲良くしているとところが見えたのは、もしかしたら実際の光景ではなかったのかもしれない。

森といえばエルフだろうという、自分の心の中のイメージから見えてしまった虚像という可能性もある。

しかし、仮に事実だったとしても、あまり不用意に尋ねたり口外したりしない方がきつとよいことなのだろう。

彼女と話をする前に、そのことを教えてもらえたのは幸いだった。「どういたしました。でも、それはそれとして、ユマちゃんが魔法を使うところはぜひ見てみたいわね」

「広い場所が必要なら、シルフィードで人目のないところに行く」

ユマはちよつと考えたが、首を横に振った。

「わかったわ。でも、朝ごはんを食べてからにしましょう」

「あ……そうね、食事に行かなきゃ」

「もうそんな時間？ いつの間にか、すっかり話し込んだじやったみたいね」

「……わかった。食事が優先」

すっかり話し込んでしまったので、今外に出かけたら朝食の時間間に合わなくなってしまうだろう。

それにユマは、シエスタたちの手伝いもしなくてはならない。

やるとしたら昼休みの時間か、今日の授業がすっかり終わってしまつてからだろうか。

部屋から出て食堂へ向かう間に、ユマはルイズに向かってひとつ提案をした。

「それで。よかつたら、ルイズも今日から私と一緒に魔法の訓練を試してみない？」

「訓練、つて……瞑想とかをやるの？ なんて、私が……」

「だって、これまでしてきた訓練で、ルイズは上手いかなかつたんでしよう？」

なら、違う方法を試してみるのもいいのではないか、と思ったのだ。ユマがこれまでに見てきた限りでは、呪文の訓練をしている時のルイズの集中力は相当なものだった。

彼女ならきつと、瞑想も上手にできるのではないだろうか。

「ルイズが使いたいのが系統魔法だつてことは、わかつてるわ。でも、

勉強の手助けにはなるかもと思って……」

どうかしら、と問いながら、じつと自分の顔を見つめてくる使い魔の思いやりに満ちた真っ直ぐな目。

それを見ていると、ルイズは先程自分が彼女を妬んだのがひどく恥ずかしくなってきた。

「……う、その……。あ、あんたの魔法とやらがどんなものかもまだ見てないのに、そんなの決められるわけないでしょー!」

軽く頬を染めて目を逸らしながら、ルイズは内心とは裏腹のぶっきらぼうな返事をした。

彼女はそうそう素直に詫びたり礼を言ったりできるような性格ではないのだ。

「ま、まあ、主人のためを思つて提案したことは褒めてあげるわ。とにかく、話は見せてもらつてからよ」

「わかった。ルイズのために、がんばるわ」

自分とは対照的に素直に頷いて微笑むユマに手を取られると、ルイズはより一層赤らんだ頬を膨らませて、なおのことそっぽを向こうとする。

そんな二人の姿を、タバサは後ろのほうからただじつと、キュルケは面白そうににやにやしながら見つめていた……。

第十五話 放課後の課外授業

放課後になると、ルイズ、キュルケ、タバサ、ユマの四人は待ちかねたようにシルフィードに乗って、人目のない学院の近郊へ移動した。

目的はもちろん、ユマが使えるという魔法を見せてもらうことである。

「……あの。私、本当に少ししか魔法は使えないし、すぐ終わるから」時間を置いたことでみんなの期待がさらに高まっているような気がして、ユマは居心地悪そうに身じろぎをした。

自分は本当にわずかな呪文しか覚えていないし、使うところなんて一瞬で見せ終わってしまうものだし、そう何回も立て続けに唱えられるわけでもない。

カードの力を使って見せたときや、『ガンダールヴ』のときのようなわけにはとてもいかないだろう。

期待させておいてがっかり、なんてことにならないか不安なのだ。

「なによ、とにかく使えるってだけで十分じゃないの」

ルイズが、ぶすつとした様子でそう言った。

「そうそう、そんなに気負いすぎなくてもいいのよ。魔法がどうだろうが、ユマちゃんがすごいのはもう十分に確かなんだから」

「見てみないとわからないし、見せてもらうものに文句は言わない。約束する」

タバサはさらに、杖なしで使えるというのならそれだけであなたの魔法は私たちに対するアドバンテージをもっている、とも指摘した。

どんなにささやかな効果だったとしても、少なくともその点においては自分たちよりも優れているということだ。

実際、彼女は今回見せてもらう魔法にある程度以上の性能が認められるのであれば、自分もユマに頼んで一緒に訓練をさせてもらうだけの価値はあると考えていた。

（杖のない状態でも魔法が使えれば、状況によってはそれが最後の切り札になるかもしれない。それに、油断させての不意打ちにも使える

……)

ユマやルイズを自分の事情に巻き込んで迷惑をかけたわけではないが、独学で進められる程度に手法だけでも学び取ればそれでいいのだ。そんな彼女の思惑はさておき、ユマは少し安心したように微笑んだ。

それから少し辺りを見回して、自分の体よりもやや小さい程度の大さきの岩を見つけると、それをターゲットにすることに決める。

「ありがとう、みんな。それじゃあ、あの岩に呪文を撃ち込んでみるから、見ていて」

ルイズらの視線がその岩に集まったのを確認すると、ユマはひとつ深呼吸をして精神を集中させた。

それから、感覚の枝を周囲に伸ばし、影響を与える植物の生命を探す。

(――見つけた)

深い段階の瞑想を成功させたことで感覚がより鋭敏になったのか、いつもよりも周囲を広く素早く探索することができたように感じた。

といっても、おそらく時間にすればコンマ一秒にも満たない程度の差なのだろうが、こと戦闘中には呪文の完成は大抵の場合、早ければ早いほどよい。

相手より一瞬でも早く撃てたかどうかによって、往々にして戦いの結果が大きく左右されるのだ。

『『ディア・ウィーブ』』

ユマは自分の感覚が植物のそれとつながったのを感じると、直ちに『ウィーブ』の呪文を唱えた。

紡がれた古の音韻が対象となった植物を構成する事象に働きかけ、それによって急速に成長した植物たちが、ユマの指差した先の岩に向かって猛烈な勢いで蔦を伸ばしていく。

この呪文はほんのわずかな量の植物でも急速に成長させて攻撃に使えるのだが、近くにまったく植物の居ない場所というのもごく稀にある。

そういう場合には触媒としてポケットなどに持ち歩いている植物

の種を蒔いたり、ヤドリギの杖などを携帯して、そこから蔦を伸ばさせて攻撃を行うのだ。

もちろん、今この場所で使用するぶんには、そんな必要はなかったが。

四方八方の肥沃な地面から迸った幾本もの太い蔦によって鞭打たれ、岩はたちまち激しい悲鳴を上げた。

その攻撃が止むと、役目を終えた蔦は、育ったのと同じ勢いで急速に萎びて枯れていく。

後には、あちこちが砕けてぼろぼろになった、岩の残骸だけが残っていた。

ルイズはその光景に、ちよつと目を丸くしていた。

「今のは……、系統で言う『土』？　生き物にはたらきかけているから、『水』との組み合わせかしら」

ハルケギニアの系統魔法では、あまり見かけないタイプの呪文である。

四方八方から相手を鞭打つという攻撃の形態は、『水』系統の『ウォーター・ウィップ』などに多少似ているが……。

ユマは軽く息を整えると、首を横に振った。

「ごめんなさい、わからないの。これは、『木』の呪文だって聞いたけど」

ウルフレンドでは、いくつもの系統を組み合わせるといような考え方はしていなかった。

ひとつの呪文はひとつの呪文なのである。

『木』？　……系統の分け方も違うのね。杖も使っていないし、やっぱり先住魔法の仲間なのかしら……」

先住魔法は周囲にある自然の諸力を利用する魔法で、その中には植物を武器化するようなものもあると聞いている。

アカデミーに勤めている上の姉ならば、あるいはもっと詳しく分析できるのかもしれない。

もつとも、大切な使い魔をそんなところに送って実験動物扱いされる危険を冒させる気は毛頭なかったが。

「それもわからないけど、精霊に呼びかけたりはしてないと思う」

周囲にある植物と感覚をつなげているのは確かだが、精霊に仲介を頼んだりはしていないはずだ。

あくまでも自分自身の精神力を用いて、詠唱を通して事象にはたらしきかけているのだ。

とはいえ、もちろんユマには系統魔法だの先住魔法だのの分類についてはよくわからないのでなんともいえなかった。

たぶん、そのどちらにも少し似ていて、どちらとも少し違うところがあるのだろうとか、漠然とそんなふうに考えている程度である。

キュルケはといえば、砕けた岩を見て軽く口笛を鳴らしていた。
(謙遜したわりに、結構な威力じゃないの)

攻撃的な傾向のある『火』系統のメイジである彼女にとっては、細かい分類がどうのこうのよりもそちらのほうに関心があった。

呪文の系統こそ違うようだが、自分の唱えたライン・スペルに迫るくらいの威力はあるかもしれない。

少なくとも、並みの平民の戦士やゴボルドのような弱い亜人なら一撃だろう。

ユマの年齢も考えればなおさらのこと、大したことがないなどと自虐するようなものではあるまい。

とはいえ、ユマが大したことがないといっていたのは主として威力に関してではなく、レパトリの少なさや燃費の悪さについてだった気がする。

それについては、まだ一種類の魔法を一度見ただけなのだから、なんともいえないが……。

「……」

タバサのほうは、植物の鞭が飛び出したあたりの地面と破壊された岩をじっくりと観察して小さく頷くと、ユマのほうに向き直った。

「十分すごいと思う。いくつか聞いてもいい?」

「ええ。答えられることなら」

「ありがとう。まず、あなたは休憩なしで何回までこの呪文を使えるのか」

ユマは少し首を傾げて考えてから、使えてせいぜいあと四、五回くらいだろうと答えた。

「わかった」

術者の腕前にもよるのだろうが、今の呪文は威力的にはせいぜい並みのトライアングルメイジのラインスペルほどだった。

ラインスペル程度の威力で一日四、五回しか撃てないというのなら、確かに燃費はかなり悪そうである。

しかし、それはタバサにとっては大した問題ではなかった。

大概の相手に対しては十分通用するだけの威力があり、杖なしの状態でも四方八方から突如攻撃できるとなれば奇襲性もかなり高い。

要するに、非常時の最後の手段や隠し玉としては有用だということだ。

そういった用途であれば、どうせそう何発も撃つたりしないだろうから、燃費が多少悪くても大して気にはならない。

ユマの精神力がどの程度のものかはわからないが、彼女に休息なしで数発は使えるのであれば、自分にもまったく使えないなどということとはまずないだろう。

この呪文ひとつだけでも、余裕があるときに彼女から教わっておくだけの価値は間違いなくある。

しかし、もちろんレパートリーは多いに越したことはないし、ほかにも有用性の高い呪文があればなおさら結構なことだ。

「では、ほかに使える呪文はあるの？」

続けてそう聞かれると、ユマは困ったような顔をして曖昧に頷いた。

「あるけど。今ここで見せられるようなものは、あんまり……」

「どんな呪文か、教えてくれるだけでも構わない」

そう言われて、ユマは指折り数えながら説明していった。

「ええと。まず、『ヴィタル』の呪文があるわ。怪我を治したり、体力を取り戻させたりできるの」

もちろん、今ここで見せられるようなものではないというのは、魔法を使って治すような怪我やひどい疲労などはないからということ

だ。

見世物じやあるまいし、わざと怪我をしてまで使ってみせるなんて気はなかった。

「へえ、治癒の呪文も使えるのね」

「うん。仲間の傷を治せる呪文がほしかったから」

実際、『ヴィタル』はユマが最初に覚えて一番よく使っていた呪文である。

「……触媒に、何か秘薬は使うの？」

タバサは少し考えると、そう尋ねてみた。

ハルケギニアの『水』系統の治癒呪文は、術者の腕前にもよるが、深手を治すときには通常は高価な秘薬を使う必要があるのだ。

「秘薬？ いいえ、そういうものは使わないわ」

カードの中には傷を癒すヴィタエードという飲み物やマツスルソーマという神酒などもあったが、いずれも単独で使うもので、呪文と併用するものではなかった。

「わかった」

タバサは頷くと、無理に使ってくれとまでは頼まなかったものの、いつか機会があったら見せてほしいとは言っておいた。

自分も『水』系統の治癒呪文は使えるが、秘薬なしでは大した効果は期待できない。

効力の大きさ次第では、やはり覚えておくだけの価値があるだろう。

「あとは……、『スリープ』ね。相手を眠らせる呪文」

こちらは呪文の性質上、眠らせる相手が居ないと使えないので、ここでは見せることができないのだ。

「眠りの呪文ね……。そうすると、あなたは私たちの魔法でいえば『水』の系統なのかしら？」

ルイズはそう分析した。

治癒や生命・精神の操作は、ハルケギニアの魔法体系においては『水』の領分である。

その中には、眠気を誘う気体を発生させる『スリープ・クラウド』と

いう呪文も含まれているのだ。

「私を眠らせてもかまわない」

タバサは、自分から呪文の実験台になることを申し出た。

眠るだけなら害はないし、どの程度の強さがあるのか自分の体で確かめてみるのが一番わかりやすいだろうと考えたのである。

しかし、ユマは首を横に振った。

「ごめんなさい。寝かせたら起こせるかどうかわからないから、やめておいた方がいいと思う」

「起こせるかわからないって……、そんなに深く眠らせる呪文なの？」

キュルケの問いかけに、ユマはこくりと頷いた。

この呪文で眠らせた相手は、たとえ殴ったり剣で斬りつけたりして傷つけても、まどろみから抜け出せなくなるのだ。

カードから呼び出した仲間ならば、ユマはそのつながりを通してしっかりと呼びかけ、賦活してやることで叩き起こすことができる。

だが、そういつたつながりのない相手でも起こせるかどうかは自信がなかった。

戦闘中に敵にかけたことしかないのです、もし起こすことができなかったらどのくらい眠り続けることになるのかもよくわからない。

最悪ずっと寝っぱなしなどということもあり得ないわけではないし、危険なので試さないほうがよいだろう。

もちろん、呪文の対象にするためだけにカードの仲間を呼び出すなんてのは論外である。

「そう」

タバサは軽く頷いただけで今度も無理には頼まなかったし、表情も動かさなかった。

しかし、内心ではかなり興奮していた。

(相手をずっと寝かせておける呪文……)

ということは要するに、敵が一人ならその呪文が効けば勝ちということだ。

もちろん、無力化して捕らえたりするのにも重宝だろう。

どの程度の相手にまで効くのかはわからないが、これまたかなり使えそうな代物だった。

ユマは戦いに使う呪文をいくつかかじっただけだと言っていたが、なるほど、戦闘に有用そうなものばかり選んで覚えたという感じである。

「それ以外には……、もう、ないかな。あとは、自分の体の周りだけに簡単な『シールド』を張っておけるくらい」

「その、『シールド』って何よ？」

「敵の攻撃から、目に見えない壁で身を守る呪文よ。こっちはないの？」

アインガングで一緒だったカード使いの仲間たちの中には、ユマよりも体格に優れていて、ディアアーネなどの戦士のように武器や防具で身を守る者もいた。

しかし、ユマは体格に優れておらず、体捌きで回避しきれない攻撃から身を守るのは主に『シールド』が頼みだった。

ウルフレンドの魔術師は、戦闘時にはふつう敵の攻撃に対して反射的に素早く『シールド』を展開し、身を守るのである。

ほぼどんな攻撃に対しても有効だが、もちろん受ける攻撃の強さに対して『シールド』の強度が足りない場合には防ぎきれないこともある。

きちんと呪文として習得している者ならば他人にかけて守ってやることもできるのだが、ユマは戦闘中に自分の体の周りに展開しておくことができるだけだ。

消耗は少なく、クエストが終わるまで戦いのたびに張り続けても問題は無いが、やはり短時間にあまりたくさん攻撃や強すぎる攻撃を受けると突破されてしまうことがあった。

「呪文で、風や土の防壁を張るようなもの？」

タバサは、また少し考えてからそう質問してみた。

敵の攻撃に対して素早く呪文を唱え、風の膜や土の壁などで防御することは、ハルケギニアでも戦い慣れたメイジならば心得があるものだ。

「わからないけど、風や土ではないと思うわ。意識で、目に見えない壁を作るの」

「……試してみても、いい？」

少しためらってから、遠慮気味にそう尋ねる。

試すということは、要するにユマを攻撃してみるということで、不躰な願いには違いない。

しかし、実際に見てみないければ今ひとつよくわからなかった。

攻撃に対して反射的に素早く、それを防ぐ防御壁を作れるというのは、その強度にもよるが戦闘においてはきわめて有用に思える。

「うーん。……少しだけなら」

ユマの許可を得ると、タバサは軽く頭を下げてから地面に落ちていく小さな石ころを拾って、これは大丈夫かと確認するように彼女を見た。

そのくらいなら大丈夫だといわれてから、ぼんと軽く、彼女に向けて石を放る。

石ころはユマの体にあたる直前に目に見えない壁にぶつかり、かつんと音を立てて地面に転がった。

タバサは次に、別の石を『念力』で浮かせてもう少し強く、あたれば間違いなく怪我をするくらいの勢いで投げつけてみた。

結果は同じで、体にぶつかる直前に目に見えない壁にあたって弾かれ、ユマは少しも傷を負っていなかった。

「魔法も防げる？」

「ええ。あたったときに、怪我をするようなものなら」

タバサはそこで、万が一あたっても軽い切り傷を負う程度の威力を抑えた風の刃を、ユマの腕に向かって放ってみた。

それも同じように『シールド』に遮られるのを確認すると、もういいとお礼を言ってお礼を下げる。

「もう少しなら、強い攻撃でも大丈夫よ？」

万が一怪我をしても『ヴィタル』で治せるからとユマは言ったが、タバサは首を横に振った。

「これで十分、ありがとう。迷惑をかけた」

正直、どのくらいまで耐えられるのかを試してみたい気持ちはある。

だが、さすがに万が一何か間違いがあったときに致命傷を負いかねないような攻撃を、友人に対してぶつけるなどというわけにはいかない。

それに、他にもまだひとつ、おこがましいお願いをするつもりであるのだから。

「最後の質問。……私もあなたと一緒に、魔法の練習をしてもいい？」

第十六話 手探り

ユマがトリステインに召喚されてから、二回目の『虚無の曜日』がやってきた。

学院長オールド・オスマンと教師のコルベールは、休日にもかかわらず、学院長室で顔を突き合わせてなにやら話し込んでいる。

秘書のミス・ロングビルは、今日は休みだった。

「ふーむ。これまでの君の報告を聞いた限りでは、やはりその子は『ガンダールヴ』らしく思われるのう……」

「はい、まず間違いないかと」

コルベールが、ユマが伝説の使い魔『ガンダールヴ』であるかもしれないと学院長に報告をしてからはや一週間。

彼はその間、それとなく彼女の様子を探っていたのである。

毎朝運動をしたり剣の素振りをしたりと、幼い少女らしからぬトレーニングに精を出しているあたりは、いかにも『ガンダールヴ』らしく思われた。

その動きのキレや身のこなしなども、並大抵の子供のそれではない。

彼は生徒たちには冴えない中堅教師と思われているものの、実のところは相当の達人であり、見る目は確かだった。

「少なくとも、ただの少女ではないのは確かですな。そんなトレーニングをしているということは、当然あの子自身も、自分の得た能力について気が付いているのでしよう」

「では、主人のミス・ヴァリエールはどうかね？ やはり本人から教えられるなどして、自分の使い魔がもつ能力に気付いておるのかな？」

「確証はないのですが、おそらく……」

ユマは朝の訓練のときに、武器を使ったトレーニングもしている。

そしてコルベールの見た限りでは、それらの武器は学院に勤める衛兵などから借りたものではなさそうだった。

「その中には、珍しいインテリジエンスソードなども含まれていましたので。ミス・ヴァリエールがあの子に買い与えたものだとか考え

られません」

「なるほど……。確かに『ガンダールヴ』の能力について知っておらねば、幼い少女にそんなものを与える理由はないのう……」

オールド・オスマンは自慢の長いあごひげを撫でながら、ゆっくりと考え込んだ。

「……しかし、まあ。特に問題などは起こしておらんのかな？」

「ええ、何も問題はありません。主人のミス・ヴァリエールには忠実なようですし、よく使用人たちの手伝いなどしている姿も見かけます。いい子だと思いますよ。ただ……」

「ただ……、何かね？」

「はい。ミス・ツエルプストーやミス・タバサとも、随分と親しくなつたようです。最近は主人ともどもよく彼女らと一緒に居たり、連れ立ってどこかへ出かけたりしているようです」

「つまり、その二人も知っておる見込みが高いといたいいのかな？」

「あり得ることかとは思いますが。あるいは使用人たちの中にも、知っている者はいるかもしれません」

異郷から召喚されて来たという少女や大切な教え子が周囲の者たちと良好な関係を築いているというのは、大いに結構な話である。

しかし、少なくとも当面の間は『ガンダールヴ』の存在を公にせずにおくほうがよいと考えていたオスマンにとっては、あまりありがたくない話だった。

「ふうむ……」

件の『ガンダールヴ』が、戦いなどには縁のなさそうな幼い平民の少女だということもあって、オスマンはそんなに早く彼女が自分の力に気が付くとはまったく思っていなかった。

ならばうかつに藪をつついて蛇を出すよりも、当面はそのことに触れず経過を見守ったほうが……と、判断していたのだが。

(わしも年をとって、ちと悠長になりすぎたのかなのう?)

若人の気付きは時として年配者の思いもよらぬほどに鋭く、その成長は驚くほどに早いものだ。

自分にも、はたしてそんな時期があったかどうか。

「……いかがいたします？ やはり何らかの形で、関わりのありそうなき者たちには口止めをしておくべきでしょうか」

オスマンがしみじみと考えていたところに、コルベールがそう伺いを立てる。

「ああ、まあ……そうじゃなあ。まずは落ち着きなさい、ミスタ・コルボーズ」

「私はコルベールです！」

「ほっほ、すまんの。そうそう、コルベル君だった」

わざと名前を間違えるいつもの冗談をやりながら、オスマンは紅茶を一口すすって一息入れた。

一旦気持ちをほぐして、落ち着いて判断を下すためである。

「君はせっかちでいかな。もしも他の生徒や使用人が何も知らなかったら、性急な口止めはかえって彼らの好奇心と疑念をかき立てるだけの結果となろうぞ」

「しかし。彼女らの気付きの早さからしましても、このまま何も手を打たなければ、情報はすぐに広まり……」

「状況から見て、そんなに無分別な子らではないとは思わんかね？」

オスマンはそう言いながら、机の引き出しから焼き菓子の載った皿を取り出して、ひとつつまんだ。

「君の話からすれば、少なくともミス・ヴァリエールが自分の使い魔の能力に気付いているのは確かなようじゃ。……しかし、それを自慢げに周囲に言いふらしたりはしておらんのではないか？」

「それはまあ、確かに」

「ならば、あの子はそれがみだりに口外すべきものではないと理解しておるといふことになる。他にも知っておる者がいるとしても、その者たちの口も軽くはないはずじゃ」

「はあ……。今のところはそうかもしれないませんが、しかし……」

コルベールが懸念を口にしようとするのをさえぎって、オスマンは自分の意見を話し続けた。

「無論、今のうちに話はしておかねばなるまい。しかし、焦っていきなり口止めなどしてはいかん。まずはミス・ヴァリエールとその使い魔

だけをここに呼んで、慎重に探りを入れてみることにじゃよ」

彼女らは、単にユマという少女が使い魔となったことで、武器の扱いが得意になったことに気付いているだけなのか。

それとも、ルーンが『ガンダールヴ』のものだということにも気付いているのか。

そのことを知っているのは二人だけか、それとも親しい生徒や使用人にも既に話したのか……。

既に『ガンダールヴ』のことを知っていて、それを伏せておこうと思っているのなら、最初は正直に答えないかも知れない。

しかし、こちらもそのことを把握しているのだとわかれば、おそろく話してくれるようになるだろう。

「まだその二人だけしか知らんのなら、うかつに口外せぬよう念を押しておけばそれで済む。他にもおるようなら、そのときは状況を見て判断する。なんにせよ、騒ぎは最小限にじゃ。大ごとにすればするほど、情報は漏れやすくなるからの」

「は……、ごもつともです」

コルベールが頭を下げて了解の意を示したので、オスマンはそれでひとまず話はまとまったと見た。

「うむ。ああ、とこころで……」

オスマンは、ふと思いついたように疑問を口にする。

「先週の君は、『ガンダールヴ』を見つけ出したことにかかなり興奮しておったように見えたが」

「ええ、それはもう、これは世紀の発見だと思いましたが」

「にもかかわらず、せっかくのその発見を伏せ続けねばならないということには、不満はないのかね?」

「は、先日の学院長のお話を伺いましたから。生徒らの安全や将来に悪影響を及ぼすのを避けることを第一に考えるべきであったと、自分の浅慮に恥じ入った次第であります」

「そうかね……」

頭を下げるコルベールを見てオスマンはいくらか顔を綻ばせると、彼にも茶菓子を勧めた。

「ところで、君はここ数日、ミス・ヴァリエールを中心として生徒らの様子を熱心に見てくれていたわけだが、『ガンダールヴ』の件は別として、使い魔の召喚は彼女らに悪影響を与えてはいなかったかな？」
コルベールもまた頬を緩めて、嬉しそうに答える。

「悪影響などんでもない、むしろその真逆といってよいでしょう。ミス・ヴァリエールは召喚以来ずいぶんと明るくなりましたし、交友関係も広がったようです。それにミス・ツェルプストーやミス・タバサにしましても、以前と比べて……」

「ふむ、ふむ……。そうか、そうか……」

オスマンは満足そうに相槌を打ちながら、その話を聞いていた。

学院の教師の中には、いかにも貴族然としていて教育者としての自覚に乏しい者も多い。

そんな中でこのコルベールは、いつも妙な研究にばかり時間を使って本職をないがしろにしているようにも見えるのだが、実のところは生徒思いで誠実である。

だからこそ、今回の件でも安心して見守りを任せられたのだ。

(今の君は、生徒らの様子もしっかりと見てくれておるからのう……) かつては冷酷非情な兵だったこの男が、罪悪感から剣杖を捨て、この学院に身を寄せてからどれだけの月日が流れたことだろう。

自分の内面にのみ向き合い、罪滅ぼしのための研究にただひたすら没頭しようとしていた彼が、生徒たちにも目を向けるようになったのはいつのことだったか。

齢百歳とも数百歳とも言われるこの老メイジは、その間ずっと、少しずつ変わって行く彼の姿を目にしてきたのだ。

「……ふむ、そんなものかな。では、ミス・ヴァリエールと明日顔を合わせたら、使い魔を連れて放課後にここへくるように伝えておいてくれ。もちろん、その時には君にも立ち会ってもらおう」

しばらく話を聞いた後で後でオスマンがそう告げて、それで今回の会議は終わりになった。

オスマンとコルベールが会議をしていた、その頃。

ルイズ、ユマ、キユルケ、タバサの四人は休日だというのに外出するでもなく、学院の中で一緒にゲームをして遊んでいた。

「といってもただの遊びではなく、魔法の訓練の一環なのだが。」

「おまたせ、隠してきたわよー」

「私も」

「本当に探せるの?」

女子寮一階の階段下で待っているユマの元に、キユルケ、タバサ、ルイズの三人が戻ってきた。

「わからないけど、やってみる」

ゲームの内容は、お菓子の包みやアクセサリーなどのちよつとしたプレゼントを建物内のどこかに彼女らが隠し、それをユマが見つけるというものである。

瞑想によって桃りんごの生えていた場所を探し当てたのと同じ要領で物品のつながりを手繰っていき、現在のありか突き止める訓練だった。

故意に隠された品物には隠し手の意図が絡みついているから、特にそれが以前に見たことのあるものなら、腕の確かな魔術師には容易く探し当てられるのだという。

ユマはウルフレンドにいた頃にやり方を教わっていたが、実際に自分でやってみるのは初めてだった。

屋外でもできないことはないだろうが、限定された建物内の空間のほうがりやすそうなので、まずは人が少なくなる休日の学院でというわけだ。

最初は瞑想に慣れている自分がチャレンジしてみても、うまくいくようならルイズらにもいずれやってみてもらおうと思っていた。

目的のあるゲーム形式のほうが、やりがいがあつて自分も彼女らも上達が早くなるかもしれないから。

ルイズやタバサはユマから作法を教わり、授業後の時間に集まってもう何度か瞑想には挑戦してみた。

二人とも集中力が高く、長時間雑念を払い続けることは既にかかなりできるようになっていたが、深い瞑想に入って物品のつながりをたどるといような段階にはまだ至っていない。

感覚の枝を伸ばして目に見えないつながりを捉え、それを手繰っていくという慣れない手法を、まだよくつかめていないようだった。

まあ、数日程度ですぐにできるようになることではないのは、元よりわかつているのだが。

ちなみにキュルケも少しだけやってみたものの、「こういうのは私には向かないわね」と言って、あっさり諦めていた。

何時間もじつと座って黙々と考え続けるなんて、自分にはとても無理だというのである。

確かに、彼女には静かに雑念を払って瞑想するなんてやり方は、見るからに似合いそうもない。

魔法の腕を高める方法はひとつではなく、彼女のやり方はウルフレンドでユマが学んだそれとは違うのだということなのだろう。

「ま、瞑想だのは私にはできそうにないけど。……でも、隠したものを見つけられる、って言うのは便利ねえ」

キュルケはそんな感想を漏らした。

「ちよつと使い方を工夫するだけで、簡単にお金儲けができそうでもない」

たとえば、何か物を隠して数分以内に見つけられたら勝ち、とかの賭け事をやって全勝したり。

誰かの秘密の書類や、隠し金庫の場所を突き止めたり……。

「お金、お金って。まったく、これだからツエルプストーは……」

「あら、お金は大切よ？ ま、自分の手で地道に稼いだお金で物を買った経験もない、箱入りのお嬢様にはわからないことでしょうけど」

キュルケとてルイズと同じく実家は裕福な貴族家であるが、実力主義の新興国ゲルマニアの出身ゆえ、身ひとつで金を稼ぎ出す実地経験もそれなりに積んできている。

もつとも、彼女の「地道な」稼ぎ方というのは、主としてあれやこれやの色仕掛けの手管で誑かした男たちに金を吐き出させることなのであるが。

口喧嘩を始めた彼女らのことはさておいて、ユマは静かに目を閉じて精神を集中させ、感覚で周囲の様子を探ってみた。

最初に成功して以来数日の間にずいぶん回数をごなして慣れ、静かに座って瞑想せずともかなりスムーズに感覚の枝を伸ばせるようになってきている。

(……………)

すぐにわかったのは、周囲に三人の人間が……すなわちルイズ、キユルケ、タバサがいる、ということだった。

目を閉じていてもどこに立っているかがわかり、それぞれの発するぼんやりした空気のようなもの、いわゆる気配の違いで、どれが誰であるのかも区別できた。

もつと感覚を広げていけば、この建物の中に現在人が何人いるのかなども、いちいち部屋の扉を開けて回らずに調べられるだろう。

あの盲目の魔術師ヴィシユナスも、おそらくこのようにして周囲の世界を把握していたのに違いない。

もちろん、熟達した魔術師である彼女は意識せずとも普段からもつと自然に、より広い範囲を遙かに鮮明に捉えることができているのだろうが、基本の原理は同じのはずだ。

自分にも彼女と同じことができているのだと思うと、なんだか嬉しくなる。

ちよつとした魔術師になれた気分だった。

しかし、この程度のことでもいつまでも浮かれてはいられない。

目的はあくまでも彼女らの隠した品物のありかを見つけ出すことであつて、ここからが本番なのである。

桃りんごのときは、生命のつながりをたどって過去に戻つていった。

今回探そうとしている品物は生命体ではないので、まったく同じ方法は使えない。

しかし、代わりにそれを隠そうとしたルイズらの『意図』……『作為』が品物に絡み付いて、微かな痕跡を残しているはずだ。

それを探し出し、糸を手繰るようにして同じ要領でつながりをたどっていけば、現在のありかが見つけられるだろう。

(ええと……)

生命の連鎖に比べるとそのつながりは細く、すぐには見つけられなかった。

しかし、一心に集中して周囲に張り巡らせた感覚の枝を研ぎ澄ませると、やがて微かにキュルケと同じ気配を漂わせる細い糸、いや意図の痕跡が、それに引つかかったのを感じた。

(——これ……かな?)

ユマは目を閉じたまま、その意図のつながりを手繰ってゆつくりと歩き出した。

別にヴィシユナスの真似をしようとしたわけではなく、できる限り自分の感覚を研ぎ澄ませて集中し続けないと、そのか細い線を見失ってしまいそうだったからだ。

ルイズとタバサの隠した品物も見つけなくてはならないが、一度には見つけられそうもないので、まずはひとつずつ突き止めていこうと決めた。

桃りんごのときは、ルイズの部屋に座ったまま意識だけを過去のアルビオンにまで飛ばすことができた。

しかし今回は、実際に細い意図がつながって伸びているその線に沿って歩いていかなくは、大本を突き止められそうになかった。

おそらくは生命のつながりに比べてそうした感情の痕跡はずっと微かなものだからだろうが、あるいは自分の得手不得手なども関係しているのかもしれない。

「急にどこへ行くのよ。隠したものは見つかったの?」

しばらく押し黙ったまま目を閉じて立ち尽くしていたユマが、突然前置きもなくゆつくりと歩き出したので、ルイズは慌てて彼女の後を追いつながらそう声をかけた。

「……………」

しかし、ユマからは何の反応もない。

ただ一筋の細い感覚のつながりだけに全力で集中しているために、耳から入ってくる音の刺激には気が付いていないのだった。

「……ちよつと。返事くらいしなさいよ、ユ——」

「やめたほうがいい」

しびれを切らしてユマの肩をつかもうとしたルイズの腕を、横合いから伸びてきたタバサの杖がそつと抑える。

「彼女は今、とても集中しているはず。きつと、あなたの声も聞こえないくらいに」

「そうね。それにこれは、一応はゲームなんだもの。対戦相手のユマちゃんの体を揺すったりして妨害をするのは、マナー違反じゃないかしら?」

「……むー……」

二人から囁くような声でたしなめられたので、ルイズはやや不服そうにしながらもそれに従った。

三人でユマの様子を見守りながら、静かに彼女の後についていく。しばらくそうして歩いていくうちに、最初はのろのろしていたユマの足取りは、少しずつだが早くなってきた。

微かに残留している意図の線をたどるといふ作業に、徐々に慣れてきたのである。

(もう大丈夫、気を散らさない限りは見落としっこないわ)

余裕が出てきたことで、ユマの胸の内に得意な気持ちと自信とが芽生えだしていた。

目を閉じたまま胸を張って、感覚で捉えた線だけをしっかりと見つめつつ、普段と変わらないはきはきした軽やかな足取りで歩き出す。

だが、それがよくなかった。

こういった試みにまだ不慣れなユマは、やはりまだまだヴィシユナスのようなわけにはいかなかったのである。

上の方に向かっていく線を追って無造作に進もうとしたユマの足が空を掻き、階段を踏み外した。

「——っ!?!」

目を閉じてただひたすらにたどっている線だけを見ていた彼女は、周囲の地形や障害物についてはほとんど把握できていなかったのだ。感覚で捉えた世界と現実の肉体のおかれた実際の世界とを混同していた、といってもいい。

そのため、以前に感覚だけを飛ばして桃りんごのつながりを追っていた時と同じように、地面と無関係に自由に移動できるような錯覚を起こしてしまったのである。

「ぎゃんっー！」

意識をよそに集中させていたため咄嗟に『シールド』を張ることもできず、ユマは思いつきり前のめりにぶっ倒れて階段におでこをぶつけてしまった。

眼鏡を打ち付けなかったのは、不幸中の幸いといえよう。

「ユ、ユマ!?!」

「ちよ、ちよつと。ユマちゃん、大丈夫?」

「痛そう」

「……大丈夫。ちよつと、失敗したみたい。ごめんなさい」

ユマは涙目でうーと唸りながら、自分のおでこをさすりつつそう答えた。

タバサに作ってもらった冷水で額を冷やし、少し休憩した後、ユマは今度は気を付けるからとルイズらに詫びた上で探索を再開した。

先程と同じように目的物につながる意図の痕跡をたどりながら、今度は同時に周囲にも感覚の枝を伸ばして、手近の地形を把握しつつ進んでいく……。

言葉にすれば単純なことだが、やってみるとすぐに、それが非常に疲れる作業であることがわかった。

以前の桃りんごの時には疲労はほとんど感じなかったのだが、それは初めての経験に対する興奮や、生命の神秘を探っているような高揚感が、疲れを忘れさせてくれたというのものもあるかもしれない。

しかしやはり、ただ一筋の線をひたすらたどっていくのと、常に感覚の枝を広げてなにかがあるかわからない周囲の状況すべてに気を配り続けるというのでは、精神の消耗の度合いが大きく違うというこ

となのだろう。

(やっぱり、ヴィシユナスはすごいよね)

盲目であるにもかかわらずまったく不自由を感じさせずに活動をしていた彼女の凄さを、あらためて実感する。

苦勞しながらも、ユマはゆっくり、ゆっくりと足を進めて、意図の線をたどっていった。

そうするうちに、やがて、線がうろうろと動き回っているあたりに到達する。

(この辺で、どこに隠すか迷ったのかしら?)

ユマは意図の痕跡にさらに意識を集中させて、その時のキュルケの心の動きを、彼女の姿を詳しく見てみようとした。

正確な場所をかなり狭い範囲まで絞り込めてから、目を開いてそのあたりを探ってみればいだろう。

キュルケが隠したのは、確か、たくさんの小さなビーズを寄せて星の形にしたブローチだったはずだが……。

「……ねえ。この辺に、あんたたちのどつちかが隠したの?」

「ええ、そうよ」

ユマがしばらく立ち止まっているのを見て、ルイズがひそひそ声で尋ねると、キュルケが首肯した。

彼女は、ユマの一挙手一投足をわくわくした様子で見守っている。
(さあて……、ユマちゃんは、"あれ"を見つけられるかしらね?)

ここまで探り当てたのはさすがだが、自分はよく考えて隠し方にちよつとした工夫を試みたのだ。

彼女の感覚の枝とやはらは、はたしてそれも見破ることができるのだろうか?

「……………」

ユマがしばらく集中していると、やがて彼女の脳裏に、小物を隠そうとしているキュルケの姿が浮かびあがってきた。

『さて、どこに隠そうかしら？』

その時の彼女の思考もまた、声のようになって聞こえてくる。

『ふふつ、ちよつとズルいみたいだけど。これでも見つけられるかしらね？』

ユマは、そんなことを考えながらブローチを弄っているキュルケの近くに感覚の目を近づけて、何をしているのか手元を覗き込んでみた。

彼女がブローチの後ろにある小さな留め金を外すと、それまでしっかりと集まって組み合っているように見えたビーズが、たちまちばらばらに解けた。

実はビーズは一本の紐に通されて輪っか状になげられていて、それを集めて星形にしてから金具で留めてあったのである。

留め金を外してしまうと、紐に通されたビーズはもはやブローチではなく、ネックレスかブレスレットのようにしか見えなかった。

(見た目を変えて、探せないようにしようとしたのね)

実際のところ、隠し方に工夫を凝らせば凝らすほどそれを隠そうとした者の意図がより強く鮮明になるから、かえって感知しやすいのだ。

自分の思考やその痕跡を隠す術を身につけた者か、魔法的に思考を遮蔽できる魔術師であれば別なのだが、ハルケギニアのメイジはどうやらそういう術は知らないらしい。

キュルケはばらしたブローチをひとまず懐に押し込むと、現在人が使っていない空き部屋のひとつの扉を無造作に『アンロック』で開けて、その中に入っていった。

室内を見分すると、インテリアの一部としてさまざまな小物が並べられている飾り棚に目を付ける。

彼女はその中から安っぽい宝石飾りのついたゴブレットを引っ張り出し、その周りに新たにビーズのついた紐を巻き付けて、棚の奥の方に戻した。

一見して特に不自然さが感じられないのを確認すると、キュルケは満足そうに頷いてその部屋から出て、元通りに鍵をかけ直した。

『オーケー、これであれがさっきのブローチだなんて、普通に見ても絶対にわかるはずないわ。ユマちゃんのお手並み拝見よ!』

「——見つかったわ」

ユマはぱつちりと目を開けると、キュルケが選んだ空き部屋を指さして、その扉を開けてほしいと頼んだ。

室内に入ると真っ直ぐに飾り棚へ向かい、感覚の中で捉えたとおりの外見をしたその棚の中からゴブレットを引っ張り出すと周りに巻き付けられているビーズを外して、ためらうことなく目を丸くしているキュルケに差し出した。

「はい。キュルケが隠したのは、これでしよう?」

それを見て、横合いからルイズが怪訝そうに口を挟んだ。

「キュルケが隠したのは、確かブローチだったじゃない。これはビーズが通された飾り紐でしょ」

「でも、確かにあのブローチについていたビーズに見える」

タバサの言葉にユマはこくりと頷いて、先程頭の中で見た映像を思い出しながら、たどたどしくビーズを元の星型に組み直して見せた。

「さっきはこうやって、留め金で止めてあったの。隠すときに、それを外したのよ」

「なによ、そんなのずるいじゃない!」

軽く憤慨しているルイズをよそに、キュルケはまじまじとユマの顔を見つめた。

「……まいったわ。でもユマちゃん、どうしてすぐにわかったの?」

キュルケは、この不思議な子なら隠し場所は見つけられるかもしれないとは思っていた。

それでもさすがに、見た目がまるつきり変わっていることに少しも戸惑わなかったのは予想外だったのだ。

タバサもまた、星形に戻ったブローチを見つめて小首を傾げながら、この問いに対するユマの答えを待っていた。

(どうして、一瞬も迷わずにあの紐がこのブローチだと?)

探していたのが自分だったなら、紐に通されているビーズの種類が同じだということには、あるいは気が付けたかもしれない。

しかし、少なくとも手に取ってある程度じっくりと調べて見てからでなくては、これだと断定するのはまず無理だろう。

タバサは瞑想の訓練を通してユマから説明を受け、感覚の世界で物を探すという概念についてある程度は把握できたつもりでいた。

だが、やはり実際に経験してみなくては、なかなか本当に理解できるものではない。

ユマが感覚の世界の中で時間を遡り、キュルケがこのブローチを隠したその瞬間の光景を間近で見ているかのように感じ取ったのだ、などということはわかるはずもなかった。

その不可思議な技術を自分も教わって身に着けられるかもしれないのだと思うと、期待も膨らむ。

そのユマの方はといえば、ようやく目的のものをひとつ見つけて気を緩めた途端、どっと疲れが出てきたのを感じていた。

「うん……。あとで説明はするけど、少し休ませて。ちよつと疲れたから……」

ユマはそう言って手近にあった椅子に座り、一息ついた。

それから軽く頭を下げて、ルイズとタバサの分はひとまずギブアップしたい、と申し出る。

予想していたよりもずっと消耗が大きい作業だった上に、不慣れなために本来以上に疲れたのである。

右利きの人間が左手で手紙を書こうとするようなものだ。

仮に続きをやるとしても、数時間くらいは間をおいてからにしたかった。

ルイズらにしても、ゆっくり歩くユマの後をひたすら黙ってついていくのをこのままあと二回繰り返すよりも、休憩を入れつつ今やってみせてくれたことについて話を聞かせてもらおう方が楽しく実りのあ

る時間になりそうだと思ったので、文句なく受け入れる。

そうして、一行はひとまず隠した小物を回収してからルイズの部屋に戻ると、あれこれと話し合いながらお茶を飲んで、和やかな休憩をとった。

その時に、続きは日が落ちてから、今度は範囲を広げて学院の敷地内全域でやってみることにしたらどうか、という話になった。

どの道夕方になれば外出していた生徒たちも戻ってくるので、女子寮の中では人目が多くなって不都合だし、感覚の目で探索する分にはあたりが暗くても関係ないからだ。

デルフリンガーの本体にもいずれ会いに行きたかったし、休憩がてらシルフィードに頼んで、少しだけ王都に足を運んでみるというのもいいかもしれない。

まさか、建物の外に出ていたことでその夜思わぬ事件に巻き込まれることになるうなどは、この時の四人はまだ想像もしていなかったのである……。

第十七話 はじめまして、また会ったね

休憩がてらデルフリンガーの本体に一度会いに行こうという話になったルイズ一行は、さっそくシルフィードを呼んでトリスタニアに向かった。

そうしてトリスタニアにつくと、もういい時間だしまずは美味しいものでも食べようかという話になって、適当な店で食事をする。

しかしその後、腹も満たされたことだしよいよ本題に入ろうかという段になってから、困ったことが判明した。

皆、カードから呼び出したデルフリンガーに聞けば、彼の本体がどこにいるのかは当然すぐにわかるだろうとばかり思っていたのだが……。

「何なのよ、自分の居所も知らないって！ やっぱりボケてるんじゃないの？」

「人間の常識で考えるんじゃないよ、俺は剣だぞ？ 好きなように歩き回れるわけでもなし。だいたい前に買い取られたつきり、薄汚れた店の中しか見てねえんだよ」

「この街に武器屋は何件あるのかしら。仮にも王都だもの、一軒きりってことはないわよね」

「衛視の詰所に行つて店主の名前を出して聞けば、たぶんわかるはず」「いや、俺はあいつの名前なんか知らねーぞ？ 前に聞いてたかも知れんが、忘れた」

「あ、あんたねえ……。自分の持ち主の名前も知らない、つて……」

「持ち主だったって、俺を振るわけでもねえし。大体、店に話す相手はあいつだけだから、名前を呼ぶことなんかねえよ」

そんな調子で、結局『トリスタニアのどこかの武器屋の中』だということしかわからなかったのである。

「なによ、それじゃ探しようがないわ。とんだ無駄足じゃないの！」

「武器屋はそんなに多くない。場所を全部教えてもらって、順番に回れば見つかるはず」

「まあそうだろうけど……。面倒くさいわねえ。どうしても今日会わな

きやいけない、つてわけでもないんだし……」

いかにもだるそうにそう言いかけたキュルケは、ふとユマのほうを見て、彼女が黙って何か考えている様子なのに気が付いた。

「あら、何か方法があるの？」

彼女から尋ねられたユマは、少しためらいがちに頷く。

「いえ、できるかはわからないんだけど。もしかしたら、探せるかもしれないと思って……」

「……瞑想の要領？」

タバサに聞かれて、ユマはそうだと答えた。

まったく知らない相手ならともかく、デルフのことはよく知っている。

周囲に感覚の枝を広げて、彼と同じ気配を放つ者がいないか調べてみれば、たぶん居場所を見つけられるのではないかと考えたのだ。

とはいえ初めてやることなので、もちろんユマにも自信があるわけではない。

「できたとしても、衛視の人に聞くほうが早いかも……」

「やってみて」

ユマ自身はいささか自信なさそうにしていたが、タバサは迷わずにそう促した。

彼女の技術でどこまでのことができるのか、実地で見られるせつかくの機会を逃す手はない。

結局試してみることになって、ユマは人気のない静かな公園に移動すると、木陰に座り込んで感覚の枝で周囲を探り始めた。

ルイズらはただ、黙ってその様子を見守る。

しばらく瞑想した後で立ち上がると、ユマは東のほうを指差した。

「あっち。……だと、思う」

ユマを先頭にしてみんなでそちらの方向にしばらく歩いていくと、だんだん道が狭くなっていった。

どうやら路地裏のほうに向かっているようだ。

とはいえ、実際のところユマはどうかデルフのものらしき気配がある方向と大体の距離を感じ取っただけなので、どんな風に道をたど

ればいいのか正確なところまではわかっておらず、歩き方はややためらいがちだった。

あのヴィシユナスならば、きつと道筋なんかも簡単に調べて迷わず歩いていけるのだろうか、今の自分にはそこまでするのは難しい。

がんばればできなくはないかもしれないが、なんにせよ時間がかかりすぎるし疲れすぎるので、普通に歩き回って探したほうが早くて楽なのは間違いないだろう。

(近くまで行ってももしどうしても見つからなかったら、そこでもう一回やってみよう)

ユマはそう考えていたが、幸いその必要はなかった。

歩いている途中で、ルイズがあることに気付いてくれたのである。

「あ……、この辺にある武器屋だったら見た覚えがあるわ。たしか、ピエモンの秘薬屋の近くだったはずよ」

そこから先はルイズが先頭に立って進み、大体このあたりだということろまで来てから全員で手分けをしてあたりを探してみると、ほどなくしてその武器屋が見つかった。

四つ辻の近くにある古びた感じの店で、剣の形をした銅の看板がぶら下がっている。

「おーい、親父！ いるかー？」

石段を登り、羽扉を開けて薄暗い店内に入るや、開口一番にユマが携えたデルフが店主に向かってそう呼びかけた。

「何でえ、うるせえぞデル公！」

「うるせえのはそっちだ、俺はしゃべってねえや！」

後ろを向いたまま反射的に文句を言った五十がらみの店主にそう怒鳴り返したのは、店内に置かれていたデルフリンガーの『本体』の方である。

「何をわけのわかんねえこと、を……？」

振り返った店主は、いつの間にか4人組の客が来ていたことや、その客が見たところ貴族でしかも少女たちばかりであったことなどに気が付いて驚いた。

しかし何よりも驚いたのは、もちろんその中でも一番小さな少女の

腕に抱えられたモノについてである。

(……デ、デル公が二本!?)

ぎよつとして、慌ててデルフが置かれていたあたりを確認するが、そこにはちゃんと彼の姿があった。

なのに、店にやってきたばかりの客の腕の中にも、同じような剣が……。

ややあつて気を取り直した店主は、胡散臭そうに顔をしかめながら、ドスの利いた声を出した。

「貴族のお嬢様方。こりゃあ一体、何のご冗談で？ 言つときますが、うちはまっとうな商売をしてるんで。妙ないたずらやおどかしを受けるいわれはありやせんぜ」

「冗談なんかじゃないわ」

ルイズは腕組みをしながらそう答えた。

「まあ、そう思われるのも無理はないでしょうけどね」

「はじめまして。私から事情を説明します」

キュルケが肩を竦めて苦笑する横からユマが進み出て、店主に向かってぺこりとお辞儀をした。

「……はあ。するつてえとこの間からデル公の言つてたことは、ありや本当だったんで……」

かいつまんだ話をユマから聞き終えた店主は、事前にデルフリンガーの本体から『最近見る夢の話』を聞いていたのもあつて、その真偽を疑うというとはなかった。

とはいえさすがに面食らったようで、ぽかんとした顔をしている。「へへっ、やっぱりただの夢じゃなかったんだな。いや、また『使い手』に出会えるたあ嬉しいねえ！」

デルフの本体が、興奮した様子でかちやかちやと嬉しそうに金具を鳴らしている。

キュルケは、そちらとユマの腕の中にある『分身』のデルフの方と

を、いくらか不思議そうな目で見比べた。

「自分が二人もいるだなんて、変な感じじゃないかしら？」

「それほどでもねえな。そりゃあ妙といえば妙だけどよ、よくは思い出せねえんだがなんか、前にもこんなことがあった気がするぜ」

『偏在』の自分が本体と話をするようなものだと思う」

タバサが冷静にそう分析する。

「なんでもいいぜ。肝心なのは、俺がまた『使い手』の手の中に収められたってことなんだからよ」

デルフがそういうのを聞いて、店主ははつと我に帰った。

「……それで、お嬢様方。してみると、今日お運びになったのは、こちらの剣もお買い上げになりたいということですか？」

そう尋ねながらも、店主は内心、デルフリンガーを手放すのは気が進まなかった。

少し前までは、「やたらにしゃべくって商売の邪魔ばかりするうつとおしい錆び剣め、誰か買ってくれそうな奴がいたらさっさと捨て値で叩き売ってやるんだが」くらいに思っていたのだが……。

最近聞かせてくれる夢の話は妙に面白かったし、上機嫌な彼と話しているうちに情も移ってきて、あまり手放したくなくなってきたのである。

ましてや、その話がただの夢ではなく本当のことだとわかった以上は、なおさらこの奇妙な縁を切らずにおきたいものだと思う。

彼はデルフリンガーの語る『使い手』というのが伝説の使い魔のことだとまでは知らなかったが、まるでお伽噺の中の英雄に突然出会えたようなわくわくした気持ちはあった。

この薄暗い店の中で、いかに物を知らない客から利益をせしめるかということばかり考えて過ごす日々の中では、そんな出会いは二度とないに違いない。

とはいえ彼は武器屋であって、客が、それも貴族が買い取りたいと言うのならば、それに従うしかないだろう。

おまけにその客が、この剣と理解しがたい奇妙な絆で結ばれた『使い手』とやらであるというのならばなおさらのこと、売らないぞと

突っぱねるといわけにも……。

そんな店主の惜しむような気持ちを探したといわけでもあるまいが、ユマは問いかけに対して首をふるふると横に振ってから、ペコりと頭を下げた。

「いいえ、今日は買うことはできないの。お話をしに來ただけなんです。商売の邪魔をして、ごめんなさい」

まず、自分には買うためのお金がない。

少し調べてみたところでは、ちゃんとした武器というのはかなり高いもので、大剣ともなればそこらの平民の稼ぎでおいそれと購入できるような代物ではないらしいのだ。

それでは、今後も買える見込みはほとんどないだろう。

それに、自分では体が小さすぎて、デルフリンガーのような大きな剣を常に持ち歩くことは難しい。

必要なときだけカードから分身を呼び出して、それを使うほうが理に適っているのだ。

分身ならば万が一破損したとしても、本体は無事だというメリットもある。

買いたいのならお金を出すとルイズらも言っってはくれたが、そういった考えを説明して辞退した。

実用上購入する必要がないのに、なんとなく手元においておきたいからという程度のこと、そんな大金を出してもらうわけにはいかない。

「……まあ、仕方ねーかな。相棒の体じゃあ、俺とお前の二刀流なんぞ、最初から無理な相談だしよ……」

「ああ、気にすんな。お前が経験したことは、みんな俺に伝わるんだからよ。夢ったって、本当の出来事と変わらねえんだ」

幸いデルフたちも、特に難色を示すでもなくそう言っただけで合意してくれたので、本体のデルフリンガーには今後もこの店のほうにいてもらうということに決まった。

店主は、ほっと胸を撫で下ろした。

そうしてから、自分が売れなくて喜ぶなんて珍しいこともあるもん

だと考えて、思わず苦笑する。

(こりやあ俺も、焼きが回ってきやがったかな?)

そうして話がついて、ルイズらがいよいよ帰ろうかとしたところで、デルフの本体が彼女らを呼び止めた。

「待ちな！ 思い出したぜ。相棒にひとつ、渡しときてえものがあつたんだ」

「渡したいもの……、何？」

ユマは足を止めると、彼の元へ歩み寄った。

それ以外の面々は、不思議そうに首を傾げていた。

渡したいものといっても、剣に持ち物なんかあるものだろうか？

「ちよいと俺を持って、鍰元の金具に手を当てな」

「こう？」

ユマが言われたとおりにすると、デルフが体にぐつと力を入れたように感じた。

その直後に、一瞬その部分の金具が光ったかと思うと、かちりと外れる。

「これは……」

外れた金具の内側を見てみて、ユマはあつと驚いた。

そこにはごく小さなスペースがあつて、ほんの一枚だけではあつたが、カード使いの使うカードが収められていたのである。

「……このカードは、前にあなたが出会ったカード使いから？」

カードを取り出し、金具を元通りにはめなおしてから、ユマがそう質問した。

「ああ、そいつのことはあんまり覚えてねえんだけどよ。確か、次にカード使いに会うことがあつたら渡せって言われて預かってたんだ」

その様子をみた店主が、横合いから文句を言った。

「おいデル公、その金具がそんなふうに外れるなんて初めて聞いたぞ？ 前に俺が手入れたときにも、どうしても外れなかったじゃねえか！」

「あたりめーだ、俺が外そうと思わなきや外れねえ。まあ、外し方は俺も、今さつき思い出したんだけどよ……」

そのやり取りを聞いて、ルイズとキュルケは改めて、この剣の呆け具合にあきれていた。

タバサは常のとおりは無表情で、ユマのほうをじっと見つめている。

(どんなカードなんだろう?)

さて、ユマが今しがたカードを見つけたときの驚きは、決して小さいものではなかった。

しかしながら、その後にしたカードを表返して絵柄を確かめてみたときに受けた衝撃に比べれば、まるで取るに足りなかったといつてよいであろう。

(え……?)

それは、彼女が以前にウルフレンドで知り合った、ある人物のキャラクター・カードだったのである。

「……………」

しばらくは呼吸をするのも忘れるほど驚いて、まじまじとそのカードを見つめていた。

それはまったく予想もしていなかったタイミングでの再会で、もちろんまた彼と巡り合えたことはとても嬉しいのだが、疑問も大きかった。

ややあつて、ユマはデルフに質問を試みた。

「……あの。デルフがこのカードをもらったっていうのは、いつのことなの?」

「知らん、忘れた。何百年前だったか、何千年前だったか」

「……そう……」

そんな昔に、一体どうしてこの人のカードがあったのだろうか?

姿もカードの説明もそっくりなので、同名の別人だとは考えられない。

もしかしたら、彼は見た目よりもずっと長生きなのだろうか。

話をしてみた感じでは、何百歳だとか何千歳だとか、そんなにすぐく年をとっているようには思えなかったのだが……。

(それとも……)

そうしてすっかり上の空になってしまったユマに代わって、ルイズらが店主と話し始めた。

「デルフがくれるといったにせよ、カードはこの店の中にあつたものなのだから、譲り受けるにあたっては彼と話をつけなくてはなるまい。」

「ねえ、あのカードはおいくら？」

「はあ……。あれがどんなもんだか存じやせんが、俺はあるってことも知らなかつたんで。お求めでしたらどうぞご自由にお持ち帰りくだせえ、金を取る道理はありませんや」

「だって、このお店の中にあつたものじゃない」

「同じ家の中にあつたって、ガキの貯金箱の中身は親のもんじやねえでしょう？ そいつと同じで、デル公の持ってたものは俺のもんじやねえんで」

そう答えながらも、店主は内心でまた苦笑していた。

せつかくの好機を見つけて吹っかけないとは、自分としたことがいっつになく無欲じゃないか。

「でも、それじゃ悪いわ。なら、せめて他に何か買って行こうかしら」
ルイズはそれから、せめてものお礼代わりにと、砥石や錆び止めのオイル、羊毛の拭き布などの手入れ用品をいくらか買い込んでから店を後にした。

「ありがとう、ルイズ」

店を出たユマはそうお礼を言ってから、もう一度じっくりと手にしたカードを見つめてみた。

学院に戻ったら、まずは彼を呼び出して再会を喜び合いたい。

それから、いろいろと話も聞いてみなくてはなるまい。

キュルケは好奇心から肩越しにそのカードを覗き見ると、嬉しげな声を上げた。

「あらー。なによ、すごく美形な殿方じゃないの！」

別にその言葉に惹かれたわけでもないが、タバサも彼女に倣ってカードを覗き込んでみる。

「……」

『マリオン：キャラクター（妖精／吟遊詩人） HP 5／MP 6 Lv

22 物理防御7 魔法防御8

世界中を渡り歩く旅の吟遊詩人。ある神の血を引いており、その歌には魔力が宿る。

なぜかディアーネの兄、ヘリオスとよく似ている』

（……見た目より先に、もっと注目するべきところがあると思う）
タバサは心の中で、親友にそう突っ込みを入れた……。

第十八話 異文化講義

「へえー、それじゃあユマちゃんは前に行ったところでもこの人と知り合いだったの？」

学院までの道中、シルフィードの上でユマがかいつまんでマリオンに関して説明をすると、キュルケは感心したような声をあげた。

「すごい偶然ねえ。それとも、運命ってやつなのかしらね？」

「……でも、それっておかしくない？ あの剣は、このカードをもらったのはずつと昔のことだって言ってたじゃない。なのに、なんでユマの知り合いが……」

「そりゃあ半分ボケてるみたいな剣だもの。大方もらったのがいつのことだったかなんて忘れてて、思い違いをしているのよ。ねえ？」

キュルケから同意を求めるような目を向けられたユマは、小さく首をかしげた。

「……わからない。そうかもしれないけど、もしかしたらマリオンが思ったより長生きなのかも……」

「そういうえば、ただの人間じゃないみたいなのが書いてあるわね……。妖精だとか、神だとか。でも、本当なのかしら？」

ルイズはそう言つて、カードの文面に目を落とした。

そこには確かに、マリオンはある神の血を引いているとか、妖精の吟遊詩人であるといったようなことが書かれている。

「私も、それが知りたい」

タバサがそう言つて、問いかけるようにユマの顔をじつと見つめる。

ここハルケギニアにおいては、精霊は実在するが妖精は物語の中存在だと考えられている。

いわんや神の血を引いているなどは、与太話以外の何物でもない。

始祖ブリミルを主として崇拜するハルケギニアでは、特に宗教面で保守的な国家においては、そんなことを口にすれば異端者として処罰されかねない。

以前から知人だったというのであれば、ユマはその真偽のほどを知っているのではないだろうか？

「ごめんなさい、知らないの。マリオンは、自分も親のことは知らないんだって……」

ユマはそう言つて、以前にそれについて彼に尋ねた時のことを思い出しながら、彼女らにかいつまんで説明していった……。

・
・
・

「神？ ……いいや、ぼくは身内のことは何も知らないよ。吟遊詩人には、家も故郷もないんだ。でも、カードに書いてあったというのなら、あるいはそうなのかもしれないね」

ユマからカードに書いてあったことについて尋ねられた時、マリオンは大して興味もなさそうに、そっけなくそう答えただけだった。

「ぼくはエルフの神であるユリンに、この豎琴をもらったときに一度会ったことがあるんだ。その時に、いくつかの魔法の旋律も教えてもらったよ。でも、それだけさ」

これまでに名乗りを上げて暖かく接してくれたことのない身内が実は神だったなどと言われても、それでありがたがる子供がいるだろうか。

そんなことよりも、ごく平凡な親でもいつも傍にいて見守ってくれることや、その腕で自分を暖かく抱きしめてくれることの方が、ずっと嬉しいことなのに……。

彼の態度はそうした気持ちをあらわしたものののではないかと、ユマには思えた。

なにせまだ稚さの残る年頃の少女だというのに、自ら進んで異世界にやってきて、それでいて親を恋しがって泣くこともないのだから、彼女だって自分の身内との関係は決して良好ではないのだ。

親の愛情に飢えるという気持ちはよくわかる……少なくとも、容易に想像することのできるものだった。

「恨んでいるの？」

そんな子供らしい率直な問いかけに、マリオンはしかし、苦笑して首を横に振った。

「いいや、そんなことはないよ。もしも小さなころから肉親が近くにいて守ってくれていたなら、今の自分はなかっただろうからね」

時に孤独を感じることはあっても、自分は吟遊詩人として世界を旅して、さまざまなものを見て回る、今のこの生活が気に入っている。

だから両親に対する執着はないが、別にわだかまりもないのだと、マリオンは言った。

「そういうもの、なの？ ……わかった、ありがとう……」

ユマにとっても、そんなマリオンの態度にはいささか感じる場所があつて、それ以上深く立ち入って聞こうとはしなかった。

「……だから、マリオンがもし本当に神さまの血を引いているとしたら、きつとユリンがそうなんだと思う」

そう説明すると、当然のように今度は「ユリンとはどんな神か」「その世界では神の血を引く子なんてものが普通にいたりするのか」などといった話になる。

ユマはそれらについても、ルイズらにぎつと話していった。

「ユリンは、学芸の神さまで、エルフを守護する神さまでもあるんだつて」

「エ、エルフの神!?!」

ルイズらが驚くのも無理はない。

ハルケギニアでは、エルフは始祖の時代よりの宿敵であり、最強の妖魔とされる存在なのだ。

「うん。でも、向こうではエルフは特に人間と戦ったりはしてないの。それに、神さまも、最初から神さまだったわけじゃないんだって……」

ウルフレンドにおいて神として崇められる存在は数多くあるが、単に『神』といった場合、一般的には『死すべき種族』を守護する七人の神々のことを指す。

学芸の神にして、エルフの守護神である、ユリン。

鉱業と鍛冶屋の神にして、ドワーフの守護神である、ヘフス。

力と火の神にして、オークの守護神である、 balan。

海の神にして、ゴブリンの守護神である、メーラ。

商業と旅とシーフの神にして、シャーズの守護神である、セテト。

恋の神にして、コボルドとノームという二つの種族から崇められる、イリス。

そして、農業と酒の神にしてかつてのヒューマン（人間）の守護神であり、後に墮落して闇の神の一柱となった、ゾール……。

死すべき種族の中でも例外的にトロールにだけは守護神がないのだが、これは彼らがその誇りの高さゆえに他の種族と神を共有することに耐えられなかったからで、本心ではユリンを崇めていたと言われている。

神々は元々、宇宙から飛来した悪意、闇の力から世界を救った七人の英雄であった。

彼らは数多の戦いを勝ち抜き、多くの生命を合体させることで力を得て、不死の神となったのである。

死すべき種族と神々は力を合わせて闇と戦い、やがて世界が光で満たされた後も、長きに渡って親しく交わり続けた。

そうした交わりの中で神の血を引く子が生まれることも、当時はまだ珍しいことではなかったのだという……。

「つまり……、その世界では、自分の体を改造して寿命の限界を克服した人がいたわけね？ で、その中でもすごい功績を立てた人たちがこつちの始祖ブリミルみたいに神格化された、……ってことかしら」
キルケはユマの話聞いて、要するにそうだったことなのだろう

と理解した。

「うん。たぶん、そういうことだと思う」

こういった、ウルフレンドの神話や物語に関するユマの知識は、実のところ今話題になってきているマリオンから教わったものが多かった。なんと聞いても彼は吟遊詩人なのでそういった話には詳しくかつたし、聞いていてとても楽しくわかりやすかつたから。

「本当に、そんなことが可能なの？」

「……ありえなくはない」

ルイズはやや懐疑的な様子だったが、タバサは少し考えてからその意見を述べて、キュルケの解釈に同意した。

ハルケギニアでも、永遠の命を得るまでにはまだ至っていないものの、生物を改良するための水魔法の研究は昔からされているのだ。

タバサの故郷であるガリアは特に、諸国家の中でも屈指の発展した魔法技術を持ち、そういった研究を盛んに行っている。

より美しく長持ちする花、よりおいしくたくさん収穫できる作物などを作るための品種改良は常に進められているし、複数の生物を接ぎ合わせて新たな合成幻獣（キメラ）を作り出す研究を密に行っていた施設もあった。

老いた体から脳を取り出して別の生物の体に移植し、寿命の限界を超えるという技術でさえ、難しく危険性が大きいものの既に実行可能なことが確認されているのである。

異世界において偉大な魔術師ないしは魔術師からの施術を受けた者で、完全に寿命の限界を克服した者が存在していたとしても、そこまで驚くほどのことではないだろう。

それに、そもそも始祖ブリミルを神格とみなすのであれば、現在のハルケギニアで王族に連なる者たちはその子孫とされているのだから、そういう意味では自分だつて『神の血を引く者』だと名乗れなくもない。

学院内でも知る者は誰もいないが、タバサはガリアの王族にごく近しく連なる血筋だつた。

ルイズにしても、公爵家の娘なのだからトリステインの王族の血を

引いているはずだ。

そう考えれば、神の血を引くという話も、確かにそこまで常軌を逸しているというわけではないのかもしれない。

「いずれにせよ、早くお会いしてみたいわね！　神の血を引く、高貴にして美しい吟遊詩人だなんて！」

恋の微熱が燃え盛るわと、キュルケがうつとりと夢見るような顔でそう言った。

ルイズはあきれ顔で、タバサはいつものことだとばかりに無反応である。

(まだ、会ってもいないのに?)

カードの絵柄をただだけで恋なんてするものなのだろうか、ユマは疑問に思った。

自分も彼やヘリオス王子、タムローンなどといった、ハンサムな男性と接していて少しどきどきしたことはあるが……。

たぶん、それは恋というほどのものではないような気がする。

自分の兄がどんなに素敵な男性か、上気した顔で熱っぽく話すディアーネの様子などを見ると、自分とはまるで夢中になっている度合いが違うというのがよくわかるのだ。

キュルケは、確かにうつとりしたような様子ではあるが、そういう時のディアーネとはやっぱり違って見える。

いわゆる一目惚れ、というやつなのだろうか。

そういえば、あのロリエーンはいろいろな男の子に声をかけてみんなからちやほやされるのが好きなようだったが、体形はまったく違うもののどちらかと言うとキュルケは彼女に似ているような気も……。

……そんなことを考えているうちに、そろそろ学院が見えてきた。

もう、あたりはだいぶ暗くなってきた。

「あ、そういえば。ねえ、出掛ける前は、戻ってきたら外でさつきの続きをやるうって言ってたけど……」

その予定は中止か後回しにして、先にその人を呼び出すのか、とルイズが尋ねた。

「そうね。ユマちゃんとのゲームも楽しみだけど、やっぱり素敵な殿

方へのご挨拶が優先よね？」

もちろん、挨拶だけで済ませようという気はなく、口説くにも時間を費やす予定である。

どの程度お堅い男性なのかまではまだわからないが、神の末裔だろうが何だろうが自分の魅力で口説き落とせない男などいないとキユルケは自負していた。

そうになると、ユマとのゲームはまた今度、ということになるだろう。残念なような、申し訳ないような気持ちも多少はあるが、キユルケにとつては恋の微熱が燃え上がったときはそれがすべてに優先するのだ。

口説いて、うまくいけば今夜にでも部屋に連れ込んで……。

いや、しかし彼は、ユマが力を費やしてカードから呼び出している間しかこちらにいられないのだったか？

(と、なると。その時は、ユマちゃんにもお願いして付き合ってもらわないとね！)

ユマのようなまだ小さい子を恋の駆け引きだの男女の睦言だの、そんなことに付き合わせることに、キユルケは特に問題だとは思っていないかった。

自分がユマくらいの年の頃にはそういった事柄について既に学び始めていたし、ルイズのような色気のないお子様に付き合わせるより自分が教育してその辺を伸ばしてあげた方が彼女にとつてもいいだろう、くらいの感覚なのだ。

(そうよ、ユマちゃんなら私がお手本を見せてあげれば、男の五人や十人はすぐにも口説けるようになるわ。そうしたら、ルイズが悔しがってまたぎやあぎやあ騒ぐでしょうね。面白いわあ……)

想像すると、キユルケはお上品ぶったつまらない女から男を取り上げて悔しがらせてやるときのような、わくわくした気分になった。

誇り高きツェルプストー家の女は、生まれつきの狩人なのである。

「うん。私も、マリオンに早く会いたい。それに、彼ならきつと、もつと詳しい話を聞かせてくれると思う」

そうやってユマが同意したのを確認すると、タバサはシルフィードを学院よりも少し手前の、人目のないあたりに一旦着陸させることにした。

カードの力を使うのなら、学院内よりも人の目に触れない場所の方がいいだろうと考えたからだ。

別に人目を避けるだけならルイズの部屋とかでもいいのだろうが、あえて外にしたわけは……。

（お姉さまたちだけで話してないで、シルフィにも見せてほしいのね！）

シルフィードがそんな感じの目をして、タバサに訴えたからである。

この間の外出で巨大ネズミと見つめ合って以来、彼女もユマの能力には大いに興味を惹かれているらしい。

ましてや、背中に乗せている主人らがあれやこれやと話し合っているのを傍でずっと聞かされていては、最後まで立ち会いたくもなるだろう。

・
・
・

「じゃあ、マリオンを呼び出すわ……」

周囲に人がいないことを確認したユマは、そうやって彼のカードを手を持った。

それを顔の前にすつと立てて精神を集中すると、きらきらと輝いたカードが宙に浮かび、ゆつくりと回転しながら消えていく……。

すっかりカードが消えてしまった頃には、代わりに一人の男性が目を閉じて、静かにその場に佇んでいた。

その男はゆつくりと目を開けて自分を召喚したカード使いの姿を認めると、やや驚いたような顔になった。

「——おや、これは。誰に呼ばれたのかと思えば、ユマじゃないか。久しぶりだね」

「うん、久しぶりね。こんばんは、マリオン」

ユマがぱつと顔を綻ばせて挨拶をすると、マリオンもにこやかに笑みを返して手を差し出し、しっかりと握手を交わした。

彼はそれから、ユマの後ろに控えるより年長の少女たちにも丁寧に頭を下げて挨拶をした。

「はじめまして、お嬢様方。私はしがない旅の吟遊詩人で、マリオンと申します」

彼の挨拶はハルケギニアの作法とは少し違っていたが、貴族である少女たちの目から見てさえもまったく非礼さや違和感を感じさせない、実に優雅な動作であった。

キュルケはもちろん、普段男子にこれといって興味をもっていないルイズでさえ、思わずほうつと溜息を漏らしてしまう。

タバサだけは、少なくとも見た目は常と変わらぬ無表情で、軽く会釈を返した。

「マリオン、この人たちは私の友達で、貴族の魔法使いなの」

ユマの紹介を受けて、ルイズらも自己紹介をする。

「初めまして、お美しい方。私の名はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストーですわ。キュルケと呼んでくださいな」

「は、初めまして、ミスタ・マリオン。私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。トリステインの貴族で、ユマの……ええと、パートナーをしています」

「タバサ。よろしく」

実際に間近で見ると、なるほどいい男には目敏いキュルケが即座に反応しただけあって、マリオンは文句のつけようがないほどの美男子だった。

ウエーブのかかった長い金髪に、非常に整った美しい顔立ち。

これでもう少し背が低く、体つきが華奢であったなら、誰もが女性と見間違えてしまうはずだ。

貴族の中にさえ、これほどの美形はまず見かけられないことだろう。

その美しさだけでも、彼が神の血を引いているという話を真実だと

信じさせるに十分ではないかと思えるほどだった。

男にしては派手な色合いの服を着ているが、それも全体の上品な印象を損なってははいない。

左肩には立派な豎琴をかけており、そのことと服装とを合わせて考えれば、カードの文面に目を通さずとも、彼が衆目を集めて歌うのが生業の吟遊詩人であろうことは容易に察せられた。

「これは、ご丁重に痛み入ります。私は貴族の方々に、そのように礼を尽くしていただけるような身分ではございませんのに。どうか私のことも、ただマリオンとお呼びください」

マリオンは微笑んで、場慣れた様子で、また優雅に礼を返した。

社会的な身分も何もない吟遊詩人など、本来なら貴族にそんな挨拶をしてもらえないような立場ではない。

しかしマリオンは、その腕前と美しさのために地位のある人物の館へ招かれたりすることも頻繁にあったし、感動した聴衆から身分不相応に持て囃されることにも慣れっこだった。

彼から微笑みを向けられると、たとえお高くとまった貴族のご婦人やご令嬢であっても、大抵の場合は心が蕩けてしまうのである。

マリオンはそれから、またユマの方へ向き直ると、少し首を傾げた。

「……ところで、ユマ。君は確か、元の世界へ戻ったんじゃないのか？ それとも、ここは君の住む世界なのか？」

第十九話 歌の王子さま

「……なるほど。確かにここは、ぼくがこれまでに旅をしたウルフレンドのどの土地とも空気が違っていているみたいだ」

ユマからおおよその事情を聞いたマリオンは、ごくあっさりとそれを受け入れた。

特異な状況であるにもかかわらず、ほとんど動じた様子もない。

優秀な吟遊詩人である彼は、ウルフレンドの外にもユマの住んでいた世界を含めて数多くの世界があるのだということを神話や伝承を通して、あるいは旅をしてきた長い年月の間の経験から、既に知っていたのだ。

「でも、驚いたな。いきなり異世界だなんて。ユマも大変じゃなかったかい？」

「二回目だし、自分で選んで来たから。それに、みんな親切なもの」「あなたは、以前にもこちらへ来たことがあるのでは？」

タバサが小さく首を傾げて、そう質問を挟んだ。

今の発言からすると、彼はこのハルケギニアへ来るのは初めてであるように思える。

しかし、彼のカードがあつた以上は、一度もこちらへ来たことがないとは考えにくいのではないか。

マリオンはしばらく記憶を手繰るように考え込んでいたが、やがて首を横に振った。

「いいえ……。確かに、私のカードがあつたということは、そうなのだろうとは思えますね。ですが、覚えはありません」

それから、ふと思いついたように付け加える。

「そうですね。伝承によれば、ウルフレンドを巡る魂は、同じ名前、同じ姿で、幾度もまた生まれてくるのだといいます」

「夢のある話ですわね」

「ええ……。ですからあるいは、叙事詩(サーガ)の時代にか、再誕(リザレクション)の時代にか、伝説(レジェンド)の時代にか……。私

は今と同じ姿で、いずれかのカードの使い手によって、この世界に呼び出されていたのかもしれないよ」

「でも、どうして自分のカードをデルフに渡したの？」

「それは、わからないよ。いわゆる前世のことは、普通は覚えていないからね。でも、今のぼくでも、きつとそうしてくれるように頼むだろうね」

なぜなら、伝説の使い魔の手に握られる宿命をもつという剣に自分のカードを託せば、おそらくまたいつか、新たな英雄に巡り合うことができるだろうから。

詩人として、異世界の英雄による新しい冒険譚を間近で見聞きする機会をどうして逃すことができようか。

「前世つて、まさか。そんな、お伽噺みたいな……」
「……………」

ルイズやタバサは、あまり納得してはいない様子だった。

それはまあ、ごく当然の反応だろう。

(…………知っているのに、それを隠そうとしている？ あるいは、誰かに記憶を消されている…………?)

タバサは、そんな疑いを抱いた。

デルフリンガーがこちらの知りたい肝心な点をいろいろ忘れていくことといい、何者かの作為がはたらいているのではないか。

ある種の高度な水魔法なら、記憶を消去するようなこともできるかもしれない。

でなければ、始祖にも関連のあることだとすれば、失われた『虚無』の魔法が用いられとか。

エルフだの神だのもかかわっているとすれば、あるいは先住魔法、ないしは神の力とか、何かそういった類のものだとも考えられなくはない…………。

とはいえ、いずれにせよはるか昔のことであるはずだ。

マリオンが故意に隠しているのだから、記憶を消されているのである、あるいは本当に前世とやらの出来事なのであれ…………、真偽のほどは調べようもないだろう。

そんな親友の思惑をよそに、キュルケが早速マリオンに色目を使いながらおねだりをする。

「ところで、あなたは吟遊詩人でいらっしやるとか。よかったら、一曲お聞かせ願えませんこと？」

彼女にとつてはタバサの気にしてるような話はおよそどうでもいいことであつた。

この賢い親友のやり方にけちをつける気はないが、異世界人だとか、妖精だとか、神の子だとか……、そんなのは、無駄に小難しい話や気取つた話が大好きなお子様な男どもにでも任せておけばいいのだ。

過去のそんな話よりもずっと大事なのは、今現在目の前にいるのが確かにいい男だという、ただそれだけのことではないか。

そのいい加減ともいえる態度は、確かにタバサのそれとはまるで違つている。

しかし、個人的なことについてほとんど話そうとしない彼女に対してあれこれ詮索したりしないからこそ、キュルケはこの無口な少女と友人でいられたのだ。

「ええ、もちろん」

マリオンは快く頷いて、豎琴を手を取つた。

キュルケらに向かつて丁寧に一礼すると、楽器を奏でながらのびやかな声で歌い始める。

♪

まぶしい朝日 動きだす家々の戸

小鳥のしらべ聞いて 朝の町

ほら、いつだつて 町は君を待っている

毎朝挨拶をして けして離れない

明るいい日差し 鳴り響く鐘の音

レンガ道を歩いて 昼の町

ほら、いつだつて 町は君を忘れない

太陽に手を振って さあ旅立とう

お日さまは眠り シチューが暖炉で煮える
安らうよみんな 夜の町
たとえ、君が忘れても 町は君を忘れない
どんなことがあっても いつも待っている

トウララ、トウルラララ

ようこそ お帰り

……

♪

短い、素朴な温かみのある静かで優しげな歌だった。

どのような歌が好きかわからない初対面の観客たちが相手ということ
ことで、まずは無難なものを選曲したのだ。

それが終わると、マリオンは間をおかずに次の曲を弾き始める。

♪

ぼくは生きてた

記憶の中に 軌跡を残して

出会いの中に 奇跡を残して

カミサマなんかには なれなくてもいい

きみは笑い ぼくも笑い ひとが笑う

きつと それがすべてさ

さあ 歌を紡ごう

最高速の 喜びの歌を

……

♪

今度はかなり速いテンポの歌で、息継ぎのタイミングも難しく、弾くにも歌うのにも高度な技巧を要するものだった。

しかし、マリオンはそういった類の歌を得意にしている。だからこそ、二曲目には自分本来の技量を活かすためにこの曲を選んだのだ。

これは、『電子の歌姫』とか『大宇宙歌姫天使』などといった異称で呼ばれているとある異次元界の歌い手から教わった曲を元に、彼が独自のアレンジを加えたものだった。

本来の歌い手である少女と彼とでは種族的な違いから喉や肺の構造にも差異があるため、まったく同じ歌よりもこちらのほうがマリオンには向いているのである。

ルイズとキュルケはすっかり歌に惹き込まれたようで、うっとりと言き入っていた。

タバサは表情こそ常のままだったが、本を開くこともなくじつとマリオンのほうを見つめているし、目の奥の方にはわずかながら常になり輝きが宿っている。

ユマも、二度と聞けないと思っていた彼の歌をまた聞いた喜びに顔を輝かせ、瞳をきらきらさせて夢中になっていた。

演奏を終えてマリオンが頭を下げると、ユマは大きな拍手を送った。

他の少女らもちろんそれに倣う。

「ありがとう、マリオン」

「素敵でしたわ。きっと私の母国の宮廷にも、あなたほどの歌い手はいませんわよ」

そう言つて、キュルケは懐からエキユー金貨を四枚取り出した。

吟遊詩人に歌を聞かせてもらったのだから、対価を払うのは当然のことだ。

普通は流れ者の吟遊詩人の歌に対して聴衆が支払うのは銅貨か、せいぜい銀貨がいいところであろうが、貴族が依頼して前で歌わせた場合には金貨を渡すことも珍しくはない。

それにしても二曲の歌に四エキユーとは払いすぎだろうが、それだけ彼の歌に本当に満足したということを示したかったのである。

ルイズもそうしようとしたが、そこでちよつと首を傾げた。

「……そういえば。お金って、私たちのところの金貨で大丈夫なのかしら？」

「そもそも、持ち帰れないかもしれない」

タバサがそう指摘した。

ユマの話によれば、カードから出てくるのはどこかにいる本体と意思や記憶を共有する『偏在』のようなものだということだった。

実際、先ほどデルフリンガーの本体とカードから出てきた分身体との邂逅に立ち会ってきたばかりだ。

金貨として使えるかはともかく貴金属そのものにはきつと他の世界でも価値はあると思うが、カードから出てきたこのマリオンにお金を渡しても使い道はないだろうし、おそらく本体の下に届くわけでもないだろう。

といっても、別に対価を払う気がないわけではなく、そういうながらもちゃんと財布を取り出してはいた。

ただ、他に何か、もつと意味のある支払いをする方法があるかもしれないと思ったのである。

「ええ、持ち帰ることはできないでしょうね」

マリオンは微笑んで、首を横に振った。

「ですから、お金は要りません。そのお気持ちだけで十分な報酬です」マリオンは、芸術家に必要なものは金貨よりも聴衆の感動と称賛の声であると強く信じていた。

もちろん金はあるに越したことはないが、報酬が期待できないからという理由で歌ってほしいという頼みを断ったことはないし、相手が無一文でも感動してくれていれば歌って損をしたと思ったことはない。

「それじゃあ私の気が済みませんわ。でしたら、せめて私の部屋で一緒に、ささやかな宴会でも……」

キュルケが流し目などを送りながらそう提案すると、マリオンはわけなく同意した。

貴族に気に入られて宴席に招かれ、そこでまた何曲か披露して賞賛の声を受けながら、美味しい食事と酒と暖かい寝床にありつく。

そういつた流れは、そこそ腕の立つ吟遊詩人にとっては大して珍しくもないものだ。

マリオンはその端正な容貌もあって、より個人的な一夜の楽しみに誘われるなどということも幾度となくあった。

流浪の身ゆえ、互いに別れがたくならないよう概ねはうまく受け流して、少なくとも深入りはしないように気をつけていたが。

「ちよつと、もう夜も遅いわ。明日は授業があるのよ?」

「あら、そんなの別にどうでもいいでしょうに。つまらない子ねえ」

「よくないわよ! だいたい、ユマを夜更かしなんかには……」

「もちろん、ユマちゃんは途中で抜けてもいいわよ。あなたも一緒におやすみなさいな、お子様はおねむの時間でしょ。その後は、私と殿方だけで……、あ、あなたは一緒に付き合うかしら?」

抗議するルイズをさらりと受け流しつつそんな話をふってきた親友に一応は返事をしようかと、タバサが少し顔を上げる。

そのとき、奇妙なものが目に飛び込んできて、彼女はわずかながら目を見開いた。

「どうかしたの?」

「あれ」

そんな微かな表情の変化を目ざとく見とがめた親友に対して、タバサは杖で学院の方を指し示した。

キュルケのみならず、みんながそちらの方に目をやる。

すぐに、タバサが何に驚いたのかわかった。

「……えっ? あれって……、ゴーレムじゃない?」

「ちよ、ちよつと。なんであんな大きなのを、学院の中で作ってるのよ!」

いつのまにか、学院の本塔のすぐ近くに、巨大な人型のゴーレムらしきものが姿を現していたのである。

自分たちは学院の外にいて、だいぶ距離があるので威圧感などは感じないが、逆に言えばそれだけ距離が開いていても明らかに見て取れるほどに大きかった。

学院の建物との対比から推測すると、身の丈は20メートル、いや3

0メイルほどもあるだろうか。

かなりの腕利きでなければ作れないサイズだが、そうであっても普通、あんな大きなゴーレムを建物の敷地内などで使ったりはしないはず……。

「わ……」

ユマも、その随分な大きさに少しく驚いていた。

あんなに大きなゴーレムは見たことがない。

ウルフレンドで手にしたカードのモンスターの中でも、あれ以上にサイズの大きなものはかなり稀だっただろう。

おそらく、世界創造の獣とされるアウドムラヤ、世界樹ユグドラシルの根をかじるという巨竜ニーズヘッグなどの、神話に出てくるようなごく一部の強力なモンスターだけだ。

「……何か、工事に使うとか?」

思いつくままにそう呟いてみたが、タバサは首を横に振った。

「聞いてない。第一、こんな時間にやるわけがない」

「うーん……」

マリオンも最初は驚いた様子だったが、すぐに冷静さを取り戻したようで、他の少女らの言い分を聞きながらじつと考え込んでいた。

ややあつて、意見を口にする。

「……では、夜の闇に紛れて強襲をかけようという賊の類なのでは?」

その言葉を聞いて、キュルケがはつとした顔になった。

「そうだわ、それよ! あんなに大きなゴーレムだもの、最近うわさになってる『土くれ』のフーケつてやつに違いないわ!」

「フーケ。……って、なによ?」

世間の噂話などには疎いルイズが、怪訝そうに尋ねる。

「知らないの? メイジの盗賊よ。どうも『土』系統のメイジらしくて、『錬金』や大きなゴーレムを使って、トリステイン中の貴族のお宝を手当たり次第に盗み出してるとか……」

「確か、学院の本塔には宝物庫があったはず」

それを聞いて、ルイズはにわか慌て始めた。

「そ、それじゃ大変じゃないの! 何とかしなくちや!」

「そうね、先生たちに知らせましょう」

マリオンも含めた全員が、急いでシルフィードの背に乗って、学院へ引き返すことにした。

場所は変わって、こちらは学院本塔近くの中庭。

トリステイン中の貴族から恐れられている『土くれ』のフーケが、今まさに自分の作り出した巨大ゴーレムの肩に乗って、それを操っていた。

「さて……、さつさと済ませようかね」

彼女は事前に、宝物庫に施されている魔法的な防護や壁の厚み、強度などを入念に調査していた。

さすがに歴史ある魔法学院だけあって、宝物庫には最高位であるスクウェアクラスのメイジによる『固定化』がくまなく施されている。

フーケは、もちろん怪盗としての腕のほどには自信があったが、メイジとしてのランクそのものはトライアングルであり、『錬金』でそれを打ち破れる望みはなかった。

そうなると、あとはゴーレムによる物理打撃で壁を崩すという方法が考えられるが……。

魔法を抜きにしても壁自体が非常に分厚く頑丈で、巨大ゴーレムといえども普通に殴りつける程度でそうそう短時間のうちに壊すことはできそうもない。

かといって時間をかけすぎでは、騒ぎに気付いて駆けつけた学院中のメイジに取り囲まれてしまうことになるだろう。

とはいえ、もちろんその程度のこととは調べる前から想定していた。いうまでもなく、駄目元でやるだけやってみようかなどと考えたわけではなくて、ちゃんと勝算があるのだ。

さかのぼること、数ヶ月前の話……。

『俺はよお、もう少しで貴族のお宝をいただけるはずだったんだぜ?』

とある酒場で食事を摂っていたフーケは、酒に酔ってそんなことを吹聴している男に出会った。

いつものことなのか、常連の客からはろくに相手にもされていないかったのだが、フーケは何かの参考になるかもしれないと興味をもった。

近くの席に座って、「まあ、すごい。一杯奢りますから、もつと詳しく聞かせてくださいませんか?」ともちかけると、いい気になった男はぺらぺらと自慢げにその手口を明かしてくれた。

『俺はな、使用人になってくせえ馬の世話をしながら、一月ばかりもがんばったんだ。夜中にこつそりと、宝物庫の外壁にやすりで傷を入れながらよ!』

いかに強力な固定化の呪文で守られていようとも、物理的に少しずつ削っていけばいずれは破れる。

男はそう考え、夜な夜な壁を削り続けた。

『間拔けな館の連中にやあばれてなかったんだ、もうすぐ成功したはずだったぜ。ああ、寝不足でうっかり貴族の坊主を落馬させたせいで、クビになってさえないなけりやあな……』

笑顔で相槌を打ちながらくだをまく男の話を聞いていたフーケだったが、内心では呆れて鼻を鳴らしていた。

(馬鹿か。やすりなんぞで穴があくまで、どれだけかかると思っただい)

そのうちに傷が大きくなって目立ってくれば、穴が開くはるか以前にばれてしまうに決まっているではないか。

そうなる前に放り出されたおかげで、本当に首を切られなくて済んだようなものだ。

それも、そもそも本当のことだったらであって、実際には自分を大きく見せようとしてこしらえた駄法螺の可能性のほうが高そうである。

いずれにせよ、頭の悪い話だった。

(あーあ、私としたことが。こんな男に付き合っただけで損したよ)

見切りをつけたフーケはそいつをすっかり酔い潰してしまおうと、二

人分の勘定の支払いを押し付けて、さつさと店を後にした……。

（あんな間抜け野郎の話でも、ちゃんと聞いておくもんだね）

そのときは何の参考にもならない話だと思ったのだが、後日この学院の強固な宝物庫を荒らす策を頭の中で弄んでいるうちに、その手口が応用できることに気がついたのである。

もちろん、やすりだけで穴を開けるだなんて、気の遠くなるような話は論外だが……。

いかに硬く分厚い壁でも、一箇所でも脆くなった部分があれば、そこに強い力を一気に叩きつけることで破壊できるものだ。

優秀な『土』のメイジであるフーケにとっては、建築物の構造上の脆弱さを見定めて利用するのはお手の物である。

フーケは早速、学院に使用人として潜り込む算段を立てた。

最初は志願を出して使用人として雇って欲しくないか問い合わせしてみようと思っていたのだが、ちょうどいい具合に一時的な仕事場所に選んでいた居酒屋に学院長のオールド・オスマンがやってきてくれた。

偉大なメイジとか言われているらしいが、年甲斐もなく好色な上にいい加減な老人で、ちよつと色目を使ってすり寄ったら意外なほどあっさりと秘書として雇ってくれたのである。

そう、近年トリスティン中を騒がしている大怪盗の正体は、学院長秘書ミス・ロングビルなのであった。

「ま、平民も貴族も、世の中は大体が馬鹿ばかりさ……」

フーケは、被り込んだ黒いローブの下で皮肉っぽく唇をゆがめた。彼女はしばらくの間、学院長からのセクハラに耐えつつ真面目に勤めて信頼を得る一方で、夜な夜な宝物庫の外壁を少しずつ削り、徐々に脆くしていった。

まずは最終的に破壊する予定の一か所を集中して削り、さらにそこを殴りつけた時の衝撃が効果的に伝わるように、構造を計算して周囲

の何か所かにも少し傷を入れておく。

宝物庫は五階の高さにあり、ほんの小さな擦り傷などはまず発見される恐れはなかったが、念のため作業を終えるたびに『鍊金』で作った偽の壁を上から被せて何の異常もないように見せかけた。

そうして仕込みを続け、ようやく巨大ゴーレムの拳を全力で叩き込めば十分に一人がお宝を抱えて通り抜けられるだけの穴が開くであろう状態になったのである。

「こんなに時間をかけて仕込んだのは初めてだったね」

さんざん待たされたのだ、早いところお宝を拝ませてもらおうとしよう。

フーケが杖をすうっと持ち上げると、それに呼応して巨大な土のゴーレムが片腕を振り上げ、その先端が鋼鉄に変化した。

次いで杖が無造作に振られると、ゴーレムもその拳を全力で振り下ろし……。

「……駄目、先生たちを呼んでいたら間に合わない！」

ゴーレムが叩き付けた拳によって本塔の壁が崩れて穴が開いたのを見て、ルイズが悲鳴のような声を上げた。

全員でシルフィードに乗って誰か先生の下へ報告に向かおうとしていたが、これでは駆けつけてくれたころには宝はとっくに盗み出されてしまっているだろう。

「こうなったら、私たちでフーケを捕まえるのよ。それしかないわー！」

第二十話 破壊のカード

自分たちでフーケを捕まえようというルイズの言葉に、キュルケが顔をしかめた。

「ちよつと、本気なの？」

あのゴーレムの巨大さからいって、自分の炎やタバサの風をもってしても倒すのは難しいだろうと思える。

危険だし、むしろ下手に手を出す方が無謀の誹りを受けるかもしれない。

悪名高い怪盗の盗みの現場をたまたま目撃したからといって、まだ学生のメイジには後で報告をする以外に何かしなくてはならないということはないはずだ。

しかし、ルイズの返事に迷いはなかった。

「当たり前じゃないの！ 盗賊なんかには私たちの学院を荒らされて、見逃すわけにはいかないわ。タバサ、早くあそこへ！」

「……わかった」

タバサは頷いたが、シルフィードにはある程度まで近づきつつもゴーレムの手の届かない安全な距離を保つように、と指示を出していた。

彼女としても、キュルケと同じくゴーレムの破壊は難しいと判断していたからだ。

ゴーレムを操る本体を叩くのがおそらく最も現実的な方法だが、いずれにせよ危険が大きい。

賊は捕らえられるものならもちろん捕らえるに越したことはないが、そのために大きな危険を負うまではしたくなかった。

命がけで戦うことには慣れているが、たまたま遭遇しただけの無関係な賊を捕らえるためにそこまでする気はない。

ましてや、大切な使い魔や友人たちの身まで深刻な危険にさらすわけにはいかないのだ。

さて一方、フーケの側はといえば。

さすがに手馴れた怪盗らしく、壁に穴が開いたのを確認すると直ちに土ゴーレムの腕を伝って、宝物庫の中に速やかに侵入していた。

歴史ある魔法学院の宝物庫だけあってさまざまなお宝が並んでいるようだったが、フーケは片っ端から盗み出そうなどという欲はかかずに、当初の目的の品だけを捜し求めた。

こういった仕事では、片を付けるまでの時間の早さが成功のカギになるからだ。

欲張って荷物を増やし、そのために逃げ出すのが遅れて取り囲まれてお縄などということになっては、間抜けもいいところである。

「さて、お宝は……と」

あたりを見回すと、装飾品や宝石類などのさまざまなお宝が収められた、美しいガラスのショーケースが並ぶ一角があった。

その中に、一束のカードが収められたケースがある。

美しい金の縁取りを施したそれらの美しいカードの中には、さまざまな写実的な絵柄が描かれていた。

近くに置かれた金属のプレートには、『破壊のカード。持ち出し不可』と説明書きがされている。

(よし、こいつだ)

フーケは目的のお宝を見つけて、にんまりと口元をゆがめた。

「これの何が『破壊のカード』なのかは知らないけど……ま、そいつは後で調べるさ」

なんにせよ、持ち運びの楽なお宝なのは結構なことだ。

躊躇なく杖を一振りしてガラスケースを砂に変えると、さつさとカードを取り上げて懐に収める。

それからもう一度杖を振ると、カードの説明書きがされていたプレートの文字が消えて、代わりにそこへ別の文句が刻まれた。

『破壊のカード、確かに領収いたしました。土くれのフーケ』

犯行現場の壁にこういったふざけたメッセージを残していくのが、彼女のやり方だった。

安全にさつさと盗み出す上では余計なお遊びなのだが、フーケが貴族ばかり狙って盗むのはただ金のためだけではなく、彼らを愚弄して

その慌てふためく様子を見るのが嬉しいからでもあるのだ。

「さて、後はさっさとずらかると……、ん？」

壁の割れ目から外に出てゴーレムの肩に乗ったフーケは、そこで初めて、ウインドドラゴンとそれに乗った数名の人間が近づいてくるのに気が付いた。

見たところ、学院の衛士や教師ではないようだ。

たまたま騒ぎに気付いた学生たちが、自分を捕らえようと血気に逸って使い魔と共に飛び出してきた、といったところか。

(ちっ、思ったより早いね)

フードをしっかりと被り直して顔を見られないように気を付けながら、フーケは素早く対応を考えた。

当初の予定では、ゴーレムで学院の外壁をまたいで悠々と逃げ去ってやろうと思っていたのだが、ウインドドラゴンはもちろんゴーレムなどよりも断然速い。

ならば目立って仕方がないゴーレムなどは捨てて、物陰にでも隠れて追手の目をくらませながら身ひとつで逃げるという手もあるが……。

それでうまく連中を欺ければよいものの、失敗して見つかり、追いつめられるようなことになってはまずいだらう。

たかが学生ごときとはいえ、こちらは一人なのに対して向こうは数人、しかもウインドドラゴンの援護もついているのだ。

大型のゴーレムは一旦解除してしまえば新たに作るのには時間がかかるし、ゴーレムの補助なしで戦っては思わぬ不覚を取る可能性も否定できない。

そうなると、できる限り速やかに相手を始末するか追いつかしてから立ち去る方が安全ではないか。

「ガキを殺すのは、趣味つてわけじゃあないけどね……」

少々脅しつけてあっさり尻尾を巻いて退散してくれるようならそれでよいが、しつこいようならば、始末するのもやむを得まい。

フーケはそう結論すると、向かってくる連中を迎え撃つ態勢に入った。

シルフィードは、フーケのゴーレムから斜め上におよそ二、三十メートルほど離れた位置まで近づくと、そこで停止してホバリングを始めた。

この位置ならば、敵の腕は届かない。

また、何か飛び道具が撃たれたとしても、対応する時間の余裕があるだろう。

とはいえ、それは逆に言えば、相手の側にも同じだけの対応する時間が与えられるということだ。

タバサとしては、フーケが宝物庫に入っている間にゴーレムの下に辿り着ければ十分に勝機があると考えていた。

術者がいなくなつて動きを停止しているゴーレムなら破壊できるかもしれないし、出てくるところを待ち伏せて不意打ちすることもできる。

しかし、さすがは怪盗というべきか、予想以上に素早く仕事を終えたようで、こちらが攻撃できる距離まで近づいた時には既に仕事を終えてゴーレムの肩に戻つてしまつていた。

しかも逃げ出さないとところを見ると、どうやらこちらの存在に気が付いて、迎え撃つ気んでいるようだ。

しっかりと態勢を整えている相手に対してこの距離から攻撃しても、おそらくはあの巨大ゴーレムによって難なく防がれてしまうだろう。

それでもタバサは、シルフィードがホバリングに入るのとはほぼ同時に、自分の身長よりも大きな杖を振るつて呪文を唱えた。

たちまち大きな竜巻が渦巻いて、ゴーレムめがけてぶつかつていく。

しかし、ゴーレムはフーケをかばうように手をかぎただけで避ける様子もなく、竜巻をまともに受けてもほんの少し表面の土が削れただけでびくともしない。

続けてキュルケが、胸に刺した杖を引き抜いて呪文を放った。

突き出された杖から炎が噴き出してフーケを狙ったが、やはり同じ

ようにゴーレムのかざした腕に防がれてしまう。

その腕に炎が絡みついてしばらくごうごうと燃え盛ったものの、片腕を炎に包まれようともゴーレムはまるでこたえていないようだった。

ルイズもまた、杖を振って呪文を唱えた。

彼女は『ファイヤーボール』の呪文でフーケ本体を狙おうとしたのだが、まるで的外れなゴーレムの胸部のあたりで小さな爆発が起こり、土が少々飛び散っただけだった。

「やつぱり、ダメね。燃やすにしても吹き飛ばすにしても、相手が大きすぎるわ」

「……そうかも」

悔しげに顔をしかめるキュルケの言葉に、ユマが小さく頷いた。

彼女はカードから小さな体には不釣り合いに大きいストロングボウを取り出して矢をつがえていたが、撃つことはしなかった。

ここまでの攻撃の結果を見る限りではゴーレムの本体に効くとは思えなかったし、フーケ自身は腕の陰に隠れていて狙うことができないからだ。

弓を構えながら問いかけるようにマリオンの方を見てみたが、彼は黙って首を横に振った。

「残念だが、この距離ではぼくには何もできそうにないよ」

呪歌（まがうた）の効果を相手に及ぼすには少し遠すぎたし、吟遊詩人であるマリオンは、武器も護身用の最低限のものくらいしか持ち歩いていないのである。

手をこまねいているルイズらをあざ笑うかのように、ゴーレムがもう片方の腕を持ち上げて、上空のシルフィードに向けて突き出した。その先から、散弾のようにいくつもの石礫が放たれる。

タバサが素早く杖を振って風の防護膜を作りだすことで、間一髪その攻撃を凌いだ。

ゴーレムはそれを尻目に、ゆっくりと学院の外の方に向かって歩き出す。

「フーケが逃げるわ、追わなきゃ！」

ルイズがそう叫んだが、タバサはじつと考えてから、首を横に振った。

「……追わない方がいい」

「なんですって!? このまま、あんな賊なんかを見逃すっていうのー!」
ルイズはいきり立ったが、タバサの気持ちは動かなかった。

「学院の外にまで追いかけて行けば、援軍は期待できない。私たちが
けでは分が悪い」

学院の中でなら、このまま戦い続けていればそのうちに気が付いた
教師なりがおそらく援軍に駆けつけてくれるはずだ。

しかし、フーケを学院の外にまで追いかけていけば、それは期待で
きなくなる。

かといって、自分たちには出ていこうとする巨大ゴーレムを止めら
れる方法もないのだ。

フーケが自分たちを倒さないうちに学院の外に向かおうとしてい
るのは、つまり、しつこく付きまとわなければこちらを始末する気は
ないということ。

それを無視してどこまでも追っていくという態度を示せば、向こう
も逃げ切るために本気で攻撃してくるだろう。

ここは大人しく引き下がって、後のことは学院の教師たちなりに任
せた方が賢明だ。

「何を言ってるのよ! 貴族は……」

「私には、勝算もないのに無関係な盗賊を捕まえるためだけに、シル
フィードをこれ以上危険にさらす気はない」

タバサは、きっぱりとそう宣言した。

「……っ、う……」

ルイズは俯いて、悔しそうに唇を噛みながら身を震わせた。

貴族として誇りを重んじるのが当然のことならば、メイジとして使
い魔の幸福を重んじるのもまた当然のことであり、その言葉は無下に
否定できるものではない。

現実的に勝つ方法があるならともかく、勝算もないのにそれでも戦
わせろというわけにはいかないだろう。

そう、タバサを責めるわけにはいかない。

ルイズは、無策で無力で、何もできない自分が、ただ悔しかったのだ。

「……」

彼女の使い魔であるユマは、そんなルイズの姿を傍らでじつと見つめて、心を痛めていた。

なんとかしてあげたい、と思った。

どうにかしてフーケをここで、ルイズの、みんなの力で捕まえることができないものだろうか。

そう考えながら、もう一度、手持ちのカードに目を通してみた。

そこで、一枚のカードが目にとまった。

「……撤退する」

タバサがもう一度、確認するようにそう言った。

問答無用ですぐに撤退せずにわざわざもう一度確認したのは、彼女自身、誰かがいい案を出して自分を引き留めてくれないものだろうか
と、無意識のうちにそう期待していたからだだった。

表情こそ変わらなくとも、彼女だってルイズの悔しげにうなだれる姿にはいささかなりとも心を痛めていたのである。

それに、彼女自身にも密かに負けず嫌いなところがあって、全力で戦ってははいないとはいえこのまま成す術なく撤退するというのはどうにもすつきりしなかったのだ。

そのお陰で、彼女が内心期待していた少女の口から、内心期待していた望む言葉を聞くことができた。

「まって！ 私に、作戦があるの」

全員の注意がユマに集まる。

「……何？」

「これを使えば……、ゴーレムの体全体は無理でも、フーケを守っている腕くらいは壊せるかもしれない」

そう言って、一枚のカードをみんなに見せる。

『サンダーワーム：魔法（魔法攻撃）』

いかづちの精サンダーワームを呼び出して敵を攻撃する魔法の

カード』

「……魔法のカード？　これ、そんなにすごい威力があるの？」

キュルケの問いかけに、ユマは首を横に振った。

「いいえ、そんなにすごく強い魔法じゃないわ。私が使っても、たぶんあの腕は壊せないと思う」

サンダーワームは、これといって癖のない平凡な単体攻撃魔法である。

ガンダウルフのような超一流の魔術師であればともかく、自分が使っても、効果はたかが知れている。

あれほどの巨大なゴーレムに対しては、大きなダメージはまず与えられないだろう。

「……？　それじゃ、どうするっていうのよ？」

「カード使いのカードは、使うのに向いた人になら一時的に渡して使ってもらうこともできるの。メイジなら、魔法のカードを使えるはずだわ。だから……」

ユマはそこで一旦言葉を切って、ルイズの方に顔を向けた。

「私には無理でも、ルイズに使ってもらえば、きっと」

「え？」

突然指名されて、ルイズは目を丸くした。

「な、何を言ってるのよ!?　だ、だって、私は……」

認めたくはないが、『ゼロ』の自分にはたして魔法のカードが使えるものだろうか。

仮に使えたとしても、トライアングル・クラスのタバサやキュルケの呪文ですら通用しないあのゴーレムに、効果があるものだろうか。「カードにもう入っている呪文だから、失敗はしないはずよ。前にタバサが言ってたわ、ルイズにはすごい魔力があるはずだって。私も、そう思うの」

「……そ、そんなこと……」

あんなの、また呪文を失敗してしまって落ち込んでいる自分を励ますために大袈裟に言っただけではないのか。

しかし、ルイズ自身が困惑して自信をもてずにいるのをよそに、タ

バサとキュルケ、それにマリオンは、納得した様子で大きく頷いた。「わかった。シルフィードに、危険でないぎりぎりまであのゴーレムに近づいてもらう」

「そうね、ユマちゃんとおなたであの腕を壊してくれれば、あとは私たちの仕事よ。もしうまくいかなかったら、そのときはすぐに反転して逃げだせばいいんだし。気を楽にして臨みなさいな」

「では、私はユマの代わりに弓を引き受けましょう。あまり武器の訓練は受けていませんが、いないよりはましでしょうから」

下手をすれば命にかかわるこの状況で、みな嘘偽りなく自分の力を信じて、大事な役目を任せてくれているのだ。

そのことがわかると、ルイズの心にも火が付いた。

「そうね！ 私たちは貴族よ、あんな賊ごときなんてことないわ。やってやろうじゃないの！」

「……ふふん、あいつらは追ってこないみたいだね。お利口さんでよかったよ」

巨大ゴーレムの肩に乗ったフーケは、そう呟いてほくそ笑んだ。

ウィンドラゴンに乗った学生どもはこちらの反撃を凌いだが、その後歩き出したこちらを追ってくる様子はない。

もうすぐ学院の外壁をまたぎ越して、見つかる心配なくどこへでも姿をくまることができるようになる。

これで、お互い不幸な目に合わずに済んだというものだ。

しかし、そう思つて人心地が付いたところで、あのウィンドラゴンがまた動き始めた。

逃げ出そうというのではなく、こちらの方へまっすぐに向かってくる。

「ち……、なんだい。やっぱり馬鹿どもかい」

こちらが遠くへ去っていくのを見ているうちに、怯える気持ちが消えて徐々に蛮勇を取り戻していったのかもしれない。

まさに、喉元過ぎれば熱さを忘れるというやつだろう。

立ち去る前に、もっと手酷く脅しつけておくべきだったか。

「仕方ない。そういう人を舐めた態度が命取りになることもあるって教えてやるよ、クソガキどもが！」

フーケはウインドドラゴンがある程度近づいたのを見計らって巨大ゴーレムを出し抜けにぐるりと振り返らせると、腕を大きく横に振らせた。

そこから大きな土の塊がこそげ落ちて、ドラゴンを目掛けて飛んで行く。

今度は、とつさに張ることができる薄い風の防壁などでは防ぎきれないだけの質量だ。

しかし、シルフィードは的確に上昇気流を捕らえ、ほぼ直角に急上昇して容易くその土塊を避けてみせた。

そうしながら、きゅいきゅいとかわいらしい鳴き声をあげる。

『風韻竜を甘く見ないでほしいのね！ これだけの距離があれば、そんなのろまな攻撃なんかシルフィがやられるわけないわ！』

それから、第二射が来る前に急降下して、まっすぐにフーケをめがけて突っ込んでゆく。

攻撃と攻撃の間の隙を狙って、一気に間合いを詰めるという作戦だった。

(思ったよりいい動きをする竜だね。でも、無駄さ！)

フーケは慌てず騒がず、先程と同じようにゴーレムの片腕を自分の前にかざさせて、敵と自分の間の射線を遮った。

こうしておけば、どんなに間合いを詰められようが向こうの攻撃はこつちには届かないのだ。

仮にあのドラゴンが腕に向かって自爆特攻するような無茶な真似をしてきたとしても、その時はゴーレムの腕を鉄にでも変えるだけのこと。

攻撃を凌ぎながらひとまず学院の外にまで出てしまえば、所詮は烏合の衆でしかない学院のメイジどもに深夜、自分たちの領域を離れた敷地外にまでこつちを追いかけてくる勇気はまずあるまい。

それからゆつくりと、この面倒な連中を始末するなり追い払うなりすればよいのだ。

フーケがそう考えていたところに、突然ウインドドラゴンの方から眩い雷光のような輝きが迸った。

ユマが手渡したサンダーワームのカードの力を、ルイズが解き放ったのである。

(……………?)

何が起こったか見極めようと、少しだけゴーレムの腕をずらさせてそちらの方に目をやったフーケは、奇妙な光景を目の当たりにした。体が稲妻でできた大蛇のような姿をしたものが、ウインドドラゴンの周りをのたうっている。

「な、なんだい、あの魔法は……………」

あんなもの、見たことがない。

系統魔法にも電撃を放つ『ライトニング』の呪文はあるが、人ひとりを撃つ程度のそれよりもずっと大きく、何よりも稲妻自体が自分の意思をもつ生物のように不規則に宙を踊っていた。

(まさか、精霊? ……先住魔法?)

フーケがそう考えたところで、その稲妻の蛇は鎌首をもたげて、彼女の方に向けて突っ込んできた。

咄嗟にゴーレムの腕でそれを受け止めさせようとしたが、大蛇はうねって土の腕に絡みつき、締め上げ始めた。

バチバチツと凄まじい火花が上がり、土の焼け焦げる嫌な臭いがする。

しばしの後に稲妻の蛇が消滅すると、それと同時にゴーレムの腕もぼろぼろに崩れ落ちてなくなってしまうた。

「な……………」

フーケは呆然とした。

対生物の殺傷力は高くとも構造物の破壊には本来適さないはずの稲妻の呪文で、巨大な土ゴーレムの腕が焼き切られるなんて。

しかしすぐに、はっと気を取り直す。

ゴーレムの腕が落ちたということは、今、自分の身を守ってくれるものはなくなっているのだ。

「くっ!」

慌てて杖を構え直し、防御の態勢を整えようとする。

しかし、予想外の事態に一瞬頭の中が真っ白になり、行動が遅れたことが命取りだった。

杖を握る腕を狙って、マリオンの放った強弓の矢が飛来する。

その矢は咄嗟に石礫を放って迎撃できたものの、そのために魔法を使ってしまったフーケには、もはや続くキュルケとタバサの攻撃を防ぐ手段はなかった。

「ぎっ、ぎやああああっ!?!」

キュルケの炎に巻かれ、タバサの風の刃に斬られて、フーケはたまたらずゴーレムの肩から転げ落ちていく。

「……………あっ……………?」

その時、斬り裂かれた彼女のローブの胸元から宝物の『破壊のカード』が散らばっていくのを、ユマたちは目のあたりにした……………。

第二十一話 事の始まり

戦いが済んだ後、ルイズらはフーケに最低限の治療を施してから医務室に運び込み、学院長室で事の次第を報告することとなった。

「ふうむ……。まさかあのミス・ロングビルが、巷で悪名高い怪盗だったとはのう……」

「ええ、驚きました。なんといいものか……」

学院長のオールド・オスマンの他にコルベルもこの場に同席して、一緒に報告を聞いている。

他にも駆けつけてきた教師はいたが、当面の事件は既に解決したということまでひとまず解散し、今は宝物庫の穴を塞いだりぞろぞろと野次馬にやってくる生徒らを追い返したりといった作業にそれぞれあたっていた。

身近で親しくしていた人間に裏切られたという事実に関心を痛めているのであろう、沈んだ様子の二人を前に、ルイズらも神妙な面持ちになる。

もっともその後、街の居酒屋で美人な上に媚びるように擦り寄ってきたフーケに気をよくして独断で採用し、いきなり秘書に取り立てたなどという学院長の話を聞くに及ぶと、一転して白けたような顔になったが。

おまけにコルベルも、何か後ろめたいことでもあるのか、そんなふざけた学院長の言葉に途中から同調する始末であった。

「……ん、オホン」

生徒らの冷たい視線に気がついたオスマンは、決まり悪そうに咳払いをすると、厳しい顔を取り繕った。

「ともあれ、君たちの勇氣ある行動には厚く礼を述べるぞ。まさに、貴族の鑑である」

ルイズとキュルケが誇らしげに、タバサはいつもどおりの様子だが他の二人に合わせてお辞儀をした。

貴族でないマリオンとユマは礼をしたものかどうかかわからなかったので、とりあえず曖昧に軽く顔を伏せておいた。

「おかげで、『破壊のカード』を奪われて大きな騒ぎとなることも避けられたし、悪名高いフーケもついにお縄となった。一件落着じや」

オスマンが、ルイズら学生三人の頭を順番に撫でていく。

ユマは、それが終わるのを待ってから、遠慮がちに声をあげた。

「あの、学院長先生」

教頭先生、校長先生なのだから、当然学院長のあとにも先生をつけるのだろうかというのが、日本の学生であるユマの解釈だった。

「なにかね？」

「ロングビルさんは、大丈夫でしたか？」

「む？ 大丈夫か、というと？」

「捕まえる時に、大けがをしたみたいだったから」

まあ、地面に墜落する直前にタバサがレビテーションで助けていたし、杖を取り上げて軽く縛ってからヴィタルの呪文をかけて傷も塞いだので、大丈夫だろうとは思うのだが。

深手を負った衝撃のためか学院側に引き渡したときにもまだ意識を失っていたので、容態が気になったのだ。

フーケを攻撃した時点では正体が顔見知りのミス・ロングビルだとは知らなかったし、以前に瞑想の中でエルフラしき少女と仲睦まじく話すロングビルの姿を見たユマには、彼女が根っからの悪人とは思えなかったということもある。

もちろん、それはそれとして盗みは悪いことには違いないし、こちらを攻撃してきたのだから、捕まえたこと自体は悪かったとは思わないが。

問いかけるようにじつとこちらを見上げてくるユマの顔を、オスマンはまじまじと見つめ返した。

「……ふむ、確かに。人として、怪我人を気遣うのは当然のことじやな」

オスマンはふっと相好を崩すと、ユマの頭も生徒たちと同じように優しく撫でる。

「安心したまえ。フーケは君らの処置が早かったおかげで、なんら命に別状はない。先ほど意識も戻ったとのことじや。当面はこちらの

方で拘禁しながら、念のため容態を見ておこう。早めに城の衛士たちに引き渡したい旨、翌朝には連絡を送るつもりでおるよ」

ほっとした様子でこくりと頷いたユマの顔をもう一度優しげに見つめてから、オスマンは生徒たちの方に向き直った。

「この件を王宮に報告する際には、合わせて君らの働きに対して『シユヴァリエ』の爵位を贈るように推薦を出しておこう。ミス・タバサは既に『シユヴァリエ』の爵位をもっておるから、精霊勲章の授与申請じゃ。どちらも、追って沙汰であろう。認められるかはわからんが、いずれにせよ何らかの褒賞は出されるはずじゃ」

それを聞いて、三人の顔がぱあつと輝いた。

「本当ですか、オールド・オスマン」

キュルケの声に喜色がにじんでのいるのも、無理はない。

なにせ『シユヴァリエ』といえは最下級ながらも爵位であり、国から年金も支給される。

なによりも、世襲のできない功績のあつた者に対して一代限りで与えられる身分であるから、確かな実力の証明と言えるのだ。

ましてやルイズやキュルケのような若きでそれを得ることができるといふのは、大変な名誉である。

それ以上にも若いタバサが既にそれをもっているといふのは、親友のキュルケにとつても初耳で、驚きだった……。――

そのタバサとしては、勲章はどうでもよいのだが、合わせて出されるであろう報奨金は大いに嬉しかった。

別に金銭に執着しているというわけではないが、欲しいものを買うにはどうしてもそれが必要になってくるのである。

いろいろと事情があつて実家の方からの仕送りなどは期待できず、概ね『シユヴァリエ』の年金だけで暮らしている彼女は、慢性的に金欠気味なのだった。

お金さえあれば、買いたいものはたくさんあるのだ。

たとえば、本とか本とか本とか。

あと本とか、ついでに本とか。

それから本とか、さらには本とか。

さらに余裕があれば、おいしいものとか……。

ルイズもすっかり舞い上がっていたが、そこでふと、自分たちの喜ぶ様子をわずかに微笑んで見つめている、ユマとマリオンの姿に気が付いた。

「その、オールド・オスマン。あちらのマリオンと、ユマには……」

そう聞かれると、オスマンは少しばかり申し訳なさそうに顔をしかめて、首を横に振った。

「無論、働きについては触れておこう。しかし、残念ながらおそろくそちらの詩人どのと君の使い魔には、国から大きな褒賞が与えられることはまずあるまい」

「そんな！ 二人とも、私たちと同じようにフーケと戦ったのですー」
「わかつておる。しかし、残念ながら、彼らは貴族ではない」

加えて、マリオンはこの国の誰ともつかない根無し草の吟遊詩人だし、ユマの方は年端も行かぬ少女なのである。

王宮側の対応としては、せいぜい礼状の中で一言触れられて、金一封でも出してもらえればいいほうだろう。

もしかすれば、単に貴族が盗賊を取り押さえる場にたまたま居合わせただけとみなされて、それすら出ないかもしれない。

実際、普通に考えればメイジの盗賊を取り押さえるのに役に立つことなどなさそうな二人なのだから、そう判断されたとしても仕方ない面もあるう。

「あら、お国ではずいぶんと心の狭いことをなさいますのね」

キュルケの皮肉っぽい物言いにルイズが顔をしかめたが、何も言わなかった。

彼らにも自分たちに与えられるのと同じだけ見返りがあってしかるべきだというのは、ルイズとしても異論はない。

少なくともユマについては、ルイズの働きの半分は自分の手柄だと主張してもよい立場にあるう。

それなのに何もないというのは、理屈としてはわかるが納得がいかなかった。

「手厳しいのう」

オスマンは、肩を竦めて苦笑した。

それから、一応のフオローをするように付け加える。

「……まあ、爵位や勲章は与えられまいが、まだ君らへの褒賞金とフーケの首にかかっていた報奨金がある。その仲間内での分配については、もちろん君たちの自由にすればよい。王宮の連中も、そこまで口出しはするまいよ」

「そうね。マリオンとユマちゃんの取り分を多めにするのがいいかしら」

キュルケのその提案に対して、マリオンは首を横に振った。

「いいえ、私の分は要りません」

カードから呼び出された分身体である彼にはもらったところで使い道がないというのがひとつの理由だったが、そうでなくても特に金などを要求する気はなかった。

「私は、若き英雄たちの活躍の場に立ち会わせていただきました。それを歌にさせていただくことが、詩人にとっては何よりの報酬です」

分身体は金を本体の元に持ち帰ることはできないが、記憶は後に夢を見るような形で共有することができる。

ルイズらのこの度の活躍は、本物のマリオンによってしばしの後にウルフレンドの各地で、異世界の若き英雄たちの物語の序として歌い広められることなるだろう。

「ですから私の取り分は、みなさんで分けるか、壊された宝物庫の修繕費にでもあててください」

「それはなんとも、欲のない御仁じゃな。ハンサムなだけではなく、心も美しいと見える」

オスマンはそう言うと、ほっほっと愉快そうに笑った。

それから、ふと思いついたように付け加えた。

「おお、そうじゃ。当学院では明日の夜に、『フリッグの舞踏会』と呼ばれる毎年恒例の舞踏会が催されることになっておるのだが。どうか、あなたも参加していかれては??」

舞踏会の主役は、もちろん今宵、大きな手柄をあげた三人の学生に

なることだろう。

その場で、彼女らの活躍を近くで見届けたという美しい詩人に歌や物語を披露してもらえば、さらに盛り上がることは間違いない。

「それは素晴らしい。もし、その場で歌を披露させていただけのでしたら、そしてユマが認めてくれるのでしたら、喜んで」

マリオンはそう言って、申し出を快諾した。

お金は別に要らないが、注目と賞賛の言葉はいつでも大歓迎であるし、貴族のパーティであればおいしい料理やお酒も味わえることだろうから。

「もちろん。マリオンがいてくれたら嬉しいわ」

ユマもまた、嬉しそうにそう答える。

しかし、どうして旅の詩人がこんな年端も行かぬ少女の了承を得る必要があるのかと、事情を知らないオスマンは不審そうにしていた。(まさかこの男、自分から幼女に傅きたがるけしからん趣味でもあるのではなからうな?)

そんなあらぬ疑いを抱いたオスマンの胸中などつゆ知らず、ユマが言葉を続ける。

「そうだわ。シルフィードにも、何かお礼を」

彼女がいなければ自分たちはフーケを捕らえるために宝物庫に駆けつけるのに間に合わなかったはずだし、最後は危険をおしてゴールのかなり近くにまで自主的に接近してくれた。

ドラゴンにはお金の使い道はないのかもしれないが、当然功労者として報いられてしかるべきであろう。

「あの子には、食べ物が一番いい」

タバサが軽く頷いて、そう言った。

報奨金の一部を食費に当てて、今後しばらく食べ物いくらかずつでも増量してやれば、きつと大喜びすることだろう。

その前にまず、先日勝手に町で本代を使い込んで買い食いをした分を、割り当ての中から多少の利息付きで返してもらおうが。

「……ああ、ところで……。君に、少し尋ねたいことがあった」

微笑ましげに話を聞いていたオスマンはそこで、ふと何か思い出し

たようにそう言つて、ユマのほうに目を向けた。

話を振られたユマの方は、小さく首を傾げる。

「なんですか?」

「先ほどミス・ヴァリエールは、君もフーケと戦つたと言つていたが……。君はどのような方法で彼女と戦つたのか、よければ教えてくれないかね?」

オスマンのその問いかけを受けて、ユマはああ、と納得した。

自分のような子供が一体どうやって戦いに参加したのかと、不思議に思われるのも無理はない。

そこで、脇のほうからコルベールがなにやら興奮した様子で、勢い込んで口を挟んできた。

「そう! そうですぞ! もしや君は、巨大なゴーレムを相手に武器を手にとつて渡り合つたのでは!」

さりげなく話を運んで聞き出そうとしていたオスマンは、彼の直接的にすぎる質問に顔をしかめた。

例の『ガンダールヴ』の件について、本人以外の生徒らが何人もいる場所であからさまに尋ねるのはあまりよろしくないだろうに。

(やれやれ)

もつとも、想像通りだとすれば彼女らは全員伝説の使い魔の力を目の当たりにしたということになるわけだし、いずれにせよただの少女などではないことについてはもう気が付いている可能性が高いが。

いずれにせよ、既に口から出てしまった質問はいまさらどうしようもないのだから、オスマンはコルベールと共にじつとユマの方を見つめて答えを待った。

二人の熱っぽい視線を受けたユマは、また首を傾げて少し考え込む。

ややあつて、二人の顔を交互に見つめ返してから口を開いた。

「ええと……。もしかして、先生たちが聞きたいのは『ガンダールヴ』のことですか?」

「……なんと、まあ。君ら全員が、とつくに気付いておったとはのう」
「いやはや。知らずに気を揉んでいたのは、私ら年寄りばかりというわけですか。はは……」

ルイズらが『ガンダールヴ』について知つたいきさつを簡単に説明された二人は、そう言つて苦笑する。

マリオンもそれについては初耳だったので、興味深そうに拝聴していた。

（そうか、ユマ。君はこの世界でもやはり、『選ばれた勇者』だったのか）

別に何者かに選ばれようと選ばれまいと、彼女が勇者であることはもちろんマリオンは最初から知っているのだが。

それでもやはり、そのようなわれがあるということは、物語に華を添えてくれるだろう。

「……で、やはり彼女は巨大なゴーレムを相手に、武器を用いて戦ったのですかな？ 見たところ、何も獲物はもっていないようですが……」

気を取り直して、コルベールがそう質問する。

いずれにせよ『破壊のカード』についても後で尋ねる予定だったのだし、この先生たちには隠すこともないだろう。

ユマはそう考えて、軽くルイズらのほうを窺つて同意を得てから、正直に答えることにした。

「いいえ。カードの力を借りました」

そういつて、懐から数枚のカードを取り出すと、オスマンとコルベールに見せる。

「む。これは……」

「これは、宝物庫の『破壊のカード』ではないですか！ そうか、君はフーケの持ち出したこれを、逆に利用して……」

「……いや。取り戻してくれたカードは一枚も紛失してはおらん、私自身の目で枚数が合っておるのを再三確認したからの。絵柄にしても、初めて見るものじゃ」

オスマンはそう言うってから、真剣な面持ちでユマの顔をじつと見つめた。

「なぜ、君がこれを？」

その質問を受けて、ユマは自分が異世界から召喚されたこと、カード使いと呼ばれる力を持っていることなどを話した。

マリオンもまたそのカードによって呼び出された異世界の人物であることを伝え、証拠としてアイテムやモンスターをいくつかカードから呼び出して見せる。

コルベールは当然ながら非常に驚いた様子で目を丸くし、次いでひどく興奮してユマを質問攻めにしようとしたが、オスマンがそれをたしなめる。

「待ちたまえ、コルベール君。君はせっかちでいかんな、質問は後々時間をかけてゆっくりとしたまえ。そんなに興奮して幼い少女に詰め寄ったりしては、君の趣味が疑われるぞ」

オスマンのほうは、興味深そうにはしているものそこまで驚いてはおらず、ごく冷静な様子であった。

その姿を見て、やはりこの人はカードについてなにか知っているのだろう、とユマは考える。

「学院長先生。その、『破壊のカード』のことを教えてくれませんか？」

ユマがそう質問をすると、全員の注目がオスマンに集まった。

「……うむ。あれは、そうじゃな。もう、かれこれ二十五年、いや、三十年近くも昔のことになろうか……」

皆の視線を浴びたオスマンは、長いあごひげを撫でながら重々しく話し始めた。

「そのころ私は、何晩も続けて同じ夢を見ていた」

「……夢？」

一体それとカードにどんな関係があるのかと、皆が首を傾げる。

「妙な夢であった。私は森の中を散策し、そこで崩れかけた古代の遺跡を見出す。その中には素晴らしい何かがあるに違いないという胸躍る予感がするが、決まって踏み込む前に目が覚めてしまうのじや……」

オスマンはそこで一旦言葉を切ると、目を閉じてその時感じていた想いを反芻した。

若い頃のような未知への憧れ、まだ見ぬ秘宝や、得られるかもしれない力への渴望。

そして、すぐにでも踏み込まねばならないという胸を焦がすような焦燥と、何かに追われてでもいるかのような得体の知れぬ恐怖……。『……話しても、その時私の感じていたすべては伝わらぬであろうが、とにかくただの夢とは思えなかった。私は、夢で見た森と遺跡の姿を思い出して、そのような場所が本当にはないかを調べ始めた』

図書館で古い地図や文献をしらみつぶしに調べ、大勢の人に聞き込みをして、ついにそれらしい場所がトリステインの一角にあるということ突き止めた。

オスマンはすぐに、その場所へ向かうことにした。

「しかし、件の遺跡にそろそろ到着しようかという時に、私はワイバーンに襲われた。それも、何体もの群れにじゃ」

人里離れた土地を単身で旅する以上、当然そのような危険に備えていてしかるべきだったが、その時のオスマンは夢の場所に向かうことばかり気を取られて注意を怠っていたのだった。

おまけに、本来は巨体で目立つはずの幻獣、しかも複数体の群れであるにもかかわらず、どこからともなく突然湧いて出たように思えた。

「その窮地を助けてくれたのが、件の『破壊のカード』の持ち主であった」

オスマンによれば、その人物はカードの中から突然奇妙な大砲のような形をしたものを取り出すと、ワイバーンの群れに照準をつけて機構を作動させ始めた。

『これはこれは、ようやく出会えましたな。……どれ、先日ドワーフ族の遺構から発掘した、オールマイティワイバーンサーカールギー充填、120パーセント！』

……そうして砲身から撃ちだされた眩い閃光が、ワイバーンどもを森の一角もろとも跡形もなく吹き飛ばしてしまったのだという。

「彼は、齢を重ねたメイジらしく思えたな。外見は少しばかり不吉な印象を与えるようなものだったが、実際に話してみると自然で気持ちのいい態度で、人を惹きつけるものをもっていった。私を助け起こし、何くれとなく世話を焼いて親切にしてくれたよ」

「その、出会ったばかりの学院長に、それほど強力な『破壊のカード』を譲ってくれるほどに親切だったというのですか?」

コルベールが、釈然としない様子でそう尋ねた。

「うむ……。私も妙な話だとは思う。しかし、彼は自分も夢に導かれてその場に来たのだと、そう言っておった」

その人物によれば、彼は自分が故郷から持ち出してきたそれらの危険なカードを託し、保管してもらうにふさわしい人物を探していて、夢に導かれてオスマンに出会ったのだという。

『このカードは、特別な才能をもつものにしか扱えませぬ。ですが、私はずいぶん遠い場所から来たので、おそらくこの地には使えるものも、使い方を知る者もいますまい。とはいえただ捨てるといふわけにもいかず、管理していただくにふさわしい方を探していて、こうして歴史ある魔法学院の院長どのに出会うことができた。まさに運命です。なに、別段厄介なことはお頼みしません。ただ、大切に持つておいていただければそれでいいのですよ』

最後にそう言って、オスマンの手に一束のカードをしっかりと握らせると、彼はどこへともなく去っていった。

「それ以来、彼には会っておらん。夢で見た遺跡にも行って見たが、既に発見済みで中は搜索され尽くしているようだったし、崩れかけていてなにも変わったものは見つからなかった。夜ごと繰り返し返されていった夢も、それからは見なくなった……」

そう言って、オスマンは遠い目をした。

「……あの夢は何だったのか、それは今もわからん。しかし、いずれにせよ命の恩人からもらったものであるし、彼の言うとおり間違いなく強力で危険な代物でもある。私はそれに『破壊のカード』と名前を付けて、学院の宝物のひとつとして大切にしまい込んだ、というわけじゃ」

「不思議な話ですわね」

話を聞き終えると、キュルケが皆の気持ちを代表するように、そう呟いた。

ユマはしばらく考えてから、オスマンに質問をした。

「その人の、名前は？」

もしかしたら知っている人かもしれないから、というユマの言葉に、オスマンが頷いた。

「名前はそう、クルガンと言ったな。私は当然貴族だろうと思ったが、彼は、自分はただのクルガンだと言っておった」

「クルガン？」

ユマには、その名前に聞き覚えはなかった。

けれどもまた少し考えて、もうひとつ尋ねてみることにする。

「……どんな格好の人でしたか？」

オスマンは記憶を手繰りながら、その人物の姿形を説明していた。

「ふむ、黒い三角帽をかぶり、黒いローブを身に着け……、確か、先端に宝珠と蛇の装飾が飾られた杖を持っておったな。眉は太く、鼻は高い。目は大きく唇は薄く、黒い濃いあごひげを生やしていたよ。年老いていたが、ごく整った面立ちと言ってよいじやろうな」

その容姿の説明を聞いて、ユマとマリオンは顔を見合わせた。

闇の陣営の中でも屈指の存在であり、かのガンダウルフの宿敵として知られるモンドールが、オスマンの説明にちょうど一致するような姿をしていたからだ。

あるいは、クルガンというのは偽名で、その人物はモンドールだったという可能性もあるかもしれない。

ユマが戦った闇の幹部の中には、カード使いほどではなくてもある程度カードの力を使いこなせる者たちがいたし、モンドールもそうした者たちの一人だったから。

仮にモンドール本人ではないとしても、黒魔道士である可能性は高そうに思えた。

ウルフレンドの黒魔道士は、普通の魔術師が用いない闇の魔術に手

を染め、力を追い求めて自分の欲望を叶えようとする者たちである。彼らは好んで黒を基調とする衣服を身にまとう傾向にあるから、モンドールと同じような格好をしていても不思議ではない。

(それに、事の起こりが夢で見たことだったというのも怪しい)
それは本当に、何かの啓示とか、予知夢とかの類であったのかもしれない。

しかし、ウルフレンドでは腕の良い魔術師であれば、人に夢を見せてその行動を自分の望む方向に誘導してやることくらいは造作なくできることをマリオンは知っていた。

もちろん相手の側も腕の立つ魔術師であれば、普通は意識をシールドしてそういった介入を防いでしまうからなかなか上手いくくものではない。

だが、この世界のメイジはどうやらウルフレンドの魔術師とはずいぶん違っていろいろだし、あるいはそうした手法について疎く、十分な対抗手段を持たないのかもしれない。

とはいえ、そうだとしてもどうしてその男がこの世界に姿を現せたのか、そしてカードを惜しげもなく手放してオスマンに与えたのか。それについては、ユマにもマリオンにも見当がつかなかった。

「……ありがとうございます、学院長先生」

「大変貴重なお話でした、同席して拝聴させていただけたことを嬉しく思います」

二人は悩んだものの、結局その場では自分たちの考えを口に出すことはせずに、そう言って頭を下げた。

彼にとつてはその人物は命の恩人で大事な思い出なのだろうから、証拠もないのに実は悪人だったかもしれない、ワイバーンの一件も自作自演だったかもしれない、などという話をするわけにはいくまい。

ユマとしては、宝物庫の『破壊のカード』についても、フーケの手当てと教師たちへの報告を急いだためにあまりちゃんと見もしないうちに回収されてしまったから改めて調べてみたかったのだが。

まあ、今は事件の処理などで先生たちも忙しいだろうし、見せてくれと頼むのは後日でもいいだろう、と思った。

そもそもあのカードは学院長先生のもので、学院に置いて守るよう
に頼まれたということだから、調べたところで自分がもらえるわけ
もないのだ。

三十年近くも学院に置いておいて何もなかったというのだから、
カード自体には別に危険はないのだろうし、今更少しばかり急いで調
べる必要もあるまい。

それで、もう夜も遅いので、ひとまずその場は解散となった。

・
・
・

『ようやく、待ち望んだ時が近づいてきたようだ』

宝物庫の奥で、ガラスケースの中に戻されたカードの束がかたかた
と震えた。

まるで、忍び笑いを漏らすかのように。

『お前が再び私をその小さな手の中に収める時、お前もまた、私の手の
中に収まることだろう』

第二十二話 夢のようなひと時

フーケが捕縛されたその日の夜、タバサは夢を見た。

夢は母親が自分を庇い、心を狂わす毒を飲んだ日の光景から始まった。

目の前では母が心を壊す毒の入った赤い液体のグラスを口に運ぼうとしている。

その光景はすべて灰色に染まっていて、どこか現実味がない。

どんなに叫ぼうとしても、母を制止しようとしても、夢の中の自分の体はまったく動かず、ただ見ていることしかできない。

その日の実際の自分が、そうだったからだ。

弱かった当時の自分を今になってどんなに悔いても、過ぎ去ってしまった時はもう取り返しがつかないのだ。

母親はこの日から、自分のことを娘だとわからなくなった。

かつての娘の持ち物だった人形を抱きかかえ、それを娘だと思う毎日を送っている。

自分にも命がけの任務が与えられ、到底果たせるはずもないと絶望して、あきらめて死んでいこうとしたが……。

その任務の中である恩人と出会い、彼女の導きのおかげで母のため、復讐のために生きようと決意し、戦う強さを持つことができた。

でも、その恩人は最初の任務の途中で死んでしまって、そのあとはずっと一人で技を磨きながら戦ってきた。

決して母を救うことをあきらめてはいないけれど、心の中のどこかで、この孤独で色のない灰色の悪夢のような日々が、おそらく人生の最後までずっと続くのだろうと思っていた。

それが最初に少し変わったのは、キュルケに出会ったときだった。

しばらくの間は彼女がただ一人の友人だったけれど、最近は使い魔であるシルフィードが来てくれて、続けてルイズやユマとも親しくなった。

自分の日常は、彼女らのおかげでゆつくりとだが、淡い色を取り戻してきたような気がする。

それでも、母のこと、伯父への復讐のことは、いまだに誰とも分かち合えない。

心を壊した母が留まるラグドリアンの実家へ戻るとき、やはり自分は一人で、世界は灰色に染まったままだった。

夢の場面が、現在の母の前に切り替わる。

かつてはあんなにも美しかった顔が、見る影もなくやつれている。まだ四十歳にも届いていないはずなのに、母は既に老齢にさしかかっているように見えた。

ひどく怯えたように震えながら、伸ばし放題の髪の毛の奥からまるでガラス玉のような目をこちらに向け、擦り切れた人形をしっかりと抱きかかえている。

あらぬことをわめいて実の娘を仇のように罵り、物を投げつけ、腕の中の人形を大切そうにひしと抱きかかえる。

見ているだけでも胸が苦しくなってくる、痛々しい姿だったが、夢の中の自分はもちろんどうすることもできずに、その様子を見ているしかない。

それは、これまでも何度も見た悪夢だった。

何度見ても慣れることのない、決まって最後にはうなされながら汗びっしょりで飛び起きる夢……。

けれどもこの日は、いつもとは違っていた。

灰色の部屋の中に、突然、鮮やかな色彩を持つ希望の光が入ってきたのである。

はっとしてそちらに目をやると、ユマがいた。

(どうして、この子が……)

タバサは困惑した。

確かに親しみを感じてはいるし、信頼もしているが、だからと言ってこの場所へ来させるなどおおよそありえないことだ。

もちろん、これは夢なのだから現実でどうであるかなど関係ないのかもしれないが、奇妙なことには思えた。

彼女の手にもっているカードの束が、光を放っている。

いや、正確には束の中にある、一枚のカードがだ。

ユマは安心させるようにこちらに向かって微笑みかけると、その一枚のカードを抜き出して、手渡してくれた。

それを受け取った途端、ぞくりとした高揚感が体を突き抜けた。

(これだ)

この力があれば、きつとなんでも叶う。

母を救うことでも、復讐を果たすことでも、色鮮やかな世界をもう一度取り戻すことでも。

タバサは目を凝らして、そのカードをよく見ようとした。

けれども、眩しい光の中にあるそのカードの図柄は、どうしても見極めることができなかった。

それは鮮やかな色彩の中にありながら、まるで闇そのもののように真っ黒なカードだった……。

「……夢……」

タバサは、寢床の上で身を起こしてぽつりとそう呟いた。

窓の外は、既に白み始めている。

(なにか、意味があるのだろうか)

彼女は普段、予知夢とか夢のお告げだなどというものは信じていなかった。

たまたま見た思わせぶりな夢の内容に、現実の出来事が多少なりと被されば、そこに何か意味があると思ひ込むだけのこと。

なにも被さるようなことが起きなければ夢を見たこと自体忘れてしまうから、よく当たるような気がするだけだ。

あくまでも偶然に過ぎない、と理解していた。

けれど、実際に自分が体験する側になってみると、どうしても何か意味があるような気になってしまう。

何の意味もないにしては、ずいぶんと奇妙な夢だった。

(私は、彼女の……カードの力に、期待している?)

確かに、あの不思議なカードの力はまったく未知のもの。

その中には、例えばこれまでは癒す術の見つからなかった母の心を元に戻すことができるようなものも、もしかしたら……、という思いが胸をよぎったことはある。

先ほどオールド・オスマンから夢のお告げに導かれたという話を聞いたばかりだということもあるし、あるいはそれも影響したのかもしれない。

もちろん、自分の願望が夢に現れただけであるならば、それと実際にうまくいくかどうかはまったく関係のない話だ。

しかし、オールド・オスマンが実際に夢に導かれてクルガンなる人物と出会い、あの『破壊のカード』を手にしたということを考えて、もしかしたらそれ以上の意味があるのではという期待も持たずにはいられない。

とはいえ、ユマを自分の事情に巻き込むわけにはいかない。

彼女はどんなに強いにしてもまだ小さな少女だし、それにルイズのパートナーだし、なによりも、大切な友人だ。

でも、母を救える可能性があるのなら……。

「……………」

タバサはそれからしばらくの間、どうしたものかと考え続けた。

・
・
・

フーケを捕縛した翌日の夜、『アルヴィーズの食堂』の上の階にある大きなホールで、恒例行事の『フリッグの舞踏会』が開かれた。

大勢の生徒や教師らに混じって、ユマも先日ルイズが買ってくれたかわいらしいデザインのドレスを着て参加した。

参加しているといっても、ものめずらしげにきよろきよろしながら邪魔にならない程度に歩きまわりつつ、たまに知り合いと話したり飲み物や食べ物をつまんだりしているだけだが。

それでも、フーケ捕縛の功労者……と、本気で信じる者がどれだけ

いたかはわからないが、少なくともその場に居合わせた人物だということ、親しい使用人たちから仕事の合間にその時の話をせがまられたりして、それなりに楽しんでいた。

ルイズは長い桃色がかった髪をバレツタにまとめ、高貴な印象を与えるパーティドレスに身を包んでいた。

常日頃の飾り気のない姿では目立たなかったその美貌にいまさらながらに気付いたのか、男子生徒らが次々にダンスを申し込んでくる。

しかし、ルイズはそれをすべて断ると、ユマと一緒に喧騒の中心から離れて、ゆったりとパーティを楽しむことに決めた。

いつもゼロだ無能だと陰口を叩かれてきた自分が思いがけず得た賞賛が嬉しくないわけではなかったが、今は自分一人の手柄であるかのように過剰にちやほやされて得意になっていられるような気分ではなかった。

それよりも、自分をそれだけ活躍させてくれた大切なパートナーと喜びを分かち合って時間を過ごす方が、道理にかなっているような気がしたのである。

「ユマは、踊らないの?」

「私、ダンスは『WA』になっておどろう」と『マイム・マイム』しかやったことないから」

「……? なによ、それ」

「私も、なんなのかはよく知らないけど。私のいたところの学校で、行事とかの時によくみんなで踊るの」

「ふーん……、フォークダンスの一種かしら?」

「ルイズは、踊らないの?」

「……気が向かないのよ。ここでのんびりしてるほうがいいわ」

他の功労者たちも、みな思い思いにパーティを楽しんでいた。

キュルケは、ホールの中心でたくさんの男子生徒たちに囲まれ、笑っている。

彼女はルイズとは逆で、自分にはちやほやされるだけの権利があるのだし、自分と踊ったり話したりしたがっている男たちの望みに応え

る方が互いに思う存分楽しめるといふ考えだった。

それでも、彼女がせがまれて語っているフーケ捕縛の武勇伝を聞いていると、いささかドラマチックに話を盛りすぎてはいるものの、自分の功績と同じくらい他の仲間たちの働きについてもきちんと言及して、手柄を独り占めにするような気はないらしい。

タバサは、上品だがあまり飾り気のないパーティドレスを着て、テーブルの上の料理を平らげることには専念していた。

男女がペアになってホールで睦まじく踊り始めようと、まるで目もくれない。

親友のキュルケが相手を見繕ってあげるから参加しないかと誘ってみても、「知るかバカ、そんなことよりデザートだー」とでも言わんばかりに、ひたすら分厚いステーキだの甘いプディングだの、はしばみ草のサラダだのを貪っている。

それでも時々、何かを気にしているようにちらちらとユマの方を窺っているのは、昨夜見た夢のことが気になっていて、ルイズがいなくなったらそれとなく話を聞いてみようかどうか、と考えているのだった。

普通ならそこまで慎重にならなくても、何か自分の目的にとって有益なカードはないかをさりげなく尋ねる程度のことなら彼女らを巻き込むほどの心配はないだろうと、タバサもそう思っているのだが……。

ユマが『意図を辿る』という能力をもっていることを考えると、隠し事があるのを悟られたらどこまで探り出されてしまうかわからない、という気もした。

不用意な質問をすることに二の足を踏んで、結局昼間の内には切り出せなかったのはそのためである。

そしてマリオンは、その容姿と素晴らしい演奏とで、他の誰よりも人々の注目を集めた。

マリオンはフーケ捕縛の功労者ということで、オールド・オスマンから今回のパーティの途中に時間をもらって、演奏と弾き語りをする許可を取り付けていたのである。

しばらく学院お抱えの楽士たちの演奏によるダンスが行われた後、演奏が一時中断されて、彼がホールの中央まで進み出た。

彼は体全体を大きく動かして聴衆に挨拶したが、拍手はまばらであつた。

その美しい容貌にうつとりと見とれる女性もいたが、ろくに注意を払わずに仲間内の雑談を続けている者も多い。

楽士たちも、飛び入りで出てきたどこの馬の骨とも知れぬ吟遊詩人などのために自分たちの仕事を減らされたとあつて、面白くなさそうにしている。

中には、ひそひそと小声で彼に対するあてこすりのようなことを言い合っている者たちもいた。

しかしそれも、マリオンがユリンの豎琴をかき鳴らすまでのことだつた。

その澄んだ音色が響くや、ホール全体はびたりと静かになつた。

マリオンはそれから、ホールの中央にしつらえられた席に腰を下ろすと、まずは何の前置きもなしに最初の曲を弾き始めた。

それは、呪いによつて昼と夜とに隔てられた恋人たちをテーマにした曲だつた。

神である父と人間である母との間に生まれたある男が、愛する母が死んだ夜に夢の中で父神の訪問を受け、『お前に直接会いには行けないが、せめて何か望みを叶えてやろう』との申し出を受ける。

いつも一人で寂しそうにしている母を見て育つた男は、『自分は永遠の命を得て愛する人とこの館でずっと一緒に暮らしたい』と願う。

しかし、半神である男は真に永遠の命は持ちえなかつたため、『ならばお前はこれから昼と夜のどちらかだけで暮らさねばならぬ』と父神に言われて、愛する人との睦言の時である夜を選ぶ。

それ以来、男は日没と共に起き、日の出の前に目を閉じて、昼間は死んだように眠つて過ごすこととなつた。

やがて男は愛する女性と巡り合い妻に迎えるが、その女性は夜にしか姿を見せない男は吸血鬼なのだと思ひ、男の訪問を拒むために夜の

間はその身を石とする呪いを自らの身にかけてしまう。

ようやく巡り合えた愛する人の身も心も、自分に対しては硬い石のままであることを嘆いた男は、やがて……。

演奏の最初の一節が終わらぬうちに、神の楽器の音色と神の息子の歌声は、聴衆の心を完全に掴んでしまった。

朗々と弾き語るマリオンの表情は、自分の歌には誰も抵抗はできないという確かな自信に満ちており、それは決して不当な思い上がりではなかった。

彼の曲が続く間中、他所事を話したり、飲み食いをしたりしようとする者は誰もいなかった。

商売敵である楽士たちでさえ、マリオンの曲が続く間は感動や後悔、恥じらいの念に打たれて、みな押し黙っていた。

中には、感情の高まりのあまり俯いて身を震わせ、落涙する者さえいた。

彼が一曲引き終えてまた大きな動作でお辞儀をすると、聴衆から嵐のような拍手が巻き起こった。

「今宵はこうして遠い異郷の宴にお招きいただき、光栄です。最初は私自身の見聞きした物語を歌いましたが、続けては、さまざまな地の歌い手たちから学んだ物語をご披露しましょう」

今度はそう前置きを述べてから、いくつかの曲を次々と披露していった。

歌の力だけで巨人たちの戦争を止めたという、とある少女の物語。

英雄を夢見て冒険の旅に出る、コボルドの詩人の物語。

破天荒な衛視がいる異世界の公園前詰所を舞台にした、波乱万丈の日々の物語……。

聴衆たちはみな、彼の紡ぐ物語の世界に深く入り込んでいた。

冒険譚には目を輝かせ、ロマンスには頬を紅潮させ、悲しい場面では瞳を潤ませ、喜劇的な展開には遠慮なく頬を緩ませて笑う。

そして曲の終わりには、決まって大きな拍手が沸き起こった。

(この子、英雄の話とかが好きだったのね)

コボルドの詩人が英雄と共に冒険を潜り抜けていくという詩人の話を、恋する少女のような熱っぽいきらきらした目と上気した頬で真剣に聞いている親友の姿を見て、キュルケは微笑ましく思った。

今のところ、同年代のクラスメートであれ大人の教師であれ、生身の男とのダンスを愉しむような気はないらしいが。

彼女はまだ、物語の勇者や王子さまに憧れる少女だということか。

マリオンは一通りの曲を終えると、今度は席を立ってゆったりとした楽しい曲を弾きながら、ホールを回り始めた。

聴衆は我に返ったように、再び酒や料理に手を出し始め、他の楽士たちもまた、マリオンのそれと競合しないような優雅なダンスのための楽曲を奏で始める。

みな、悪い意味ではなく、彼の演出に巧みに操られているかのようだった。

彼の行く先々で女子生徒らがきやあきやあと黄色い声を上げながら、マリオンに杯を手渡してワインを注いだり、歌や話をせがんだりする。

その中には、先日ギーシュをしこたまぶちのめしたモンモランシィやケティの姿もあった。

ちなみにそのギーシュは、いまだに怪我が完治していないらしく、パーティの会場には姿を見せていない。

男子生徒らの中には貴族でもない飛び入りの男に注目をさらわれていることがいささか面白くなさそうな者もいたが、たとえばそうであつても、彼らもまたマリオンの歌に感動したことは変わらなかつた。

マリオンはそんな男性陣にも愛想よく接し、リクエストに応じて勇ましい曲や物語を気前よく披露したり、カップルのためには即興の曲を作って贈ったりしたので、彼らの機嫌もすぐに持ち直した。

中には、自分もマリオンに曲を贈ってもらいたいからと、あまり気のなかつた男子生徒からの誘いを場の勢いで受け入れる女子生徒な

どもいて、彼のおかげで何組かのカップルが新しく成立しさえしたらしい。

当然、そんな恩恵にあずかれた者たちは、彼に大いに感謝していた。

そのとき、舞踏会の喧騒の中に、前触れもなく窓から一羽の伝書梟が飛び込んできた。

灰色の梟はまっすぐにタバサの元へとやってくると、その肩に留まったが、それに気付いた者はほとんどいない。

タバサの表情が、わずかに硬くなった。

梟の足から書簡を取り上げて読むと、彼女の目に、強い光が宿る。

それは、マリオンの演奏を聞いていた時の目の輝きとは、また違った種類の、諸々の感情がこもった光だった。

彼女は音もなくすつと会場を抜け出して、まっすぐに人気のないバルコニーへと向かった。

そうして手すりから身を乗り出して口笛を吹くと、やってきたシルフィードの背に身を躍らせる。

「……………」

最後に、少しだけ未練のあるような目で、賑やかな会場を振り返った。

マリオンが自分のところに来てくれたら、もう少し英雄の話をしてくれるようにせがんでみようかなどと、人とかかわりをなるべくもちたがらない彼女らしからぬ算段を立てていたのだった。

それほどに、彼の語る物語には惹き付けられるところがあった。

それに、ユマのこともある。

(…………話は、後でいくらでも聞ける)

そのためにも、まずは無事に今回の『任務』を終えて戻らねばならない。

これ以上、余計なことを考えている余裕はない。

タバサは一度目を閉じて深呼吸をし、雑念を振り払った。

それから、感情の籠らない目でまっすぐに前を見つめながら、シルフィードの背に体を預けて、夜の闇の中を飛んで行った……。

マリオンはぐるりと会場を回った後に中央の席に戻ると、最後に新たに作った、ルイズらの昨夜の活躍を謳う物語を奏で始める。

実際以上に勇壮に脚色を交えて語られている部分もあったが、昨夜の戦いをうまくまとめ、短い美しい一つの物語に仕上がっていた。

そして、彼の技量をいかんなく発揮して歌われたその物語には、超常的なまでの臨場感があった。

ルイズやキュルケ、タバサらとゴーレムとの戦いが語られる間、聴衆は皆、実際にその場に立っているかのような錯覚を覚えた。

実際、彼らは風竜の背に乗って飛びまわり、巨大なゴーレムによる地面や空気の振動を感じ、その体から発する土の匂いを嗅ぐことさえできたのである。

曲が終わっても、しばらくの間は誰もが幻想の世界の余韻に浸っているようで、しんと静まっていた。

ややあって、大きな拍手が巻き起こるとともに、誰が言いたすともなく彼女らの活躍を称える声があちこちから上がって、杯が掲げられた。

「みなさん、ありがとうございます。素敵なお歌と過分なお言葉を頂いて、このツエルプストー、感激の極みですわ」

胸を張って誇らしげに微笑みながら手を振ったり、大仰にお辞儀をしたりして、聴衆からの賞賛の声に堂々と応えるキュルケ。

それとは対照的に、ルイズは常日頃の彼女に対する対抗意識もどこへやら、真つ赤な顔で恥ずかしげにもじもじしている。

褒められ慣れていない彼女に、いきなりこんな大舞台での賞賛はいささか刺激が強すぎたらしい。

「おめでどう、ルイズ。すごく格好よかったわ」

そう言って彼女の顔を見上げながら、しっかりと手を握って微笑みかけてくれたのは、ユマだった。

「あ、ありがとう……」

かーつと、ますます顔を赤くして、照れたようにそっぽを向く。
「で、でも、あんな大袈裟な歌なんて……。それに、ユマのことが入ってなかったわ」

「だって、マリオンにそう頼んだもの。ルイズも、それは知ってるでしょ？」

あまりカードのことについて大っぴらに話すのもどうかということとで、オールド・オスマンやユマ自身の希望で、彼女の働きについては触れられていなかったのである。

もちろんそれはこの場で披露する時だけの話で、マリオンがウルフレンドに戻ってから酒場などで同じ歌を歌う時には、彼女の活躍も織り込まれるだろう。

デイアーネやルフィーアら、ウルフレンドの仲間たちに、自分がこちらの世界でも仲間たちとうまくやっているのだということとを彼の歌を通して知ってもらえたなら、それは嬉しいことだと思う。

「それは、そうだけど……」

ルイズはそれでも、少なくとも自分と同じくらい働いたユマに何も見返りがないということとを、しきりに気にしている様子だった。

しばらく考えた後に、彼女が出した結論は。

「……ユマ、私と踊りましょう」

「え？」

「あなたは私たちと同じ、今夜の主役なんだから。あなたも、この舞踏会に参加するべきだわ。私と一緒にね」

「でも、私、踊れないから……」

「そんなの、私が教えてあげるわよ。ほらー！」

ルイズはそう言って躊躇するユマの手を取ると、思い切ったようにずんずんとマリオンの元へ向かって行って、彼にリクエストを出した。

「ねえ、お願い。踊りたいの。私たちのために、なにか弾いてくれる？」

もちろん、楽士たちの曲に合わせて、他の生徒らと同じダンスを踊ることもできる。

だが、今はそれよりも、自分たちのためだけの特別な曲が欲しかった。

自分たちはなんといっても今夜の主役なのだから、そのくらいのがままは許されてもいいだろう。

マリオンが快諾して美しい調べを奏で始め、二人がそれに合わせて踊りだすと、大勢の注目が彼女らの方に向いた。

ホールの中央付近で、今日の主役の一人が、大人気の吟遊詩人の奏でる美しい調べに合わせて踊ろうというのだから、周囲の視線を集めないわけがない。

その相手が使い魔とはいえ同性の稚い少女だというのも、注目をいや増す要因になっているのだろう。

その注目の中を、ルイズはつんとして優雅に踊っている。

大喝采を浴びるのは不慣れであっても、公爵家の令嬢らしく、舞踏会で浴びる注目や踊りにはそれなりに慣れていた。

それでも、頬はまだ赤みがかっているの、恥ずかしくないわけではないらしい。

ユマの方は、自分よりも背の高い彼女の動きに合わせて見様見真似で勉強しながら一生懸命に、ややぎくしゃくと手足を動かしている。

とはいえ、物覚えはいいので、少し経つとかなりスムーズに踊れるようになった。

「……なんだか、たくさん見られてるみたいで、恥ずかしい。ドキドキするわ」

「気にしないで。私もよ」

二つの月がホールに月明かりを送り、蝋燭の灯りと絡み合って、幻想的な雰囲気を作り上げている。

その中で、二人の少女らは周囲の視線を浴びながら、お互いに見つめ合いながら、くるくると優雅に踊り続けた。

「……へえ、ルイズも踊る気になったのね。それもユマちゃんどだなんで、なかなか洒落てるじゃないの！」

二人のダンスを見つめながら、キュルケがそう感想をもらした。彼女としてはマリオンをダンスに誘おうかと狙っていたのだが、彼が演奏役に必要らしいので、ルイズらのために見合わせてやることにした。

ならば自分も、代わりにもう一人の主役と一緒にダンスでも踊って注目を競おうかと思えども、その親友の姿は見当たらない。

最初は花でも摘みに行ったのかと思っていたのだが、いつまで経っても戻ってこないところを見るとさっさと部屋に引き上げて寝てしまったのか、それともこんな夜更けなのにどこかに出かけたのか……。

「……まったく、あの子ってば。こんなに素敵な夜だっていうのに、一人でどこかにいなくなっちゃうんだから……」

キュルケはタバサに対するぼやき半分、心配半分で、そうひとりごちた……。

第2章

第二十三話 新たなるクエスト

舞踏会の終わった翌日、ユマはさつそくオスマンに掛け合つて、『破壊のカード』を検分させてもらうことにした。

それほど急ぐことでもないのだろうが、カード使いとしては当然ながら、早く調べてみたかったから。

「恩人から預かつたきり、長年謎のままだった品じゃからのう。君が調べてくれるのなら、私としてもありがたい」

オスマンはそう言つて、快く承諾してくれた。

「ありがとうございます、学院長先生」

ユマはペこりと頭を下げると、オスマンと共に宝物庫へ向かつた。もちろん彼女の『主人』であるルイズも、そしてキュルケも一緒だった。

「せつかくまた、ユマちゃんが面白いものを見せてくれるかもしれないっていうのに。あの子は一体、どこへ行ったのかしらね？」

キュルケは野次馬根性でわくわくと目を輝かせていたものの、ふとこの場にはいない親友のことを思い浮かべて、そうぼやいた。

タバサはあの舞踏会の夜、いつの間にもやら会場から姿を消してしまつて、いまだに戻っていないのだ。

そういうことはこれまでも度々あつたのでそう心配はしていないものの、不満ではあつた。

（あの時は珍しいくらい楽しそうにしてると思つたのに、まったくもう！）

彼女がそんなことを考えている間に、一行は宝物庫へ着いた。

フーケが壊した壁面は、教師たちが『錬金』の魔法をかけることで、既に塞いである。

無論、あくまでも応急的な処置であり、近いうちにきちんとした修理が施される予定だが。

「宝物庫が元に戻るまでの間は、ひとまずここに隠しておいた」

オスマンはそう説明しながら杖を振ると、宝物庫の目立たない片隅にある隠し戸のようなスペースを開き、収納されていた『破壊のカード』を取り出す。

そのまま『念力』で手近の机の上まで運ぶと、さあ自由に見ておくれと、ユマを促した。

「じゃあ、見させてもらいます……」

ユマはそう言って机に歩み寄り、そつとカードの束に手を伸ばそうとした。

その時。

——よくぞきた、……カード使いの名のもとに、おのれの定めを手繰り寄せるがよい……。

「……!？」

突然、聞こえてきた声に、ユマははつとして目を見開いた。身を起こして、きよろきよろとあたりを見回す。

「ど、どうしたのよ？」

「ユマちゃん、何かあった？」

ルイズやキュルケは、そんなユマの姿を見て怪訝そうにしている。

「あの、……いま、なにか聞こえなかった？」

そう尋ねるが、ルイズもキュルケも、オスマンも、困惑したように顔を見合わせて、首を横に振るばかりだ。

「別に、何も聞こえなかったわよ。空耳じゃないの？」

「……そう」

ユマは納得しきれない様子で頷くと、もう一度カードの束にそろそろと手を伸ばしてみた。

——はじめに、お前が赴くべきところを選ぶがよい……。

(やっぱり……)

どうやらこの声は、自分の心の中にだけ聞こえているらしい。

そしてユマは、このような文句には聞き覚えがあった。

細部は少し、違っているようだったが。

困惑と懐かしき、期待と不安の入り混じったような複雑な思いを抱くユマの前で、カードの束が自然に動き出し、シャッフルされていく。やがて、その中から8枚の札が弾き出され、ユマの前に裏向きのまま並べられた。

彼女以外の三人は、呆気にとられた様子だった。

「ち、ちよつと、ユマ。これは何よ、そのカード、どうなってるの?」

「それも、カード使いの力ってやつなのかしら?」

「私も、そのカードを幾度となく手に取って見たが。そんな現象が起こったことは……」

口々に尋ねる三人に、ユマは困ったように首を傾げた。

「……わからないわ」

わかるのは、目の前にあるこれはどうやら同じカードでも自分がデッキに組み込むようなものではなく、『占い札』であるらしいということだけだった。

かつてアインガングにいたころ、占い師の館で何度となく引いた経験がある。

引けば、その組み合わせに応じたクエストの舞台へ、カードの導きによって飛ばされるのである。

ただ、あの時は手引きをしてくれる占い師がいたが。

この札はそれ自体が意思を持っているのか、自動的に動き出してカードを配ってきた。

単にそういった性質のものだというだけなのか、それとも何かの罫なのか。

カードでできているわけではないこの世界では、占い札を引いたらどんな結果が生じるのか……。

まったくわからないし、危険かもしれない。

それでも、これはおそらく運命であり、引かなければその運命は先に進んでいかないのだということを、ユマは直感的に感じ取ってい

た。

(じゃあ、……これ)

なおも質問を続けたそうにするルイズらをよそに、ユマは黙って一枚のカードを選ぶと、めくってみた。

表面には、紫煙の渦巻く、きらびやかながらもどこか仄暗い会場が描かれていた。

たくさんの人々、連なるテーブル、その上に並べられた遊具と、きらきらしたコインの山……。

初めて見るカードだった。

——カジノ。酒と脂(やに)の香りが漂うところ。狭く深く、あさましき者どもの欲望が渦を巻く場所だ……。

——次は、お前が求めるべき目的を……。

再びシャッフルされ、目の前に並べられたカードの中から、ユマはまた一枚を選んだ。

今度は、見覚えのあるカードだった。

魔力が生み出す波紋を背景に、開かれた本と羽ペンが描かれている。

——メイガス。魔術師であり、知恵をもつ者の象徴だ……。

——最後に、そこで為すべきことを、己の手で選ぶがいい……。

ユマはもう一度、一枚を選んだ。

温かく輝く何かを包み込むように抱く、両腕が描かれている。これも、見覚えがあった。

——ガード。目的の者を護り切ることが、お前の役割か……。

——さあ。お前に、このために挑む覚悟はあるのか……？

「……………」

ユマはそこで、返事をする前に、背後にいるルイズらの方を振り返った。

「ちよつと、ユマ。さつきから黙ってそのカードをめくってばかりで……、どうしたのよ？」

「それって、ユマちゃんが使うようなカードじゃないのかしら？」

そう質問するルイズらに、ユマはぺこりと頭を下げた。

「ごめんなさい。私……、まだわからないけど。もしかしたらちよつと、出かけないといけないかもしれないから」

「え？」

「でも、ちゃんと戻ってくる。だから、心配しないでね」

唐突な言葉にきよとんとするルイズらに手短にそう言って背を向けると、ユマは先ほどの返事をした。

「ええ、あるわ」

——では、行くがよい……。

・
・
・

——気が付くと、ユマは最初のカードに描かれていたのと、よく似た場所に立っていた。

眩い光、列なすテーブル、大勢の賑やかな人々……。

立ち込める酒とパイプ煙草の臭いに、ユマは思わず顔をしかめた。

「ここが、カジノっていうところなのかしら？」

きよろきよろとあたりを見回しながら、ぽつりとそう呟く。

どんなことをする場所なのかくらいはなんとなく知っていたものの、当然ながら、実際に入った経験などあろうはずもない。

ひとまず、行き交う周囲の人々の邪魔にならないように、隅の方に移動した。

(……カードの世界……じゃ、ないみたい)

以前の世界で自分が経験したクエストでは、フィールドはすべてカードで覆われていて、先へ進むためにはそれをめくっていかなくてはならなかった。

ここは明らかに、そのような場所ではない。

何もカードでできている様子はないし、人々の格好を見る限りでは、ついさつきまでいたのと同じ、ハルケギニアのどこかのようだ。

ほっとしたような、でも少しがっかりしたような、ちよつと複雑な気分だったが。

まあ、それはいいとして……。

「……私、なにをしたらしいの？」

これまでに経験したクエストでは、始まるとすぐに誰かから頼み事をされたりして、何を目指せばいいのかという目的がはっきりとわかったものだが。

今回はそんなことが何もなく、突然見知らぬ場所に放り出されただけだ。

わからなくても、とにかくカードをめくって先に進んでいけばいいという、これまでのような舞台でもないようだし……。

これは、どうにも予想外な事態であった。

ユマはしばらくの間、途方に暮れて立ち尽くしていたが。

しかし、いつまでもぼうつとしていても始まらないと気を取り直すと、まずは手持ちのカードを確認してみた。

「ええと……」

カードはすべて出かける前の状態のまま、手元に揃っている。

これもまた、以前に経験したクエストとは大きく違っていた。

これまでのクエストでは、最初の手札はデッキとしてクエストに持

ち込んだカードのごく一部、ほんの数枚だけ。

あとはカードをめくってクエストを進んでいくうちに、カード使いとしての力が溜まり、また新たな札を引いてこれるようになる、という具合だったのだが……。

(……ここではどのカードでも、いつでも使えるということ?)

そうなのであれば、これまでとはだいぶ勝手が違うものの、心強くてありがたい。

とはいえ、いくら手持ちの札が充実しているにしても、依然として何をしたらよいのかはわからないわけで。

このままでは、どうにもなるまい。

(……どうしよう?)

せめて、ここがハルケギニアのどこなのか、だけでも知りたいところではあるが……。

周囲の客や店員にそんな質問をすれば、おそらく不審がられて、最悪どこかから入り込んだおかしな子供だということ、この店からつまみ出されてしまうかもしれないし。

自分はこの世界の地理にはまだまだ疎いので、よしんば教えてもらえたとしても、よくは分からないかもしれない。

それに、クエストの目的はメイガス・ガードということだったが、なにせこのハルケギニアには、そこら中にメイジがいるのだ。

この店の中だけでも、おそらく一人や二人ではないだろう。

「……………」

マリオンか誰かを召喚して相談してみるという手もありそうだが、カード使いとしての力の限界から、クエスト内で一度に召喚しておく仲間の上限は三人までなのだ。

勝手もわからない現状でその枠を埋めてしまうのは、自分でできるだけのことを試してみても、完全に行き詰ってからにするべきだろう。(とにかく、あまり不審がられないよう、目立たないように店内の様子を見て回って、ここで自分がするべきことの見当をつけていくしかない)

ユマはそう決心すると、以前にウルフレンドで初めてのクエストに

挑んだ時のような初心の心持ちで、まったくの手探りの状態から行動を開始した、のだが。

幸いというべきか、その状態は、そう長くは続かなかった。

しばらく賭博場を見て回り、酒と煙草の匂いで気分が悪くなったユマが、落ち着くために部屋を出て、休憩室に続く廊下を歩いていき。

突然、後ろの方から声をかけられた。

「あれ？ お前……、カード使いの、ユマじゃないか」

はっとして振り返ったユマは、その相手の顔を見て、大きく目を見開いた。

それは、風になびくような赤い髪と精悍な顔立ちをもつ、若い男だった。

たくましい体つきで、この世界の貴族が身に着けるようなものとはまた違う、赤いマントを羽織っている。

さすがに場所が場所だけに、いつものように胸板を剥き出しにしているというとはなく、きちんとしたスーツのような服を着込んでいたが、それでも間違いようがない。

「ダムローン!? どうして、ここに……」

「それはごっちのセリフだぜ。お前、元の世界だかに帰ったんじゃないのか?」

第二十四話 カジノでの学びと出会い

「……そういうわけで。私はそのルイズという子に召喚されて、この世界に来たの。ここに居るのは、占い札と呼ばれて、それを引いたからよ」

ユマはそう言って、これまでの経緯に関するかいつまんだ説明を締めくくった。

「ふうん、なるほどねえ。どうやらカード使いつてのは、やっぱり変わった運命に巻き込まれるものらしいな」

タムローンは、少しばかり呆れたような調子でそう言った。

「人のことは言えないでしょう。ここは、あなたの世界とも違うはずよ。なのに、どうして……」

「そりゃまあ、そうだが。俺はセテトの用意した筋書きなら、いつだって快く乗ることにしてるんでね。時には、女神からこんないたずらを受けることもあるのさ」

ユマに言い返されて、タムローンはそう言って肩をすくめてみせたが。

次いで、にやつとした笑みを浮かべた。

「でもな。それは、俺だけのことじゃないかもしれないぜ」

「? どういうこと?」

首を傾げたユマに、タムローンは今度は、自分がここへ来た経緯の説明をしてやった。

「ほら、お前がこっちに来てた頃、アインガングに『カードの精霊』ってやつがいただろう?」

「マルスミルドさん?」

「ああ。実は、あいつに頼まれたのさ。どこかよその世界にこの世界のカードの一部が散らばったみたいだから、探し出して来てくれたってな」

タムローンはそれを受けて、ユマもアインガングで利用していたような占い師の館でカードを引き、その導きに従って、ここへ連れてこ

られたのだという。

以前は、ユマの住む異世界である地球から、自分たちの世界に『闇』が入り込んで来ようとしていた。

だから、カードの精霊であるマルスミルドは、同じ異世界から自分たちの世界にカード使いたちを召喚することで、それに対抗しようとしたのである。

今回は逆に、自分たちの世界から異世界へカードが流出しているのだから、自分たちの世界の勇者たちを送り込もう、ということか。

「そうなんだ……」

「ああ。で、頼まれたのは俺だけじゃない。デートのお誘いならいざ知らず、精霊さんがそんな要件で俺だけを選んで声をかける理由なんて、別にないだろう？」

彼の話聞いたユマは、またしてもウルフレンドに問題が起こっているのかと、心を痛めたが……。

同時に、おさえがたい期待で、胸がふくらんだ。

だとすれば、この世界でもまた、みんなに会えるかもしれないわけだ。

「……でも、タムローンはなんだか、この場所に合わせた服を着ているみたいだわ」

カードを引いていきなりここに飛ばされたのなら、そんな恰好をしているのは変だ。

もしかしたら何か別の場所でクエストを受けてここに来たのか、という質問に、タムローンは頷いた。

「まあな。話すと長くなる、ってほどでもないが——」

占い師の館で三枚のカードを引いた直後に視界が暗転し、気が付いたときにはタムローンは、見覚えのない部屋の中で、見知らぬ男と向

かい合つて座つていた。

腰の剣があることを確かめつつ、さりげなく周囲に視線を走らせて、状況を確認する。

(とりあえず、敵意はなさそうだ。さすがに異世界つてだけあって内装なんかは見慣れないが、雰囲気からすると、ここはちよいと品の良い料亭か何かの個室つて感じだな)

ブルガンデイあたりになら、あつてもおかしくなさそうな店だな、と考える。

そうこうしているうちに、じろじろとタムローンのことを品定めしていた対面の男が、口を開いた。

「あんたが、先方から紹介のあつた傭兵さんだね？ なんでも、若いが経験豊富な手練れで、博奕の腕にも結構な覚えがあるという話だったが……」

いつの間にかそんな設定になつているのかと感心半分、呆れ半分に思いながら、タムローンは頷く。

「……ああ。紹介があつたかどうかは知らんが、まあその話は確かだな」

「それを聞いて安心したよ。そんなあんたを見込んで、私の主人がひとつ頼みたいことがあると言つているんだ。ちと面倒な仕事だが、当家は裕福だ。首尾よくいけば、十分な礼金が出ることは保証する」

どうやら、言葉は普通に通じるらしい。

そういえばユマみたいなカード使いの連中もまったく支障なく異世界で話していたし、きつとそういう魔法が働いてるんだろうなどと、タムローンはひとりで納得した。

「報酬は、多いに越したことはないけどな。請けるかどうかは、仕事の内容次第だぜ」

そう言いながら机にあつたグラスを傾け、皿に盛られたお通しらしき料理を、いくらかつまんでみる。

流石に酒は上物だったが、料理の方は見た目はいいものの実際に食べてみると無難な味のありきたりな乾き物ばかりで、あまり好みではなかった。

従者はもつともなことだと頷いて、説明を始める。

「あんたも博奕打ちなら、ベルクート街に新しくできた賭博場の噂くらいは聞いたことがあるかな。もつとも、貴族か豪商か、とにかく金持ちでないと入れない会員制の店だから、行ったことまではないだろうがね」

ここ最近、彼の仕える主人の不肖の息子がそこに入り浸るようになり、派手に大金を巻き上げられているらしい。

主人はそれを知って怒り、ガリア王室に訴え、軍警を派遣させて店を取り潰させようとしたのだが……。

「なんでも、そうやっておおっぴらに取り締まったのでは恥をかくことになってしまいう連中が大勢いる、とかでね。軍警は動かしてくれなかつたらしいのさ」

話によると、どうも大負けしているのはその息子ばかりではないらしい。

他にも身分の高い貴族家の者が何人もカモにされていて、表立っての取り締まりは彼ら全員の顔を潰してしまうことになるために、王家の側も二の足を踏んでいるという次第だった。

「何とかしてくれるとは言ってたそうだが、まああてになりそうにならぬうちの主人は思ってる。そこで、あんたの出番ってわけだよ」

「出番といわれても、要するに何をしてほしいってんだ。そのバカ息子だかが賭場に入りに出たりしてる現場を捕まえて、首根っこをひっ捕まえて連れ帰れとでもいうのかい」

「いや、そうじゃない。うちの主人が考えてるのは、王室から聞いた話からして、あまりにも大負けしてる貴族の数が多すぎるようだってことなのさ」

「それは……、つまりその賭場には、イカサマかなにかの不正に儲けるからくりがあるんじゃないか、ってことか？」

「主人はそう踏んでいるんだ。その証拠を押さえれば、賭場を潰せるだろう？」

タムローンはそれを聞くと、胡散臭そうに顔をしかめた。

「そいつはどうにも、疑わしい話だな。そんなのは単に、セテトが

……、あ、いや」

この世界でその名は通じないだろうと気付いて、言い直した。「つまり、たまたまそいつらの運がなかった、ってだけのことじゃないのか」

確率的に言ってどんな博奕も胴元の方が儲かるようにできているのだから、普通に考えれば、イカサマを仕組む必要などないだろう。リスクを冒してまで不正を試みねばならない理由がない。

運なんてのは大抵の者が思っている以上に、偏る時には偏るものだ。

たまたま最近は大負けする客の数が多かったただけだなんてのは、ごくごく普通でありそうな話でしかない。

タムローンがそう言っていると、従者は反論するでもなく、小さく二、三度頷いた。

「ああ。まあ、そうかもしれないね」

「かもしれないねって、もしそうだったらどうするんだ。何の問題もなかったら?」

従者は、軽く肩をすくめた。

「なあ、あんた。公正かどうかなんてのは、最初から問題じゃない。どうであれ、私の主人の望みは、若旦那が入り浸ってるその小生意気な賭場が潰れることなんだ」

そう言いながら、唇の端を皮肉っぽく軽く吊り上げて、タムローンの顔をじっと見つめる。

「ついでに、若旦那の負け分も取り返してくれたら、いうことはないだろうね。それに、もしもイカサマでない儲けるカラクリがあったなら、それを探り出して教えて差し上げれば、さぞや喜ばれることだろうよ」

「——つてことだな。そいつの仕事を引き受けたんで、事前に必要なことを聞いたり、服装や軍資金なんかを用意してもらったりしてからここへ来た、つてわけだぜ」

タムローンはそう言つて、話を終えた。

「その。依頼した人の言つてた、公正かどうかなんて関係ない、つていうのは……」

つまり、どういうことなのか？ ……と、今ひとつ呑み込めない様子で不審そうな顔をするユマに。

タムローンは、もう少しわかりやすく説明をしてやった。

「まあ、はつきりしたことは言われなかったがな。そりゃあ、つまりだ。本当に不正があればそれでよし、なくてもそういう証拠をでっちあげるとかして、とにかくこの賭場を取り潰せるように計らえつてことだろうさ」

「そんなの。それこそインチキだわ、ひどいじゃないの」

子供らしい潔癖さで憤慨するユマに、タムローンは軽く肩をすくめながら頷きを返した。

「ああ、まったくだ。けどな、そんなのは実際、よくある話さ」

「あなたは、本当にそんなことをする気なの？」

ユマが眉をひそめて、そう抗議する。

タムローンは苦笑しながら、首を横に振った。

「まさか、俺は自分からサマを仕掛けたことはないぜ。普段なら気に入らない仕事だが、俺がここに寄越された以上は乗ってやらないといけないんだろうと思つたから受けたまでさ。何もなかったらその時は、すつぱりと降りるさ。……とはいえ、実際にここに来てみた感じだと、何も無いってことはなさそうだがな」

ユマは、不思議そうな顔をして首を傾げた。

「え？ どうしてわかるの？」

「簡単なことだぜ。ここは、真つ当に稼いでるだけにしちやあ羽振りが良すぎるんだ」

常に五分と五分で戦つてこそその博奕、ダイスやコイン投げのようにごく単純な運否天賦のものほどいいというのが持論のタムローンだ

が、決して頭が悪いわけではない。

複雑なカードゲームやプラツカチェスのような思考を要するゲームでも、優秀なプレイヤーだった。

彼はこのカジノに入ると、まずは内部の様子を把握するとともに、用意されているすべてのゲームをチェックして、そこで張られている掛け金と勝率、客の回転から考えて、どの程度儲かるものかを計算してみたのだ。

もちろん、複雑な内部事情はわからないからざっとした概算だけだし、この異世界の物価などについてもなんら正確なことを知っているわけではない。

それでも、どう考えても明らかに採算が合わない、というのがタムローンの結論だった。

「客層は貴族と金持ちだけで、そいつらに合わせた上等な飲食物は、酒も含めてぜんぶ無料。カモフラージュのために地上に立てた店は、一級品ばかりの宝石店。内装も手が込んで、一流ホテル並みの休憩室や仮眠室まで用意されてる。従業員も大勢だ。そのくせ参加料は安いし、それぞれの博奕の勝率設定も、特に悪いつてわけでもない。これで真つ当に運営してた日にゃあ、胴元は大赤字だぜ」

つまり、何か真つ当じゃない、客に明かされていない追加収入を得る方法があるに違いないんだ……と言って、タムローンは話を締めくくった。

ユマはそれを聞いて、感心したように頷く。

「そうか。タムローンは頭がいいのね」

「博奕打ちにしてはな」

謙遜気味にそう言うと、タムローンは賭場の方に顔を向けた。

「さて、ちよつと長くなつたな。俺は飲み物でももらつて喉を潤してから、そろそろ仕事にかかるところにするよ」

「だけど、その仕事の内容は、あなたが頼まれた本来のクエストとは違うわ。マルスミルドさんに探すように言われたカードがどこにあるのかは、探す心当たりはあるの？」

「特にないな。しかしまあ、占い札を引いてここまで来たんだから、こ

の仕事にもそれと何かの関係があるんだろうさ。当面は依頼の件をこなしながら、向こうから話が飛び込んでくるのを待つことにするよ」

ひよつとして、彼が探すように言われたカードとは、もしかしたら自分の持っているもののどれか、あるいはぜんぶのことだろうか。

だとしたら、残念ではあるけれど、彼に引き渡したほうがいいのかも……。

ユマはそう考えて、その旨を伝えてみたが、タムローンはあっさりと言を横に振った。

「あいつは、この世界に散らばったままでいるのを探して来いといったんだ。カード使いのお前さんが集めて管理してるものなら、とりあえずそのまま持つてもらえばいいさ。むしろその方が、他のカードを取り戻す助けにもなるはずだぜ？」

手伝ってくれるんだろう？ ……と尋ねるタムローンに。

ユマはもちろんだと、大きく頷いた。

「よし、それなら着いて来てくれ。本当なら子供に來させるようなところでもないだろうが、何事も勉強だ」

そう言つて、タムローンは賭場の方に戻っていた。

ユマも、その後が続く。

「とりあえず、大勝ちを目指す。なにかイカサマがあるとしても毎回そいつを使つてゐるってことはないだろうが、カジノが大損害を受けそうになりゃあ、きつと持ち出してくるだろうからな」

「勝つ自信はあるの？」

タムローンは、自分からはイカサマは仕掛けないと言つていた。

しかし、賭け事というのはそういつたズルをするのでもなければ、基本的には運の勝負ではないのだろうか。

そんなもので、狙い通りに大勝ちするなんてことが、はたしてできるのか……。

「そいつは、セテトの思し召し次第さ。目が出ないようなら、今日は俺の勝つ日じゃないってことだ」

タムローンはあっさりと言つると、賭け事が行われているテーブル

ルのひとつに向かっていった。

その途中でユマの方を振り向くと、にやつと笑いかけてみせる。「でもな、今日は間違いなく勝てるさ。なんたって、お前に再会できた日なんだからな。ツイてないはずがないだろう？」

それから、しばらくの時間が経って。

彼自身が宣言したとおり、今夜のタムローンにはツキがあるようで、今のところ順調に勝っていた。

しかし、何分純粹に運の勝負のことゆえ、時には負けることもあったし、まだそこまで極端に大きく勝っているというわけでもない。

勝負自体も彼の好むごく単純なゲームだったので、見ているうちにユマは緊張感に欠けていていけないとは思うものの、どうしても少し退屈になって、眠気を感じてきた。

タムローンもそんな様子を察して、彼女に声をかける。

「別に、ずっとここで見てなくてもいいぜ。勝負はまだかかりそうだし、少し他のテーブルでも見物してきたらどうだ。そのほうが勉強になるだろう」

ユマは少し迷ったものの、確かにずっとここにいても、自分にできることがあるわけでもなし。

事態が動き出すまではどうしようもなさそうだからと考えて、席を立つことにする。

「わかった。じゃあ、勉強してくるわ。タムローンもがんばってね」

それから、近くにいた従業員に声をかけて冷たい飲み物をもらおうと、他のテーブルを回って、そこで行われている賭け事の様子を順番に見ていった。

最初に見たテーブルでは、『蛇(くちなわ)のまなこ』という、サイコロを使ったゲームが行われていた。

見た感じでは、基本的には二人の客同士が勝負するもので、それぞれが二つのサイコロを振って出た目が大きかった方が掛け金を取る

らしい。

ただし、蛇のまなこ……つまりは1のゾロ目が出た場合だけは勝者なしで、掛け金は胴元が没収することになっていた。

参加している客たちは大体、あと蛇のまなこが1回出るまでとか、2回出るまでとかをあらかじめ決めて、勝負をしているようだ。

(このゲームだと、お客さんがいくら勝ってもカジノ側が損をすることはないわね。あんまり儲かりもしなさそうだけど)

タムローンはサイコロ賭博が好きらしいが、このゲームを選ばなかったのはそのためなのだろう。

いくら勝ってもカジノ側は出てこないかもしれないし、ゲームそのものにもイカサマなどは仕掛けそうにもないから。

カジノには他にも、ディーラーが振った三つのサイコロの目を客が当てるといふ勝負もあるようだったが、それもタムローンは選ばなかった。

それについては、自分でサイコロを振れないのでは味気ないから、ということらしい。

(ええと、他には?)

少し離れたテーブルには、カードを使った博奕もあった。

たとえば、『サンク』という名前の、トランプのような札を使ったゲーム。

ルールはあまり詳しくはわからなかったが、見た感じではどうも、ポーカーに似たゲームのようだ。

他にも同じ札を使った、『金鉱掘り』というゲームもあった。

最初にディーラーが山札の一番上のカードをめくり、プレイヤーはその数字と同じ枚数だけ、追加でめくっていく。

その中に最初に引いたものと同じ数字のカードが1枚以上含まれていればプレイヤーの勝ちで、掛け金を出した枚数に応じて2倍、3倍にして受け取ることができる。

同じ数字のカードが1枚もなければプレイヤーの負けで、掛け金は胴元に没収される。

(うーん……。もし引いたカードの数字が1だったら、引ける確率は

51分の3だから、6%未満で。2だったら……、51分の6じゃないし、ええと?)

ユマもタムローンにならって確率の計算をしようと、しばらくがんばってはみたものの。

どうにも、自分がこれまで学校で学んだ数学の知識だけでは、うまく導き出すことができないようだった。

がっかりすると同時に、あらためて彼の頭の良さに感心もした。

ウルフレンドは地球に比べたら学問はあまり発展していなさそうなのに、こんな計算がパツとできるのだから、彼は見かけによらず相当地に学のある方なのではないだろうか、と思った。

まあ、詳しい計算はできなかつたものの、可能な範囲で考えて受けた印象としては……。

確かにタムローンも言っていた通り、カジノ側の方が勝率的に有利なのは確かであるにもせよ、それだけで大儲けできるほどに客側の方が著しく不利というわけでもなさそうだ。

(カードの数字が10とかだったら、引ける確率の方が高いでしょう。時には、2枚以上引けることだってあるわけだものね)

その他のテーブルも、ユマは一通り回ってみた。

ルーレットゲームでは、回転盤に白と黒に塗り分けられた4と1つの属性、地・水・火・風・虚無のポケットと、エルフのポケットがあった。

客はそれぞれのポケットに1点賭けするか、色で賭けることができ、エルフのポケットに入った場合は胴元の総取りだ。

あとは、カードを使った絵合わせのようなゲーム、すごろくのようにボードの盤面を回るゲーム、袋の中から色付きの小さな石を掴み出すゲームなど。

どれもこれも目新しく、ルールを聞いて勝率を考えたりするのはそれなりに楽しかったが、いずれのゲームにもこれといって不正行為のようなものがありそうには思えなかった。

まあ、プロであるカジノが自分のような素人の子供に見つけられるような不正をするはずもないし、当たり前前のことか。

ここはやはり、タムローンがうまく成果をあげてくれるのを待つしかないだろう。

(そろそろ、戻ってみようかな……)

そう考えながら、首を巡らせた時。

「……………」

ふと、カジノの客の中に見知った顔がいたような気がした。

まさかと思いなながらも、念のため確かめてみようと、そちらへ近づいてみる。

ディーラーが振ったダイスの目を当てるサイコロ賭博のテーブルについて、順調に勝ちを積み上げているらしい、一人の客……。

「あ……………」

見間違いではなかった。

青い乗馬服に、膝丈まであるブーツ、そして大きなシルクハット。

子供のような体つきでそんな装いをしているために、遠目にはまるで美しい少年のようにも見えたのだが。

近くに寄ってみれば、その端正な面立ちと鮮やかな青い髪とで、はつきりとわかった。

ユマは邪魔にならないよう、今行われている勝負が終わるのを待って、そつと彼女の肩に手を置いた。

振り返ったその少女の目が、はっとしたように、わずかに見開かれる。

「……………ユマ?…」

「タバサ、どうしてこんなところに?…」